

兵庫県伊丹市所在

—都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

南本町遺跡・北村遺跡

2007年3月

兵庫県教育委員会

兵庫県伊丹市所在

—都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

南本町遺跡・北村遺跡



2007年3月

兵庫県教育委員会



遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（西から）



遺跡近景（南西から）



遺跡近景（西から）



北①区（南から）



中②区（南から）



南③A区全景（北東から）



南区SK③A01遺物出土状況（北から）



南②B区全景（東上空から）



南②B区全景（南から）



南②B区SE01井戸枠出土状況（西から）



南②B区SE01水溜曲物出土状況（西から）



南①C区ST01土器群A出土状況（南南西から）



南①A区SE02底遺物出土状況（南から）



北①区SD20出土遺物



北①区SD21出土遺物



a 中②区SD04出土青磁



b 中①区SK05出土漆器



c 南②B区SE01出土墨書き土器



d 南①C区SD06出土墨書き土器



南②B区SE01井戸枠



南②B区SE01出土遺物



南①A区SE02井戸枠



南①A区SE02出土土器



南②D区SE04出土遺物



南①C区ST01（SD02）出土土器

例　　言

1. 本書は、兵庫県伊丹市南本町1・2・4・5・7丁目から南町3丁目にまたがって所在する南本町遺跡および、伊丹市鉢物館5丁目に存在する北村遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査および出土品整理作業は都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴い、兵庫県阪神北県民局県土整備部伊丹土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会が実施した。なお、震災復興事業に指定されている。
3. 現地調査は、開発事業の進行に合わせるかたちで平成8（1996）年度から実施し、平成15（2003）年度まで確認調査、本発掘調査を繰り返しながら、足かけ8年かけて実施した。
4. 現地調査は本文に示すとおり、南本町遺跡では確認調査11回、本調査12回、北村遺跡では各1回実施した。以下に本報告の内容に関する調査について兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が設定した調査番号と調査年度および調査種別を掲げておく。詳しくは本文を参照されたい。

960074 (平成8年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

960155 (平成8年度) 北村遺跡の確認調査

960232 (平成8年度) 北村遺跡の本発掘調査

960320 (平成8年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

970013 (平成9年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

970239 (平成9年度) 南本町遺跡の南区の確認調査

970326 (平成9年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

990108 (平成11年度) 南本町遺跡の北・中区の確認調査

990203 (平成11年度) 南本町遺跡の北・中区の確認調査

990284 (平成11年度) 南本町遺跡の中区の本発掘調査

2000254 (平成12年度) 南本町遺跡の中区の本発掘調査

2000289 (平成12年度) 南本町遺跡の南区の確認調査

2000290 (平成12年度) 南本町遺跡の北区の本発掘調査

2001071 (平成13年度) 南本町遺跡の北区の本発掘調査

2002224 (平成14年度) 南本町遺跡の北区の確認調査

2002233 (平成14年度) 南本町遺跡の南区の確認調査

2003001 (平成15年度) 南本町遺跡の北区の本発掘調査

2003002 (平成15年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

2003062 (平成15年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

2003063 (平成15年度) 南本町遺跡の南区の本発掘調査

5. 現地調査は震災復興事業として位置づけられたものもあり、現地調査担当職員は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所のみならず、震災復興のため全国からの支援職員も加わり測量を担当した。以下に担当者名のみを記すが、担当地区・担当年度等詳細は本文を参照されたい。また、測量補助員・室内作業員・現場事務員の方々にもお世話になった。

池田征弘・今村道雄（大阪府支援職員）・大崎晃司（研修員）・河合 修（静岡県支援職員）・

川口洋平（長崎県支援職員）・川村慎也（臨時職員）・岸本一宏・鐵 英記・小淵忠司（岐阜県支援職員）・篠宮 正・鈴木敬二・多賀茂治・高瀬一嘉・種定淳介・仁尾一人・西口圭介・服部 寛・

半澤幹雄（千葉県支援職員）・平田博幸・藤井 整（京都府支援職員）・藤田 淳・松岡千寿・
村上泰樹・山田清朝・横田 明（大阪府支援職員）・吉田東明（福岡県支援職員）・渡辺 昇

五十音順（当時）

6. 報告書作成のための出品整理作業は、平成15年度から平成18年度まで兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で実施した。担当者は、発掘調査担当者でかつ調査事務所に所属する職員および整理嘱託員が担当した。各年度の作業および担当者名は本文を参照されたい。
7. 本書の執筆は、現地の発掘調査担当者でかつ埋蔵文化財調査事務所に所属する職員がおこなったが、兵庫陶芸美術館の仁尾一人および兵庫県教育委員会考古博物館開設準備室の村上泰樹も執筆した。ただし、調査担当者以外が執筆した部分もある。執筆分担は目次および本文に明記している。
本書の編集は平成17年度には仁尾が行ったが、異動のため、最終年度のみ整理嘱託員の村上京子・溝上くみの補助を得て岸本が担当した。
8. 発掘調査および本書の作成にあたって、次の方々にお世話になった。記して感謝の意を表する。
吉川真司・小長谷正治・戸田真美子

凡　　例

1. 南本町遺跡の調査箇所および調査回数が多いため、今回の報告では、近世以降を中心とした北区、中世遺構を中心とした中区、古墳～奈良時代遺構を中心とした南区に便宜上分割して記述した。
同時に、調査年度を越えた調査区内の小区画でも同じ名称が使用されていることが多く、遺構名も同一名称のものが多い。そこで、遺構名については当時の名称をできる限り残すため、調査番号ごとに調査区名を○付き番号で分け、小区画名はそのまま使用することとした。したがって、遺構名については調査区名番号と小区画名を冠したものとすることで特定できるようにした。ただし、掘立柱建物跡や井戸といった重要で混乱の少ない遺構については名称を新たに付している。以下、地区ごとに調査番号を示しておく。

北区 ①区……本2001071（確990108）	③区……本2000290（確990203）
②区……本2003001（確2002224）	
中区 ①A～C区……本990288（確990108・990203）	②区……本2000254（確990203）
南区 ①A～C区……本970326（確970239）	④3・4区……本2003002（確2002233）
②A～D区……本960074	⑤区……本2003062（確2002233）
②N・S区……本970013	⑥I～III区……本2003063（確2002233）
③A～C区……本960320	
2. 本書の写真のうち、遺構写真については各調査担当者が撮影したものであるが、遺物写真については、株式会社タニグチフォトおよび株式会社アコードに委託して撮影したものを使用した。
3. 使用した方位は、日本測地系国土座標（第V系）を基準とし、水準は東京湾平均海水準を使用した。
4. 遺構名は建物跡にSB、構列にSA、柱穴にP、井戸にSE、溝にSD、土壤にSK、特殊遺構にはSXを冠した。
5. 遺跡の土層色調名は『新版標準土色帖』に掲り、南①区土層名のうち堆積物の粒度区分は『新版地学ハンドブック』（柴地書館発行）に基づき、担当者が経験的につかみにより判断したものである。
6. 遺物実測図断面のうち、須恵器は黒塗り、陶磁器は網掛けとし、木製品は年輪をあらわす。

本文目次

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯	（竹尾一人）	1
第2節 確認調査および本発掘調査の経過と体制	（仁尾）	1
第3節 整理作業の経過と体制	（仁尾）	3

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	（岸本一宏）	6
第2節 歴史的環境	（岸本）	7
第3節 南本町遺跡について	（岸本）	10

第3章 南本町遺跡の調査成果

第1節 北区の調査成果	1. 調査の概要	（仁尾）	11
	2. 遺構	（池田征弘・仁尾）	11
	3. 遺物	（藤田 淳・仁尾）	14
第2節 中区の調査成果	1. 調査の概要	（仁尾）	18
	2. 遺構	（村上泰樹・仁尾）	18
	3. 遺物	（村上・仁尾）	23
第3節 南区の調査成果	1. 調査の概要	（岸本）	27
	2. 遺構	（岸本）	29
	3. 遺物	（岸本・溝上くみ）	46

第4章 北村遺跡の調査成果

第1節 遺構	（鐵 英記）	65
第2節 遺物	（鐵）	65
第3節 小結	（鐵）	66

第5章 まとめ

第1節 南本町遺跡について—建物配置の形態と遺跡の性格—	（岸本）	67
第2節 南本町遺跡の井戸—構造と配置によるランク差の可能性について—	（岸本）	71
第3節 中近世以降の南本町遺跡—北・中区調査結果のまとめ—	（仁尾）	72

カラー写真図版目次

- カラー図版 1 上 遺跡遠景（南から）
下 遺跡遠景（西から）
- カラー図版 2 上 遺跡近景（南西から）
下 遺跡近景（西から）
- カラー図版 3 上 北①区（南から）
下 中②区（南から）
- カラー図版 4 上 南③A区全景（北東から）
下 南区SK③A01遺物出土状況（北から）
- カラー図版 5 上 南②B区全景（東上空から）
下 南②B区全景（南から）
- カラー図版 6 上 南②B区SE01井戸枠出土状況（西から）
下 南②B区SE01水溜曲物出土状況（西から）
- カラー図版 7 上 南①C区ST01土器群A出土状況（南南西から）
下 南①A区SE02底遺物出土状況（南から）
- カラー図版 8 上 北①区SD20出土遺物
下 北①区SD21出土遺物
- カラー図版 9 a 中②区SD04出土青磁
b 中①区SK05出土漆器
c 南②B区SE01出土墨青土器
d 南①C区SD06出土墨青土器
- カラー図版10 上 南②B区SE01井戸枠
下 南②B区SE01出土遺物
- カラー図版11 上 南①A区SE02井戸枠
下 南①A区SE02出土土器
- カラー図版12 上 南②D区SE04出土遺物
下 南①C区ST01（SD02）出土土器

挿図目次

第1図 遺跡分布図.....	8
第2図 南区SE02出土麻布写真	52
第3図 南本町遺跡掘立柱建物跡配置図.....	68
第4図 大阪府平尾遺跡遺構平面図（集落跡、『古代の村』より）	71
第5図 南本町遺跡の井戸枠構造.....	71
第6図 井戸枠構造の各種（黒崎直氏による）	72

表目次

第1表 遺跡名 9

図版目次

図版 1		調査区配置図
図版 2	北村遺跡	北村遺跡調査区平面図・壁断面図
図版 3	北村遺跡	遺構平面・断面図
図版 4		南本町遺跡調査区配置図
図版 5	北区	北区平面図
図版 6	北①区	北①区平面・断面図
図版 7	北①区	北①区遺構
図版 8	北③区	北③区平面・断面図
図版 9	北③区	北③区遺構
図版10	中区	中区平面図
図版11	中①A区	中①A区平面図
図版12	中①A区	中①A区遺構
図版13	中①B・C区	中①B・C区平面図
図版14	中①B・C区	中①B・C区遺構①
図版15	中①B・C区	中①B・C区遺構②
図版16	中①B・C区	中①B・C区遺構③
図版17	中②区	中②区平面図
図版18	中②区	中②区土層断面図
図版19	中②区	中②区遺構
図版20	中②区	中②区土層断面図
図版21	南区	南区遺構全体図
図版22	南①②区	南①・②区遺構全体・土層断面図
図版23	南①区	南①区遺構全体図
図版24	南①区	南①区南部
図版25	南①区	南①区ST01・SB01・SA01
図版26	南①A区	南①A区SE02
図版27	南①C区	南①C区SE03
図版28	南①区	南①区土層・溝土層断面①
図版29	南①区	南①区溝土層断面②
図版30	南①区	南①区溝土層断面③
図版31	南②区	南②区遺構全体図
図版32	南②区	南②A・B区SB02

図版33	南②区	南②B区SB03
図版34	南③区	南②C区SB05
図版35	南②区	南②A区SA02、B区SB04・SA03・SA04、C区SA05
図版36	南②区	南②D区SB11、A区SA06、C区SB08
図版37	南②区	南②C区SB09・SA07
図版38	南②区	南②D区SB10
図版39	南②区	南②B区SE01
図版40	南②区	南②B区SE07、SD②B01・02、SD②C02、D区SE04、SK②C01
図版41	南③区	南③区遺構全体・土層断面図
図版42	南③区	南③区主要部遺構平面・土層断面図
図版43	南③区	南③区建物跡平面図
図版44	南③区	南③区建物跡柱穴土層断面図
図版45	南③区	南③区樹列・土壤
図版46	南④3区	南④3区遺構全体・土層断面図
図版47	南④4区	南④4区遺構全体・土層断面図
図版48	南⑤区	南⑤区遺構全体・遺構平面・土層断面図
図版49	南⑥I区	南⑥I区遺構全体・土層断面図
図版50	南⑥II区	南⑥II区遺構全体・土層断面図
図版51	南⑥III区	南⑥III区遺構平面・土層断面図
図版52	北村遺跡	北村遺跡出土遺物
図版53	北区	北①・③区出土遺物
図版54	北①区	北①区SD20出土遺物
図版55	北①区	北①区SD20・21出土遺物
図版56	北①区	北①区出土遺物
図版57	中①区	中①区遺構出土遺物①
図版58	中①区	中①区遺構出土遺物②
図版59	中①区	中①区包含層出土遺物
図版60	中①区	中①区遺構・包含層出土遺物
図版61	中②区	中②区遺構出土遺物
図版62	中②区	中②区遺構・包含層出土遺物
図版63	南区	南区出土古墳時代遺物
図版64	南区	南区建物跡関係・溝出土遺物
図版65	南②B区	南②B区SE01曲物
図版66	南②B区	南②B区SE01井戸枠
図版67	南②B区	南②B区SE01井戸枠・木製品
図版68	南②B区	南②B区SE01杭
図版69	南②B区	南②B区SE01出土土器
図版70	南②B区	南②B区SE01出土瓦

図版71	南①A区	南①A区SE02井戸枠・木製品
図版72	南①A区	南①A区SE02隅木・土居桁
図版73	南①A区	南①A区SE02出土土器（1）
図版74	南区	南区SE02・03出土遺物
図版75	南区	南区SE03・05・07出土遺物
図版76	南②D区	南②D区SE04出土土器
図版77	南②D区	南②D区SE04出土瓦
図版78	南区	南区土壤等出土遺物
図版79	南②D区	南②D区SX01出土土器
図版80	南②D区	南②D区SX01出土瓦
図版81	南①C区	南①C区溝出土遺物
図版82	南①C区	南①区溝出土土器
図版83	南区	南区溝出土遺物
図版84	南区	南区包含層出土土器
図版85	南区	南区包含層出土遺物
図版86	南区	南区包含層出土瓦

写真図版目次

- 写真図版 1 北村遺跡
 a 調査区中央（南から）
 b 調査区北半（南から）
 c SE01（西から）
- 写真図版 2 北①区
 上 調査区全景（南上空から）
 下 調査区全景（北から）
- 写真図版 3 北①区
 a 調査区西壁土層断面①（北東から）
 b 調査区西壁土層断面②（北東から）
 c 調査区西壁土層断面③（北東から）
 d SK10土層断面（北から）
 e SK25土層断面（北から）
- 写真図版 4 北①区
 a SD20土層断面①（南から）
 b SD20土層断面②（南から）
 c SD21完掘状況（北東から）
 d SD21土層断面（東から）
- 写真図版 5 北①区
 上 痕跡（南から）
 中 痕跡たちわり断面（南東から）
 下 調査状況（南から）
- 写真図版 6 北③区
 a 全景（南から）
 b SK02（西から）

写真図版 6	北③区	c SD02断面（南から） d SD02石器出土状況（東から） e SD01石器出土状況（東から）
写真図版 7	北③区	上 北部龜溝（南から） 下 南部龜溝（東から）
写真図版 8	中①A区	上 調査区全景（北から） 下 調査区南半部（北から）
写真図版 9	中①A区	上 調査区南半部（北東から） 下 SK201全景（南西から）
写真図版10	中①A区	上 SK203土層断面（北から） 中 SK205土層断面（北から） 下 SK211土層断面（北から）
写真図版11	中①A区	a P257たちわり断面（北から） b P257柱痕検出状況（北から） c P308・P309断ち割り断面（北から） d P315たちわり断面（北から） e P322たちわり断面（西から） f P329・P330たちわり断面（東から） g 調査状況（南から）
写真図版12	中①B・C区	上 調査区南半部（北から） 下 調査区中央部（南から）
写真図版13	中①B・C区	上 調査区南端部（北西から） 中 調査区中央部（北東から） 下 調査区中央部（東から）
写真図版14	中①B区	上 SK01土層断面（東から） 中 SK01完掘状況（北から） 下 SK02土層断面（南から）
写真図版15	中①B区	上 SK04土層断面（西から） 中 SK05上層断面（西から） 下 SD10・SD11土層断面（東から）
写真図版16	中①B区	上 SK25土層断面（東から） 中 SK26上層断面（南から） 下 SK26完掘状況（東から）
写真図版17	中①B・C区	上 SK30土層断面（南から） 中 SK37土層断面（東から） 下 SK106土層断面（東から）
写真図版18	中①B・C区	a P32たちわり断面（南から） b P40・P41たちわり断面（北から）

写真図版18	中①B・C区	c P 44たちわり断面（東から） d P 46たちわり断面（東から） e P 50たちわり断面（北から） f P 56たちわり断面（南から） g P 60たちわり断面（南から） h P 71たちわり断面（西から）
写真図版19	中①B・C区	上 調査区北端部上層遺構（南東から） 中 調査区北半部上層遺構（南から） 下 調査区西壁土層断面（東から）
写真図版20	中②区	a 調査区全景（北から） b SD03上器出土状況①（南から） c SD03上器出土状況②（北から） d SD03土層断面（南から） e SD02土層断面（北から）
写真図版21	中②区	上 SK01完掘状況（南から） 中 SK02土層断面（南から） 下 SE03完掘状況（北東から）
写真図版22	南区	上 ①A・C区①（南上空から） 下 ①A・C区②（西上空から）
写真図版23	南区	上 ①B区①（南上空から） 下 ①B区②（西上空から）
写真図版24	南区	上 ②A・C区①（西上空から） 下 ②A・C区②（南上空から）
写真図版25	南区	上 ②A・C区（東上空から） 下 ②B・D区（南上空から）
写真図版26	南区	上 ②B区（東上空から） 下 ②C区（東上空から）
写真図版27	南区	上 ③B区（南南東上空から） 下 ③A・C区①（南上方から）
写真図版28	南区	上 ③A・C区②（西上空から） 下 ③B区（西上空から）
写真図版29	南①区	全景（真上から・上が北）
写真図版30	南②区	全景（真上から・上が北）
写真図版31	南②区	主要部（真上から・上が北）
写真図版32	南③区	全景（真上から・上が北）
写真図版33	南①区	上 A・C区全景（北から） 下 C区西壁土層断面（東から）
写真図版34	南①A区	上 全景（北から）

写真図版34	南①A区	下 全景（南から）
写真図版35	南①B区	上 全景（南から） 下 南部（北から）
写真図版36	南①C区	上 全景（北から） 下 南部（北から）
写真図版37	南①C区	上 ST01土器群全景（南西から） 下 ST01土器群A（南西から）
写真図版38	南①C区	a ST01土器群（北から） b ST01土器群A（東から） c ST01土器群A・C（西横から） d ST01土器群B・C（北から） e ST01土器群B①（南から） f ST01土器群B②（南横から） g ST01土器群C（南西から） h ST01土器群実測状況（南西から）
写真図版39	南①A区	上 SE02上部（北から） 下 SE02下部（南から）
写真図版40	南①A区	上 SE02底部の状況（南から） 下 SE02底部遺物出土状況（南から）
写真図版41	南①A区	SE02木組細部 a 木組残存上部①（西から） b 木組残存上部②（東から） c 木組下端（南から） d 北西隅（南東から） e 南西隅（東から） f 南西隅拡大（東から） g 北西隅拡大①（南東から） h 北西隅拡大②（南から）
写真図版42	南①A区	a SD①A01Ⅱ・Ⅲ区間埋土断面（南から） b SD①A01Ⅰ・Ⅱ区間埋土断面（北から） c SD①A02Ⅰ・Ⅱ区間埋土断面（南から） d SK①A01完掘状況（南から） e SB01p01たちわり断面（東から） f SB01p02たちわり断面（東から） g SA01p04たちわり断面（西から） h SA01p05たちわり断面（西から）
写真図版43	南①区	a ①B区西壁土層断面（東から） b SK①A02（北東から）

- 写真図版43 南①区
- c SD①B01 I 区北端土層断面（南から）
 - d SD①B01 I・II区間土層断面（北東から）
 - e SD①B01Ⅲ区北側土層断面（南から）
 - f SD①B01Ⅲ・IV区間土層断面（南から）
 - g SD①B01b II・III区間土層断面（南から）
 - h SD①B01c I・II区間土層断面（南から）
- 写真図版44 南①B区
- a SD①B02 I・II区間土層断面（北から）
 - b SD①B02Ⅲ区北側土層断面（南から）
 - c SD①B03・09a I・II区間土層断面（南から）
 - d SD①B09b III・IV区間土層断面（南から）
 - e SD①B10b I層断面（西から）
 - f SK①B05十層断面（南から）
 - g P①B01たちわり断面（南から）
 - h P①B02たちわり断面（南から）
- 写真図版45 南①C区
- 上 SE03（東から）
 - 下 SE03たちわり状況（東から）
- 写真図版46 南①区
- a SD①C01東肩土器出土状況（北東から）
 - b SD①C01 I・II区間土層断面（南から）
 - c SD①B01（C区北東隅、南西から）
 - d SD①C02 I・II区間土層断面（北から）
 - e SD①C02Ⅳ・V区間土層断面（北から）
 - f SD①C02V・VI区間土層断面（南東から）
 - g SD①C02V・VI区間土層断面（北西から）
 - h SD①C03 I・II区間十層断面（西から）
- 写真図版47 南①C区
- a SD①C03 I・II区間土層断面（西から）
 - b SD①C03 II・III区間土層断面（東から）
 - c SD①C03Ⅲ・IV区間土層断面（西から）
 - d SD①C03Ⅳ・V区間土層断面①（南西から）
 - e SD①C03Ⅳ・V区間土層断面②（南南東から）
 - f SD①C03V・VI区間土層断面（東から）
 - g SD①C04 I・II区間十層断面（西から）
 - h SD①C04 II・III区間十層断面（西から）
- 写真図版48 南①C区
- a SD①C05 I・II区間土層断面（西から）
 - b SD①C05土器出土状況（南から）
 - c SD①C05 I・II区間土層断面（南から）
 - d SD①C05・06Ⅲ・IV区間土層断面（北から）
 - e SD①C06 I・II区間土層断面（南から）
 - f SD①C07Ⅳ・V区間土層断面（南から）

写真図版48	南①C区	g SD①C08北部土層断面（南から） h SD①C08南部土層断面（南から）
写真図版49	南①C区	a SK①C01炭層面（南西から） b SK①C01完掘（南西から） c SK①C01土層断面（北西から） d SD①C02遺物出土状況（西から）
写真図版50	南②A区	a ②A区全景（北から） b ②A区SB02南半（北から） c SK②A01（南から） d SD②A01（東から）
写真図版51	南②A区	上 ②A区SB02南半（南から） 下 SD②A01（東から）
写真図版52	南②区	a ②区SB02p01たちわり断面（東から） b ②区SB02p02たちわり断面（東から） c ②区SB02p03たちわり断面（東から） d ②区SB02p04たちわり断面（南から） e ②区SA02p06たちわり断面（南から） f ②区SA02p09たちわり断面（南から） g SK②A01上層断面（南から） h SD②A01土層断面（東から）
写真図版53	南②B区	上 全景（北から） 下 全景（南から）
写真図版54	南②B区	上 ②B区SB03①（北から） 下 ②B区SB03②（北から）
写真図版55	南②B区	上 ②B区SB03（南から） 下 ②B区SB02北半（南から）
写真図版56	南②B区	a ②B区SB03p01たちわり断面（南から） b ②B区SB03p02たちわり断面（東から） c ②B区SB03p03たちわり断面（北から） d ②B区SB03p04たちわり断面（北から） e ②B区SB03p05たちわり断面（北から） f ②B区SB03p06たちわり断面（北から） g ②B区SB03p07たちわり断面（北から） h ②B区SB03p09たちわり断面（南から）
写真図版57	南②B区	a ②B区SB03p10たちわり断面（南から） b ②B区SB03p11たちわり断面（南から） c ②B区SB03p12たちわり断面（南から） d ②B区SB03n13たちわり断面（南から）

- 写真図版57 南②B区 e SX②D01瓦出土状況（西から）
- 写真図版58 南②B区 上 ②B区SE01井戸枠上部（西から）
下 ②B区SE01下部（西から）
- 写真図版59 南②B区 上 ②B区SE01井戸枠残存状況（西から）
下 ②B区SE01井戸枠と水溜め（西から）
- 写真図版60 南②B区 上 ②B区SE01水溜曲物（西から）
下 ②B区SE01作業風景（北から）
- 写真図版61 南②B区 ②B区SE01
a 上部（北から）
b 上部埋土土層断面（西から）
c 北西隅板組み状況①（西から）
d 北西隅板組み状況②（南西から）
e 南東隅板組み状況（北西から）
f 水溜曲物検出状況（西から）
g 東側板組み状況（北西から）
h 南東隅板組み細部（北西から）
- 写真図版62 南②B区 上 SD②B01（北から）
下 SD②B02（西から）
- 写真図版63 南②B区 a SD②B03（西から）
b SD②B03西部土層断面（西から）
c SD②B03東部土層断面（西から）
d ②B区北部遺構（北から）
e ②B区SA04p23たちわり断面（東から）
f ②B区SA04p24たちわり断面（東から）
g ②C区SA05p25たちわり断面（東から）
- 写真図版64 南②C区 上 ②C区全景①（南から）
下 ②C区全景②（北から）
- 写真図版65 南②C区 上 ②C区SB08（南から）
中 ②C区SB05（北から）
下 ②C区SB09（北から）
- 写真図版66 南②C区 a ②C区SB05p01たちわり断面（北から）
b ②C区SB05p03たちわり断面（北から）
c ②C区SB05p05たちわり断面（北から）
d ②C区SB05p28たちわり断面（北から）
e ②C区SB09p10たちわり断面（西から）
f ②C区SB09p15たちわり断面（東から）
g ②C区SB09p16たちわり断面（南から）
h ②C区SB09p17たちわり断面（西から）

- 写真図版67 南②C区
a ②C区SB09p18たちわり断面（西から）
b ②C区SB09p19たちわり断面（西から）
c P②C2Iたちわり断面（東から）
d ②C区SB08p29たちわり断面（北から）
e ②C区SB08p31たちわり断面（北から）
f ②C区SB08p32たちわり断面（南から）
g ②C区SB08p33たちわり断面（南から）
h ②C区SB08p34たちわり断面（南から）
- 写真図版68 南②C区
a ②C区SA07p35たちわり断面（西から）
b ②C区SA07p36たちわり断面（西から）
c ②C区SA07p37たちわり断面（西から）
d P②C38たちわり断面（東から）
e P②C39たちわり断面（東から）
f SD②C01土層断面（南から）
g SD②C02（西から）
h SK②C01土層断面（南西から）
- 写真図版69 南②C区
a ②C区SE07土層断面（西から）
b ②C区SE07完掘状況（東から）
c SK②C01完掘状況（南西から）
- 写真図版70 南②D区
上 ②D区全景（南から）
下 ②D区SB10（南から）
- 写真図版71 南②D区
上 ②D区SB10（西から）
下 ②D区SE04（西から）
- 写真図版72 南②D区
a ②D区SB10p01たちわり断面（西から）
b ②D区SB10p02たちわり断面（西から）
c ②D区SB10p03たちわり断面（西から）
d ②D区SB10p04たちわり断面（西から）
e ②D区SB10p05たちわり断面（西から）
f ②D区SB10p06たちわり断面（南から）
g ②D区SB10p08たちわり断面（北から）
h ②D区SB10p09たちわり断面（北から）
- 写真図版73 南②D区
a ②D区SB10p10たちわり断面（北から）
b ②D区SB11p12たちわり断面（南から）
c ②D区SB11p14たちわり断面（南から）
d ②D区SB11p15たちわり断面（南から）
e ②D区SB11p16たちわり断面（南から）
f ②D区SB11p17たちわり断面（南から）
g P②D11たちわり断面（西から）

- 写真図版73 南②D区 h ②D区SE04土層断面（西から）
- 写真図版74 南②N区 a ②N区西半（南から）
b ②N区西部（南から）
c ②N区東半（西から）
d ②N区SB05p12たちわり断面（北から）
e ②N区SB05p11たちわり断面（北から）
f ②N区SB05p14たちわり断面（南から）
g ②N区SB05p18・19たちわり断面（南から）
h P②N05たちわり断面（北から）
- 写真図版75 南②N・S区 a P②N09たちわり断面（北から）
b P②N11たちわり断面（北から）
c P②N20たちわり断面（西から）
d P②N21たちわり断面（南から）
e ②S区西半（南から）
f ②S区東半（南から）
g SX②S01（SD②B01）（東から）
h ②S区SB02p16たちわり断面（西から）
- 写真図版76 南③A区 i ③A区全景①（南南東から）
j ③A区全景②（北東から）
- 写真図版77 南③A区 上 ③A区全景③（南から）
下 ③A区SB12（南から）
- 写真図版78 南③A区 上 ③A区SB13（南東から）
下 ③A区SA08東部（南から）
- 写真図版79 南③A区 上 SK③A01（西から）
下 SK③A01土器出土状況（北から）
- 写真図版80 南③A区 a ③A区SB12p20たちわり断面（西から）
b ③A区SB12p22たちわり断面（西から）
c ③A区SB12p24たちわり断面（西から）
d ③A区SB12p27たちわり断面（西から）
e ③A区SB12p29たちわり断面（南から）
f ③A区SB12p45たちわり断面（西から）
g ③A区SA08p23たちわり断面（南から）
h ③A区SA08p25たちわり断面（南から）
- 写真図版81 南③A区 a ③A区SA08p26たちわり断面（南から）
b ③A区SB13p40・41たちわり断面（南から）
c ③A区SB13p47たちわり断面（南から）
d ③A区SB13p48たちわり断面（西から）
e P③A04たちわり断面（北から）

- 写真図版81 南③A区 f P③A11たちわり断面（北から）
g P③A44たちわり断面（北から）
h P③A49たちわり断面（西から）
- 写真図版82 南③B区 上 ③B区全景（南から）
下 ③B区南部（北東から）
- 写真図版83 南③B区 a SD③B01~03（南西から）
b SD③B02土層断面（南から）
c ③B区南部遺構群（北から）
d SD③B04遺物出土状況（南から）
e 柱穴遺物出土状況
f ③B区SB13p07たちわり断面（北から）
g ③B区SB14p06たちわり断面（北から）
h ③B区SB14p10・44たちわり断面（北から）
- 写真図版84 南③B区 a ③B区SB15p20たちわり断面（南から）
b ③B区SB15p25たちわり断面（東から）
c ③B区SA08p26たちわり断面（南から）
d P③B35・36たちわり断面（北から）
e P③B39たちわり断面（南から）
f P③B43たちわり断面（南から）
g P③B46たちわり断面（南から）
h P③B48たちわり断面（東から）
- 写真図版85 南③C区 上 ③C区全景（南から）
下 SK③C01（北西から）
- 写真図版86 南③C区 上 SD③C01・02①（南から）
下 SD③C01・02②（南西から）
- 写真図版87 南③C区 a SD③C01土層断面（北西から）
b SD③C02上層断面（北西から）
c SD③C03土層断面（北から）
d SD③C03西側の遺構群（南東から）
e SK③C02（南東から）
f P③C01たちわり断面（西から）
g P③C02たちわり断面（西から）
h P③C03たちわり断面（西から）
- 写真図版88 南④区 a ④3区全景（北から）
b ④3区南側壁土層断面（北から）
c ④3区SE06土層断面（南から）
d ④3区SE06全景（南から）
e ④4区全景（南から）

写真図版88	南④区	f SD④ 4 01・02 (南から) g ④4 区SE05 (西から) h ④4 区SE05土層断面 (西から)
写真図版89	南⑤区	a ⑤区全景① (南から) b ⑤区全景② (北から) c ⑤区東側壁土層断面 (南西から) d SX⑤01土層断面 (南東から) e SX⑤01 (北西から) f SD⑤01・02 (東から) g SD⑤02土器出土状況 (南東から) h P⑤05土層断面 (西から)
写真図版90	南⑥Ⅲ区	a ⑥Ⅲ区全景① (南から) b ⑥Ⅲ区全景② (北から) c ⑥Ⅲ区SB06 (西から) d ⑥Ⅲ区SB07 (東から) e ⑥Ⅲ区SB06p02たちわり断面 (西から) f ⑥Ⅲ区SB06p04たちわり断面 (北から) g ⑥Ⅲ区SB07p09たちわり断面 (東から) h ⑥Ⅲ区SB07p13たちわり断面 (東から)
写真図版91	北村遺跡	北村遺跡出土遺物
写真図版92	北③区	上 北③区SK02・包含層出土遺物 下 北③区出土石器
写真図版93	北①区	北①区遺構出土遺物①
写真図版94	北①区	北①区遺構出土遺物②
写真図版95	北①区	上 北①区遺構出土遺物③ 下 北①区包含層出土遺物
写真図版96	北①区	北①区SD20出土遺物①
写真図版97	北①区	北①区SD20出土遺物②
写真図版98	北①区	上 北①区SD20出土遺物③ 下 北①区SD20出土遺物④
写真図版99	北①区	北①区SD21出土遺物
写真図版100	北①区	北①区SD21・包含層出土遺物
写真図版101	北①区	北①区出土木製品・金属器
写真図版102	中①区	中①区遺構出土遺物①
写真図版103	中①区	中①区遺構・包含層出土遺物①
写真図版104	中①区	上 中①区遺構出土遺物② 下 中①区遺構出土遺物③
写真図版105	中①区	上 中①区遺構出土遺物④

写真図版105	中①区	下 中①区遺構・包含層出土遺物②
写真図版106	中①区	上 中①区包含層出土遺物
		下 中①A区遺構・包含層出土遺物
写真図版107	中①区	上 中①A区出土遺物
		中 中①区出土金属器
		下 中①区遺構出土木製品
写真図版108	中①区	中①区遺構出土石臼
写真図版109	中②区	上 中②区遺構出土遺物①
		下 中②区遺構出土遺物③
写真図版110	中②区	中②区遺構出土陶磁器①
写真図版111	中②区	上 中②区遺構出土陶磁器②
		下 中②区出土遺物
写真図版112	南①区	南①区ST01出土須恵器
写真図版113	南区	南区建物跡関係出土遺物
写真図版114	南区	上 南②区建物跡関係出土遺物
		下 南①区遺構出土土器
写真図版115	南②B区	上 南②B区SE01井戸枠（側面）
		下 南②B区SE01井戸枠（斜削歛）
写真図版116	南②B区	上 南②B区SE01曲物（側面）
		下 南②B区SE01曲物（正面）
写真図版117	南②B区	南②B区SE01曲物細部
写真図版118	南②B区	南②B区SE01井戸枠板
写真図版119	南②B区	南②B区SE01井戸枠板・木製品
写真図版120	南②区	上 南②B区SE01杭
		下 南②区SE01・遺構出土遺物
写真図版121	南②B区	南②B区SE01出土土器
写真図版122	南②B区	上 南②B区SE01出土瓦（凹面）
		下 南②B区SE01出土瓦（凸面）
写真図版123	南①A区	上 南①A区SE02井戸組（側面）
		下 南①A区SE02井戸組（斜削歛）
写真図版124	南①A区	南①A区SE02井戸枠板
写真図版125	南①A区	南①A区SE02井戸刷毛・土居桁
写真図版126	南①A区	南①A区SE02底出土土器
写真図版127	南①区	南①区SE02・03出土土器
写真図版128	南①区	上 南①区遺構・包含層出土土器
		下 南①C区SE03出土曲物底板
写真図版129	南①区	上 南①区SE02・03出土木製品
		中 南①A区SE02出土木製品

写真図版129	南①区	下 南①C区SE03出土曲物
写真図版130	南区	上 南①C区SE03井戸桿
		下 南④区SE05ほか出土遺物
写真図版131	南②D区	南②D区SE04出土土器①
写真図版132	南②区	上 南②D区SE04出土土器②
		下 南②区遺構出土土器
写真図版133	南②D区	南②区D区SE04出土瓦
写真図版134	南区	南区遺構・包含層出土遺物
写真図版135	南区	上 南③区遺構・包含層出土遺物
		下 南②D区SX01出土土器①
写真図版136	南②D区	南②D区SX01出土土器②
写真図版137	南②D区	上 南②D区遺構・包含層出土土器
		下 南②D区SX01出土瓦
写真図版138	南①C区	南①C区溝出土遺物
写真図版139	南①C区	上 南①C区SD02出土遺物（凸面）
		下 南①C区SD02出土遺物（凹面）
写真図版140	南区	上 南区遺構・包含層出土遺物
		下 南①C区溝出土土器
写真図版141	南区	上 南①区溝出土土器
		下 南区包含層出土石製品
写真図版142	南①区	上 南①区溝出土土器①
		下 南①区溝出土土器②
写真図版143	南区	南区溝出土土器
写真図版144	南②区	上 南②A区SD01出土土器
		下 南②区溝出土土器
写真図版145	南区	南区包含層出土土器①
写真図版146	南区	上 南②区包含層出土土器
		下 南①区包含層出土土器
写真図版147	南区	上 南①区包含層出土遺物
		下 南区遺構・包含層出土遺物
写真図版148	南②区	上 南②区包含層出土瓦（凹面）
		下 南②区包含層出土瓦（凸面）

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

平成7年1月17日、淡路島の北部を震源とした兵庫県南部地震によって、神戸市や淡路島を中心とした地域では、5,500名を超える人命が奪われ、多くの建築物が倒壊するなど、甚大な被害がもたらされた。

兵庫県では、震災による被災者の生活再建のひとつとして、住宅の整備および建築を計画し、災害復興公営住宅の建設を実施することになった。当時、埋蔵文化財の調査は復旧・復興の阻害要因と危惧される状況であったが、兵庫県教育委員会は、「復旧・復興事業の円滑な推進と埋蔵文化財保護の整合を図るという基本方針の下に事業者と協議を重ね、また、文化庁は法的緩和措置を講じ、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本的方針について」(平成7年3月29日付)を定めた。これにより、伊丹市南町において、県営伊丹南町住宅(以下、県営伊丹住宅)建設にともなう埋蔵文化財の調査が実施された。調査は、平成7年10月より、3ヵ年4次にわたって大幅な遅延もなく行われ、直徑約15mの古墳や奈良時代の構、掘立柱建物跡、室町時代の堀などの遺構が確認された(『南本町遺跡』 兵庫県教育委員会 平成9年度刊行)。

都市計画道路尼崎港川西線(通称、産業道路 以下、尼崎港川西線)は、尼崎市の国道2号線から伊丹市を経由し、川西市に至る延長約15kmの広域幹線道路である。尼崎港川西線都市計画街路事業は、震災後の復旧・復興事業の一環として、現行道路の車線を拡幅し、4ヶ所の鉄道との交差部を立体交差化することによって、歩行者自転車空間の整備を図り、阪神間東部の南北主要幹線道路ネットワークを形成するとともに、交通の円滑化を目指して建設が進められた。

本書は、県営伊丹住宅建設地に隣接する調査区(南区)から、「国指定史跡 右岡城跡・伊丹郷町遺跡」に隣接する調査区(北①区)におよぶ南北に長い範囲を南本町遺跡(南区・中区・北区)として報告している(第1図 詳細は第2章 第3節 南本町遺跡について)。また、伊丹市北伊丹に所在する北村遺跡についても、同事業にともなって調査を実施したことから、あわせて掲載している。

第2節 確認調査および本発掘調査の経過と体制

尼崎港川西線都市計画街路事業における埋蔵文化財の調査は、上述した県営伊丹住宅建設地に隣接する南区と呼称した範囲では、遺構が連続して確認されるため、現行道路の東側約15m、南北約300mの範囲を復興調査として、平成8年5月より、2ヵ年4次にわたって本発掘調査を実施した。調査は、兵庫県の埋蔵文化財担当職員とともに、全国各地から復興調査のために派遣された他府県の調査員が担当した。

現行道路部分については、遺構が広がっている可能性が高いと考えられたが、道路建設時に削平を受けている部分が多いことが判明したため、確認調査の成果に基づいて限られた範囲のみ本発掘調査を実施した。

また、尼崎港川西線の建設事業が北進するに従い、南本町7丁目から同1丁目におよぶ範囲では、工事の進捗状況にあわせ、順次、確認調査を実施し、本発掘調査へと移行していった。

南本町5丁目を中心とする中区と呼称した範囲では、平成11・12年度に3地点4地区(中①A区～中

①C区・中②区)の調査を実施し、南本町1丁目を中心とする北区と呼称した範囲では、平成13・15年度に3地点3地区(北①区～北③区)の調査をそれぞれ行った。

確認調査および本発掘調査における各年度の調査体制は、下記の通りである。

確認調査

調査担当者	遺跡調査番号	調査期間	調査面積
平成9年度			
復興調査第2班 平田博幸・高瀬一嘉	970239	平成9年7月29日	12m ²
平成11年度			
調査第2班 岸本一宏・川村慎也	990108	平成11年5月11日～5月13日	56m ²
復興調査班 山田清朝・服部 寛	990203	平成11年8月24日～8月25日	66m ²
平成12年度			
復興調査班 藤田 淳	990317	平成12年2月25日～2月29日	25m ²
企画調査班 山田清朝	2000230	平成12年7月28日	14m ²
調査第1班 池田征弘	2000289	平成12年6月14日～6月23日	104m ²
平成13年度			
調査第4班 渡辺 昇・松岡千寿	2001140	平成13年8月30日～ 11月7日(4日間)	53m ²
調査第3班 村上泰樹	2001222	平成13年12月19日	6m ²
平成14年度			
調査第3班 鈴木敬二	2002048	平成14年5月21日・5月27日	24m ²
調査第2班 西口圭介	2002224	平成15年1月17日	24m ²
調査第3班 池田征弘	2002233	平成15年2月4日～2月7日	56m ²
平成15年度			
調査第3班 山上雅弘	2003122	平成15年7月14日	24m ²

本発掘調査 南本町遺跡 北区

調査担当者	遺跡調査番号	調査期間	調査面積	調査地点 (図版4)
平成12年度				
調査第1班 種定淳介・池田征弘 大崎見司	2000290	平成12年5月22日～7月5日	528m ²	③区
平成13年度				
調査第3班 多賀茂治・仁尾一人	2001071	平成13年6月11日～7月5日	580m ²	①区
調査第2班 山田清朝	2003001	平成15年4月7日～4月17日	160m ²	②区

南本町遺跡 中区

調査担当者	遺跡調査番号	調査期間	調査面積 (図版 4)	調査地点
平成11年度				
復興調査班 藤田 淳・仁尾一人	990288	平成11年12月27日～ 平成12年3月7日	1,026m ²	①区
平成12年度				
調査第4班 村上泰樹・篠宮 正	2000254	平成12年12月8日～ 平成13年1月31日	287m ²	②区
南本町遺跡 南区				
調査担当者	遺跡調査番号	調査期間	調査面積 (図版 4)	調査地点
平成8年度				
復興調査第2班 高瀬一嘉 小瀬忠司(岐阜県)	960074	平成8年5月13日～8月22日	1,441m ²	②区
復興調査第1班 渡辺 畏	960320	平成8年11月18日～	880m ²	③区
復興調査第2班 高瀬一嘉 河合 修(静岡県)		平成9年3月14日		
平成9年度				
復興調査第1班 横田 明(大阪府) 雁井 整(京都府)	970013	平成9年4月14日～4月25日	56m ²	(②区)
復興調査第1班 岸本一宏 半澤幹雄(千葉県)	970326	平成9年10月13日～12月25日	931m ²	①区
平成15年度				
調査第2班 池田征弘	2003002	平成15年4月7日～4月17日	140m ²	④区
調査第2班 池田征弘	2003062	平成15年4月21日～4月25日	91m ²	⑤区
調査第2班 山田清朝	2003063	平成15年4月28日～5月20日	300m ²	⑥区

第3節 整理作業の経過と体制

遺物の整理作業は、各遺跡の調査時に一部、監督員詰所において、遺物の水洗いおよびネーミング作業を行ったが、本格的な作業については、平成15年度より下記の工程および体制で実施した。

平成15年度

発掘現場において行えなかった遺物の水洗いおよびネーミング作業を兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の魚住分館(明石市)において実施し、その後、場所を埋蔵文化財調査事務所(神戸市兵庫区)に移し、遺物の接合・補強作業を行った。

整理担当職員 整理保存班 村上泰樹(工程管理)・中村 弘(魚住分館)

調査第2班 岸本一宏・池田征弘

調査第3班 藤田 淳・仁尾一人

担当嘱託員 吉田優子・眞子ふさ恵・石野照代・中田明美・西野淳子・藏 純子
大仁克子

(魚住分館) 長谷川洋子・早川亜紀子・伊藤ミネ子・衣笠雅美・江口初美
家光和子・小林俊子・渡辺二三代

平成16年度

前年度に行えなかった調査区（平成13年度以降の調査）の遺物の水洗いおよびネーミング、遺物の接合・補強作業を引き続き実施し、さらに、遺物の実測・拓本、遺物の復元、遺物の写真撮影、遺構図の補正、木製品および金属製品の保存処理作業を行った。

整理担当職員 整理保存班 村上泰樹・仁尾一人（工程管理他）・岡本一秀（保存処理）

調査第2班 岸本一宏・池田征弘

調査第3班 藤田 淳

整理嘱託員 伴 悅子・岡崎輝子・村上京子・尾鶴都美子・垣本明美・溝上くみ
西村美緒

吉田優子・西口由紀・石野照代・中田明美・藏 純子・大仁克子
加藤裕美・岡田祥子・又江立子

(保存処理) 栗山美奈・大前篤子・藤井光代・三島重美

(魚住分館) 長谷川祥子・早川亜紀子・伊藤ミネ子・衣笠雅美・江口初美
家光和子・小林俊子・渡辺二三代

平成17年度

前年度に引き続き、遺物の写真撮影、写真整理、遺構・遺物のトレース作業を実施した。また、北区より出土した下駄あるいは南区より出土した井戸枠・曲物・簀串等の分析鑑定（木製品の樹種同定）を外部業者に委託し、実施した。

整理担当職員 整理保存班 藤田 淳・仁尾一人（工程管理他）

調査第1班 岸本一宏

調査第2班 池田征弘

調査第3班 村上泰樹・鐵 英記

整理嘱託員 村上京子・溝上くみ

平成18年度

遺構・遺物図版および遺構・遺物写真図版のレイアウト作業、原稿の執筆作業を実施し、報告書を刊行した。

整理担当職員 整理保存班 岸本一宏（工程管理他）・藤田 淳

調査第2班 池田征弘

調査第3班 鐵 英記

考古博物館開設準備室 村上泰樹

兵庫陶芸美術館 仁尾一人

整理図託員

村上京子・溝上くみ

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

南本町遺跡・北村遺跡が所在する伊丹市は兵庫県の南東端に位置し、かなりの部分が東の猪名川と西の武庫川にはさまれた段丘上にある。段丘が沖積層に覆われた南側部分には尼崎市、段丘が連続する北側および北西側には川西市・宝塚市が隣接する。また、西側は武庫川をはさんで西宮市と接し、東の大坂府側では池田市・豊中市と境を接している。

伊丹市周辺は大阪平野の北西部にあたるが、北～北西側は北摂山地と六甲山地に接し、南側は大阪湾に面して開けている。地形的には、猪名川と武庫川がつくる沖積平野とその間にひろがる伊丹段丘に分けられる。伊丹段丘は、平野南部の尼崎地域では沖積平野の下に没し、尼崎地域を境にして南側は次第に沖積層が厚くなる傾向が認められる。

伊丹市の多くを占める伊丹段丘は、中位段丘にあたると考えられており、その基盤には伊丹粘土層があり、その上部には流紋岩の礫からなる伊丹礫層がのっている。中位段丘は、後期更新世の最終間氷期にともなって形成された海成層とその後の海退にともなって形成された非海成層からなり、地層の堆積年代は、4～12万年前と考えられている。いっぽう、伊丹礫層は低位段丘相当としての考えもあり、最終氷期の頃に形成された地層で、堆積年代は2～4万年前程度とも考えられている。

伊丹段丘北縁には花崗岩断層、六甲断層がほぼ東西に走り、流紋岩質溶結凝灰岩である有馬層群の北摂山地に接するが、その南縁に沿って大阪層群が尾根筋の斜面にへばりついで分布している。この地域の大坂層群は、主に小礫・中礫の大チャート礫を多数含む砂礫からなり、シルト層・砂層を挟んでおり、この砂礫がちの地層は、層相と地質構造から大阪層群下部生層群に属すると推定されている。

伊丹段丘内のはば中央には見陽池陥没帯とその南側には伊丹断層がほぼ東西に走り、段丘の東西両側は比高差10～20mの段丘崖となっている。いっぽう段丘の南側では、小支谷が5箇所に認められるようであるが、おおむね南にもかって緩やかに下降してゆく。南本町遺跡はこの台地から支尾根に変化しへじめる部分に位置し、遺構面での標高は約12mから約8mの部分にあたる。

南本町遺跡から南側にかけては伊丹段丘が緩やかに埋没してゆく。段丘を構成する伊丹粘土層は、尼崎付近では沖積面下に没し、大阪湾に向かってその厚さを増す。そして、伊丹粘土層を覆う伊丹砂礫層も、南方では沖積層の下位にもぐり込む。また、伊丹砂礫層に相当する砂・砂礫層は音波探査により大阪湾全域に分布していることもわかっていることである。西宮・尼崎地域の沖積層は、大阪湾岸あたりでは深度O.P. -30m付近まで分布し、厚さは約30mに達するとされ、これより北側に向かって徐々に薄くなり、名神高速道路付近では、厚さは5m程度とされている。沖積層は海成粘土層と砂・砂礫層からなり、前者は尼崎粘土層、後者は尼崎砂礫層と称されている。

南本町遺跡での調査の結果、遺構面はシルトに覆われており、井戸部分で確認した限りでは、約70cm～1mの厚さがあり、その下層が砂礫層となっていた。このシルトが尼崎粘土層にあたるのか、あるいは段丘からの堆積物であるか、もしくは砂礫層の土壤化した部分であるのかの判断はできていない。

一方、北村遺跡が所在する部分は、伊丹段丘の東側段丘崖下で、猪名川の開析による沖積地にあたり、未固結の砂礫・砂・シルト・粘土などから構成される部分である。この地層は海水面上昇により海が広く大阪湾奥まで侵入してきたことにより形成されたものと考えられており、海水面上昇のピークは約

6000年前の繩紋海進時で、現在より2~3m程度海水面が高かったといわれている。

なお、先述のように伊丹段丘の東側は急な段丘崖となっている。中近世の有岡城・伊丹郷町は、この自然の地形をうまく利用しているようである。

第2節 歴史的環境

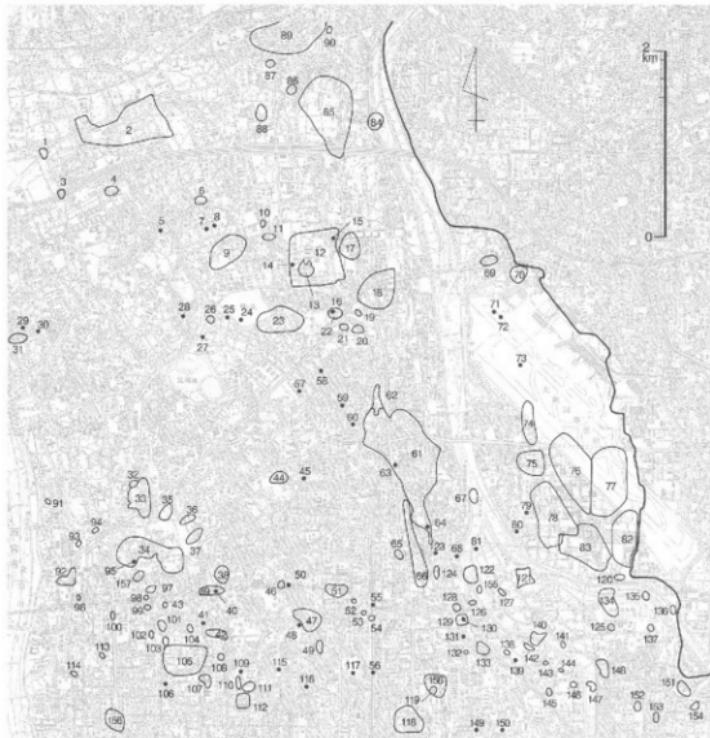
今回の南本町遺跡・北村遺跡の調査の結果、奈良時代・中世・近世の造構を中心であったが、ほかに古墳時代中期末の埋没古墳や旧石器時代後期に属する石器や繩紋・弥生時代に属する石器も出土した。

伊丹段丘上では旧石器は加茂遺跡でナイフ形石器・楔形石器等が発見されているが、段丘南部では本遺跡での出土が初例となるようである。

周辺に存在する繩紋時代の遺跡のうち、沖積地に存在するのは小阪田遺跡(70)…第1図・第1表の番号。以下同じ)、大阪空港遺跡A地点(72)、大阪空港遺跡B地点(73)、森本遺跡(76)、岩岸遺跡(77)、口酒井遺跡(78)、原田西遺跡(82)、猪名川川床遺跡(120)、瀬川川床遺跡(148)がある。段丘崖下の沖積地に存在する下加茂遺跡(85)や、大阪府側の豊中市穂積遺跡、同市小曾根遺跡、同市勝部遺跡、同市山ノ上遺跡、池田市豊島南遺跡とともに中期から晚期の遺跡は沖積地に多く存在している。一方、段丘上の後期～晚期の遺跡は有岡城・伊丹郷町遺跡(61)や加茂遺跡(89)で後期～晚期の造構・遺物が発見されているが、東野第3遺跡(11)、桜ヶ丘遺跡(59)および大阪府側の池田市池田城跡下層遺跡を含めても遺跡数が限られ、造構をともなう遺跡としては段丘上では沖積地に近い縁辺部に限られるようである。

弥生時代の遺跡のうち、前期前半では口酒井遺跡(78)があり、前期中頃以降小阪田遺跡(70)、大阪空港遺跡B地点(73)、岩岸遺跡(77)、田能遺跡(83)、下加茂遺跡(85)、北裏遺跡(92)、猪名川川床遺跡(120)、古宮遺跡(147)、東武庫遺跡(156)と遺跡数が多く、田能遺跡や北裏遺跡・東武庫遺跡では中期以降も継続して存続している。これらの遺跡はすべて沖積地に存在し、技術レベルの低い段階の水田経営に適した場所を占地している。この段階には伊丹段丘上には遺跡の出現は認められない。弥生中期には原田西遺跡が加わり、外縁付鉢の銅鋸が中村遺跡(71)から出土している。沖積地においては弥生後期に至って遺跡数が増大する。新たに北村遺跡(17)、松原遺跡(67)、大阪空港遺跡A地点(72)、西桑津遺跡(74)、森本居館跡(75)、久代遺跡(84)、四ノ坪遺跡(125)、中ノ田遺跡(129)、松ヶ内遺跡(133)、田能高田遺跡(134)、東園田遺跡(151)、深田遺跡(153)、が出現し、詳細は不明であるが、下河原遺跡(69)、森本遺跡(76)、口酒井春日神社境内遺跡(79)、宮ノ北遺跡(91崖)、春日神社遺跡(121)、寺前遺跡(126)、上園橋遺跡(127)、園田競馬場遺跡(135)、椎堂遺跡(136)、大西遺跡(137)、喜撰町遺跡(140)、南口遺跡(143)、南浦遺跡(145)、瀬川川床遺跡(148)、西浦遺跡(154)、塚口山廻遺跡(158)の多くの後期以降と思われる。沖積地に存在する遺跡のうち、北村遺跡、中ノ田遺跡、宮ノ北遺跡、寺前遺跡、上園橋遺跡は段丘崖下に、松ヶ内遺跡、塚口山廻遺跡は段丘の埋没線上に位置している。

一方、伊丹段丘上の弥生時代の遺跡には加茂遺跡(89)が中期初頭に出現するが、段丘東端でかつ北側にある南花屋敷の陥没地に面した位置にあたる。中期の遺跡は段丘南西端にあたる部分に道ノ下遺跡(101)、南戸板遺跡(103)、武庫庄遺跡(105)が出現し、後期に至っても同じ地域に南城越遺跡(99)、東柿ノ木遺跡(104)、庄ノ内遺跡(107)、四方田遺跡(108)が存在し、堀池遺跡(38)、野間森本遺跡(42)を含めても段丘中央部には遺跡の広がりは認められない。また、この現象は段丘南東端における



第1図 遺跡分布図

北畠遺跡（124）、前畠遺跡（128）、真淨坊遺跡（155）や、沖積地に面した段丘東端の高台遺跡第3地点（21）、高台遺跡第4地点（22）、伊丹小学校遺跡（60）および東大野遺跡（86）、六つ塚遺跡（87）、加茂西遺跡（88）や加茂遺跡も含め、同様の立地となっており、段丘西端には西野遺跡（31）が立地している。昆陽石蹴出土地点（45）を除けば、一見段丘中央部とも思える荒牧遺跡（2）は北側の低地や陥没地に面して選地しているようであり、荻野遺跡（6）についても段丘内の陥没地にある。

伊丹段丘上最古の古墳は、段丘西縁中央部に存在する前期の安倉高塚古墳である。段丘中央部ではそれに続く古墳は不明確であるが、段丘南東部および埋没段丘上に猪名野古墳群で総称される前方後円墳を主体とした古墳群が前期末から中期にかけて築造されている。池田山古墳（119）、伊居太古墳、御願塚古墳（55）、御園古墳（149）、南清水古墳（131）、園田大塚山古墳（130）、と統いて集かれ、食満1号墳（138）も前方後円墳と思われる。やや北に上がった段丘上には前期末の前方後円墳である女郎（上脇）塚古墳（63）およびその東側の有岡城跡・伊丹郷町遺跡下層（63）で前期末墳の埴輪円筒棺が出土している。その他に中期の鶴塚古墳（64）、本報告にある中期末の埋没古墳のほか、後期前半の南本町1～3号墳（66）、黄金塚古墳（68）、螢塚古墳（123）などが存在するが、古墳の数はもっと多かったようである。段丘東縁中央部では緑ヶ丘1号墳（15）、緑ヶ丘2号墳（竹塚）（16）といった後期古墳が築造されている。段丘中央部には荒牧古墳（5）、中野古墳（28）も存在する。

a.	南本町道跡	36. 足場集田道跡	73. 大阪空港連絡B地点	110. 東富松連絡A	147. 古宮通跡
b.	北村道跡	37. 山田有堀道跡	74. 西桑原道跡	111. 東富松連絡B	148. 露川川床道跡
1.	荒牧町道跡	38. 磐治道跡	75. 森本道跡	112. 富松城跡	149. 倭國古墳
2.	荒牧道跡	39. 野間東口道跡	76. 森木道跡	113. 舟田溝跡	150. 向院の石棺
3.	荒牧戸ノ尻道跡	40. 一本松道跡（塙墓）	77. 岩屋道跡	114. 武庫中学校道跡	151. 東面田道跡
4.	荒牧長新道跡	41. 須宿古墳	78. 口添外溝跡	115. 華塚古墳	152. 神楽田道跡
5.	荒牧古墳	42. 新開森本道跡	79. 口添春日神社境内道跡	116. 須羅古墳	153. 深田道跡
6.	萩野道跡	43. 野間岩宮道跡	80. 口添井猪名川河原道跡	117. 芹畠寺古墳	154. 西浦道跡
7.	豆野マウンド1道跡	44. 足場林田道跡	81. 口添井瀬川河原道跡	118. 瀬口城跡	155. 真淨寺道跡
8.	豆野マウンド2道跡	45. 足場石脚出土地点	82. 庫田西道跡	119. 池田山古墳	156. 東武庫道跡
9.	東野道跡第1地点	46. 南野出口道跡	83. 田柴道跡	120. 猪名川山道跡	157. 長ノ手道跡
10.	東野道跡第2地点	47. 南野溝跡	84. 久代道跡	121. 春日神社道跡	158. 稲口山道跡
11.	東野道跡第3地点	48. 平留官塙	85. 下加茂溝跡	122. 猪名寺廻寺跡	
12.	緑ヶ丘道跡	49. 安堂寺道跡	86. 東大野道跡	123. 宝塚古墳	
13.	伊丹麻寺跡	50. 丁接寺石造塔刹	87. 六つ塙道跡	124. 北畠道跡	
14.	猪ヶ山城跡	51. 御頭塙道跡第1地点	88. 加茂西道跡	125. 四ノ坪道跡	
15.	緑ヶ丘1号塙	52. 御頭塙道跡第2地点	89. 加茂東道跡	126. 寺前溝跡	
16.	緑ヶ丘2号塙（竹塙）	53. 御頭塙道跡第3地点	90. 乗積御塙出土地	127. 上園横道跡	
17.	(=b) 北村道跡	54. 御頭塙道跡第4地点	91. 宮ノ北道跡	128. 前須道跡	
18.	北園道跡	55. 御頭塙古墳	92. 北裏道跡	129. 中ノ田溝跡	
19.	高台道跡第1地点	56. 松木古墳	93. 三良田道跡	130. 園田大塚山古墳	
20.	高台道跡第2地点	57. 千世道跡	94. 上方シデ道跡	131. 南瀬水古墳	
21.	高台道跡第3地点	58. 大熊お屋	95. 猫山古墳	132. 桜荷道跡	
22.	高台道跡第4地点	59. 桜ヶ丘溝跡	96. 常松東道跡	133. 桜ヶ内道跡	
23.	大阪道跡	60. 伊丹小学校道跡	97. 時吉道跡	134. 田原高田道跡	
24.	大阪城ノ中溝跡	61. 有岡城跡、伊丹鶴町道跡	98. 友行古墳	135. 園田望馬塙道跡	
25.	尾ヶ治跡塙	62. 有岡城跡岸ノ筋跡	99. 南城越道跡	136. 桂宝溝跡	
26.	大槻玉田道跡	63. 有岡城跡女部奉着跡（古墳）	100. 中路道跡	137. 大西溝跡	
27.	箕面治北東町界	64. 有岡城跡鶴塙箭頭跡（古墳）	101. 道ノ下溝跡	138. 食瀬1号塙	
28.	中野古墳	65. 平松町道跡	102. 浅歌上溝跡	139. 食瀬2号塙	
29.	西野マウンド1道跡	66. (⇒ a) 南本町道跡	103. 南戸板遺跡	140. 喜撰町道跡	
30.	西野マウンド2道跡	67. 松原道跡	104. 東桃ノ木道跡	141. 錦田道跡	
31.	西野道跡	68. 黄金塙古墳	105. 武庫庄道跡	142. 西ノ口道跡	
32.	寺本猪名野神社境内道跡	69. 下河原道跡	106. 淺御古墳	143. 南口道跡	
33.	足場寺境内道跡	70. 小坂田道跡	107. 庄ノ内道跡	144. 宮ノ前道跡	
34.	山田道跡	71. 中村道跡（銅鐸）	108. 四方田道跡	145. 南浦道跡	
35.	寺本道跡	72. 大阪空港道跡A地点	109. 庄御塙古墳	146. 東口道跡	

第1表 遺跡名

一方、段丘南西部および埋没段丘上には前期末頃の前方後円墳である水堂古墳や後期前方後円墳の大井戸古墳、前方後円墳の可能性が高い友行古墳のほか、狐塚古墳（41）、猫山古墳（95）、浅堀古墳（106）、座頭塚古墳（109）が存在し、段丘中央南端部には径38mの柏木古墳（56）のほか、平塚古墳（48）、車塚古墳（115）、阪塚古墳（116）、琵琶塚古墳（117）があり、南野遺跡（47）では埋没古墳の周溝が検出されており、伊丹段丘南縁から南東部にかけては比較的標高の低い場所に前期末～中期の古墳が集造されている。

段丘上の古墳時代の集落跡は加茂遺跡や南西端の道ノ下遺跡以外には不確定なものが多く、不明であるが、沖積地の集落では中ノ田遺跡、岩屋遺跡、田能高田遺跡、東園田遺跡、深田遺跡があり、立地の点では弥生時代後期とあまり変化は無いようである。

奈良時代以降の遺跡は、段丘中央東端部、段丘南東部、段丘南西部に集中し、それぞれ伊丹廃寺、猪名寺廃寺、昆陽寺が核となるようである。昆陽寺境内遺跡では奈良時代の礎石建物が検出されている。

第3節 南本町遺跡について

南本町遺跡の本発掘調査は平成7年12月に遡る。平成7年度から平成9年度初頭にかけて、兵庫県阪神・淡路大震災復興本部都市住宅部が建設する灾害復興県営伊丹南町住宅建築工事にともなって本発掘調査が実施された。その調査区のすぐ西を南北に走る都市計画道路、尼崎港川西線（通称産業道路）の都市計画街路事業が調査区付近（南町工区）においても実施されることになった。事業主である兵庫県西宮土木事務所から平成8年3月に埋蔵文化財に関する調査の依頼がなされた。ちょうどその箇所は県営住宅に西接する部分にあたるため、兵庫県教育委員会は県営住宅部分の遺跡の状態から、本発掘調査が必要であるとの判断をおこない、平成8年5月に調査に着手した（調査番号960074）。

調査の結果、東西・南北方向に軸をそろえた奈良時代の握立柱建物跡が多数検出され、枠木などの遺存した大型の井戸のほか多数の柱穴・溝などが検出された。その後、その北側の工事にも着手されることとなつたため、遺構の状況から、本発掘調査が必要であるとの判断をおこない、平成8年11月から本発掘調査を開始した。

一方、遺跡の南側への広がりについては遺構の状況が不確定であったため、平成9年7月に確認調査（調査番号970239）をおこない、その結果、平成9年10月から本発掘調査（調査番号970326）を実施した。また、遺跡の最南端については未確認であったため、平成12年6月に確認調査（調査番号2000289）を実施し、遺構および遺物包含層を確認した。しかし残念ながら、本調査に入る前に工事が実施されたため、本発掘調査を実施することができなかつた。

その後、調査は北方向へ展開し、中区や北区と今同呼称した地区へ調査の中心が移つていった。ただし、これまでの調査は南北道路の東側半分に限られていた。次に道路西側半分の工事が実施されることになったため、平成14年度から当該部分の確認調査を実施し、その調査の結果を受けた各地区の本発掘調査が北区（調査番号2003001）から南へと展開していった。本発掘調査は平成15年度中には最後の南端部分（調査番号2003063）が終了し、当該事業にかかる足かけ8年にわたった南本町遺跡の調査が終了した。

なお、南本町遺跡の名称で発掘調査を実施した部分のうち、北区のさらに北部分にあたる平成15年7月の確認調査箇所以北については、遺跡の場所・時期・性格から、有岡城・伊丹郷町遺跡として次回に報告することとし、今回の報告には含まれていない。

第3章 南本町遺跡の調査の成果

第1節 北区の調査成果

1. 調査の概要

南本町遺跡の北区と呼称した伊丹市南本町1丁目から2丁目を中心とした範囲では、3地点（北①区・北②区・北③区）の調査を実施した。調査では、「国指定史跡 有岡城跡・伊丹郷町遺跡（以下、有岡城跡・伊丹郷町遺跡）」に隣接する北①区で近世の遺構が確認され、他の2地点（北②区・北③区）では、後世の擾乱等によって遺構の残存状況が悪いものの、中世の柱穴や廻溝あるいは近世の土坑や杭列などの遺構が確認された。中世の遺構からは、須恵器の他、土師器、瓦器などが出土し、近世の遺構からは、肥前系陶磁器、備前焼、丹波焼などの土器類の他、瓦が多数出土した。

北①区では、調査区の中央部から以北の範囲で近世の溝、土坑、竈跡などが確認された。このうち、東壁際および北部で確認された2条の溝（SD20・SD21）は、ともに幅が広く、また、19世紀代の遺物が多量に出土していることから、隣接する有岡城跡・伊丹郷町遺跡に関係する遺構と考えられる。

北②区は、南東部の一部が後述する北③区と隣接しているが、周辺のその他の範囲については、確認調査（遺跡調査番号2002224）の結果、著しく削平されていることが明かとなった。このため、調査区は遺構あるいは遺物が確認された南北に長い範囲を設定した。調査では、遺構面は2面確認され、ともに出土した遺物から鎌倉時代（13世紀代）の遺構と考えられる。

北③区は、調査区の中央部を中心に後世の擾乱によって多くの遺構が削平されているが、ほぼ全域から廻溝が確認されている。廻溝以前の遺構には、3条の溝（SD01～SD03）があり、廻溝以後の遺構は、土坑、柱穴、杭列などが確認された。

2. 遺構

北①区

北①区は、今回報告する南本町遺跡の最北端、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に隣接した地点に位置している。東側は史跡範囲からは除外されているが、その延長は有岡城の摂構えの範囲を反映する水路が流れしており、現在もその水路に沿って長さ約60mにおよぶ石垣が残っている。

調査範囲は南北約60m、東西は中央部より南側は道路拡幅部分約13mを測り、北側は史跡の範囲を控えたため、北端部では約3mと狭く、調査面積は約600m²である。基本土層は、厚さ約80cmの盛土、その下層に厚さ約20cmの耕土があり、さらにシルト混じりの黄褐色層および暗褐色層を取り除くと黄褐色シルト層を主とする遺構が確認された基盤層である。

調査区中央部を中心とした範囲で確認された遺構は、一部切り合った状態で検出された多数の土坑の他、調査区の東壁際に沿った溝状遺構（SD20）、調査区を横断する東西方向の溝（SD21）などである。また、調査区の南端部では遺構および遺物は確認されなかったが、北端部では近接する範囲に複数の竈跡が確認された。出土した肥前系あるいは頬戸・美濃系の陶磁器や、備前焼、丹波焼などの遺物から、江戸時代後期（19世紀代）の遺構と考えられ、南本町遺跡という名称であるが、東接する有岡城跡・伊丹郷町遺跡に深く関係する遺跡の一部と考えられる。

溝

調査区の東壁際で南北方向に長さ約33mにわたって比較的深く掘り込まれた溝状の遺構（SD20）は、検出当初、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に関連する堀跡の可能性が高いと考えられた。しかし、土層断面の観察用の畦を設定し、掘り下げを進めていくと、遺構の中央部に一辺約5m、深さ約1.8mを測る方形の土坑（SK27）が検出され、溝の東側の立ち上がりも一部確認された。このため、堀跡と考えられたこれらの遺構は、SK27が水溜めとして機能する、溝あるいは排水施設と考えられる。これは、SK27が比較的広く池状に掘り込まれているものの、その南側には堤状に残る部分があることや、溝の立ち上がりが緩やかで深さが1m前後と浅いこと、さらに、溝の南北両端が東側へと屈曲していることなどが挙げられる。しかし、調査区外の東側が明かでないため、SD20については、詳細は不明といわざるをえない状況である。また、SD20の下層では自然堆積が認められるが、上層部は遺物を多量に包含した残土で人為的に埋められていることが確認された。出土した遺物は、肥前系あるいは瀬戸・美濃系の陶磁器の他、備前焼の火入や丹波焼の徳利、等・明石系の擂鉢など18世紀後半を含む19世紀代の陶磁器類や瓦などであり、当該期にこの遺構が埋められたものと考えられる。

調査区の北側では、長さ7.4m以上、深さ約1mを測る調査区を横断する溝（SD21）が確認された。溝の北側は、直線的に東西方向に延びているが、南側は、調査区の東壁際で幅約4.4mを測り、溝の中央部ではほぼ直角に広がり、西壁際では約6.8mを測る。このため、検出当初は、有岡城跡・伊丹郷町遺跡に関連する堀跡の一部と考えられた。しかし、溝の南側の立ち上がりには、SD20でみられた方形の土坑（SK27）に類似した、溝の内側を区画したと考えられる十字状の痕跡が複数確認された。また、調査区の東壁際では、上記のSD20がわずかに重なり、一部が切り込まれた状態で検出された。しかし、調査区外の東側の状況が明かでないため、SD21についても、詳細は不明である。遺物は、肥前系あるいは瀬戸・美濃系の陶磁器や丹波焼など、18世紀後半を含む19世紀代のものが多量に出土しており、SD20と同時期か近似する時期の遺構と考えられる。

土坑

調査区の中央部、SD20の南半部に近接する範囲を中心に、約20を数える土坑（SK01・SK10他）が確認された。上坑は、0.7m～4.2mを測る円形あるいは方形状を呈する比較的小さなもので、一部には切り合い関係が認められる。いずれの土坑もほぼ垂直に掘り込まれており、土層の堆積状況から、人為的に埋められたことが確認された。このうち、SK01・SK02・SK08・SK05・SK10・SK25では、比較的まとまった量の遺物が出土している。遺構の切り合い状況から、前後関係はあるものの、上記のSD20・SD21と同様、19世紀代の限られた時期の遺構と考えられる。

竈跡

調査区の北壁部では、焚口の一部が残存する竈跡が2基確認された。地上部は削平されているが、約10cmの立ち上がりが残存し、いずれも直径約80cmの円形を呈している。竈は、円形の周囲に河原石を巡らせ、焚口は南側に開口してつくられている。竈跡の床面は灰色に還元しているが、周辺にも灰色に還元された塊や粒子、焼土あるいは炭化物などを多量に含んだ層が広がっていた。これは、確認された2基の他にも、灰色の円形状に還元された層が3箇所検出されていることから、周辺には複数の竈が存在していたと考えられる。しかし、それらの竈が同時に使われていたのか、つくり代えられて廃棄された痕跡なのかは、遺構の切り合い関係が明らかでないため、不明である。また、竈跡あるいは焼土層が検出された地点は、SD21が検出された地点とは、約10cmの高低差があるため、SD21との範囲は、広く

削平されたものと考えられ、周辺にはさらにいくつかの竪が存在していた可能性が考えられる。竪より出土した遺物は、肥前系の陶器、備前焼などわずかであるが、上記の遺構などと同様、18世紀後半から19世紀代の時期の遺構と考えられる。

(仁尾)

北②区

北②区は現行道路部分にあたり、道路拡幅部分の調査が完了したのち、道路を付け替えて調査を実施した。しかし、周辺の遺構の残存状況は悪く、調査範囲は南北約41m、東西は約4mと狭く、調査面積は約160m²である。

遺構は、地表面から約1.4m掘り下げた地点（以下、上層）とさらに約20cm掘り下げた地点（以下、下層）の2面で確認された。

上層で確認された遺構は、直径15~20cmを測る6つの柱穴である。いずれも検出面からの深さが、5~10cmと浅いため、周辺は広い範囲にわたって削平されたものと考えられる。柱穴内から遺物は出土しなかったが、遺構検出時に13世紀前半の土師器および瓦器が出土していることから、当該期の遺構と考えられる。

上層から10~20cm掘り下げた淡黄灰色シルト層を基盤とする下層でも、直径15~20cmを測る柱穴が複数確認された。上層の柱穴同様、残存する深さは5~10cmと浅く、周辺は削平されたものと考えられる。柱穴内から遺物は出土しなかったが、遺構検出時に13世紀前半の須恵器および瓦器や、一部に8世紀代の須恵器が出土している。しかし、上下層ともに、確認された柱穴からは、建物跡を復元することはできなかった。

(仁尾)

北③区

北③区は、現行道路を東側に約15m拡張するものである。調査区は、境界から約1mの控えをとり、幅約13mとしたが、調査区南半部においては東側に隣接する「伊丹ダイハツ」店舗の通路を確保する必要から東側のみ約1.5mの控えを設けた。また、調査区南西部には残土運搬車両乗り入れ・転回スペース（南北4m×東西3m）を確保した。

調査地は有岡城の縄構えの西側ラインである段丘崖の60m西側に離れている。層序は、現地表面から約1.5mの深さまで確認した。基本的な層序は、現地表面下約80cmの厚さで最上層の盛土が認められ、その下層に旧耕土が2層（2層：オリーブ黒色のシルト質極細砂、3層：灰オリーブ色のシルト質極細砂）堆積している。2層がおそらく近代、3層が近世の耕土である。その層の直下には床土（4層：暗オリーブ色の極細砂～細砂）が、さらにその下には灰オリーブ色の極細砂（5層）、暗灰黄色のシルト質極細砂（6層）が堆積している。6層がわずかに瓦器・須恵器・土師器の細片などを含む包含層となっている。7層には中世の耕作時に削り残され、土壤化の影響を受けなかつた黒褐色シルト質極細砂が薄く広がっている。耕作地以前は湿地であったと考えられる。基盤層は灰黄色のシルト質極細砂である。中世の遺構面は6層を除去した7層上面であるが、7層は黒色系の色剥であるため検出が困難であるため、ベースの8層上面で検出をおこなった。

検出した遺構は、大部分が繕溝であるが、その他に溝・柱穴・土坑・杭列などがある。

鍋溝

鍋溝は、ほぼ調査区の全面で検出された。概ねN10°~15°Eの方向を向き、溝の間隔は70cm前後であ

る。個々の溝は断続的にしか残存しておらず、鋸の尖端が深く地中に食い込んだ部分のみが残存したものと思われる。幅は20~40cmで、深さは10cm程度である。今回検出した鋸溝は、中①B地区での検出事例と規模・方位とも同じである。6層中に含まれる瓦器などから中世前期の時期と考えられる。

溝

SD01は、調査区北部の擾乱部分に接しており、南側は削平され消滅している。全体的に残存状況は良くない。幅50cm、深さ2~3cmで底部は平底の浅い溝であるが、掘削時に溝の底より石鎧が1点出土した。

SD02は、調査区中央部の擾乱部分からほぼ南北方向に向かう溝である。南側は削平され消滅している。幅は60cm程度、深さ10~15cmで底部は平底状の溝である。掘削時に溝の縁部より国府型ナイフ形石器1点、石鎧1点、剥片1点が同一地点でまとめて出土した。

SD03は、調査区北東端より南進し、途中で南東方向へ屈曲している。幅60cm程度、深さ10cmで底部は平底状の溝である。

掘立柱建物跡

SB01は、調査区南端で検出された掘立柱建物跡である。東と南は調査区外へ延び梁行2間以上、桁行3間以上と考えられる。柱間は梁・桁とも3mで、方位はN68°Eである。

土坑

SK02は、調査区南部に位置する。平面形状は方形を呈し、南北方向2m、東西方向3m、最深部16cmを測る。底部は不定形で、粘土ブロック、礫を含んでいる。この土坑からは近世の肥前系陶磁器片や瓦片が出土している。

杭列

調査区内を、東西方向に横断する形の杭列が調査区中央部、南部の2ヶ所で検出された。方位は北側の杭列1がW64°E、杭列2がW70°Eである。杭列間の幅は15mで、概ね平行に並んでいる。SK02を切っている。

(池田)

3. 遺物

北①区

北①区では、遺構あるいは包含層から多数の遺物が出土したが、実測、図化したものは、土器および瓦47点(20~66)、金属製品3点(M3~M5)、木製品4点(W1~W4)の以上、54点である。また、北区周辺の確認調査で出土した遺物のうち、4点(67~70)も実測、図化している。

土器および瓦

20・21はSK01より出土した唐津焼の甕(20)と肥前磁器の碗(21)である。口縁端部を内側に屈曲させた20は復元径約30cmを測る大型の甕であり、棺桶として利用された可能性が考えられる。21は外面に丸文を描き、内面の見込みに五弁花文が印版された、いわゆる「くらわんか碗」である。

22・23はSK02より出土した行平の蓋(22)と堺・明石系の擂鉢(23)である。22は円形のつまみの周間に刻みを巡らし、白釉で花文状にイッチャン描きされている。蓋うらの見込みにのみ釉がけされている。23は底部からほぼ直線的に立ち上がり、口縁部は三角形状を呈する擂鉢である。外面は比較的丁寧にナデ調整され、内面体部には、11本一単位の搦目が全面に施されている。

24・25はSK05より出土した萩焼の小鉢（24）と窯西系の陶胎染付の鉢（25）である。24は外面に黒褐色と白色の釉がかけられ、高台内には特徴的なロクロの削り痕跡がみられる。25は底部の小破片であるが、外面には草花、内面見込みには龍が描かれている。

26はSK08より出土した朱泥の小壺、27はSK10より出土した油壺である。ともに備前焼と考えられ、26は器壁が薄く、外面は光沢のある暗赤褐色を呈している。27は外面に沈線が巡り、底部が安定した算盤玉状を呈している。

28～30はSK25より出土した京焼系と考えられる鉢（28）、堺・明石系の鍋（29）、肥前の青磁碗（30）である。28は火入と考えられたが、口縁端部は丁寧に釉が拭きとられ、内面は全面に施釉されているため、蓋が取り付く鉢と考えられる。また、内面の底部には二等辺三角形の日跡が残り、底部には判読不明の墨書きがみられる。29は内済する体部からほぼ直角に聞く口縁部に弧状の把手が二方向に取り付いた鍋である。内面および外面の下半部まで光沢のある褐色を呈しているが、底部および口縁部には煤が付着している。

31～33は竈跡より出土した備前焼の壺（31）、肥前磁器の碗（32）および鉢（33）である。31は口縁部の小破片であるが、口縁端部を外側に屈曲させた大型の壺であり、復元径は約40cmを測る。33は内外面に草花が描かれ、見込みには五弁花文が印版された鉢である。高台内には、「渦羅」を崩したと考えられる銘がみられる。

SD20では多量の遺物が出土したが、瓦を含む22点（34～55）を抽出し、実測、図化している。

34は土師質の小壺である。器壁は薄く、底部は糸切りされ、内面のみ施釉されている。35は備前焼の火入である。36は堺・明石系の擂鉢で、口径約18cmと比較的小型のものである。内面体部には、12本一単位の摺り目が全面に施され、底部にも一部摺り目が認められる。37は鉢の部分がわずかに残存する瓦質の羽釜である。内外面ともナデが施され、鉢下には煤が付着している。38は暗灰緑色を呈する信楽焼の秉燒である。39は暗灰緑色の灰釉が全面に施された丹波焼の徳利である。口縁部から体部の一部のみが残存するため、高さは不明であるが、白釉でイッチン描きされていたものと考えられる。40は京焼系の植木鉢である。残存する部分はわずかであるが、三脚の底部および高台を除き白化粧され、山水文が赤絵付けされている。41は丹波焼と考えられる花生である。口縁部は欠損するが、低く安定した体部から口縁部へは直線的に外反する形状を呈し、双耳は簡略した貼付けがされている。42は口縁部の小破片である。口縁端部および内面には細かな草花文が施されており、清朝の綠釉大盤と考えられる。43～49は肥前磁器の伝花瓶（43）、碗（44～47）、輪花鉢（48）、皿（49）である。43は高さ6.6cmを測る小型のもので、外面にはたこ唐草文が描かれている。45の外面には松葉状の文様が描かれ、内面の見込みは蛇の目状に釉剥ぎになっている。46の外面および口縁内部にも松葉状の文様が描かれ、内面の見込みには五弁花文が印版され、重ね焼きの痕跡が残っている。47は内外面ともに圓線が巡り、見込みには菊花文、外面体部には#状の文様が描かれている。48は型打ち成形された輪花形の鉢であり、内外面には唐草の文様が描かれている。49は口径15.7cmを測る中型の皿であり、口縁端部はわずかにつまみ上げられている。内面の口縁部には葉文、見込みには松竹梅円形文が描かれている。50は瀬戸・美濃系の碗である。内外面に圓線が巡り、内面の見込みには蝙蝠、外面には草花が描かれている。51は瀬戸・美濃系の小皿である。内面の見込みには壺や瓢箪などの中に圖案化された文字が描かれている。52は近代の印版皿である。約半部が欠損するが、内面の周縁部には日本列島や東アジアの大陵、東南アジアの島々や槍などが配され、中央には桐文が描かれている。

瓦は実測、図化した軒丸瓦（53・54）および軒平瓦（55）の他にも、軒瓦や丸瓦、平瓦が多量に出土している。53は巴先端部が比較的長く延び、周囲に13の珠文が巡る軒丸瓦である。瓦頭部のみが残存し、直径15.8cmを測る小型のものである。54は瓦頭面の中央に凸が配され、圓線を隔てて12の唐草文様が巡っている。直径17.2cmを測る大型のもので、瓦の凹面には横方向のコビキ痕や吊り縫痕、粗い布目の痕跡など、製作上の痕跡が残っている。55は平面の形状が三角形状を呈するため、棟に接する位置に垂かれたと考えられる軒平瓦である。文様面は両端から左右それぞれ約5.5cm内側にあり、中央に宝珠を飾り、中心から左右に片側4葉の唐草を配している。

SD21でもSD20同様、多量の遺物が出土したが、7点（56～62）を抽出し、実測、図化している。

56は土師質の小皿である。34同様、器壁は薄く、底部は糸切りされ、内面のみ施釉されている。57は丹波焼の菜形皿である。壓押し成形され、長辺は約23cmを測る比較的大型の皿である。58は口径30.7cm、高さ20.1cmに復元される瀬戸・美濃系の水桶である。底部を除き、内外面は施釉され、内面の見込みには6ヶ所の目跡が残っている。59・60は肥前磁器の皿（59）と碗（60）である。59は内面に格子文が描かれ、見込みは蛇の目状に釉剥ぎされている。61は直径約33cm、厚さ約2.6cmを測る蒸籠に使用されたと考えられる円形の板である。上面には直径約1.5cmを測る穴は16を数えるが、下面まで穿孔するものは、そのうち9つである。62は六角形の原根部分が残る陶製の置物と考えられる。

63～66は包含層から出土した遺物である。

63は須恵器の甕である。口縁部の小破片であるが、口径約16cmに復元され、口縁端部が下方にわずかに引き下げる形を呈している。64は衛前焼の櫛鉢である。63同様、口縁部の小破片であるが、その形状から14世紀後期のものと考えられる。65・66はともに丹波焼である。65は復元径31.9cmを測り、ほぼ直立する頭部から口縁部には直角に屈曲する形を呈する植木鉢である。口縁部および頭部を装飾帶が巡り、型取りされた菊花文が貼付けられている。66は口径11.6cmを測る円筒形の火入である。

この他、肥前磁器の皿（67・69）や瀬戸・美濃系磁器の碗（68）などが出土している。

金属製品および木製品

M3・M4はSD21より出土した銅鏡で、ともに寛永通宝である。M5は包含層から出土した断面が方形の角釘である。頭部および先端部はともに欠損し、一部折れ曲がっているが、残存長6.3cmを測る。

W1はSK06より出土した下駄である。長さ22.1cm、幅7.0cm、高さ2.9cmを測る長円形を呈し、台部裏面の二本の溝に歯を差し込む構造の、いわゆる陰卯下駄である。

W2～W4はいずれもSD20の下層より出土している。W2は直径約7.7cm、厚さ約0.6cmを測る円形の木板で、容器あるいは曲げ物類の底板と考えられる。W3は長さ11.8cm、幅約5.5cmを測る圓筒の柄と考えられ、柄の一部には漆が残存している。W4は長さ14.9cm、幅7.7cm、高さ2.8cmを測る格円形を呈し、台部裏面の中央部を割り取った、いわゆる露地下駄である。鼻緒を通す眼（穴）は貫通しておらず、台上面から打ち込まれた2本の鉄釘と鼻緒留めと考えられる鉄製品が残存している。

（仁尾）

北③区

北③区では、遺構あるいは包含層から遺物が出土したが、実測、図化したものは、土器4点（16～19）のみである。

土器

17・18はSK02から出土した肥前磁器の碗である。17は内面に格子文が描かれ、見込みは蛇の目状に

種剥ぎされている。18は外面に雪餅文が描かれた、くらわんか碗であるが、高台内に書かれた銘については不明である。

16・19は包含層から出土した丹波焼の壺（16）と中国製磁器の皿（19）である。16は復元径約12cmを測り、外面には灰釉がかけられている。19は底部の小破片であるが、内面には草花および鶴が丁寧に描かれている。器壁が薄く、高台の断面が三角形状を呈することなどから、中国製と考えられる。

（仁尾）

石器

S 2はサヌカイト製の角錐状石器である。素材は石核底面を有する横長剥片で、瀬戸内系の横剥ぎ技術で剥離されている。調整剥離は打面側の一部を除いて、ほぼ全周にわたって行われており、打面側と末端側の半分は急角度に、残りは薄く平坦な剥離となる。全周が急角度の調整剥離で槍先状に成形される一般的な角錐状石器と比べると、素材の形状をまだ留めている。しかし、刃部にも調整剥離が及んでいることから、スクレイパーとすべき資料かもしれない。

S 3・S 4はサヌカイト製の凹基式石鏃である。S 3は比較的大きな剥離を正確に入れて、均整の取れた二等辺三角形に仕上げられており、製作者の技量の高さがうかがわれる。基部の抉りは浅く、表裏とも最後に剥離が行われている。肉眼による識別では二上山のサヌカイトと思われる。S 4は偏縁がゆるやかな「S」字状を成し、基部は一整で大きく抉られている。

S 5は剥片である。寸詰まりの小片であるが、背面構成をみると打点が反時計回りに移動しており、円整状の石核から石理に沿って剥離されたことがうかがえる。打面は点状で、末端は縦番剥離となる。

（藤田）

第2節 中区の調査成果

1. 調査の概要

南本町遺跡の中区と呼称した伊丹市南本町4丁目から5丁目を中心とした範囲では、3地点4地区（中①A区・中①B区・中①C区・中②区）の調査を実施した。調査では、各地点とも後世の擾乱等によって遺構の残存状況は悪いものの、中世を中心とした時期の掘立柱建物跡や溝、井戸、土坑、柱穴などの遺構が検出され、須恵器、土器類の他、瓦器、瓦質土器、備前焼などの遺物が出土した。

中①A区では、調査区の南東部を中心に中世の溝、土坑、柱穴などが確認された。多数検出された柱穴から復元された建物跡は、この時期にみられる柱穴の並びが不規則な1棟（SB347）のみであるが、柱穴の底に柱材が遺存しているもの（SP257）もあり、他にも建物跡として復元できる柱穴の並びがあると考えられたが、調査区内で復元することはできなかった。出土した遺物から、鎌倉時代末期から室町時代（14～16世紀代）の集落跡と考えられる。

中①B区および中①C区は、隣接する調査区であるが、中①B区の東側には当時、使用されていた駐車場があり、その進入路が調査区を斜めに横断する状況であった。このため、進入路を境に、中①B区を南北に二分し、南側は中①C区と同時に調査を実施し、終了後に北側の調査を行うこととした。その結果、中①B区では、工事範囲の一部を調査することが困難となったが、周囲の遺構の検出状況が極めて希薄であったため、調査は行わなかった。

中①B区を中心とした調査区の北半部からは、ほぼ南北方向に延びる幅約20～30cmの鶴溝や土坑などが確認され、遺構が検出された土層や出土遺物から江戸時代後期（19世紀代）の畑地であったと考えられる。中①B区南側および中①C区を中心とした調査区の南半部からは、中世の溝、土坑、井戸、柱穴などの遺構が確認された。このうち、ほぼ東西に延びる2条の溝（SD10・11）を境にした北側では、L字状に屈曲する溝（SD13）の内側（西側）に多くの遺構が検出されたが、調査区の西壁際に広がる後世の擾乱土坑によって、遺構の広がりを確認することはできなかった。また、溝の南側、調査区の南東角部では、調査区外の東および南側に遺構が続いている多くの遺構が検出された。出土した遺物から、中①A区同様、鎌倉時代末期から室町時代（14～16世紀代）の集落跡と考えられる。なお、中①C区の南および西側については、確認調査（遺跡調査番号990108）の結果、擾乱等によって遺構が残存している可能性が極めて低いことが判明したため、調査は行わなかった。

中②区では、中世および近世の遺構、遺物が確認された。中世の遺構は、東西方向に延びる溝（SD01）と南北方向に延びる溝（SD03）、井戸（SE03）であり、出土した遺物から鎌倉時代（13世紀代）の遺構と考えられる。溝については、屋敷地を区切る地割りの溝と考えられ、近接する地点に中世の建物跡の存在する可能性が想定される。近世の遺構は、江戸時代後期（19世紀代）と考えられる堀桶造構（SK01・02）と江戸時代末期から明治時代と考えられる溝（SD04）が確認された。

2. 遺構

中①A区

中①A区は、今回報告する南本町遺跡のほぼ中央、中区と呼称した3地点4地区の最も北側に位置している。

調査範囲は南北約32m、東西は道路拡幅部分約14mの約450m²である。基本土層は、厚さ約30cmの盛

土、その下層に厚さ約20cmの耕土があり、それらを取り除くとシルト混じりの砂礫層を主とする遺構が確認された基盤層である。

調査区の南東部を中心に確認された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑、溝、柱穴などであり、出土した須恵器の鉢や瓦器碗などの遺物から、鎌倉時代末期から室町時代（14～16世紀代）の集落跡と考えられる。しかし、調査区の西側あるいは北側では遺構、遺物とともに極めて希薄な状態であるため、遺跡の中心部は今回の調査区の東側に存在する可能性が高いと考えられる。

掘立柱建物跡

中①A区で確認された掘立柱建物跡は、調査区の中央やや南側で確認された1棟（SB347）である。建物の主軸は、N10°Eでほぼ南北方向を指し、東西3間（約5.3m）、南北3間（約7.1m）の純柱建物跡であったと考えられる。柱穴は直径約20cm、深さ10～20cmを測る比較的小さく、一部に柱穴が確認されなかつた箇所があるため、検出された遺構面は削平を受けている可能性が高いと考えられる。また、中世の時期には、柱穴の並びが不規則な掘立柱建物跡が存在していたと考えられていることや、確認された柱穴のひとつ（SP257）の底に柱材が遺存していたことから、他にも掘立建物跡が復元できると思われたが、柱列を想定することはできなかった。なお、建物を構成した柱穴から、遺物は出土しておらず、切り合ひ関係のある土坑からも遺物が出土していないため、遺構の詳細な時期は不明であるが、後述する周囲の土坑と同様、14世紀代を中心とした時期の遺構であったと考えられる。

溝

調査区の南東隅で西側の肩部の一部が確認された遺構は、溝（SD204）と考えられるが、土坑になる可能性も想定される。溝とすれば、幅は2m以上、深さは約60cmを測り、中①A区では最も大きな遺構である。掘立柱建物跡（SB347）の主軸とほぼ並行することから、尾敷地を区画する溝の可能性が考えられるが、遺物は出土しておらず、詳細は不明である。また、調査区の北側に東西方に向延びる溝（SD365）は、長さ約12m、幅約30cmを測るが、深さは数cmしか残存していないため、調査区の南側同様、周辺は削平されたものと考えられる。

土坑

調査区の南東部を中心に9基の土坑が確認された。東西約3.2m、南北約3.6mを測る亞な方形状を呈するSK201は、深さ約10cmを測り、中央付近からは拳大の礫群が出土している。東接するSK203は、東西約3.7m、南北約4mを測る台形形状を呈し、深さ約25cmを測る浅い皿状の断面をもつ土坑で、現代の井戸によって北西角部が削平されている。また、調査区の東駿跡から確認された2基の土坑（SK205・SK211）は、ともに調査区外へと続いているが、前者はSK201・SK203同様、方形状を呈し、深さも約15cmを測る浅い皿状の断面をもつ土坑である。後者は長辺約2.5m、深さは70cm以上におよぶため、井戸の可能性が考えられる土坑である。いずれの土坑からも、14世紀代を中心とした須恵器および瓦器の小片が出土しており、当該期の遺構であったと考えられる。この他の土坑については、遺物は出土していないが、遺構は同一面から検出されたため、同時期の遺構であったと考えられる。

柱穴

調査区全域から約130を数える柱穴が確認された。柱穴は概ね直径15～30cm、遺構検出面から深さ10～30cmを測るが、掘立柱建物を構成するものは、先述した1棟（SB347）であった。また、SP257の底には、検材と考えられる直径約20cm、長さ約30cmを測る柱材が遺存していた。

（仁尾）

中①B区・中①C区

中①B区および中①C区は、中区と呼称した3地点4地区の中央、中①A区の南約60m、中②区の北約25m（中①B区・中①C区の南北両端を基点）の地点に位置している。土地利用によって区画されていたため、中①B区と中①C区とに調査区を分割し、それぞれに地区名を付しているが、ひとつのまとまった範囲であり、これ以降は、ふたつの地区をあわせて報告していきたい。

調査範囲は南北約50m、東西は道路拡幅部分約14mの約700m²であるが、中央部の西壁際には東西約5m、南北約10mの範囲に後世の擾乱が広がっている。基本土層は、厚さ約20cmの耕土の下に薄い床土があり、それらを取り除くと中①C区の南側ではシルト混じりの砂疊層、その他の範囲では黄褐色シルト層を主とする遺構が確認された基盤層である。また、中①B区の北側では、耕土上に厚さ約80cmの盛土層がみられた。

調査区の北半部では、幅約20~30cm、深さ約10cmを測る浅い溝が、ほぼ南北方向に70~80cmの間隔で並行して確認された。遺構が検出された土層は、南半部の遺構検出面（シルト混じりの砂疊層および黄褐色シルト層）より上層であり、溝よりわずかに出土した染付磁器などから、江戸時代後期（19世紀代）の掘溝であったと考えられる。但し、北側は東西方向の十手と浅い溝によって区切られ、後述するほぼ東西に延びる2条の溝（SD10・11）以前では、確認されなかった。このため、近世あるいはそれ以降の時期、掘溝が検出された一帯は畠地として利用されていたと考えられる。また、調査区の南半部では、中世の溝、土坑、井戸、柱穴、近世の溝などの遺構が確認された。出土した瓦器碗や瓦質土器の鍋、備前焼などの遺物から、中①A区同様、鎌倉時代末期から室町時代（14~16世紀代）の集落跡と考えられる。しかし、調査区の東側および南側には、遺構が続いているものが多く、この時期の遺構はさらに周辺に広がっていたと考えられ、集落の一部を調査したに過ぎないと思われる。

掘立柱建物跡

中①B区および中①C区で確認された掘立柱建物跡は、調査区の中央で確認された1棟（SB85）である。建物の主軸は、N15°Eでほぼ南北方向を指し、東西3間（約5.2m）、南北3間（約7.3m）の側柱建物跡であったと考えられる。柱穴は直径約20cm、深さ10~30cmを測る比較的小さく、一部に柱穴が確認されなかつ箇所があり、周囲の遺構（SK37他）あるいは検出された遺構面が削平を受けている可能性が高いと考えられる。建物を構成した柱穴から、遺物は出土していないため、遺構の詳細な時期は不明であるが、後述する周囲の遺構が概ね15~16世紀代を中心とした時期であることから、SB85も当該期の遺構であったと思われる。また、調査区の南端部で確認された複数の柱穴は、南北方向にはSB085の柱穴列に並行するが、東西方向へは調査区外に展開するため、掘立柱建物跡を復元することはできなかった。

溝

調査区の中央部で確認された溝（SD13）は、南北約5m、東西方向には後述する2基の土坑（SK25・SK30）によって削平されているが、約50cmを測り、掘立柱建物跡（SB85）を囲むようにL字状を呈していたと考えられる。残存する深さが約10cmと非常に浅く、北東角部や北辺部が確認されていないため、周辺は広範囲にわたって削平されたものと思われる。また、SD13の南東角部からさらに南へ約6m延伸し、ほぼ直角に屈曲したL字状を呈する溝（SD14）は、西に約7m確認され、調査区の西壁へと続いている。これら2条の溝（SD13・14）の切り合い関係を確認することはできなかつたが、比較的遺構が密接する範囲にあり、周辺から柱穴が確認されていることから、建物の周囲を巡る区画溝であった

と考えられ、室町時代（15～16世紀代）を中心とした掘立柱建物跡（SB85）と同一時期の遺構であると思われる。

さらに、調査区を横断する2条の溝（SD10・SD11）が確認され、北側に位置するSD11は、幅1.6m、東西方向に約12.4mを測り、東側は調査区外へと続いている。南側に位置するSD10は、東壁際の土坑に切り込まれているが、幅1.2～2.4m、東西方向に約12.6mを測り、西側は調査区外へと続いている。前者（SD11）は、出土した遺物から16世紀後半の時期の遺構と考えられ、後者（SD10）は北側肩部がSD11に切り込まれているため、後出する遺構であるが、遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

土坑

調査区全域から約20を超える土坑が確認された。調査区南端では、東西約1.2m、南北約1.5m、深さ約1.1mを測る楕円形の土坑（SK01）や、直径約1.6m、深さ約1mを測る円形の土坑（SK04）、調査区外の東へと続いている土坑（SK05）などが確認された。このうち、SK01は、上層は砂礫混じりのシルト層であるが、最下層には礫が充填され、常時水が湧き出ている状態であることから、蒸掘りの井戸と考えられる。SK05は、西側の約半部を検出することができたが、調査区の壁面が崩落する危険が想定されたため、約1.6mの深さまでしか掘り下げることはできなかった。直径約1.9mを測る円形を呈するものと考えられ、上層は礫混じりのシルト層が堆積し、下層は砂状の粒子の粗い灰色土層である。下半部は幅約1.2mの比較的の垂直に掘り下げられ、漆碗の破片の他、井戸枠の横棟と考えられる加工された木片が出土しており、構造は不明であるが、SK01同様、井戸と考えられる。

調査区南東角部では、調査区外の南へと続く土坑（SK02）が検出された。後世の搅乱および土坑に切り込まれ、さらに調査区外へと続いているため、全体の大きさは不明であるが、東西約3.7m、南北4m以上、深さ約40cmを測る方形の土坑である。また、SK02に隣接して東西約80cm、南北約50cmを測る楕円形の小型の土坑（SK79）が確認された。これらの土坑は、出土した瓦質土器の鍋や備前焼のすり鉢の形状から、14～16世紀代の遺構と考えられる。

調査区中央部では、後世の溝（SD14）に一部を削平された直径約80cmを測る円形の土坑（SK22）や、東西約1.5m、南北約2.2mを測る長方形の土坑（SK27）を切り込んだ一辺約1.8mを測る方形の土坑（SK26）、東西約3.2m、南北約2.3mを測る長方形の（SK37）の他、溝（SD13）の南辺を切り込んだ一辺約1.5mを測る方形の土坑（SK25）、東西約4.7m、南北約4.4mを測る方形形状を呈する土坑（SK30）などが確認された。このうち、SK22は、ほぼ垂直に約1.3mの深さに掘り下げられ、上層は砂礫混じりのシルト層であり、最下層には大型の礫が大量に充填されていることから、SK01同様、蒸掘りの井戸と考えられる。SK26およびSK37は、ともに床面から壁面に沿って灰色のシルト層が薄く堆積しており、同時期に埋没したものと考えられる。また、SK25は深さ約20cmを測るが、床面には直径10cm前後の礫が散きつめられた状態であった。これらの土坑から出土した遺物は小破片が多く、図化できたものは9点（93～97・S 6～S 9）であるが、概ね14～16世紀代の遺構と考えられる。

この他、調査区北の西壁際では、大きさは不明であるが、上層に礫が敷き詰められた方形を呈する土坑（SK106）が、調査区東壁際では、東西1.8m以上、南北1.4mを測る長方形の土坑（SK20）がそれぞれ確認された。出土した遺物から、前者は16世紀代、後者は18～19世紀代の遺構と考えられる。

柱穴

調査区の中央部および南側を中心としたふたつの範囲で約60を数える柱穴が確認された。柱穴は概ね

直径15~30cm、遺構検出面から深さ約20~40cmを測るが、据立柱建物を構成するものは、先述した中央部での1棟（SB85）であった。調査区の南側で確認された柱穴のひとつ（SP71）からは、土器類の小皿が数枚重ねられた状態で出土しており、意図的に埋められたものと考えられる。

(仁尾)

中②区

中②区では、調査の結果、中・近世の遺構と遺物が確認された。中世に比定される遺構は、東西方向と南北方向に「L」字型に配置された堀割り溝と井戸がある。近世ないしは近世以降の遺構は、埋桶遺構・溝などが検出されている。

遺跡の層序は、近年の整地層（a・b・c層）下に旧耕作土（I層）、土壤化層（II層）、遺物包含層（III層）、地山層（IV層）の順で堆積している。

I層あるいはII層上面からは、調査区西側を南北方向にはしむ幕末から明治期の遺物を含む溝（SD04）が掘削されている。また、江戸時代後期の遺物が出土した埋桶遺構（SK01・02）は、中世遺物を包蔵するIII層上面から掘り込まれている。IV層上面は中世の遺構検出面である。

近世以降の遺構

江戸時代末から明治期の溝（SD04）、江戸時代後期の埋桶遺構（SK01・02）や土坑群（SX01~03）がある。SE01・02は現代の井戸である。ここでは溝・埋桶遺構について報告する。

溝

SD04は、調査区の西側をほぼ南北方向にはしむ溝である。溝の北端はI層（旧耕作土）から掘り込まれ、南端はII層（土壤化層）上面から掘り込まれている。I層上面から掘り込まれている溝の北端部は幅広くなっていることから、後世の擾乱を受けている可能性がある。溝の北半部と南端部では西側に溝が拡張する。幅は2m前後で、北端では4mと幅を広げる。深さは北端で35cm、南端は55cmである。溝底は平坦である。埋土には小砾を多く含み、南端部では、下層に砂砾が堆積する。

遺物は土師質土器皿（134）・瓦質羽釜（135）・須恵器壺（136・137）・無釉陶器すり鉢（138）・植木鉢（139）・施釉陶器碗（142・143）・灯明具（144）・青磁鉢（147）・碗（146）・染付碗（149~151）・鉢（153・155）・皿（154・155）・蓋（157）・白磁小杯（145）・碗（148）など、中世段階・江戸前期のものも含まれるが、多くは江戸末期から明治期に比定できる遺物である。

埋桶遺構

SK01は、調査区北端部に位置する埋桶遺構である。西側の一部はSD04を切っている。桶は20~30cm大の河原石によって埋められている。

掘方は南北方向に長い楕円形を呈し、2.3×2.1mの規模である。検出面からの深さは60cmである。確認できる桶の大きさは径1.3m前後である。桶底には漆喰が確認された。

遺物は桶内より土器（161）の破片が出土している。

SK02は、調査区の北西隅に位置し、中世の井戸（SE03）を切って作られている埋桶遺構である。掘方は径1.4m前後の円形に一旦掘削され、中央の桶を埋置する部分をさらに桶の大きさに合わせ、円形に掘り込む2段構造である。上段の掘削深度は検出面から65cm、下段は検出面から75cmである。確認できる桶の大きさは径1mで、周囲にはタガが残っていた。

遺物は、桶内より瓦質羽釜（162）、染付碗（163）が出土している。

中世の遺構

地割り溝と理解できるSD01・03と性格不明のSD02の溝群、井戸（SE03）が検出された。

溝

調査区の中央を南北方向にはしるSD03と、この溝に直行し東西方向にはしるSD01がある。両溝は地割り溝と理解でき、ここでは同一の遺構として取り扱う。

SD01は、幅1m、深さ18cmで断面は浅い平底状を呈する。溝の西端は調査区外に及び、東端は近世の溝SD04に切られる。埋土は上下2層に分かれ、下層は粗砂が堆積し水が流れていた痕跡を示す。

SD03は、幅65cm～1.1m、検出面からの深さは15cmで、SD01と同様浅い平底状である。溝の北端はSD02に切られ、南端は調査区外に延びる。埋土はSD01と同様に砂層が堆積している。SD01の西端部とSD03の北端は連結せず、約4mの空白部分がある。

両溝は「L」字状に配置され、埋土の状況も類似する。調査区が狭小なため、溝の全容は明らかではないが、屋敷地を限る地割り溝の可能性が高い。

遺物はSD03より瓦質鍋（133）や上師器皿の鉢片が出土している。

SD02は、調査区の西側を蛇行して南北方向にはしる溝である。溝の北端はSK01に切られる。北半部は幅45cmと狭いが、南端部分では幅60cmを超える。検出面からの深さは15cm～25cmである。

遺物は瓦器碗の絆片、丹波焼すり鉢（132）が出土している。

井戸

SE03は、調査区の北西隅に位置する素掘り井戸である。一部を近世の桶型遺構SK02に切られている。井戸は径80cm前後の規模で、円柱状に削削されている。検出面からの深さは約1.5mで、井戸底は径55cmの円形を呈する。検出面から75cm下には砂礫層が堆積しており、井戸の掘方はこの砂礫層を約55cm程度掘り抜いている。

遺物は須恵器壺片（159）、瓦質羽釜（160）が井戸内より出土している。

（村上）

3. 遺物

中①A区

中①A区では、遺構あるいは包含層から多数の遺物が出土したが、実測、図化したものは、土器12点（119～125）、金属製品1点（M6）の以上、13点である。

土器

119はSK201より出土した瓦質土器の羽釜である。口縁部の小破片で摩滅が激しいが、復元径約25cmを測る。

120はSK203より出土した瓦器皿である。内外面とも摩滅が激しく、調整等は不明である。

121～125はSK205より出土した備前焼の擂鉢（121）、瓦質上器の羽釜（122）、丹波焼の壺（123）、瀬戸・美濃産の壺（124・125）である。121は口縁部の小破片であるが、内外面ともに丁寧にナデ調整され、内面部には、6本一単位の摺り目が施されている。122は鉢部がわずかに残存するのみであるが、鉢部径が約36cmに復元される比較的大型の羽釜である。123は口縁部の小破片であるが、復元径約37cmを測り、口縁端部の形状は、いわゆる「N字状」を呈している。124と125は接合する面は確認されなかつたが、内外面の施釉状況や胎土などから同一個体と考えられる。

126はSK211より出土した瓦器碗である。口径11.3cmを測る小型のもので、高台の貼付けの痕跡が残るが、内外面とも摩滅が激しく、調整等は不明である。

127～130は包含層より出土した土師器の羽釜（127）、瓦質土器の羽釜（128）、土師器の小皿（129）、ミニチュア羽釜の蓋（130）である。127は口縁部から鋸部が残存するのみであるが、口径21cmを測る。128も口縁部から鋸部が残存するのみであるが、口径25.8cmを測り、口縁部外面に2条の凹線が巡る。129は口縁部の小破片であるが、口径7.8cmを測り、ヨコナデおよび指揮さえの痕跡が明瞭に残っている。

金属製品

M 6はSK205より出土した鉄製品であるが、小破片であるため、詳細は不明である。

(仁尾)

中①B・C区

中①B区および中①C区では、遺構あるいは包含層から多数の遺物が出土したが、実測、同化したものは、土器49点（71～118）、石製品3点（S 6～S 9）、金属製品2点（M 7・M 8）、木製品4点（W 5～W 8）の以上、58点である。

土器および石製品

71～76はSK01より出土した土師器の皿（71）、須恵器鉢（72）、瓦質土器の羽釜（73～75）である。71はほぼ完存し、口縁端部に横ナデ、底部および立ち上がり部に指揮さえの痕跡が残っている。72は底部および立ち上がりの一部が残存し、口径約18cmを測る。73・74ともに口縁部の小破片であるが、前者は口径約25cmを測り、内外面とも横あるいは不定方向に丁寧なナデ調整が行われている。後者は口径約26cmを測り、内外面とも横あるいは不定方向にナデ調整が行われ、内面には指揮さえの痕跡が明瞭に残っている。75は口径27.5cmを測り、内面は横方向の板状工具によるナデ調整の痕跡が明瞭に残っている。外面には横ナデあるいは指ナデ、指揮さえの痕跡が残り、鋸ははり出しが長く、下部には煤が付着している。

77～79はSK02より出土した土師質の羽釜である。いずれも口縁部の小破片であるが、鋸上部に3条の凹線が巡っている。摩滅によって、詳細は不明であるが、内外面とも横あるいは不定方向のナデ調整の痕跡がみられる。

80～82はSK04より出土した瓦質土器（80）および備前焼（81・82）の擂鉢である。80は口縁部の小破片であるが、内外面には横ナデ、指揮さえ等の調整の痕跡が残っている。81は口縁部の断面が三角形状を呈するもので、内外面ともに横方向のナデ調整が行われ、内面には6本一単位の摺り目が施されている。82は非常に胎土が粗く、81より遅い時期のものと思われる。底部の小破片であるが、内外面には横方向のナデ調整と指揮さえの痕跡が残り、内面には7本一単位の摺り目が施されている。

83・84はSK05より出土した丹波焼の皿（83）、備前焼の擂鉢（84）である。83は口縁部の小破片であるが、口径約17cmを測り、外面上には化粧土が塗布され、栗皮色に発色している。84は口縁部が上下に拡張した形状を呈し、内面には10本一単位の摺り目が施されている。

85はSK79より出土した瓦質土器の羽釜である。口縁部から体部の約半部が残存しており、口径は21.6cmを測る。全体的に摩滅しているが、鋸上部に3条の凹線が巡り、外面上には横方向のヘラ削りの痕跡がみられる。

86～90はP71より出土した土師器の小皿である。90のみ口縁部の小破片であるが、いずれも底部が上方に突出する、いわゆる「ヘソ皿」で、口径は約8cmを測る。薄手で、体部は直線的に斜め上方に延び、

横ナデ、指押さえの痕跡が残っている。

91・92はSD11より出土した瓦質土器の鋤釜（91）、中国製磁器の碗（92）である。91は口縁部の小破片であるが、口径29.6cmを測り、内面にはハケメの痕跡が残っている。92は底部の小破片であるが、施釉あるいは高台の形状等から、中国製と思われる。

93～95はSK22より出土した瓦質土器の壺（93）、土師器の小皿（94・95）である。93は内外面とも不定方向のミガキが施され、丁寧に仕上げられている。94・95はともに口径約7.5cmを測るヘソ皿で上記の86～90より若干、厚手である。

96はSK26より出土した土師器の皿である。口径約10cmを測り、横ナデおよび指押さえの痕跡が残っている。

97はSK37より出土した丹波焼の壺である。口径36.8cmを測る大型のもので、内外面ともに横ナデの痕跡が明顯に残っている。

98はSK106より出土した備前焼の擂鉢である。図示した形状から下部が外側へ開き、口縁部の形状は「く」の字状を呈するものであり、16世紀前期に属するものと考えられる。

99～106はSK20より出土した丹波焼の火入（99）、堺・明石系の擂鉢（100）、土師器の小皿（101）、肥前磁器の紅皿（102）、仏飯器（103）、小皿（104）、碗（105・106）である。99は口径10cmを測り、内外面とも横ナデによる調整が施され、外面には化粧土が塗布され、暗赤褐色に発色している。100は比較的の残存しており、口径37.2cm、器高15.4cmを測る。内面には8本一単位の摺り目が全面に施され、内面見込みには火棒の痕跡がみられる。103は口径6.2cm、器高6.5cmを測り、外面には蓮華が描かれている。104は垂みがはげしく、小皿として実測、図化しているが、小鉢類の蓋とも考えられる。106は口径9.6cmを測る、いわゆる、「くらわんか碗」で外面には雪鶴錦文が描かれている。

中①B区および中①C区の包含層出土遺物は、12点（107～118）を実測、図化している。

107は土師質の鉢であり、口径9.8cmを測り、外面には花弁状の文様が押印されている。108は口径12.6cm、器高6.7cmを測る中国龍泉窯製の青磁である。内外面とも青磁の発色は悪く、高台下部の釉は削りとられている。109・110はともに備前焼であり、前者は、口縁部が上下に拡張した形状を呈する擂鉢で、内面には8本一単位の摺り目が施されている。後者は、口縁部の小破片であり、口径等不明であるが、口縁端部を外側に折り曲げた玉縁状を呈する壺である。111は瀬戸・美濃系の火鉢である。外面のみ緑釉が施され、壓押しによる施文が巡っている。112は肥前磁器の仏花瓶であり、外面には錦文が描かれている。113～118は明治時代以降の遺物であり、肥前系の印版皿（116）、大鉢（118）などである。

S 6～S 9はいずれも遣唐から出土した石臼である。S 6はSK22より出土した砂岩製であり、約1/4が残存している。側面に一辺約2cm四方の方形の挽き木孔が穿たれている。S 7・S 8はSK25より出土し、前者は花崗岩製、後者は凝灰岩質砂岩製である。S 9はSK26より出土した花崗岩製である。一部欠損するが、ほぼ完存しており、直径約27.3cm、厚さ9.8cmを測る。

金属製品および木製品

M 7は包含層より出土した断面が方形の角釘である。頭部および先端部とともに欠損するが、復元長約5cmを測るものと思われる。M 8はSK01より出土した板状の鉄製品であり、鍔等の農耕具と考えられる。

W 5～W 8はSK05より出土した椀（W 5）、板材（W 6）、建築部材（W 7・W 8）である。W 5は体部のみが残存するため、全体の大きさは不明であるが、内外面ともに黒漆が施され、内面には赤漆で

円形文様が描かれている。W 6 は長さ15.3cm、幅2.7~4.0cm、厚さ0.8cmを測る加工された板材である。一部欠損しているが、木釘孔と思われる痕跡が残るために、曲げ物類の側板と考えられる。W 7 は最大径9.2cm、現存長79.5cm。W 8 は最大径8.2cm、全長88.8cmをそれぞれ測る建築部材である。前者は枘穴が穿たれ、後者の両端は一辺を削り込んで柄に加工されている。

(仁尾)

中②区

中③地区より出土した遺物は、中世・近世の陶磁器がある。これ以外、包含層（Ⅲ層）中より弥生時代に比定されるサヌカイト製の石鏃が出土している。遺物は江戸時代末の陶磁器が多い。

近世以降の遺構

この時期の遺物には、瓦、無釉陶器、施釉陶器、青磁、白磁、染付がある。

瓦

いずれも旧耕作土（I層）より出土した巴文を施した軒丸瓦である。

無釉陶器

17世紀初めに比定される丹波焼の擂鉢（138）と江戸末期の植木鉢がある。植木鉢は須恵質の焼き上がりである。

施釉陶器

碗（142・143）皿（165）・灯明具（144・164）がある。142は京焼風陶器碗で、165は17世紀前半の肥前陶器皿である。高台内には墨書きが施されている。灯明具には受け皿（164）と芯立て（144）がある。

青磁・青磁染付

鉢（147）・碗（148・149）がある。147は型作りの鉢で三田・王地山焼である。149は青磁染付碗である。

染付

碗（150・151・158・163・166）・鉢（152・153）・皿（154~156）・蓋物（157）がある。150・163・166の丸碗は18世紀代の産と理解しているが、多くは19世紀前半～明治期に比定される。152の鉢は三田・王地山焼である。

中世の遺物

この時期の遺物には土師質土器・瓦質土器・須恵器・焼締陶器・青磁がある。

土師質土器

皿（134）・鍋（133）がある。134は15世紀前半代、133は12世紀～13世紀代に収まると理解している。

瓦質土器

羽釜（135・160）がある。135は15世紀後半の特徴をもつ。

須恵器

壺（159）がある。いわゆる東播系須恵器の範疇におさまるものである。

焼締陶器

丹波焼の擂鉢（132）がある。丹波焼に刷り目が出現する13世紀後半以降の産と考えられるが、外面に指押さえの調整痕が顕著に残るなど、新しい要素をもつすり鉢である。

(村上)

第2節 南区の調査成果

1. 調査の概要 (図版21~51、写真図版22~90)

奈良時代の遺構

南区で検出した遺構の時期は、奈良時代に代表される。それらは、②・③・⑥区を中心①区北端でも検出された掘立柱建物跡で、総数15棟検出した。一部時期が不明なものも存在するが、大半は奈良時代のものであろう。また、同時に柵列・塀跡と思われる柱列も8基検出している。一部飛鳥時代にさかのぼる可能性があるが、多くは奈良時代に属するものである。また、①・②・④区では井戸を検出した。奈良時代と思われる井戸は5基存在し、木製井戸枠を有するものが3基検出された。それらの井戸枠構造は、3基とも異なっており、差が生じている。この差については後述する。また、井戸内からは多量の土器をはじめ瓦・木製品が出土しており、墨書き土器とともに、貴重な資料となる。

また、溝が多く検出されたことも今回の調査の特徴である。掘立柱建物に伴う雨落ち溝をはじめ、排水用の溝まで非常に多くの溝を検出した。土壤についても数多く検出し、多くの土器・瓦が出土したものもある。

奈良時代の遺構は、①区から③B区南端にかけて集中しており、①区西側の⑥区でも多く存在する。同時に、包含層から出土した土器で大半を占めるのが奈良時代の土器である。

古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は①区でのみ、埋没古墳を検出した。ただし、埴輪片については③区でも出土している。付近には削平を受けた多くの古墳が埋没していることが推察される。

中世の遺構

中世に属する遺構は、推定されるものも含め、すべての地区において検出されている。それらのなかには、井戸をはじめ、溝・土取り穴などがあるが、検出した遺構の全体量からみれば非常に少ない。

また、包含層から出土した土器の中に占める中世土器の割合も少ない。

以下、遺構および遺物について今回の調査結果を述べる。

2. 遺構

A. 南①区 (図版22~30、写真図版22・23・29・33~49)

道路の東側拡張部にあたる、幅約13mの調査区で、東側に民間の事業所が存在し、その出入り口を確保するため3分割して調査を実施した。調査区は北側から順にA~C地区と呼称し、A・C地区を先行して調査実施し、埋め戻し終了後にB地区の調査を実施した。

層序のうち、最上層の盛土は現地表面下に80cm程度の厚さで認められ、その下層に旧耕土が存在している。旧耕土は土壤化した暗緑灰色の極細粒砂で、近世~近代にかけての水田面である。この層の直下には暗茶褐色の極細粒砂の床土が、その下には部分的に暗茶褐色の極細粒砂~粗粒シルトが堆積している。この暗茶褐色層が遺物の包含層となっており、遺構はこの層を除去した面で検出した。

なお、C地区の南部では遺物包含層は2層に分かれており、上部は濁灰黄色の極細粒砂で、中世までの土器を包含していた。

A地区では溝・井戸・掘立柱建物跡・柵列・土壤などを検出した。B地区ではA地区からの溝の続きと浅い溝状遺構・土壤などを検出したが、特に擾乱が多く目立って存在している。また、C地区は便槽

により中央西半が大きく搅乱を受けており、平面的な削平も認められた。検出した遺構としては、B地区でいったん途切れた溝の続きや東西方向の溝・土塙などのほか、井戸枠を伴う井戸や周溝が残存する埋没古墳を検出した。C地区で検出した遺構のうち、埋没古墳以外はすべて奈良時代に属することが出土遺物から推測される。

なお、調査区南東部溝内より「神家」と書かれた墨書き器や、SD①C01から猪名寺廃寺と同範と思われる軒丸瓦の破片が出土している。また、図示できなかったが、包含層中より奈良時代の製塙土器片が出土している。

I. 古墳時代の遺構

今回報告する遺構のなかで、古墳時代に属するものは、①C区において検出された埋没古墳1基のみである。(図版24・25・30、カラー図版7、写真図版36~38)

①C区の東部において、古墳の周溝を検出し、6世紀初頭ごろの須恵器が集中して出土した。また、この溝は奈良時代にも再利用されており、北西方向にのびている。

埋没古墳は、方墳と思われる墳丘の西側部分をおよび周溝を検出した。墳丘は南北方向9.0mを測り、東西方向では3.8mを検出したにすぎない。古墳の東部は調査区外におよんでいる。墳丘高は削平を受けたため、ほとんど残っていないかった。周溝の最も深い部分から25cm、平均20cmの墳丘高しか残存していないかった。墳丘の最も高い部分の標高は、海拔8.4mである。また、埋葬施設は、調査範囲内ではその痕跡すら認められなかった。

周溝は墳丘西側を「コ」字形に取り巻いているが、北端および南西端は、奈良時代の溝と重なっているせいもあり、非常に不明確である。周溝は西側が幅狭く約1.4m、北側では約3.6m、南側では約3.8mと、北および南側が幅広くなっている。後世の改変による変形の可能性もある。周溝の深さは約20cmで、底はほぼ平坦である。

遺物は、墳丘南西部裾付近で須恵器片が集中して認められた。それらは大きく3群に分かれて存在していた。A群では主として小型器種が集中して認められ、杯身・蓋のほか、長脚・短脚の高杯、罐など8点が遺存していた。B群では甕1点分の破片が集中して認められ、C群でも甕の破片が集中していたが、接合の結果、C群で出土した甕と同一個体の破片がA群においても存在していた。

これらの上器群は、古墳の墳丘裾部にまとめて置いていたものと思われ、ほぼ原位置を保っているものと判断される。ただし、一部は周溝に転入したものと考えられる。

なお、付近の溝SD①C01からは円筒埴輪片が出土している。

埋没古墳は前回の調査においても3基程度検出されており、遺跡の北側には有岡城関係の砦に利用されたと考えられている古墳も存在している。また、有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査の際にも埴輪が多く検出されていることから、周辺にはさらに多くの古墳が存在していたことが想定される。

II. 奈良時代の遺構 (図版23・26~30)

奈良時代と判断できるまたは推定される遺構は、検出した遺構の大半を占める。掘立柱建物跡・推定堀跡をはじめ、2基の井戸のほか、多数の溝・土塙などがある。奈良時代の遺構の密度は高いが、②区のように掘立柱建物跡が多く検出された地区ではないことから、掘立柱建物跡群の中心からは少し外れ

た部分と思われる。しかし、木製井戸枠を有する井戸が2基も検出されていることは、中心部からあまり遠く離れていないこと、中心部分の範囲が①区あたりまで及んでいることが推定できる。

a. 挖立柱建物跡等 (図版25、写真図版33・34・42)

南①区で検出した掘立柱建物跡および塙状の柱列は各1基で、すべてA地区に存在した。ただし、掘立柱建物跡は東端の柱列を検出したのみで、塙状の柱列も柱穴3基が認められたにすぎない。

S B 0 1 (図版25、写真図版33・34・42)

①A区の北西部で方形の掘り方をもつ柱穴を3基検出した。これらは柱穴の一辺が大きなものでは50cmであるうえに、1.54m・1.58mと等間隔に一列に並んでいることから、掘立柱建物跡の東端部と考えている。時期を確定できる出土遺物はないが、奈良時代の所産と考えられる。方向は座標軸を基準にN^{1°}Wである。規模は4mである。規模は4mである。

p01の検出面上より不明土器の体部破片が出土し、p02の同じく検出上面からは奈良時代と思われる土師器杯片が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。

S A 0 1 (図版25、写真図版33・34・42)

SD①A01とSD①A02の間に存在する柱列で、一列に並ぶ柱穴を3基検出している。柱穴は平面円形で、直径は約25cmと小型であり、柱間は1.8mと1.9mではほぼ等間隔であることから、塙の可能性が高いと考えられる。また、方向が座標軸からN^{4°}Wであることから、奈良時代に属するものと想定される。規模は4.2mである。

なお、p06より器種および時期不明の土師器細片が出土している。

b. 井戸 (図版26・27、写真図版39~41・45)

井戸は南①区において、A区とC区の2箇所でそれぞれ1基ずつ検出している。どちらも木組みの井戸枠を有したものであるが、C区で検出したSE03では土居桁が残存していたに過ぎない。一方、A地区で検出したSE02は井戸枠下部が良好に残存しており、多量の上器も出土した。SE02は②区で検出したSE01同様、奈良時代の木組み井戸として良好な資料の発見となった。SE02とSE03とは68.5mの間隔で、また、SE02とSE01とは24mの距離である。

S E 0 2 (図版26、カラー図版7、写真図版39~41)

①A区北西端近くで検出した。掘り方平面は梢円形で、長径約1.9m、短径約1.5mを測る。木製井戸枠は検出面から約1m掘削した時点で検出した。井戸枠は・辺約75cmを測り、高さ約1m還存していた。土居桁と4本の隅木および横板で構成される。

井戸枠構造は、基本的には横板組みであるが、上下に切り欠きを設けた角材を井桁に組んで上居桁とし、四隅に納孔をあけ、そこに隅柱を立てて外側から横板をはめ込んでいる。隅柱は丸太材を「L」字形に削り取ったもので、一段下がった部分に横板をはめ込み、外圧に耐えるようにしている。構造上からは「土居桁隅柱溝落し込み横板組み」と呼ばれるものの変型で、「土居桁隅柱切欠き横板組」でも呼称できよう。なお、横板は2~3段分還存していた。

井戸底は検出面から約2.2mの深さまで達し、上井桁よりも20cm深い。底から完形品を含む多数の須恵器・土師器が出土した。また、やや上層からは杯を中心とした土師器が数多く出土し、その上層からは麻布も出土している。ただし、この布については後世のものである可能性も捨てきれないため、時期

的な判断はできていない。詳細は後述する。

井戸の掘り込みは、途中のシルト層を掘り抜き、砂礫層に達した高さよりもさらに約60cm掘り下げており、湧水をより確実なものとしている。

なお、井戸は平面規模が小さいうえに、深かったため、堆土上層断面の写真撮影および図化するなどの記録を残すことができなかった。また、調査中の湧水も激しかったことを付け加えておく。

S E 0 3 (旧名称S E 1) (図版27、写真図版45)

①C区南西部の調査区西壁下で、井戸の東側半分を検出した。掘り方は円形で、径約1.8mを測る。検出面からの深さ70cmのところで、方形の納穴が開いた土居桁のみ残存していた。納孔の存在から、隅柱を立てる型式の井戸であること以外、構造は不明である。土居桁で囲まれた方形の一辺は65cm程度で、これが井戸枠の一辺に近いと思われ、小規模な井戸であろう。

土居桁は丸太材を半截したもので、平らな面を下に置いていた。SE02の土居桁よりも簡素なものである。井戸底出土遺物には図版74に示した少量の土師器・須恵器のほか、木製品では垂物棒・底板に加え、煮串が出土した。また、埋土からも須恵器杯蓋が出土している。

なお、この土居桁が存在した面が井戸枠下端と考えられるが、井戸は土居桁よりもさらに70cm深く円形に掘り込んでいる。このことは、土居桁の下に水溜が存在していたことを示唆しているが、調査時に水溜と思われる木製品は出土しなかった。

なお、土居桁が存在した高さが、ちょうど地山のシルト層の下端にあたる部分で、その下は湧水層である砂礫層となっている。

c. 土壙 (図版23・28、写真図版42~44・49)

①区で検出した土壙は5基である。いずれも奈良時代と推定しているが、土器が出土した土壙が限られるため、断定は避けたい。①C区で検出したSK①C01は形状・規模・炭の存在から墓と考えられ、SK①A01も墓の可能性がある。他の土壙の性格については、全体を検出できたものが少ないと同時に、遺物がほとんど出土しなかったため、判断できない。

S K①A 0 1 (図版23・28、写真図版42)

①A区の中央南部で検出した、平面方形に近い土壙である。主軸は東西で、長さ約90cm、幅約80cmを測る。深さは約25cmで、埋土には灰褐色と灰緑色の土が認められた。土壙底は略平坦であるが、南側がやや浅くなっている。墓の可能性も考えられるが、判断できない。遺物は出土しなかった。

S K①A 0 2 (図版23、写真図版43)

①A区の南西隅で検出した、平面長方形に近い土壙である。調査区の西壁にかかっているため、全体を調査することができなかった。また、①A区の調査で検出されたが、一部は①B区の掘削時にも調査をおこなった。南北長約1.5m、調査できた東西長は約1mである。深さ約15cmを測る。底面は比較的平坦で、東側壁面でみると、皿状を呈する。遺物は出土しなかった。

S K①C 0 1 (図版23・28、写真図版49)

①C区北東部で検出した平面長方形の土壙である。主軸は北西—南東方向で、北西側が幅広くなっている。長さ80cm、北西端での幅55cm、南東端での幅40cmを測る。ほぼ垂直に掘り込まれていたが、削平のためか、深さは6cm程度であった。底はほぼ水平である。検出面から約3cm掘り空めたところで炭層が現れた。この層は約3cmの厚さで土壙全面に認められ、炭に混じって、一部灰や焼土も認められた。

この層の直下が地山となっていた。

この土壤は、規模および平面・断面形態に加え、炭屑が一面に認められたことから、墓の可能性があると考えているが、土器などの遺物は全く出土しなかった。

S K ① C 0 3 (図版23)

C地区北東隅に存在し、大半が調査区外となっている。検出したのは土壤の西部のみであるため、全体の形状・規模はうかがえない。検出できた部分の長さは約1m、幅は40cmのみである。遺物は出土しなかった。

S K ① B 0 5 (図版23・28、写真図版44)

①B区南西部に位置し、多くが調査区西方に広がっているため、東西規模等は不明である。南北の長さは4.1m、検出した東西幅は約1.6mである。深さは約30cmを測り、土壤の断面形状は東側が深く西側が浅くなってしまい、底面が水平ではない。埋土は灰褐色および黒褐色で、ほかの奈良時代の遺構と同じ埴土の色である。

図版78に示した須恵器杯のほかに奈良時代に属する土師器杯蓋片、須恵器蓋片が出土しているが、図示できなかった。

d. 溝 (図版23・24・28~30、写真図版33~36・42~44・46~49)

①地区で検出した溝は、奈良時代のものが多いと思われるが、中世・近世以降のものも存在する。溝は南北方向を主とし、南縫部では東西方向のものも認められる。

なお、溝から出土した遺物のなかには、「神家」と書かれた墨書き土器や、猪名寺廐寺と同範の軒丸瓦片があり、注目される。

A地区 (図版23・28・29、写真図版33・34・42)

A地区で検出した溝は3条である。そのうちSD①A01が奈良時代のものと思われ、建物跡や柱列と平行方向にある。また、東端のSD①A03は近世以降の溝と思われ、近世陶器が出土したうえに、埋土も他の溝とは大きく異なる。

S D ① A 0 1 (図版23・28、写真図版33・34・42)

①A区西部で検出した南北方向の溝である。幅約1.5mで、深さ約30cmを測り、①B・C区へ続いてゆくものである。SB01やSA01と方向をほぼ同じにすることから、建物群との関連性がうかがえるものと思われる。所々で分岐・合流・溜まり状となっている。断面形は逆台形に近くしっかりした溝である。ただし、南にゆくにつれ、歪な形態となり、深さも浅くなってしまい。①B区の曲折部以南では溜まり状ともいべき分岐・合流・広がりが認められる。

なお、溝の北縫では、検出面が削平を受けていたせいもあって、自然消滅したかたちになっている。

出土遺物は、図版82に示したように多くの須恵器・土師器が出土している。図示した以外にも多くの土器片があるが、奈良時代に属すると思われる製塙土器の破片も存在している。

S D ① A 0 2 (図版23・29、写真図版33・34・42)

①A区南部中央で検出した南北方向の小規模な溝である。①B区のSD①B02に続く溝である。北部で分岐しているようである。幅35cm、深さ8cmを測り、埋土は黄褐色系および灰緑色を呈する。

図版83に示した奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

S D ① A 0 3 (図版23・29、写真図版33・34)

①A区東端で検出した溝である。時期が新しく、近世以降のものと思われる。調査区北端では北西南東方向で、調査区北東隅付近で曲折して南北方向になる。この溝の続きは②A区南西隅においても検出されており、⑤区ではSD⑤01と呼称した溝へと続いてゆくものである。⑤区では道路敷設直前まで使用されていた用水路であると考えられている。幅約1m、深さ20cm、長さ約19mにわたって検出した。埋土は他の溝と違って、灰色～暗緑灰色を呈し、砂質であった。

図版83に示した奈良時代に属する須恵器・土師器以外に、近世陶器の皿が出土している。

B地区 (図版23・28・29、写真図版35・43・44・46)

①B地区で検出した溝状遺構は、①A区から続くと考えられる溝のほか、東西・南北方向の小規模な溝も数条検出した。時期的には、小規模な溝は中世の可能性があるが、大規模な溝は川土器から、奈良時代に属するものと考えられる。

S D ① B 0 1 (図版23・28、写真図版35・43・46)

①B区内部で検出した。SD②A01の続きの溝であるが、大規模な擾乱により大きく途切れている。調査区中央で南東方向に曲折し、その部分の両岸には柱穴が各1基存在する。橋脚の可能性を考えているが、確証は得られていない。また、溝は南部で分歧あるいは他からの合流が認められ、b・cと枝番号を付した。なお、溝の南東端は①C区北東隅で一部検出している。

図示していないが、奈良時代を中心とした須恵器・土師器の細片が多く出土している。

S D ① B 0 2 (図版23・28・29、写真図版35・44)

SD①A02から続く溝である。SD①B01同様、擾乱により大きく途切れている。しかし、途切れながらもSD①B01を切って南にびていることが判明している。最大幅1m、深さ20cmである。SD①B01と交差しているが、断面観察によれば、本溝の方が新しい。

図版82に示した須恵器・土師器以外にも奈良時代と考えられる須恵器の破片が出土している。

S D ① B 0 3 (図版23・29、写真図版35・44)

①B区北東端で検出した南北溝である。南端で東方向に屈曲する。長さ7.5mにわたって検出した。溝幅35cm、深さ10cmを測る。SD①B09bと10cmの距離をおいて並行する。溝SD①A03の続きかもしれない。遺物は出土しなかった。

S D ① B 0 9 (図版23・29、写真図版35・44)

①B区東端で検出した、南北方向の小規模な溝状遺構である。2条が南北に途切れたようになっている。北側のものはSD①B03と平行し、コンクリート基礎により擾乱を受けている。長さ10mにわたって検出し、南端は自然消滅しているが、北端は調査区外にあたり、追及できなかった。①A区の溝にはつながらずに東側にそれるかもしれない。あるいは、SD①B10と直角につながってゆく可能性もある。溝幅最大60cm、深さ10cmを測る。中世の「すき溝」かもしれない。遺物は出土しなかった。

S D ① B 1 0 (図版23・29、写真図版35・44)

①B区北端で検出した東西方向の小規模な溝である。複数検出しているが、最も大きなもので、長さ3m、幅40cm、深さ6cmを測る。遺物は出土しなかった。中世「すき溝」の可能性がある。

C地区 (図版23・24・29・30、写真図版36・46~49)

①C地区で検出した古墳周溝以外の溝状遺構は主に溝である。南北方向、東西方向の両者があるが、南北方向のものは幅広のものが多い。いずれも奈良時代頃と考えられる。墨書き器は注目に値する。

S D ① C 0 1 (図版23・29、写真図版36・46)

①B区南端で一度途切れたSD①B01の続きと思われ、C区南西隅付近で西に折れ曲がる溝SD①C07に続くものと思われる。SD①C01とSD①C07の間は便橋により大きく攪乱を受けている。北部では2条に分かれているが、中央部で合流して南流する幅広い溝となっている。西端の一部は調査区外に広がっている。幅3m以上と広く、深さ約30cmとやや深い。灰褐色系の堆土である。

図版81に示したように多くの須恵器および土師器、軒丸瓦片、平瓦片が出土している。軒丸瓦は猪名寺廃寺の瓦と同范であり、注目される。

S D ① C 0 2 (図版23・30、写真図版36・46・49)

①C区東端で検出した。古墳の周溝を再利用した溝で、周溝の北西コーナー部からさらに北側にのびるかたちになっている。南端は低地部分にかかったため、溝の輪郭を追求することができなかった。あるいは、SD①C05に続くものかもしれない。幅1.9m、深さ7cm程度を測る浅い溝である。溝底は古墳周溝の底には達していない。

図版81に示した須恵器・土師器・丸瓦もしくは土管のほか、須恵器の壺片や杯Bの破片が出土している。

S D ① C 0 3 (図版24・30、写真図版36・46・47)

①C区南部で検出した、西流するほぼ東西方向の溝で、SD①C04とは調査区東部で分岐するかたちになっている。西部でSD①C07と交差しているが、土層関係からみるとSD①C07の方が新しい。また、調査区東部ではSD①C05・06とも交差しており、土層関係ではSD①C03の方が古い。幅約85cm、深さ約50cmで、埋土は4~5層に分層できる。調査区幅いっぱいに検出されたが、東西両側は調査区外に続いている。西側は⑥I区のSD⑥I03につながる。

図版82に示した土師器・須恵器のほかに、須恵器蓋の破片も出土している。

S D ① C 0 4 (図版24・30、写真図版36・47・48)

①C区南部で検出した、西流するほぼ東西方向の溝で、SD①C03とは調査区東部で分岐するかたちになっている。西部でSD①C07と交差しているが、土層関係からみるとSD①C07の方が新しく、調査区東部のSD①C05・06よりもSD①C04の方が古い。溝幅50cm、深さ25cmで、約10mにわたって検出されたが、西側は調査区外にのびており、⑥I区に続いている。

図示できなかったが、奈良時代でもやや古手の須恵器蓋や壺の破片が出土している。

S D ① C 0 5 (図版24・30、写真図版36・48)

①C区南東部で検出した南北方向の溝で、SD①C06と平行する。長さ約8mにわたって検出されたが、北端はST01周溝とつながっているため、確認できなかった。溝南部でSD①C03・04と交差しているが、本溝の方が新しい。幅90cm、深さ8cmで、埋土は灰褐色系の色調を呈する。

図版82に示したように、奈良時代に属する須恵器が出土している。

S D ① C 0 6 (図版24・30、写真図版36・48)

①C区南東部で検出した南北方向の溝で、SD①C05と平行する。長さ約10mにわたって検出されたが、北端はST01周溝とつながり、自然消滅している。溝中央部でSD①C03と交差しているが、本溝の方が

新しい。幅90cm、深さ10cmで、埋土は灰褐色・褐色を呈する。

図版82に示した須恵器蓋・短頸壺のほかにも須恵器杯蓋（351）が出土している。この須恵器の外面には「神家」と墨書きされており、注目される。

S D ① C 0 7 （図版24・30、写真図版36・48）

①C区南西部で検出した幅約2m、検出面からの深さ12cmの浅い溝で、SD①C01の続きと思われ、SD①A01およびSD①B01とも関連性がうかがえる溝である。溝の南端は西側に屈曲し西流する。屈曲部付近でSD①C03・04と交差・重複しているが、本溝の方が新しい。図示できるほどの破片は出土しなかつたが、やや大型で奈良時代でも新しいと考えられる須恵器蓋の破片が出土している。

S D ① C 0 8 （図版24・30、写真図版36・48）

①C区中央北部で検出した南北方向の縦い溝である。幅約50cm、深さ14cm、長さ約5.4mにわたって検出したが、南端は便槽による擾乱のため途切れしており、擾乱以南へのつながりは不明となっている。埋土は暗茶褐色である。図版82に示した須恵器小壺のほかに奈良時代の須恵器杯蓋の小片が出土している。

S D ① C 1 1 （図版24、写真図版36）

①C区南西部で検出した幅1m程度の浅い溝である。SD①C07と直交し、切っている。深さは約10cmを測り、長さ4.5m検出した。西側は調査区外にのびているが、東側では低い地盤のところで自然消滅している。SD①C11に伴うと考えられる遺物は出土していない。

B. 南②区 （図版31～40、カラー図版5、写真図版24～26・30・31・50～75）

南②区は南①区の北側に続く部分である。道路の東拡幅部分の幅15mのうち、調査区幅は14mとした。調査区は南側から順にA～Dの4区を設定したが、機械掘削に伴う耕土については埋め戻すため、土砂の仮置場を対象地区内に確保する必要から、分割して調査を実施した。順序はB・D→A・C地区であるが、東側の京営南町住宅への進入路確保のため、除外した部分がある。ただし、その部分については次年度に北（N）区、南（S）区として調査をおこなった。

基本的な層序は、盛土が現地表面下に80cm程度認められ、その下層に旧耕土が堆積している。旧耕土は黒褐色の極細砂で構成されており、土壤化している。近世～近代にかけての水田面である。この層の直下には暗黄褐色のシルト質極細砂の床土が、その下には灰褐色の極細砂～シルト質極細砂が堆積しており、この灰褐色が遺物の包含層となっている。遺構はこの層を除去した面で検出した。

②区で検出した遺構は、掘立柱建物跡8棟・井戸4基・溝・土壙などがある。

a. 掘立柱建物跡 （図版31～38、カラー図版5、写真図版50～57・64～67・70～75）

②区で検出した掘立柱建物跡の総数は8棟であるが、特に南半部で検出した建物跡4棟は東西・南北棟を交えながらほぼ同一方向の建物となっている。本遺跡では最も大規模のSB03をはじめ、廂を持つSB05など、特徴的な建物が集中している部分である。本遺跡では今回も含め過去にも多くの掘立柱建物跡が検出されているが、②区南半部ほど特徴的な部分はほかに存在しない。すなわち、本遺跡の掘立柱建物群のなかで、中心的位置を占める部分であると判断できる。この点および本遺跡建物跡群の性格については後章にゆずるが、参考までにあげておくと、当遺跡の東側約500mには、白鳳～室町時代の猪名寺廃寺が所在している。このような立地を考え合わせれば、猪名寺廃寺を創建したとされる「猪名

氏」で代表される集団の拠点的な遺跡であると考えている。

S B 0 2 (旧名 S B 0 1) (図版31・32、写真図版50~53・75)

②A地区と③B地区にまたがって検出された南北方向に主軸をとる側柱建物である。梁行2間、桁行5間で、梁方向は4.1m、桁方向は10.1mを測る。建物内の柱並びの方向にいくつかの柱穴が認められるが、本建物跡に伴うものかどうかは不明である。建物桁方向はN 3° Eである。柱穴掘り方は平面方形を呈し、一辺約90cmを測り、柱痕は径25cmから40cmのものまで認められる。

出土遺物としては、p14およびp15からは図版64に示した須恵器が出土しているが、ほかにp02から須恵器杯片、p04からは生駒西藻彫胎土の土師器鉢蓋片、p14からは須恵器杯B片と土師器高杯片が出土している。いずれも奈良時代に属すると思われる。

S B 0 3 (旧名 S B 0 2、調査時名称 S B 0 1) (図版31・33、写真図版53~57)

②B区中央で検出した、東西棟の側柱建物で、梁行2間、桁行5間である。調査した範囲内では建物面積で最も規模の大きなもので、梁方向で5.3m、桁方向で11.6mを測る。建物跡周辺には幅20~80cm、深さ5~10cmの溝②B04がめぐっている。柱穴は方形の掘り方で、大きなものでは一辺1.5mを測る。深さは80cm程度のものが多い。柱根は残存しておらず、抜き取られたものと考えられる。その痕跡は直径40~50cmを測る。桁方向はN92° E (梁方向ではN 2° E)である。

他の建物跡をはるかに凌駕する規模のものであり、当遺跡掘立柱建物跡群の中心となる建物跡である。なお、本建物跡内東部で土器の集積(SX②B01)が認められた。本建物跡と関係があるものと思われる。

出土遺物には、p08から図版64に示した小型の土師器杯Aが出土しているが、ほかにp05より須恵器B片、p06からは暗文の入った土師器杯B片、p10より須恵器蓋片、p13より須恵器杯B片が出土しているが、図示できなかった。

S B 0 4 (図版31・35、写真図版53)

SB03の北側に存在する東西棟で、調査時には判断されていなかった建物跡である。桁方向北側は3間であるが、南側では2間になっている。変則的であり、建物跡でない可能性も残されているが、東西両側の梁方向の柱列は整然と並んでいるため、建物跡と判断した。建物跡の規模は、桁方向7.2m、梁方向4.2mを測る。柱穴掘り方は平面円形・隅丸方形・方形が混じるが、70~80cmの規模で、柱痕は径30cm弱である。桁の方向はN88° Eを測る。図示できる遺物や時期が判明する遺物は出土していない。

S B 0 5 (旧名 S B 0 3、調査時名称 S B 0 2) (図版31・34、写真図版64~66・74)

②C区南端および北(N)区にまたがって検出された、東西方向に棟軸の方向をとる梁行2間、桁行4間の側柱建物跡である。南側には1間×4間の庵が付設されているようである。一部の柱穴は後世の搅乱により削平を受けていた。桁方向はN89° E (梁方向ではN 1° W)である。庵の桁方向中央の柱の位置が北側にずれており、3間のようにも見えるが、東西方向での位置はほぼ合致している。柱穴は方形の掘り方をもつものである。身舎の規模は梁方向に3.8m、桁方向に7.8mを測る。庵と身舎との柱間は2.2mで、身舎梁間の1.7mよりも広くなっている。建物全体の南北規模は6.2mとなる。

柱穴のうち、p07上面から瓦器碗のほか土師器杯Bが出土しており、図示したが、ほかにかえりのついた須恵器蓋Bが出土している。また、pN10・pN15・pN19から図示したような土師器・須恵器が出土している。なお、p12より土師器鉢蓋片が出土しているが、図示できなかった。

S B 0 8 (旧名 S B 0 4、調査時名称 S B 0 3) (図版31・36、写真図版64・65・67)

②C区南部で検出した。南北方向に棟軸の方向をとる梁行2間、桁行1間の建物跡である。方向はN

25°Wである。柱穴は円形の掘り方をもつものである。掘り方の直径は40cm程度とやや小規模で、柱痕直径も約20cmとやや細い。建物規模は梁行方向に3m、桁行方向に3.5mを測る。遺物は出土していない。

S B 0 9 (旧名S B 0 5、調査時名称S B 0 1) (図版31・37、写真図版64~67)

②C区中央部で検出した、南北方向に棟軸の方向をとる梁行2間、桁行3間の側柱建物跡である。柱穴は円形の掘り方をもつものである。掘り方直径は60cm程度、柱痕は径約30cmである。N20°Wが桁主軸方向である。規模は梁行方向に3.5m、桁行方向に約5.2mを測る。図示できる遺物は出土していない。

S B 1 0 (旧名S B 0 6) (図版31・38、写真図版70~73)

②D区北東隅で検出した、南北方向に棟軸の方向をとる梁行3間、桁行4間の建物跡である。柱穴は方形の掘り方をもつものと円形のものがある。規模は梁行方向に4.0m、桁行方向に6.5mを測る。東側は調査区外にのびており、全体を検出することはできなかった。方形掘り方の一辺は約60cm、円形は直径80cm程度、柱痕は30cm前後である。桁方向はN24°Wを測る。時期が判明する遺物は出土しなかった。

b. 棚列 (図版31・35・37、写真図版50・52~55・63・64・68)

②区において検出した柱列は、棚列あるいは廻跡と判断できるものは少ないが、東西方向3基、南北方向3基を認めた。なかには建物跡と思われるものも存在する。位置や出土土器により時期が判明あるいは判断したものは少ないが、飛鳥時代1基、奈良時代2基がある。

S A 0 2 (図版31・35、写真図版50・52)

②A区で検出した東西方向の4基の柱列である。東西両側にさらにのびてゆく可能性が高い。方向はE1°Sで、③A区SA08と方向が似ている。検出した全長は約11.5m、柱間は約3.2~3.3mと長い。柱穴掘り方は平面隅丸方形で、一辺約80cm、柱痕は径約20~40cmを測る。東端のp10から飛鳥時代の須恵器杯蓋(200)が出土している。また、図示していないものにも蓋2点があり、p06からは須恵器棟輪の破片も出土している。

S A 0 3 (図版31・35、写真図版53~55)

②B区の南部で検出した東西方向の柱列である。4基の柱穴で、全長は5.0m、柱間は1.2~1.3mを測る。N88°E方向で、北側のSB03の東西方向と近い。位置的にもSB03のはば中央南側に存在することから、SB03に伴う目隠し塀の可能性が考えられる。SB03との距離は3.8mである。柱穴掘り方は平面形で、径約70cm、柱痕は径30cm程度である。時期が判明する遺物は出土していない。

S A 0 4 (図版31・35、写真図版53~55・63)

②B区西端で検出した南北方向の柱穴4基の柱列である。掘り方が大形で、平面方形を呈するため、西側に続く建物跡である可能性も多い。方向はN3°Eで、全長7m、柱間は1.5~1.7mを測る。柱穴掘り方の一辺は最大1.2mである。柱痕も直径44cmと太い。南側3基の柱穴をもって、梁間2間の建物跡とすべきであろう。時期が判明する遺物は出土していない。

S A 0 5 (図版31・35、写真図版63・64)

②C区南西隅付近で検出した柱穴5基の柱列である。方向は、N1°Wで、SB05と全く同じ方向である。また、SB05とSA05は約4.3mの距離を置いている。全長6.1m、柱間は約80~110cmと細い。南側にさらにのびてゆく可能性がある。時期が判明する遺物は出土しなかった。

S A 0 6 (図版31・36、写真図版50)

②A区で検出した柱穴4基からなる柱列である。西端はまだのびてゆく可能性がある。主軸方向はN82°Eを測り、現時点での全長6.85m、柱間は1.60・1.94および2.28mを測る。遺物は出土していない。

S A 0 7 (図版31・37、写真図版64・68)

③C区中央部において検出した柱列である。方向はN21°Wで、建物跡SB09の方向に極めて近い。またSB09とは3mの距離を置いて南東側に存在していることから、SB09に伴う自隠し扉のような機能も考慮されよう。柱穴は3基検出し、全長3.0m、柱間は116・126cmを測る。遺物は出土しなかった。

その他の柱穴 (写真図版67・68・73~75)

柱穴はSB02からSB05の間で多数検出している。一部掘立柱建物跡として復原したが、ほかにも建物を構成していた可能性が考えられる。いくつかの柱穴から須恵器・土師器が出土しており、図版64に示した。

c. 井戸 (図版31・39・40、写真図版58~61・65・69~71・73)

②区では井戸を4基検出した。それらのうち、奈良時代に属するものは、SE01・SE04の2基で、残りのSE07・SE08の2基は埋土から中世の遺物が出土しているため、中世以降と判断される。奈良時代の井戸のうち、SE01は木枠および水溜が遺存しており、規模の点で今回検出中最も大きい。

S E 0 1 (調査時名称 S K 0 1) (図版31・39・40、カラー図版6、写真図版58~61)

方形の掘り方をもつ方形の井戸で、②B区南東部で検出した。深さは検出面から約2.5mを測る。掘り方の一辺は検出面で約3.2m、井戸枠の内法は一辺約1.14mである。相欠き仕口横板組の形態のものである。井戸枠は下端から4段目までが残存し、高さ約80cmを測る。水溜には直径約70cm、高さ約60cmの大型の曲物を使用し、曲物上端は井戸枠下端より16cm上側にある。

なお、詳細は不明であるが、井戸下部の掘り方に打ち込まれた多数の枕が検出されている。

井戸内からは多くの遺物が出土しているが、それらは、水溜内・水溜外・井戸枠内・埋土・掘り方に分けて取り上げている。埋土では図版40の第5層から出土している。

出土遺物は、図版69・70に図示した土師器・須恵器・瓦が数多く出土している。土師器杯(222)の底面には「中井口」の墨書き、(218)には井戸を示す記号文が記されている。また、(223)の暗文は精緻さにおいて他の追随を許さない。なお、(221)に示した製塙土器も出土している。また、井戸枠・水溜めに使用されていた木製品のはかに、図版67に示した串車・曲物片が井戸内から出土している。

S E 0 4 (調査時名称 S E 1・S K 1) (図版31・40、写真図版70・71・73)

平面形は1辺約2mの方形を呈していると判断できる。検出面からの深さは約70cmを測る。底はやや丸い。埋土は5層に分かれるが、そのうちの下層にあたる4層および最上層の5層より、図版76・77に示した土師器・須恵器・瓦といった奈良時代に属する多くの遺物が出土している。素掘り井戸である可能性が高い。

S E 0 7 (調査時名称 S E 0 1) (図版31、写真図版69)

②C・D区の境付近の東端で検出した平面円形の井戸である。掘り方が認められることから、素掘り井戸ではないが、井戸枠は不明である。掘り方径約1.4m、井戸内の径85cmを測り、検出面からの深さは約70cmである。図版75に示した陶器碗底部が出土している。

S E 0 8 (調査時名称 S E 0 2) (図版31、写真図版65)

井戸は地区の南側で1基検出している。円形の掘り方をもつ盗掘りのものである。図示していないが、埋土から中世の土器が出土している。SB05と位置的に重複しているが、本遺構が明らかに後出する。

d. 土壙 (図版31・40、写真図版50・52・57・63・65・68~70)

②区で検出した土壙は、調査区の南部に特に多く認められ、北半部には少ない。土壙の中には掘立柱建物跡の内部に位置するもののほか、柱穴の可能性があるものや包含層の滲まり状のものも含まれる。

S K ②A 0 1 (図版31、写真図版50・52)

土壙は梢円形の平面形状を呈し、長軸2.7m、短軸1.7m、深さは10cmを測る。東側に一部焼土が観察される。出土遺物は認められなかった。

S K ②B 0 2 (図版31、写真図版63)

B地区北西部に位置し、SK②B03の東側に重複して存在し、SK②B03よりも新しい土壙である。平面長方形に近い梢円形で、長さ1.3m、幅60cmを測る。柱穴である可能性も捨てきれない。図版78に示した土師器・須恵器の杯Bが出土している。

S K ②B 0 3 (図版31、写真図版63)

SK②B02と重複してSK②B02に切られるかたちで検出した方形と思われる土壙である。図示できる出土遺物はない。柱穴の可能性を残す。

S K ②C 0 1 (図版31・40、写真図版65・68・69)

SB05内に位置する土壙で、平面形は隅丸長方形に近い。長さ1.7m、幅1m、深さ40cmを測る。形状および規模から墓の可能性も考えられるが、棺の痕跡は認められなかった。堆土中からは図版78に示した奈良時代の須恵器杯Aが出土している。

S K ②D 0 2 (図版31)

D地区北西隅で検出した円形土壙である。直径約1m。出土遺物は認められなかった。

S X ②B 0 1 (図版31)

SB03内で土器の集積が認められた部分である。建物跡に隣接するものである可能性が高いと判断される。図版78に示した須恵器杯・土師器壺が出土している。

S X ②D 0 1 (図版31、写真図版57・70)

D地区北部中央に位置する溝状の滲まり遺構で、幅2m、長さ約7mであるが、北部はSX②D02とつながる。南部では井戸SE04と重複するが、同時もしくは前後関係があるのかも不明である。

井戸SE04と重複するため、いずれの遺構に伴うものか識別できないが、SX②D01で取り上げられた遺物は図版79・80に示した須恵器・土師器・瓦といった多くの奈良時代の遺物が認められる。

S X ②D 0 2 (図版31、写真図版70)

SX②D01の北側にあたるもので、一連のものととらえられるかもしれない。遺構の深さ等から廃棄場所の可能性がある。遺物は出土していない。

e. 溝 (図版31・40、写真図版50~55・61~64・68・75)

B地区では、溝は比較的大きなものが3条と小規模なものが4条検出された。規模の大きな3条の溝はSB03の南側で検出されたものである。1条が南北に、2条が東西に方向をとっている。幅は1.5~2.5

m、深さは20~30cmを測る。

S D②A 0 1 (図版31・37、写真図版50~52)

A地区南西隅で検出した。溝は東西方向で、最大幅3m、検出した長さは8mであるが、深さは20cmと浅い。西側の⑤区で検出したSX⑤02につながってゆく溝である。図版83に示した奈良時代の須恵器・土師器が出土している。⑤区のSD⑤01や①A区のSD①A03とは並行しており、本溝の南端上部は水田に伴う近世以降のものである。

S D②A 0 2 (図版31・32、写真図版51・75)

後述のSD②B01と一緒に溝で、SB02と重複している。なお、S地区として調査された際のSX②S01も同一の溝である。出土遺物は図版83に示した。土師器杯と須恵器片がある。図示した以外に牛乳西籠産胎土の土師器鉢蓋や焼土塊も出土している。同じ胎土の鉢蓋は重複するSB02p04からも出土している。

S D②B 0 1 (図版31・32・40、写真図版53~55・62・75)

B区南西端に位置する南北方向の溝で、SB02と重複して検出されており、溝の方が時期としては新しいと考えられるようであるが、確証はない。深さ約20cm、幅約2mを測り、南側のSX②S01およびSD②A02につながる溝で、長さは20m近くに達する。奈良時代の溝である。

出土遺物は図版83に示したが、S地区として調査された際のSX②S01も同一の溝であるため、出土遺物は一括して示している。須恵器・土師器・製塙土器がある。

S D②B 0 2 (図版31・40、写真図版53~55・61)

B区南部に位置する東西方向の溝で、西は「L」字形に南に屈曲している。東はSE01へとつながっている。井戸SE01に関連する作業場のようなものを想定しているが、確定できない。幅約2.5mで、西部では一段深くなっている、検出面から40cmを測る。奈良時代の遺構であることはほぼ間違いないと思われる。図版83に示した須恵器蓋のほか、図示していないが、須恵器壺口縁部片が出土している。

S D②B 0 3 (図版31、写真図版53~55・63)

B区南東部SB02の東、SE01の南側に位置する東西方向の幅広い溝である。長さ6m以上にわたって検出したが、調査区外東側にのびている。建物の東西方向およびSD②B02とも同じ方向であることから、関係が深いものと判断されるが、機能は不明である。奈良時代のものであり、図版83に示した須恵器・土師器杯が出土している。また、須恵器壺片も出土したが、図示していない。

S D②B 0 4 (図版31・33、写真図版53・54)

SB03の南北および西側を取り囲むように存在する溝であることから、SB03に伴う溝であることは間違いない。SB03の柱列中心から約1.3mの距離をおいて存在することから、雨落ち溝の可能性が高い。

図示できなかつたが、須恵器蓋の細片が出土している。

S D②C 0 1 (図版37、写真図版68)

溝は地区の北側で検出した東西方向のものとそこから直角方向に南側に分岐する2条を検出している。本溝は分岐して「L」字形に直角に折れ曲がったものである。幅は0.5~1.2m、深さは5~15cmを測る。図版83に示した須恵器蓋が出土しているが、溝の時期は断定できない。SD②C03に続くものかもしれない。

S D②C 0 2 (図版31・40、写真図版68)

SD②C01と重複する東西方向の溝である。断面観察によると本溝の方が占い。図版83に示した平瓦片が出土している。

S D ② C 0 3 (図版31、写真図版64)

SB09の東側に位置する南北方向の溝である。長さ8.3mにわたって検出した。幅は約50cmである。位置的にはSB09に関連する溝ととらえることができるが、方向が違っている。ただし、SA07をSB09関連の溝または堀とするならば、本溝はその間に存在することから関連性が高いと判断せざるを得ない。ところが、SD②C01の続きとすると、SB09とSA07の関係を分断するかたちとなる。判断は保留せざるを得ない。なお、出土遺物は認められなかった。

C. 南③区 (図版41~45、カラー図版4、写真図版27・28・32・76~87)

道路南面車線側の最も北側に位置する調査区である。層序のうち、最上層は盛土で、現地表面下に80cm程度の厚さで認められ、その下層に旧耕土が存在している。近世～近代にかけての水田面である。この層の直下には、暗黄褐色のシルト質細砂の床土が、その下には部分的に灰褐色の模様砂～シルト質細砂が堆積している。この灰褐色層が遺物包含層となっている。遺構はこの層を除去した下面で検出した。検出した遺構には掘立柱建物跡・溝・土壌などがある。

a. 掘立柱建物跡等 (図版41~45、写真図版76~78・80~84)

③区では掘立柱建物跡を4棟と柵列または堀と考えられる柱列を1条検出している。掘立柱建物跡は小規模なものあるいは小規模と推定されるが、柵列または堀と考えているものは調査区を横断し、さらに調査区を超えて東西両側にひろがっており、大規模なものと想定される。

S B 1 2 (旧名S B 1) (図版42~44、写真図版76・77・80)

A地区および一部B地区との境にまたがって存在しているようであるが、確認できていない。棟方向を南北にとる梁行2間、桁行2間の側柱建物跡である。北側の中間柱は検出できなかった。規模は梁方向で3.2m、桁方向では5.2mを測る。桁方向はN 2° Eである。SA08と重複し、前後関係は不明であるが、本建物跡の方が新しいものと想定している。時期が判明する遺物は出土しなかった。

S B 1 3 (旧名S B 2) (図版42~44、写真図版76~78・81・83)

A・B両地区にまたがって検出された南北方向の建物跡である。梁行・桁行ともに1間で、梁方向は2.2m、桁方向は2.5mの規模である。時期が判断できるような遺物は出土しなかった。桁方向はN 3° Eである。

S B 1 4 (旧名S B 3) (図版42~44、写真図版82・83)

東西南北に複数方向をとる梁行1間、桁行2間以上と考えられる側柱建物跡である。本遺構中桁行の柱間が最も狭いもので、その長さは1.4~1.6mとなっている。規模では、梁方向で1.5m、桁側では3.3mを測る。時期が判明するような遺物は検出されなかった。桁方向はN 73° Eである。

S B 1 5 (旧名S B 4) (図版42~44、写真図版82・84)

B地区南西端に位置する建物跡である。柱穴3基が南北方向に2.1~2.3m間隔で並ぶ柱穴列で、大半は調査区外西側にのびているものと思われる。柱穴列の方向はN 5° Eである。遺物は検出されなかつたため、時期は不明である。

S A 0 8 (旧名柵列) (図版42・45、写真図版76~78・80~82・84)

A地区からB地区にかけて調査区を東西に貫く柵列である。柱穴は6基検出しており、柱間は1.6~2.7m間隔で、その方位は座標の東西方向から8°南に振れています。この方向は奈良時代の掘立柱建物跡

の方位とはほぼ同じであることから、奈良時代建物群との関連が強くうかがえるとともに、この柱列を境にして北側では建物跡をはじめ奈良時代の遺構の量が激減していることを考え合わせると、奈良時代建物群域を区画する柵列または堀の可能性が高いと思われる。柱穴からの出土遺物としては、図示していないが、p25より奈良時代頃の須恵器壺片が出土している。

その他の柱穴（写真図版81・84・87）

柱穴は③A区および③B区の南部で多数検出している。何らかの建物を構成していたと思われるが、判然としない。

b. 土壙（図版42・45、写真図版76～79・85・87）

包含層の溜まり状遺構も含めて土壙と呼べる明確なものは、A地区およびC地区で検出している。それらのうち、SK③A01が奈良時代のものと確認できる。

SK③A 0 1（図版42・45、カラー図版4、写真図版76・77・79）

A地区北部中央に位置する南北主軸の土壙である。梢円形の平面形状を呈し、長軸2.1m、短軸1.1m、検出面から最深部までの深さは約30cmを測る。擾乱により一部が破壊されているが、図版78に示した奈良時代の須恵器杯や土師器の杯などが一括して出土している。土壙の性格は不明である。

SK③A 0 2（図版42、写真図版76・77）

SX③A01の南端に位置する不整梢円形で直径1m程度の小規模な土壙である。図版78に示した須恵器杯Aが出土している。

SK③C 0 1（図版42、写真図版85）

C地区南東隅で検出した平面梢円形を呈する土壙であるが、性格等は不明である。図版78に示した土師器杯または椀の破片が出土している。

SK③C 0 2（図版42、写真図版85・87）

C地区西端で検出した不整梢円形の土壙である。包含層の溜まり状のものとも考えられる。遺物は出土していない。

SX③A 0 1（図版42、写真図版76・77）

SB13東側の溜まり状遺構である。正確な規模は不明であるが、南北に長い長方形を呈する。図版78に示した土師器高杯片（300）が出土している。

c. 溝（図版41・42、写真図版82・83・85～87）

③区で検出した溝には近世以降の水路以外には時期が判断できるものが少ない。B地区では南北方向の溝が3条と東西方向のものが1条検出され、C地区では南北方向のものが1条と東西方向の溝が2条検出された。A地区では小規模な溝が数条検出されている。

SD③B 0 1～0 2（図版41、写真図版82・83）

SD③B01とSD③B02はほぼ南北方向に走る溝で、地区の北側で並行するかたちで検出された。規模はSD③B01が幅40～50cm、深さ3～5cm前後、SD③B02はSD③B03に切られており、現存幅0.8～1m、深さ10cm前後とSD③B02の方が幅広くなっている。図示できた出土遺物はない。

SD③B 0 3（図版41、写真図版82・83）

SD③B03は江戸時代後期に掘削された溝で、水路として利用されていたと思われる。両岸に沿って角

杭が列状に打ち込まれていた。当該地域に盛土が施される昭和後半まで浚渫されて利用されていたものとみられる。幅1.5~1.8m、検出面からの深さ20cm前後を測り、最下層の砂礫層中からは江戸時代後期の陶磁器が出土しているが、図示していない。また、円筒埴輪小片も出土している。

S D ③ B 0 4 (図版41、写真図版82・83)

B地区南東隅で検出した東西方向の溝で、幅0.9~1.5m、深さ9cm前後を測る。擾乱により切られているために判然としないが、SB12を区画する溝になる可能性も考慮される。図版83に示した須恵器高杯が出土している。

S D ③ C 0 1 ・ 0 2 (図版42、写真図版85~87)

SD③C01とSD③C02はほぼ平行に走る溝であるが、南東方向にゆくにつれややその間隔が開く。規模はSD③C01が幅25~45cm、深さ10cm前後、SD③C02が幅35~50cm、深さ12cm前後とほぼ同規模である。

SD③C02より奈良時代と思われる須恵器蓋細片および焼土塊が出土しているが、溝の時期は判断できない。

S D ③ C 0 3 (図版42、写真図版85・87)

B地区で検出されたSD③B03の延長にあたると考えられる溝で、未調査部分で西向きに曲折するものと見られる。規模についても幅2m弱とSD③B03とはほぼ同様である。図示できた遺物はない。北側の④3区で検出した溝SD④301につながってゆくものと思われる。

D. 南④区 (図版46・47、写真図版88)

道路の西側2車線部分に相当し、平成14年度の確認調査(2002233)で井戸が検出された2箇所のトレンチの周辺に南北10m×東西7mの範囲でそれぞれ調査区の設定をおこなった。北側で井戸が確認されたG13部分は④3区、南側の井戸が確認されたG11部分は④4区と呼称する。遺構面はいずれの調査区でも削平を受け、包含層はほとんど存在しないが、奈良時代~近世の遺構を検出している。

I. ④3区 (図版46、写真図版88)

奈良時代の可能性がある井戸および近世以降の流路状構などが検出された。地山は砂礫層の上にシルト質細砂が薄く覆っている。地下水位は非常に高く、地山の砂礫層から水が浸みだしている。

S E 0 6 (旧名S E 0 1) (図版46、写真図版58)

素掘りの井戸である。検査面での直径は約2mであるが、崩落によるもので、本来は直径1m程度であったと考えられる。深さ約1.8mである。埋土からの出土遺物はほとんどなく、須恵器片がわずかに出土している。土器は8世紀頃のものと考えられるが、遺構の時期については判断できない。

流路 S D ④ 3 0 1 (旧名S D 0 1) (図版46、写真図版88)

北西から南東に流れる大きな溝とそれに並行する小規模な溝が2条検出された。幅約3mで、護岸のための杭が残存している。埋土からは主として江戸時代~近代にかけての陶磁器が出土している。また、平瓦片は図版64に示した。③C区のSD03に続くものと判断できる。

II. ④4区 (図版47、写真図版88)

奈良時代と考えられる井戸や、中世の小規模な溝などが検出された。地山は砂礫層で、調査区中央部がグライ化している。本地区で検出された井戸が素掘りであり、その他の地区で検出された井戸に木組

みが多いことから、格差がうかがえる。本調査区が中心部から離れた縁辺部に位置していることを示しているのかもしれない。

S E 0 5 (旧名 S E 0 1) (図版47、写真図版88)

素掘りの円形井戸である。検出面での直径は約2.6mであるが、崩落によるもので、本来は直径1.4m程度であったと考えられる。深さは約1.4mである。埋土からは図版75に示した須恵器・土師器・製塙土器といった奈良時代に属する遺物が多く出土している。

S D ④ 0 1 · 0 2 (図版47、写真図版88)

溝は幅20cm程度、深さ10cm程度のもので、耕作による「船溝」と考えられる。南北方向のものと東西方向のものに分かれ、東西方向のものが道路敷設直前の畠の歴の方向に等しく、南北方向のものがやや古いものと考えられる。図示できる遺物は出土していないが、中世以降のものと考えられる。

E. 南⑤区 (図版48、写真図版89)

平成14年度の確認調査で包含層が認められたG 7の部分の本発掘調査区である。調査区は幅約6.5m、長さ約13mの長方形である。基本層序はアスファルト・コンクリート・道路建設時の盛土、道路建設直前の耕土・床土、包含層、地山である。地形は北東から南西に緩やかに傾斜している。検出された遺構は奈良時代と中世のもので、柱穴・土壙・溝などである。南東隅で検出した方形掘り方の柱穴は掘立柱建物跡になる可能性を残している。なお、確認調査のG 7で瓦器碗が出土している。

S K ⑤ 0 1 (図版48)

SX⑤02に重複して存在する2基の土壙のうちの1基である。平面不整円形を呈し、直径約80cm、深さ15cmを測る。SK⑤02とともにSX⑤02が埋まってから掘り込まれた土壙である。図示できる遺物は出土していない。

S K ⑤ 0 2 (図版48)

SX⑤02に重複して存在する2基の土壙のうちの1基である。平面楕円形を呈し、長さ1.2m、幅60cm、深さ10cmを測る。SX⑤02が埋まってから掘り込まれた土壙である。図示できる遺物は出土していない。

S X ⑤ 0 1 (図版48、写真図版89)

不整形の大型土壙で、調査区南西隅のやや傾斜が急になる部分で検出された。複数の不整形土壙が重なり合って検出されている。検出面からの深さは最も深い部分で50cm程度である。出土遺物の大半は奈良時代の須恵器・土師器であるが、底では瓦器碗(302)が出土している。中世の土取り穴と考えられる。

S X ⑤ 0 2 (図版48、写真図版89)

調査区北部のSD⑤02の北側で検出された。複数の溝・土壙が重なり合って形成されたと考えられる。深さは全体的に10~20cmと浅い。埋土から奈良時代の須恵器・土師器杯(図版78)が出土している。

この溝状・溜まり状遺構は②A区南西端のSD②A01と形状および位置が似ていることから、同一遺構であると思われる。

S D ⑤ 0 1 (図版48、写真図版89)

東西方向の溝で、幅約1m、深さ約25cmである。①A区のSD03と同一のものと考えられる。道路直前まで使用されていた用水路であると思われる。図示していないが、近世以降の磁器碗が出土している。

SD⑤O2 (図版48、写真図版89)

SD⑥O1と並行して走る、幅約30cm、深さ約10cmの細い溝である。埋土から須恵器杯A (図版64) が出土している。

F. 南⑥区 (図版49~51、写真図版90)

南⑥区は3つの地区からなり、平成14年度の確認調査により溝状遺構が検出されたG4・G5・G6部分についてそれぞれ20・15・15mの長さで設定した調査区である。南側からI区・II区・III区と呼称する。掘立柱建物跡や溝、土壙・柱穴などを検出した。基本的には奈良時代を中心とした遺構である。

I. ⑥I区 (図版49)

現地表面から約150cm掘削したレベルで、厚さ約10cmの遺物包含層が認められた。この層を掘り下げた面で、遺構を検出した。検出した遺構は地区内南側に集中し、東西方向の溝3条と柱穴に限られる。図示できる遺物は出土しなかった。

SD⑥I O1 (図版49)

溝は人為的に埋め戻されている。SD⑥I O2・O3とは埋土が異なり、時期差があるものと考えられる。鎌倉時代と思われるが、図示できる遺物は出土していない。

SD⑥I O2 (図版49)

溝は人為的に埋め戻されている。奈良時代と思われるが、確定できる遺物は出土していない。①C区のSD①C04から続く溝と思われる。

SD⑥I O3 (図版49)

溝は人為的に埋め戻されているようである。奈良時代と思われるが、判断できる遺物は出土していない。①C区のSD①C03から続く溝である。

II. ⑥II区 (図版50)

現地表面から約110cm掘削したレベルで、厚さ約10~20cmの遺物包含層が認められた。ただし、調査区北部では包含層が認められず、現地表面から約110cm掘削したレベルで基盤層となっている。遺物包含層からは奈良時代を中心とした時期の多量の土器（コンテナ4箱分）が出土している。基盤層からは3基の柱穴を検出した。これらの柱穴は鉢形に並び、建物となる可能性が考えられるが、断定するにはいたらなかった。出土土器から判断して、奈良時代と考えられる。

III. ⑥III区 (図版51、写真図版90)

当地区では遺物包含層は全く認められず、現地表面から約130cm掘削したレベルで基盤層に達した。旧耕作土層の直下にある。この面において、掘立柱建物跡・柱穴・土壙・溝を検出した。

SD⑥III05以外の溝は、いずれも建物の主軸方向とは一致せず、時期を異にするものと考えられる。ただし、出土土器からみた時期は掘立柱建物跡と大きな時期差は認められない。遺構の時期については出土土器から、奈良時代を中心とした時期と考えられる。

a. 挖立柱建物跡 (図版51、写真図版90)

掘立柱建物跡は2棟検出したが、2棟ともその一部を検出できたに過ぎない。

S B 0 6 (旧名S B 0 1) (図版51、写真図版90)

梁行2間からなる建物跡で、この建物を構成する柱穴は5穴検出したが、いずれもその平面形が一辺40~80cmの方形を呈する。2間×2間以上の側柱建物跡であり、東西に長い建物跡になるものと思われる。西側にある細い溝は本建物跡に関連する可能性が高い。また、建物内部に土壙SK⑥Ⅲ01が存在しているが、これも建物に関連するものの可能性が高い。梁方向と思われる南北方向は、N 0°である。

p16から図版64に示した須恵器杯蓋片が出土している。小片であるが、奈良時代に属するものである。

S B 0 7 (旧名S B 0 2) (図版51、写真図版90)

一列に並ぶ3穴を検出したに過ぎないが、この柱穴列の東側を、当建物を面するように溝 (SD⑥Ⅲ05) が巡っている。本建物を構成する柱穴の平面形も、一辺約40cmの方形を呈している。西側に展開する掘立柱建物跡と判断できる。p08から図版64に示した奈良時代の土師器杯が出土している。

建物の軸方向は、N 2° Eである。

b. 土壙 (図版51、写真図版90)

土壙は数基検出したが、明確なものは少ない。

S K ⑥Ⅲ 0 1 (図版51、写真図版90)

SB06の内部に位置する長方形土壙で、東側は調査区外にのびている。最大幅2.5mで、長さ3m弱確認できた。深さは10cm程度と規模のわりに浅い。図版78に示した瓦片が出土している。

S K ⑥Ⅲ 0 3

位置・形状などは不明となっている。図版78に示した須恵器杯が出土している。

c. 溝 (図版51、写真図版90)

⑥Ⅲ区では明確な溝は4条検出した。いずれも奈良時代のものと想定している。

S D ⑥Ⅲ 0 3 (図版51、写真図版90)

調査区中央部に位置し、北西—南東方向にのびる溝で、長さ7m弱検出した。西方は地盤が高くなっているため自然消滅している。幅約1m、深さ約10cmである。中央部がやや浅くなっている部分がある。図版64に示した土師器杯蓋が出土している。

S D ⑥Ⅲ 0 4 (図版51、写真図版90)

SD⑥Ⅲ03とほぼ平行方向の溝であるが、調査区西部で途切れている。幅が広い東側では1.3m、西側では40cmである。深さは15cm程度である。図版64に示した須恵器壺と製塙土器片が出土している。

S D ⑥Ⅲ 0 5 (図版51、写真図版90)

SB07の東側を取り巻くかたちで、区画する溝である。幅30cm程度、深さ約10cmを測る。遺物は出土していない。

(岸本)

3. 遺物

南区では古墳時代～奈良時代および中世の遺物が出土しているが、それらの大半は奈良時代に属する土器である。古墳時代の土器は埋没古墳ST01南西墳裾から出土している須恵器群があるが、奈良時代の土器はそれらの大半が井戸および土壙・溝から出土しているものである。また、包含層から多くの土器が出土している。中世の遺物は出土量が非常に少なく、瓦器椀のはか、青磁・白磁などがある。柱穴・土壙のはか、包含層から出土している。

遺物には須恵器・土師器・瓦・木製品があるが、墨書き器や猪名寺庵寺と同范の軒丸瓦片も含まれ、製塙土器や埴輪片のはか、砾石やサヌカイト剥片も出土している。

I. 古墳時代の遺物

①C区で検出した埋没古墳ST01南西墳裾の須恵器群と、SD①C01で出土した円筒埴輪片がある。

ST01墳裾では奈良時代の土器も同時に出土しているが、ここでは古墳時代に属するもののみ抽出した。また、円筒埴輪片はSD①C01以外にも③区の遺物包含層や溝SD③B07からも出土しており、一括して記述する。なお、SD③B07の位置は③B区の南西部と思われるが、正確な位置は不明である。

S T 0 1 出土須恵器 (図版63、カラー図版12、写真図版112・140)

ST01出土古墳時代須恵器には杯蓋・身のはか、長脚・短脚の高杯、短頸壺、甕、甕がある。

169～171の杯蓋のうち169・170は土器群A群から出土したものである。171もその付近から出土しているが、A群であるか確定できない。いずれも口径13.0cm前後で、口縁部と天井部の境の外面には明確な段や棱をもつ。天井部外側のヘラ削りの範囲は広い。口縁端部は面をもつが、169は内傾する凹面、170は内傾する平面、171はやや丸みをもつ段状となっている。これらの特徴から、MT-15型式の範疇に含まれると思われるが、口径はやや小さく、古い傾向を示すものかもしれない。

172の杯身は口径11.2cm、器高5.4cmを測る。立ち上がり部はほぼ直立するが、端部は丸く、平面をもたない。受け部は外に拡張するがほぼ水平方向である。底部外側のヘラ削りの範囲は広い。受け部や立ち上がり端部の形状から、やや新しい傾向も窺えるが、口径は小さくむしろ古い傾向を示すものかもしれない。MT-15型式の範疇でとらえておきたい。A群出土である。

173の低脚無蓋高杯は口径13.2cm、器高10.7cmを測る。口縁部と杯底部との境の外側には突堤状の稜をもつ。杯部は楕形に近く深い。脚部には長方形の透かしを3方向に穿つ。A群出土である。

174は長脚の無蓋高杯である。口径10.8cmで、杯部外側の段は凹線状となっている。その下部には櫛波状文を施し、その下部には段が認められる。脚部の透かしは3方向である。A群出土。

175は短頸壺と思われるが、口縁部を欠失している。肩部はやや角張っているが、体部は深い。最大径は12.8cmである。MT-15型式の範疇でとらえられるものであろう。A群出土である。

176の甕は口径12.6cm、残存器高12.5cm、体部径10.9cmを測る。頸部の径は7.4cm、口頸部の高さは5.6cmと口縁部は太く短いことから、MT-15型式としてとらえられる。頸部外側には櫛波状文を細かく施し、体部には櫛工具による刺突文をめぐらしている。A群から出土した。

177の大型甕はC群を中心にA群にも破片が分かれて出土しているが、一部B群にも認められた。口径21.6cm、体部最大径48.4cm、残存器高49.2cmを測る。口縁端部は下方に拡張し、断面は丸みをもつ三角形に近いが、先端は上方につまみあげたように引き伸ばされている。

178はB群出土の甕である。体部外側は格子目状に観察できるタタキの後、カキ目を密に施している。口径17.3cm、器高31.6cm、体部最大径29.5cmを測る。体部はやや長い。口縁部は複合口縁状に屈曲して

いる。口縁部の形状において通常とはやや異なっている。格子タタキとの関連があるのかもしれない。

以上、ST01出土須恵器は概ねMT-15型式の範疇に含まれるものである。

埴輪（図版63、写真図版135・140）

出土した埴輪はすべて円筒埴輪の破片である。なかには須恵質のものも含まれる。

SD①C01から出土した埴輪は179～182の4点を図示した。いずれも細片である。タガは179のように突出度がやや大きいものから、180のように細く低いものがある。調整痕が残るものが少ないが、182では細かい縦ハケのみ残存し、179・180でわずかに残るハケ目も縦方向で、横方向は認められない。

③区出土の円筒埴輪は183～186に示した。直径は15～20cmで、183では直径5.5cm程度の円形透かしが認められ、184でも残存している。いずれもタガの突出度は低く外側調整も縦ハケのみである。内面調整はナデが残存している。184は基部に近い第1段目と思われる。

出土している埴輪はいずれも細片であり、奈良時代の溝や旧耕土出土といった古墳時代の遺物としては包含層扱いのものばかりである。SD①C01出土のものについてはST01に帰属する可能性が考えられるが、須恵器群からは1点の埴輪片も出土していないため、断定できない。その他の埴輪についても帰属する古墳が見当たらない。付近には前回の調査時にも埋没古墳が検出されているため、それらの可能性も考えられるが、ほかにも古墳が存在していた可能性も同時に考慮しておくべきであろう。

II. 奈良時代およびそれ以降の遺物

奈良時代の遺物には須恵器・土師器のほか、瓦が目立って出土しているのが特徴である。土器には井戸や溝から出土した墨書き土器のほか、猪名寺廢寺と同様の軒丸瓦が溝から出土している。また、一部の造構から出土した遺物には、飛鳥時代にさかのぼるものも認められる。

奈良時代の遺物が出土した造構には、掘立柱建物跡、5基の井戸、土塙、溝があり、包含層から多く出土している。

a. 掘立柱建物跡等

図示できた土器が出土した掘立柱建物跡等には、SB02・SB03・SB05～SB07のほか、SA02がある。

いずれも出土した遺物の量は多くない。

SB02（図版64、写真図版113）

187・188に示した須恵器が②区南部のSB02から出土している。

187はp15から出土した壺底部で、高台は外側に踏ん張り、体部下半はやや丸みをもつ。188はp14から出土した杯B底部と思われる破片で、高台は外に踏ん張る。口縁部は外上方にのびている。

SB03（図版64、写真図版113）

②区南部の大規模な東西棟であるSB03から出土した遺物のうち図示できたものは189の土師器杯1点にすぎない。p08から出土した破片であるが、口縁端部内面には沈線状の窪みが認められ、口縁部内面には2段の暗文および底部内面にも暗文が施されている。口径9.7cm、器高2.2cmを測り、底部外面にはヘラ削りが認められる。

SB05（図版64、写真図版113・114）

②区中央部の東西棟SB05から出土した遺物のうち、身舎部分のp07の上面から197の瓦器楕および196の土師器杯B、窓と思われる部分のp19から195の土師器杯A、p12からは須恵器蓋の190、p10からは191～193の須恵器・土師器が出土している。なお、建物内に存在する柱穴p15からは194の把手およびM9の鉄製品が出土している。

190の須恵器杯B蓋は口径16.6cm、器高2.6cmを測る。天井部から口縁部へは緩をもたず緩やかに移行し、端部は下方へあまり引き伸ばさず、断面三角形に近い。つまみは扁平であるが中央部は尖る。平城宮Ⅰあたりに比定できるであろう。191は口径18.8cm。

192の須恵器杯B底部の高台はかなり内側にあって外側に踏ん張ることから、平城宮Ⅰと考えられる。

195の土師器杯は口径15.0cm、現器高2.3cmを測る。口縁部と底部の境にはゆるい稜をもつ。

197の瓦器椀は橙色に近い灰色を呈し、炭素の吸着は不十分である。口径12.9cm、器高3.5cmと口径が小さく低い形態で、高台もわずかに突出するのみであり、暗文も内面のみに非常に疎らに施している。以上のことから、瓦器椀でも新しい時期に位置づけられるものである。この土器は柱穴上面から出土していることから、後世の混入と考えたい。

M9の鉄製品は長さ7.1cm、幅2.8cm、厚さ0.8cmの長方体に近い形状である。

S B 0 6 (図版64、写真図版114)

⑥Ⅲ区の東西棟SB06のp16から出土した須恵器杯蓋(198)は細片であるが、口縁部の形態は190に近い。

S B 0 7 (図版64、写真図版114)

199は⑥Ⅲ区のSB07p08から出土した。土師器杯Aの破片で、口径17.6cm、器高3.4cmを測る。口縁端部は丸く内側に押さえることで内面に沈線状の詰みをつくり出している。底部から口縁部にかけては比較的緩やかに移行し、底部外面にはヘラ削りを施している。口縁部内外面には横方向のヘラミガキを加えている。平城宮Ⅰ～Ⅱあたりと考えられる。

S A 0 2 (図版64、写真図版113)

②区南端のSA02の東端柱穴p10出土の須恵器杯蓋(200)は、内側にかえりをもつもので、口径11.3cmと小型であるが、器高3.2cmでつまみも高い。飛鳥Ⅲあたりに比定できよう。

その他柱穴出土土器 (図版64、写真図版113・114・134)

201は①B区の単独柱穴であるP①B08から出土した土師器鍋または甕の破片である。口径44.9cm、内面の一部には横ハケが残る。

②B区のうち、SB04柱列の並び中に存在するP②B28から須恵器杯Bの破片(202)が出土している。また、付近に存在するP②B30からは土師器杯B片(203)、P②B38からは須恵器甕口縁部(207)および須恵器杯B蓋の破片(208)が出土している。②B区北端に所在するP②B36からは須恵器杯の口縁部片(204)、P②B33からは土師器杯A(205)と土師器高杯脚柱部(206)が検出された。②C区北部の単独柱穴P②C39からは土師器杯蓋と思われる破片(209)が出土している。205の土師器杯Aの口径は17.4cm、器高4.4cm。平城宮Ⅱを中心とした時期である。底部外面に「×」のヘラ書きが認められる。206の脚柱部外面は13角形に面取りをしている。208は口径16.4cmを測り、口縁端部は190に近いが、高さは低い。平城宮Ⅱと思われる。

③区ではA地区南東部のP01とP10から出土した須恵器杯B(210)が接合している。口径17.5cm、器高4.1cm、径高指数23で、口縁部はほぼ直立し、高台は外側に貼り付けられている。平城宮Ⅱ～Ⅲと思われる。

⑤区内南東隅のP05からは、図示していないが、須恵器高杯脚柱部の破片(211・写真図版134)が出土している。

⑥Ⅲ区では、P07(位置不明)から口径11.4cmの須恵器杯口縁部(212)が出土している。

b. 井戸

井戸は①・②・④区で検出されているが、遺物が出土した井戸のうち、奈良時代に属するものはSE01～SE05である。そのなかでも、掘立柱建物跡群に最も近い位置に存在するSE01やSE02では、木製井戸枠が良好に遺存し、遺物も多量に出土した。また、掘立柱建物跡群に近い位置に存在するSE03でも、土居桁のみであったが、木製井戸枠が存在していたことが判明した。平安時代末から鎌倉時代以降と考えられる井戸はSE06・SE07である。SE06では遺物は出土しなかったが、中世と思われ、SE07は近世である。

SE01

②B区の南部に位置する井戸SE01は、相欠き仕口横板組の井戸枠および曲物の水溜が残存しており、今回検出した井戸の中でも最も規模が大きく、井戸枠の一辺が約1.2mのものであった。井戸内部から出土した遺物には須恵器・土師器・瓦といった土器類のほか、壺串・曲物といった木製品がある。

井戸内出土遺物は、その出土場所・層位により、およそ4分類できる。すなわち、①水溜の曲物内から出土した遺物。②井戸枠内であるが、水溜よりも外側から出土した遺物。これらは井戸底と表現できるものであり、基本的には①と大差ないものと思われる。③井戸壁上から出土した遺物。④井戸掘り方から出土した遺物。以上の4種のうち、①には土師器・須恵器・製塙土器がある。②では墨書き土器を含む土師器や須恵器のほか、瓦・曲物片・壺串がある。③から出土した遺物には土師器・須恵器・瓦がある。④には須恵器のほか、多数の杭がある。

1. 木製品

1) 水溜（曲物）（図版65、写真図版116・117）

井戸底の水溜に使用されていた曲物である。やや歪んでいるが、直径73cm、高さ58cmを測る大型のものである。底板は無いが、底板を留めていた木釘およびその孔が底部外面に多数認められる。板の厚さは約8mmを測る。重ね合わせ部分の幅は15cmであり、両端は幅1cm弱の棒でしっかりと留められている。タガは幅7cm、厚さ8mm程度の薄板を上中下3段に巻いているが、上段のタガは現存しない。井戸内からも破片が発見されていないことから、井戸底に設置された時点ではすでに無かったものと推察される。したがって、底板が無いこととあわせて、この曲物が転用品と考えられる所以である。タガのあわせ部分も幅5mm程度の棒でしっかりと留められており、その留め方に特徴がある。また、タガがずれないようく曲物本体とも木釘により留めている部分が認められる。一方、タガと本体との間には当て板をつけている。当て板は幅9cm、厚さ3mm程度の細長い板を使用し、4方向に認められる。タガ・当て板・本体の接合は各1本の木釘で行っている。曲物内面には縦・斜め方向の切込みが多数認められる。

なお、各部材の樹種同定を行ったが、事情により、結果報告を筆者が実見できなかつたため、記述することができない。

2) 井戸枠（図版66・67、カラー図版10、写真図版115・118・119）

相欠き仕口横板組の井戸枠および下部に使用されていた板材である。相欠き仕口の井戸枠は12点残存していたが、図示できたのは7点である。ただし、欠損部分が多い。下部の板は4点すべて図示した。

w10～w12は西側井戸枠、同様にw13～w15は北側、w16・w17は東側、w18～w20は南側に組まれていた井戸枠である。井戸枠下部に使用されていた板材(w12・w15・w17・w20)は幅約12～16cm、厚さ2～3cmを測り、長さは118cmと121cmの2者があり、その差が3cmであることは、短い北側(w15)および南側(w20)の板を長い西および東側の板(w12・w17)で挟み込んだ際に正方形になるようにするために思われる。

最下段に使用されていた相欠き仕口横板のうち、北側(W14)および南側(W19)の板は片側にのみ切り欠きをついている。また、それよりも上に組まれる横板の切り欠きは、上下の深さが異なっている。すなわち、北側(W14)および南側(W19)のように下端の切り欠きが無い横板の上に組み合わされる西側(W11)および東側(W16)の横板は、切り欠きの深い側を下にしている。西・東側のこの板の上部の切り欠きは浅いものとなっているため、その上に組み合わされる北(W18)・南側(W13)の横板は切り欠きの深い側を下にしている。そしてまた、それらの板の上部の切り欠きは深いものとなっているため、その上部に組まれる西(W10)・東側の横板は切り欠きの深い側を下にしている。このように相欠きの切り込みの深さに差があることは、全く同じ規格、特に同じ幅の板材を調達できなかったことによる工夫と考えられる。

相欠き仕口に使用された板材は、井戸外面に丸太の樹皮側がくるようにし、組み合わされる部分は樹皮側から削り込むことによって厚さを調整している。ただし、いずれの材も樹皮は残存しておらず、削り取るなどの加工を施されたものと思われる。

使用された板材の法量は、長さ132~139cm、相欠きの内法は114cm前後、板材の幅は21~28.5cmで、厚さは最大8.8cm、組み合わせ部分の厚さは5~7cmである。1.3~1.4mの長さにおける最長・最短の差が7cmであるのに対し、幅の差が7.5cmもあることは、上記の判断を首肯できるものといえよう。

なお、各部材の樹種同定を行ったが、事情により、結果報告を筆者が実見できなかっただため、記述することができない。

3) 杠 (図版68、写真図版120)

詳細は不明であるが、井戸の掘り方に打ち込まれていた杠である。9点図化したが、残存していた杠のすべてであるかどうかも不明である。

幅4cm程度、厚さ1.5~3cm程度の角材の先端を尖らせたものである。長さは70cm程度から85cm程度までばらつきがある。1点について樹種同定を行ったが、上記の理由により、記述できない。

4) 斧串 (図版67、写真図版119)

水溜外側の井戸底から出土したものである。4点図示した。完形品は認められない。W21は先端を欠損する。幅2.1cm、厚さ2mm程度で、残存長は16.5cmを測る。切り込みは2段に施されている。W22は上部を欠失している。残存長16.4cm、最大幅1.6cm、厚さ約2mmである。切り込み部分がかろうじて観察できる。W23は切り込み部分の大半を欠失する。全長は16.6cmで、上下端は原形をとどめている。残存幅1.9cm、厚さ1mm強である。2段に切り込みを施している。W24は側面の約半分および先端を欠失している。切り込みは1段のようである。残存長14.6cm、残存幅1.0cm、厚さ1mmを測る。

すべて樹種同定を行ったが、事情により、筆者のもとに結果報告が届かなかっただため、記述できない。

5) 曲物 (図版67、写真図版119)

W25・W26に示した折衷と思われる曲物が、水溜外側の井戸底から出土している。W25は図の左端、W26では図の右端が原形をとどめているが、それ以外の部分は欠損している。W25の残存長は20.0cm、残存幅2.3cmを測る。厚さは2mmである。木釘孔が1箇所認められる。W26は残存長9.7cm、残存幅2.0cm、厚さは4mmとやや厚い。樹種同定を行ったが、筆者のもとに結果報告が届かなかっただため、記述できない。

2. 土器類

1) 水溜内出土土器 (図版69、カラー図版10、写真図版120・121)

218~221に示した土器が水溜内から出土した。218は土師器皿Aまたは杯Aで、口径15.5cm、器高2.1cmを測る、ほぼ完形品である。外面の底部およびその周辺をヘラ削りしている。口縁端部外面は沈線状

に凹面をなしている。底部外面ほぼ中央には墨書が認められる。文字とはいがたいが、井戸から出土した土器に時々みられるものに類似している。「井」または「井」の略字のようにも思えるが、断定できない。平城宮Ⅳ頃と考えている。なお、内面にも墨書のように見える部分があるが、植物の根などの痕跡かもしれない。

219は土師器杯または碗のほぼ完形品である。口径12.5cm、器高4.3cmを測る。底部から口縁部にかけて丸みをもって移行する。底部はやや丸く深い。口縁端部内面に沈線状の凹面が認められる。口縁部外面は横ナデの後、外面底部周辺はヘラ削りの後に横方向のヘラミガキを施している。平城宮Ⅲ頃かと考えられる。

220は須恵器杯Bは口径9.8cm、器高3.7cmを測る。口縁部の1/2弱を欠失するのみである。底部の器壁は厚く、口縁部は薄い。高台は低い。平城宮Ⅳ頃と思われるが、詳細は不明である。

221は製塙土器の口縁部である。口径13cmを測る、砲弾形のものであるが、体部下半を欠失する。口縁部内面には強いナデによる段が認められる。布目は看取できない。

2) 井戸枠内出土土器（図版69、カラー図版9・10、写真図版120・121）

222～226が出土している。前述のように、井戸底と言い換えても良いと思われる。

222は土師器杯であるが、底部外面に「中井口」の墨書がある。口径12.8cm、器高4.1cmを測る。底部外面はヘラ削り後ナデ、口縁部内外面はヨコナデ調整である。平城宮V前後の可能性がある。

223の土師器杯は、内面の放射状暗文を密に施し、連弧文も加えている。外面のミガキも多く施し、焼成良好の口縁部破片である。これほど精緻な土師器は本遺跡ではほかに認められない。口径17.0cmを測る。暗文の状態から平城宮II頃と思われる。

224は須恵器の脚部である。高台径は7.8cmで、高台は外に踏ん張る。平城宮II頃の可能性がある。

225は土師器の壺である。口径29.0cmを測る。ハケ調整で、外面に煤が付着している。口縁端部は面をもつ。平城宮II～III頃であろうか。

226は須恵器壺の体部破片である。内面には青海波の當て具痕、外面は平行タタキを施している。約38cm×約21cmのほぼ長方形の大きな破片である。

3) 埋土出土土器（図版69、写真図版120）

埋土出土土器の大半は、図版40の第4・5層といったSE01埋土上・中層から出土している土器である。

227～230の4点を図示した。227・228の土師器杯はどちらも内面の暗文が看取できるが、227は特に疎らである。227は口径17.4cm、器高2.7cm、228は口径20.8cm、器高3.9cmを測る。どちらも口縁端部を内側に丸めるように仕上げているが、あまり。また、口縁部は外反気味である。平城宮IVないしV頃と思われる。

229は須恵器壺ないし瓶子の底部と思われる。高台はやや外に踏ん張るが、短い。高台径9.0cmを測る。

230は須恵器短頸壺の口縁部である。口径11.3cmを測る。口縁端部は丸く仕上げ、器厚は薄い。

4) 摂り方内出土土器（図版69、写真図版121）

井戸枠外側の摂り方から出土した土器で、ほぼ完形の須恵器杯B 1点のみ図示できた。この土器は井戸構築時の年代の一端を示すものと思われる。

231の口径は12.1cm、器高3.6cm、高台径8.1cmを測り、高台は内側に貼り付けられている。平城宮IIと考えられるが、この土器が完形品であることは、井戸構築時の祭祀に関わる可能性があり、井戸構築年代を示すこととあわせて重要な1点である。

5) 瓦 (国版70、写真国版122)

232~235の4点を図示した。いずれも埋土中から出土しているが、232は井戸枠内、233・235は第5層から出土している。

232・233は橋子タタキの布目平瓦である。232・233の凹面には模骨の痕跡が看取できるとともに、232には布をすらす際に生じた擦痕が認められる。また、233の凹面には削りも認められる。以上のことからこれらの半瓦は桶巻作りであることを示している。

一方、234・235の2点には桶巻作りの痕跡を看取することができない。織目タタキの平瓦であり、235のように側端部が厚みを増していることは、1枚作りである可能性を示唆しているものと思われる。

S E O 2

①A区で検出した井戸SE02は、「土居桁隅柱切欠き横板組」とでも呼称できる井戸組方法で、部材の種類としては、土居桁・隅柱・横板に分割できる。また、井戸底からは土師器・須恵器が一括して検出され、完形品が多い。また、櫛などの木製品も底から出土している。一方、井戸埋土の上層からも須恵器・土師器といった上器が出土しているが、埋土の中層からは遺物は出土していない。なお、出土層位は不明となっているが、麻布が出土している。ただし、出土状況が不明である点に加えて、布の遺存状況があまりに良好であるため、後世の搅乱によるものである可能性も捨てきれない。

1. 木製品

1) 井戸枠(横板)(国版71、カラー国版11、写真国版123・124)

横板は東西南北の各2段分計8枚と上部から落ち込んだ西側の1枚の合計8枚分が遺存していたが、図示できたのはW36~W43の8枚である。W36・W37は北側上下段、W38・W39は西側上下段、W40・W41は南側上下段、W42・W43は東側上下段に使用されていたものである。いずれも台形に近い長方形の正目・板目の材で、幅広側が下方になるように組んでいた。最下段のW37・W39・W41・W43は、下端長約70cm、上端長65~66cm、幅38cm前後を測る。厚さは約3~4cmであるが、上部は厚みを減じている。

第2段目の板は長さは65~66cmとほぼ均一であるが、幅には20~32cmとばらつきがある。これは、上部が腐朽により消失していることによるとも思われるが、W40・W42のように本来の上端を比較的とどめていると判断されるものの幅が25~20cmであることから、2段目以上に使用された板材は高さにばらつきがあったものと推定される。厚さは2~3cmである。

なお、数点を抽出して樹種同定を行ったが、筆者のもとに結果報告が届かなかつたため、記述できない。

2) 井戸枠(隅木)(国版72、カラー国版11、写真国版123・125)

隅木は基本的には丸太材を使用しているが、W47・W48のように芯持ち材である場合と、W49・W50のように芯が端に偏っているものとがある。したがって、段役の切り欠き加工を行う前の材の形状としては、丸太状とは限らず、断面扇形のものもあったことが推察される。いずれにしても、側面に「L」字形の切り欠き加工を上端から下端まで施し、そこに横板がはめ込まれる構造である。なお、加工された側面を横断面で見ると、均整ではないが、蝶々のようである。組み合わされる

下端には一辺約4cm、長さ6~7cmの直方体の枘を割り出し、土居桁の枘穴に差し込んで組み合わされる。

隅木の上部は腐朽のため欠失しているが、残存している最長のW47では約1mを測る。

なお、樹種同定を行っているが、前記の理由により、ここでは記述できない。

3) 土居桁 (図版72、写真図版123・125)

隅木を立てるための枘穴を穿った土居桁は直方体に近い角材を4本組み合わせたものである。図版72のW51～W54はそれぞれ順に北・東・南・西側に使用されていたものである。

部材の長さは94～95cmを測るが、その切断には鋸を用いているようであるが、W51の片側木口に限って、鑿などの工具による削り痕が認められる。部材の幅は10～12cm、厚さ6～7.4cmを測り、直角に組み合わされる部分は深さ3.2cmの切り欠きを施し、一方の部材を天地逆にした状態ではめ込んで組み合わされる。組み合わされた部分には一辺4.4cm程度の方形枘穴を穿ち、隅木の枘を差し込むようになっている。

土居桁についても樹種同定を行ったが、同様の理由により、ここでは記述できない。

4) 樅ほか (図版71、写真図版129)

W44は井戸底から土器とともに出土した横樋である。折損し、齒が斜め方向にねじれている部分もあるが、木質の遺存状況は良好である。折損のため長さは約4cm遺存しているに過ぎない。幅は扁柄により5.7cmであるが、本来の幅と大きさは変わらないと思われる。背にあたる部分の厚さは1.1cmで、歯先にゆくにつれ厚みを減じており、側面形は楔形を呈する。表面は平滑となっているが、漆等の痕跡は看取できなかった。櫻歯は1～1.5mmの幅で、最長3.7cm遺存している。

W45も井戸底から出土したものである。棒状を呈する円柱形に近い形状を呈するが、機能等は不明である。直径2.8cm、長さ3.8cmを測るが、図で上とした面は丸みをもたせるとともに、上方の直径がやや大きい。芯持ち材ではない。

横樋と桿状木製品の樹種同定を行ったが、残念ながらここでは記述できない。

W46は井戸底よりやや浮いた部分から出土した不明木製品である。何かの柄のようにもみえる。直径2.7cm、残存長32.4cmの棒状製品である。芯持ち材ではない。

2. 土器類

1) 井戸底出土土器 (図版73、カラー図版11、写真図版126～128)

井戸底から一括して出土した土器を図版73に掲げた。

236・237は土師器杯である。236はほぼ完形で、口径13.8cm、器高2.5cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸めて、内面に沈線状の蘆みをつくり出している。口縁部内面には放射状の暗文を1段、底部内面には螺旋文を2重に施しているが、内側はかなり乱れている。底部外面およびその周囲はヘラ削りを行っている。底部外面に墨書きが認められる。墨書きは一見すると文字とは言いがたいが、井戸出土土器に時々みられるものに類似していることから、井戸を示す、「井」や「ヰ」といった文字のくずし字のようなものと思われる。237は約1/2の破片で、口径14.3cm、器高2.5cmを測る。236と同様の形態である。暗文も同様に施しているが、不明瞭である。236は平城宮II頃、237は平城宮II～III頃と思われる。

238は須恵器杯Bであるが転用鏡でもある。口径14.0cm、器高5.1cmを測り、径高指数は36である。平城宮II頃と思われる。

239は須恵器壺であるが、口縁部を欠失している。体部最大径は16.3cm、高台部から体肩部までの高さは8.2cmである。口縁部は小さく細かい単位で割れているが、祭祀用として意識的に割ったものか、頭部を繩などで巻いて釣瓶として使用していたものが、井戸枠などに当たって割れていたものか判断できない。ちなみに、現状から12回の加熱の結果であったことが看取できる。平城宮II頃と思われる。

240は平瓶の1/4から1/3の破片である。外面には5GY7/1明オリーブ灰色の自然釉が付着して美しい色

を呈している。体部には丸みがあり、口縁部は大きい。平城宮Ⅰ頃と考えられる。体部最大径は18.6cm、器高14.6cm、口径11.6cmを測る。

241も平瓶である。体部は完形品であるが、口縁部と把手を欠損する。口縁部は意識的に打ち欠いている可能性がある。240に比べて扁平で直線的である。体部最大径19.9cm、底径15.2cm、残存高9.0cmを測る。平城宮Ⅱと思われる。また、本例は、転用鏡でもあると考えられる。すなわち、底面が極めて平滑であることと、中央部がやや窪んでおり海として使用できること、天地逆に置いた際に、丁度すわりが良い状態に落ち着くような把手および口縁部の欠損度合いであることから、底面の平滑さが単に使用によるものではないと判断されたためである。墨痕は残存していない。なお、口縁部の欠損は7回の加撃によるものと看取できた。

242は横瓶であるが、これも口縁部を欠損している。体部はほぼ完形である。体部の長径は31.6cm、短径20.3cm、残存高22cmを測る。体部外面は平行タタキにカキ目を加えている。

243・244は土師器壺である。243は口径18.2cm、器高18.4cm、体部最大径18.4cmを測る。口縁部は外反氣味に上外方にのび、端部は内側に丸くおさめる。頸部は「く」の字状を呈するのみで、口縁部からすぐに体部に移行する。体部は少し丸みを帯びながら下外方にひらがり、そのまま丸い底部へと移行する。体部はタタキ成形であるが、外面には縦ハケを加えている。内面には青海波文が残存する。体上部内面のみ板ナデを加えている。外面は全面に煤が付着している。

244は口径14.1cm、器高13.4cm、体部最大径14.4cmと小型の壺である。口縁部および体部の形態は243と非常によく似ているが、口縁端部のみ異なる。体部外面はハケ、内面上半は板ナデ、下半はユビ押さえ後ヨコナデを施している。口縁部内面は横ハケである。243・244ともに平城宮Ⅰ～Ⅱと思われる。

245は須恵器壺類の底部である。高台は外に跳ね張るかたちで、直径は13.8cmを測る。

以上、SE02底出土土器は平城宮Ⅱに相当するものを中心として、一部平城宮Ⅰから、平城宮Ⅲに降るものも認められる。

2) 井戸埋土出土土器 (図版74、写真図版127・128)

図版74の246～254は井戸SE02埋土上層から出土した土師器・須恵器である。

土師器杯または皿246は、口径14.2cm、器高2.3cmを測る。口縁部は少し外反するが、端部は丸くおさめる。内面の口縁部には放射状、底部には螺旋文状の暗文を施す。底部外面にはヘラミガキを加えている。平城宮Ⅲ～Ⅳと思われる。

247は土師器皿で、口径23.6cm、器高2.2cmである。口縁部は外反し、端部は内側に丸くおさめ、沈線状の凹面を呈するが、あまり。内面の口縁部には放射状の暗文を疎らに施している。平城宮Ⅲ～Ⅳと思われる。

248は土師器杯で、器高3.4cmとやや深い。口径は19.2cmを測る。口縁部は端部付近で外反し、端部は内側に折り込むようにして丸くおさめる。内面は凹面を呈する。内面の口縁部には放射状暗文を疎らに施し、底部には螺旋文状に施しているが、螺旋状に疎らになっている。平城宮Ⅲ頃と考えられる。

249の土師器杯は、剥離のため表面を観察できない。口縁部は端部付近で外反し、端部は上方につまみあげて内面に凹面をつくり出している。口径13.8cm、器高2.6cmを測る。平城宮Vの可能性が考えられる。

250の土師器杯の口縁部は直立に近く、端部は丸くおさめるが、内面に凹面をつくりだしている。口径14.4cm、器高3.3cmで、内面に暗文は看取できない。平城宮IV～V頃と思われる。

251は土師器高杯の中空脚柱部で、外面が10角形になるように面取りをしている。

252は内面にかえりをもつ須恵器杯蓋である。口径10.4cmで、つまみ部分を欠失する。飛鳥に属する。

253は須恵器杯と思われる破片である。口径13.0cmを測る。

254は土師器の瓶または甕と思われる。把手の方向と煤が多く付着していることから、甕と判断しているが、図の下部の成形・調整が、上部のつくりよりも丁寧であることから、天地逆にして甕とする可能性も残している。図下端の口径24.7cm、上端の口径は15.7cm、器高25.0cmを測る。上端は器壁を厚く作り、ヘラ削り調整を行っている。外面には指彫り痕が多く残る。体部外面は縱方向のハケ調整である。

以上、井戸SE02埋土上層出土土器は飛鳥時代の土器から平城宮IV～Vあたりの土器までを含んでいる。

さて、この項の冒頭に既述した、SE02出土の麻布であるが、現在でも折り曲げても反発するほどの弾力があり、あまりに頑丈であることが、後世のものが混入したと判断している根拠である。

すなわち、出土時の状況写真や記録が、遺物添付のラベル以外に認められないことは、出土時に重要と判断していない証拠である。したがって、少なくとも中世以前である可能性もかすかに残しながら、現段階では後世の混入と判断しておきたい。

SE03

①C区南西端で検出した井戸SE03は、東半分のみの調査しかできなかったが、井戸底から土居柄と思われる木製品をはじめ、曲物・斎串が出土し、同時に井戸底から少量の土師器・須恵器が出土した。また、埋土中からも須恵器が出土している。

1. 木製品

1) 土居柄 (図版75、写真図版130)

調査区西壁直下で井戸の半分のみ検出したため、正確な出土状況図は作成できなかつたが、井桁状に組まれた4点が出土した。図版75のW61～W64に図示した4点は、上から順に東・西・南・北側にあったものである。いずれも丸太の半截材を使用し、遺存状況が比較的良好なものでは、枘穴が残存している。

W61・W62は腐朽により残存状況が極めて不良である。W61は残存長68.5cm、幅8.4cm、厚さ4.4cmの丸太半截材である。W62は残存長68.6cm、最大幅6.8cm、厚さは3.0cm程度しか残存していない。図の両端が尖ったようになっているが、腐朽によるものである。

W63は残存長84cm、最大幅8.0cm、厚さ3.6cm残存している。図の左端には枘穴が残存しているが、「コ」の字状になっている。枘穴の幅は6.0cm、長さ9.0cmである。図の右端でも枘穴の痕跡が認められる。枘穴間の長さは66.8cmである。

W64は両端に枘穴が残存している。ここでもW63同様、「コ」字形を呈するが、もともと長方形であったものが腐朽により現在のかたちになったものか、直交方向のものと組み合わせることにより方形を呈することで良かったのかの判断はできない。右端での枘穴の幅は4.6cm、長さは現状で10cmを測る。枘穴の間隔は64cmであることから、W63とあわせて判断できる井戸枠の一辺は約64・67cmであったことが復元できる。W64の残存長は84.8cm、幅8.4cm、高さ4.0cmで、丸太の半截材である。なお、材の丸い側が上になるように置かれていた。



第2図 SE02出土麻布写真

樹種同定を行ったが、結果報告が筆者にまで届かなかったため、ここでは報告できない。

2) 曲物 (図版74、写真図版128・129)

W55は曲物底板である。直径約20cm、厚さ1.0cmの円盤形を呈する。内側にあたる面には黒漆が一面に薄く残存しており、外側になる面には切傷が多く認められる。側面には木釘および木釘穴が残存している。W56は曲物側板であるが、長さ25.5cm、幅1.1cmしか遺存していない。厚さは4mmである。内面には継および斜め方向のケガキ線が認められる。図の上端部に黒漆が帯状に残存（図のスクリーントン部分）し、木釘の穴も認められることから、W55と組み合わされるものである。事実、W56の木釘穴の間隔は、W55の位置と合致することが確認できた。底板の図（W55）は側板（W56）と合う位置に配置している。

樹種同定を行ったが、前記の理由から、ここでは記述できなかった。

3) 豪串 (図版74、写真図版129)

すべて破片であるが、3点ないし4点認められた。W57～W60に図示した。W57は上端のみ残存している。上端側面は切込み部分で欠損しているようである。残存長9.8cm、残存幅1.8cm、厚さ1.5mmを測る。W58も同様の破片である。残存長7.9cm、残存幅1.1cm、厚さ2mmである。W59は先端部分の破片である。残存長4.6cm、残存幅1.1cm、厚さ2mmである。W60は先端部分よりも木釘の可能性が高いものである。残存長2.5cm、残存幅3mm、厚さ2mmである。

樹種同定を行ったが、前記の理由から、ここでは記述できなかった。

2. 土器

1) 井戸底出土土器 (図版74、写真図版127)

井戸SE03の底から出土した土器には土師器杯・皿各1点と須恵器杯1点がある。

255は口径16.3cm、器高2.8cmを測る。内外面は横ナデ調整、底部外面はユビ押さえ痕が残る。口縁部は外反気味で、端部内面は凹面をなす。1/2弱の破片である。平城宮Ⅲ頃と思われる。

256は小型の土師器皿で、口径10.1cm、器高2.6cmである。内外面とも横ナデ調整である。平城宮Ⅲ頃であろうか。1/2弱の破片である。

須恵器杯Aの257は、口径13.8cm、器高3.8cmで、径高指数は27.5である。平城宮Ⅲ頃と思われる。

2) 井戸埋土出土土器 (図版74、写真図版114)

SE03埋土から出土した土器のうち図示できたのは258の須恵器杯B蓋1点のみである。1/6弱の破片で、口径15.0cm、上端のつまみは欠損している。内面のかえりは痕跡程度の小さなものである。飛鳥IVから飛鳥V・平城宮Iに位置づけられる。

S E O 4

②D区で検出された素割りと思われる方形の井戸である。図示した出土土器には、壠下層である4層出土のものと最下層である5層出土のものなどがある。最下層出土土器には270・271・274・276・278があり、下層出土土器には272・275・277がある。273の出土層位は不明である。

また、丸のうち、279・280は最下層、281は出土層位不明である。

1. 土器 (図版76、カラー図版12、写真図版131・132)

270は土師器杯Aで、口径18.3cm、器高5.3cmを測る、やや深い器形である。底部から口縁部への移行は丸みをもち、口縁は端部直下で外反する。端部は内側に折り返し、内面に凹縫状の窪みをつくり出している。内面口縁部には放射状の暗文を密に施し、底部には螺旋文を施す。外表面口縁部には横方向の

ヘラ磨き、底部およびその周辺はヘラ削り調整である。平城宮Ⅰ～Ⅱと思われる。271・272は土師器杯Bで、271は口径19.8cm、器高5.4cmを測る。内面口縁部には放射状暗文を上下2段に密に施し、底部には螺旋文を施している。口縁部外面には横方向のヘラ磨きを施している。272は小型の杯Bで、口径15.6cm、器高4.3cmである。内面口縁部には放射状暗文、内面底部には螺旋文を施している。外面は横方向のヘラ磨き調整である。高台はやや内側に貼り付けている。両者とも平城宮Ⅱ頃と思われる。270・271は井戸最下層の5層、272は4層から出土している。273は井戸埋土出土土師器で、口縁部内外面にはヘラ磨き・暗文が認められるが、ほとんど摩滅している。口径17.8cm、器高4.5cmを測り、口縁部のたちあがりは垂直に近い。274は5層出土の小型土師器杯で、口径12.1cm、器高2.7cmを測る。小さいながらも口縁部内面には放射状、底部内面には螺旋文状の暗文を施している。螺旋文はやや乱れている。口縁部は外反気味で、端部内面は細くゆるい沈線状になっている。275は上師器鍋または甕であるが、破片を図上復元したものである。口径28.0cm、復元器高21.1cmとなる。4層出土である。

276は須恵器杯Bで、口径14.7cm、器高4.1cmを測り、径高指数は27.5である。踏ん張った形の高台は、内側に寄った部分に貼り付けられている。底部外面には爪形の圧痕が付着している。平城宮Ⅰ～Ⅱと思われ、5層出土である。277・278は須恵器甕口縁部で、口径は277が20.0cm、278は21.3cmを測る。口縁端部の形態が277と278で異なる。277は4層出土、278は5層出土である。

井戸出土土器のうち、5層出土土器は井戸使用時を示すと思われるが、4層出土土器は廃絶後に堆積したものとのようである。

2. 瓦 (図版77、カラー図版12、写真図版133)

平瓦を3点図示した。3点とも凸面はナデ、凹面は布目である。279・281の布目には縫じ目が压痕として残り、279では2条認められ、布の縫合せ部であることがわかる。桶巻作りの平瓦である。布は引き抜いた時の擦痕も認められ、桶枠板の模骨痕跡も観察できる。279や280の凹面に残る凹線状の窪みは、布の端である。無面にはヘラで切り落とした痕跡が縦方向に少なくとも2回認められる。すべて破片のため、全容をうかがい得ない。

S E 0 5 (図版75、写真図版130)

北部にある④4区で検出した井戸から出土した土器である。259・260は須恵器杯Bである。259は口径16.7cm、器高5.5cmを測り、径高指数は33である。平城宮Ⅱ頃と思われる。260は口径17.8cm、現状の高さは5.4cmである。261は須恵器皿で、口径16.9cm、器高2.9cmを測る。262は土師器椀または杯である。平らな底部から渦曲して口縁部にいたる。端部はよく内側に折り返している。調整はナデのようである。平城宮Ⅱ頃と思われる。263も262と似た口縁部の傾きである。263は浅く、器高3.1cm、口径12.6cmである。調整はナデ。264は口径12.4cm、器高2.9cmを測る小型の上師器杯である。内外面はナデ調整のようである。口縁端部は外反している。

265は土師器甕で、口径22.4cmを測る。266・267は砲弾形の製塩土器であるが、小片のためか、両者の形態はかなり違ったものとなっている。266の口径は10.3cm、267では10.1cmを測る。

268は須恵器甕口縁部で、口縁端部を内側に折り返したようになっている。口径20cmを測る。

SE05出土土器には平城宮Ⅱ頃のものが認められるが、出土層位が不明となっている。

S E 0 7 (図版75)

②C区北端で検出した近世と思われる井戸である。269に示した陶器椀の底部が出土している。高台径6.0cmを測り、内面のみ暗緑色の釉が施されている。外面は茶灰色を呈する。

c. 土壙等

数多く検出した土壙のうち、図化可能な遺物が出土したものは多くはない。また、各土壙で図化できた遺物の量も少ないものが多い。ただし、遺物が一括して出土した③A区のSK③A01や、井戸関連の可能性があるSX②D01では多量の遺物が出土している。以下、遺構ごとに出土遺物を述べる。

S X②B 0 1 (図版78、写真図版132)

②B区SB03の内部で検出した土器集積遺構から出土した土器のうち、図示したのは2点である。282は須恵器杯で口径11.3cm、器高2.8cmである。底部外面はヘラ切り後ナデを施している。飛鳥時代の可能性がある。283の土師器壺の口径は23.0cmを測る。

S K①B 0 5 (図版78、写真図版114)

①B区西端で検出した土壙から出土した土器は2点図示した。284は須恵器杯Bで、口径14.1cm、器高3.2cmを測る。径高指数は22であり、平城宮Ⅲ頃であろうか。285も須恵器であるが、亞んだ皿もしくは耳皿の可能性がある。口径は12.6cm、底部は不明である。

S K④Ⅲ 0 1 (図版78、写真図版114)

⑥Ⅲ区のSB06内に存在する大規模な土壙で、SB06関連の可能性もある。丸瓦(286)と半瓦(287)が出土しており、各1点を図示した。どちらも凸面はナデ、凹面は布目が残る。287はかど部分である。桶巻作りの可能性がある。

S K④Ⅲ 0 3 (図版78、写真図版134)

⑥Ⅲ区内に存在する遺構であるが、位置不明である。出土土器には288の須恵器杯Gがある。口径10.1cm、器高3.7cmを測り、径高指数は36である。底部外面はヘラ割りを施しており、飛鳥IIに比定できよう。

S X⑤B 0 2 (図版78、写真図版134)

⑤区北端の溝状かつ溜まり状の遺構から出土した須恵器は2点図示した。289は杯蓋で、口径15.5cm。290は杯Bで高台径10.8cm、高台の状態から、平城宮Ⅱ頃かと思われる。

S K②B 0 2 (図版78、写真図版132)

②B区北部の柱穴の可能性もある小規模な土壙から出土した土器は、土師器杯B(291)と須恵器杯B(292)を各1点図示した。291の口径は19.8cm、器高4.1cmで、内面に暗文が観察できる。292は口径14.9cm、器高3.9cmを測り、径高指数は26である。平城宮Ⅱ・Ⅲに比定できる。

S K③A 0 1 (図版78、写真図版134・135)

③A区の北部中央で検出した梢円形の土壙で、土器が一括して出土した。293~298に図示した。土師器皿または杯293は、口径21.5cm、器高2.3cmを測る。口縁部上半は若干外反し、端部を内側に丸くおさめる。内面には放射状および螺旋状の暗文を施すが、螺旋文は乱れている。平城宮Ⅱ頃と思われる。

土師器壺2点のうち、294は口径15.2cm、295は16.2cmである。外面はともにハケ調整。296の土師器杯または皿の内面には放射状暗文を施している。口径12.2cm、器高2.4cmを測る。口縁端部付近は外反し、若干内湾する。平城宮Ⅱ頃と考えられる。

須恵器杯A(297)は口径13.8cm、器高は4.0cmを測るが、やや歪んでいる。298は杯Bで、口径14.3cm、器高3.9cm、高台はやや内側に貼り付けられている。径高指数は27。平城宮Ⅱ頃であろう。

S K③A 0 2 (図版78、写真図版134)

③A区のSX③A01の南端に位置する小規模な土壙で、須恵器杯A(299)が1点出土している。口径14.2cm、器高3.4cm、径高指数24で、平城宮Ⅲ頃と思われる。

S X③A 0 1 (図版78、写真図版135)

③A区北部中央の溜まり状遺構から出土したのは、土師器高杯の杯部片である。口径26.8cmを測り、外面はヘラ削り後ヘラ磨きを行っている。口縁端部は内側に折り返したようになっている。

S K②C 0 1 (図版78、写真図版134)

②C区のSB05内に位置する楕円形土壙で、301の須恵器杯Aが出土している。口径11.1cm、器高3.5cm、径高指数31で、形状等から飛鳥V・平城宮Iと考えられる。

S X⑤C 0 1 (図版78、写真図版134)

⑤区の中世土取り穴と考えられる土壙から出土し、図示した遺物は、瓦器輪（302）と平瓦（303）および須恵器杯蓋（304）の3点である。瓦器輪は口径16.0cm、器高4.6cmを測り、内面に暗文を施し、見込み部分にも平行線の暗文を施しているが、外面には認められない。高台は断面三角形である。器高が低く口縁部が聞く器形であることから、13世紀後半以降14世紀前半あたりまで降るものであろう。瓦の表面は磨滅しているため不明であるが、桶模骨の痕跡が認められる。桶巻作りと思われる。蓋は口径10.6cm、かえりはわずかに突出する。飛鳥時代であろう。

S K③C 0 1 (図版78、写真図版135)

③C区南東で検出された不定形土壙からは、土師器杯（305）が出土している。口径21.8cm、端部は外反する。飛鳥V・平城宮Iの可能性がある。

S X②D 0 1 (図版79・80、写真図版135～137)

②D区中央部でSE04と重複して検出された溜まり状の遺構である。遺物はSE04埋土上層のものと交錯している可能性がある。土器10点、平瓦3点を図示した。

306は須恵器底の口縁部である。口径14.2cm。外面には縱方向に3条単位の櫛目を入れている。307は須恵器壺類の口縁部。口径9.8cmで、外面に3条の細い凹線を施す。308～310は須恵器壺である。308は口径14.1cm、残存高17.4cm、最大径17.4cmを測る。口縁端部はほとんど肥厚しない。309の短頸壺は、口径11.9cm、器高18.0cm、最大径21.0cmを測る。体部に1条の凹線を施している。310の須恵器壺にも2条の沈線を施している。肩部最大径は21.0cm。外面には自然釉がかかる。314・315は須恵器壺である。314の口径は24.4cm、口縁端部は下方に若干肥厚させている。314は図上復元であるが、器高は36cm程度であろう。口径20.5cm、最大径36.2cmを測る。口縁端部は丸くおさめている。なお、図示していないが、須恵器壺体部の大きな破片も出土している。

311は器種不明品である。底の口縁部かとも思われるが、砂粒は多く含まない。内面は被熱のためか灰褐色に変色している。突帯状のものを1条貼り付けている。口縁部は内傾し、口径22.0cmを測る。312は大きく外反する壺口縁部である。口径24.4cmを測り、器表はかなり磨滅している。313は羽釜の類と思われる。口径20.2cmで、短めの鋸が付く。口縁部は内傾する。

平瓦は3点とも凹面布目、凸面ナデで、桶巻作りである。凹面には模骨・布ナデの痕跡があり、側面には切断痕が縱方向に2回以上認められる。形態規模の全容をうかがえるものはないが、下端の幅が狭く上端が広い台形を呈する。316の凸面のナデは削り状に横方向に施している。

d. 溝

各調査区の溝からは多くの土器類が出土している。奈良時代を主としたものであるが、溝の時期により、近世の遺物を含むものもある。

S D ① C 0 1 (図版81、写真図版114・138・140・142・143・147)

①C区西端の南北溝SD①C01からは多くの土器類が出土している。319～328は溝北半部出土である。須恵器杯は4点図示した。319は歪んでおり、口径9.9～12.4cm、器高2.9～4.1cmを測る。底部外面はヘラ切り。320は口径12.3cm、器高3.9cm、径高指数32である。321も杯Bで、口径14.5cm、器高3.7cm、径高指数26である。322の杯Bは口径17.7cmとやや大きく、器高5.5cm、径高指数31である。323は口径15.3cmの蓋である。324は脚部の可能性があるものの、接合面が認められないため、壺類の口縁部とした。口径10.2cmを測る。325は中空の土師器高杯脚柱部で、外面は削て面取りをしている。326は岡上では完形品となった短頸壺である。口径10.7cm、器高13.7cm、胴部最大径20.6cmを測る。外面肩部には自然の緑色灰釉を被る。蓋を被せて焼成した痕跡が認められる。327は須恵器壺の口縁部片で、口径21.7cmを測る。外面は平行タキが格子状に見える。328も壺口縁部であるが、時期が遅るようである。口径は29.3cm、口縁端部外面直下は突帯状に見える。その下に波状文をめぐらせる。頭部外面には指頭圧痕が多く残る。329は飛鳥に遡ると考えられる須恵器杯蓋である。口径16.5cm、器高3.2cmを測る。つまみは扁平であるが中央部が尖る。330の須恵器杯Aは口径11.8cm、器高3.8cm、径高指数32である。331は土師器杯Aで、口径13.9cm、器高3.1cmを測る。口縁端部はやや尖り、少し外反する。暗文は認められない。332の須恵器壺口縁部は、口径19.3cmで、口縁端部は下方に若干擴張している。333の壺底部は高台径11.0cm、残存高9.6cmを測る。底部から体部への移行はやや角張る。334は軒丸瓦の瓦当面の破片である。複弁八葉の蓮華文瓦で、本遺跡の東500mに所在する猪名寺廃寺で出土している瓦と同範である。それによれば、連子は1+6+12粒で、創建時からの主要な軒瓦であり、主に講堂に用いられているが、やや時期が降るとされている。335は平瓦片で、凹面は布目、凸面は網目タキである。

本溝から出土した遺物は、一部飛鳥IVあたりの土器を含むが、大半が平城宮I～IIで一部Vも含まれるようである。

S D ① C 0 2 (図版81、写真図版138～140・143)

①C区東端の本溝から出土した遺物には、須恵器・土師器等のほか、窓片、土管もしくは丸瓦がある。336は平瓶の口縁部で、口径9.5cmである。337・338は須恵器杯B片で、高台はやや内側に貼り付けられている。339は土師器高杯脚柱部である。九角形にぶく面取りされている。340は移動式窓の焚口左側部分の破片で、庇の下端部分である。341は土師器鉢の口縁部で、口径17.6cmである。342は口径9.9cmの土師器小皿で、中世のものであろう。343の瓦器焼口縁部は口径19.9cm、内面にのみや粗く暗文を施している。344・345は丸瓦もしくは土管と思われ、焼成が悪く、灰～黄灰～黒色を呈している。溝北端部の土壤状に深くなった部分から出土した。厚さ2～3cmで、玉縁をつくりだしている。凸面・凹面ともに細かい削りで仕上げており、345には刺突痕のように観察できる部分がある。344の残存長は24.6cm、残存幅19.8cmで、復元される外径は21cm程度である。用途不明で、時期的にも不明の遺物である。

本溝出土土器には平城宮II・III頃と中世のものがある。

S D ① C 0 3 (図版82、写真図版114・141)

①C区南の東西溝から出土した346は、軌貫須恵器の大型品で、鉢と思われる。把手が残存しているが、口径は不明である。347は土師器壺の口縁部細片である。

S D ① C 0 5 (図版82、写真図版114・141)

①C区東部の南北溝のうち、西側の溝から出土した須恵器3点を図示した。348は口径19.8cm、器高5.6cmで、径高指数は28である。高台は外端に貼り付けられている。平城宮V～VIあたりか。349は丸い

体部の壺で、口縁部を欠損する。体部最大径は16.8cm、残存高12.3cmを測る。350も壺下半であるが、直線的である。最大径16.2cm、残存高8.4cmを測る。

S D ① C 0 6 (図版82、カラー図版9、写真図版138・141)

①C区東部の南北溝のうち、東側の溝から出土した須恵器3点を図示した。

351は須恵器杯蓋であるが、天井部外間に「神家」の墨書がみられる。欠損のため、下に文字が続くかどうかは不明であるが、「みわのやけ」と読める³⁰ことから、この2文字のみである可能性が高い。後述するが、「みわのやけ」は「みやけ」に通じるものととらえることができよう。蓋の口径は15.8cm、器高3.2cmで、口縁端部やつまみの形態などから、飛鳥V・平城宮Iの時期と考えられる。

352はかえりのある須恵器杯蓋である。口径12.3cm、器高3.0cmで、飛鳥IV頃と考えられる。

353は須恵器短壺蓋で、口径7.1cm、器高6.4cm、最大径11.4cmである。形態的には飛鳥IV頃と思われる。

S D ① C 0 8 (図版82、写真図版114)

①C区中央部の細い南北溝から出土した須恵器小壺の脚部を354に図示した。高台径4.9cmである。

S D ① B 0 2 (図版82、写真図版141・142)

①B区西寄りの細い南北溝である。須恵器5点を図示した。

355はかえりをもつ蓋である。口径8.2cmである。356の杯Aは口径11.2cm、器高3.4cm、径高指数は30である。飛鳥IV～飛鳥V・平城Iと思われる。357は口径11.6cmである。358は高杯脚部で、円形透かしを3方向に穿つ。古墳時代に通るものであろう。359は壺で、口径27.5cmである。

S D ① A 0 1 (図版82、写真図版141～143・146)

①A区の西部で検出した南北溝で、多くの遺物が出土している。

須恵器蓋は4点図示した。360はかえりをも有し、口径11.1cmである。361は口径14.4cm、器高2.65cmで、つまみはやや扁平である。362も同様の形態であるが、口縁端部が異なっている。口径15.7cm、器高3.4cmである。ともに飛鳥V・平城宮Iを中心とした時期である。363は口径19.7cmと大きい。

杯は3点図示した。364の杯Bは口径15.8cm、器高4.0cm、径高指数25である。高台はやや内側に貼り付けられている。365は杯Aで、口径13.1cm、器高3.2cm、径高指数24である。366の杯Aは口径12.1cm、器高3.6cm、径高指数30である。須恵器蓋および杯では、飛鳥の末から平城宮IVあたりまで認められる。367は須恵器鉢で、古墳時代まで通るものであろう。368の壺は高台径9.2cm、底部から体部への移行はやや角張る。369は須恵器鉢の底部付近と思われる。外面はハラ削り後ナデ、内面は回転ナデである。

土師器は5点図示した。370の杯蓋は口径18.8cmを測る。371の杯の口縁端部は尖り気味に外傾させる。口径16.8cm、器高3.4cmである。略文は認められない。372は口径19.8cmで、内面に放射状の略文が残存する。口縁端部内面は比較的幅広い円面をなす。底部外面付近はハラ削り。373は大きく外反する口縁部で、口径は26.8cm。鉢または壺と思われる。374は中空の高杯脚柱部で、外面は多角形になるように面取りをしている。

S D ① A 0 2 (図版83、写真図版142・143)

①A区の南部中央に位置する細い南北溝である。2点図示した。375は内面にかえりをもつ須恵器杯蓋で、口径15.5cm、器高3.1cmを測る。飛鳥IV～飛鳥V・平城宮Iであろう。376は土師器鉢蓋で、河内生駒西麓産の胎土である。

S D ① A 0 3 (図版83、写真図版128)

①A区東端の近世以降の溝で、陶器のはかに図示した土器が出土している。377は口径12.8cm、器高

3.5cmの杯Bで、口縁部は大きく外傾する。高台はやや内側に貼り付けている。飛鳥V・平城宮I頃かと思われる。378は土師器壺の口縁部で、口径24.2cm、端部は斜めに切り落としたような外傾面をなす。飛鳥に通る可能性がある。

S D ② A 0 1 (図版83、写真図版143・144)

②A区南縁の溝で、⑤区北縁につながるものと思われる。

379は須恵器蓋で、口径20.7cm、器高2.0cmである。つまみは扁平。飛鳥V・平城宮I頃と思われる。380は土師器杯蓋で、口径18.7cmを測る。381は須恵器壺口縁部で、口径27.2cmである。口縁部内面にヘラで「+」の記号を記している。382は須恵器横瓶で、口径12.2cm、体部の短径は28.6cmを測る。

S D ② A 0 2 (図版83、写真図版144)

②A区西端の南北溝で、②B区のSD②B01と同一の溝である。SB02と重複し、本溝の方が新しいとされている。383は土師器皿で、口径23.1cm、器高2.3cmである。384は須恵器壺肩部の環状把手の破片である。

S D ② B 0 1 (S X ② S 0 1) (図版83、写真図版114・143・144)

先述のSD②A02と同一溝の北部で、SX②S01とも同じ溝である。比較的多くの土器が出土した。

須恵器蓋は3点図示した。385は口径12.7cm、器高1.9cmを測り、口縁端部付近は屈曲している。平城宮II頃であろう。386は口径13.3cmを測る。387はかえりの付いた蓋で、口径8.4cmである。つまみは欠損している。須恵器杯Bの388は、口径14.6cm、器高4.3cm、径高指数29である。高台はやや内側に貼り付けられている。平城宮II・IIIと思われる。389は須恵器鉢の底部で、高台径10.5cmを測る。内面は多方向のナデがみられる。

土師器杯は、SX②S01も含め6点図示した。395以外は、口縁部は端部付近で外反し、端部を内側に折り返して内面に凹面をつくりだしている。390は口径17.5cm、器高3.1cm、391は口径15.7cm、器高2.7cm、392は口径14.3cm、器高3.5cm、394は口径17.0cm、器高3.4cmで、390～392・394はいずれも器表磨滅により暗文等は不明である。395は口径15.5cm、器高3.4cmで、口縁端部内面は凹面を作り出すのみである。396は口径14.5cm、器高3.5cmを測る。395・396は内外面とも横ナデ調整である。平城宮III頃と思われる。393は製塙土器の細片で、碗彫形のものである。布目は認められない。

S D ② B 0 2 (図版83、写真図版144)

②B地区で、SE01と重複または関連する溝である。須恵器蓋1点(397)を図示した。口径16.8cmを測る。

S D ② B 0 3 (図版83、写真図版144)

SD②B02の南側で並行する東西溝である。2点を図示した。398は口径11.8cm、器高3.5cm、径高指数30の須恵器杯Aである。399は土師器杯Aで、口縁部は外反する。口径18.6cm、器高3.5cmを測る。

S D ② C 0 1 (図版83、写真図版120)

②C区北縁の溝のうち、「L」字形に曲がるものである。400の蓋は口径12.9cmの小片である。401のかえりを有する蓋は、口径9.7cmの小型である。約1/4の破片である。

S D ② C 0 2 (図版83、写真図版120)

②C区北縁の溝のうち、東西方向のものである。平瓦の破片で、凹面布目、凸面は縦目タタキである。

S D ③ B 0 4 (図版83、写真図版143)

③B区南東隅の溝である。須恵器高杯(403)が出土している。杯部の約1/2の破片で、口径15.5cmで、杯部は回転ナデで仕上げている。

e. 包含層 (図版84～86、写真図版128・135・137・140・141・145～148)

包含層から出土した遺物を図版84～86に掲げた。

須恵器

図示した蓋4点のうち、404の杯蓋は口径15.4cm、器高3.2cmを測る。つまみは扁平で、飛鳥V・平城宮I頃と思われる。405は口径16.8cm。404・405は①B区の包含層から出土した。406の杯蓋はかえりを有し、口径11.6cmを測る。飛鳥IV～飛鳥V・平城宮Iであろう。⑥Ⅲ区出土。407は蓋蓋で、口径8.2cm、器高1.7cm、⑥Ⅱ区出土である。

杯は408～413の6点を図示した。408～411・413は杯Bである。③A区出土の408は口径14.2cm、器高4.1cm、径高指数29である。口縁部はやや外反し、高台はやや内側に貼り付けられる。409の高台も内側に貼り付けられるが、口縁部は直線的に外方に開く。口径14.2cm、器高4.1cm、径高指数29、①B区出土である。408・409ともに平城宮II頃と思われる。⑥Ⅱ区出土の410は口径16.5cm、器高5.5cmで、径高指数は33、同地区的確認調査(G5)出土の411は口径16.4cm、器高4.3cm、径高指数26である。ともに底面外周またはその付近に高台が貼り付けられており、平城宮V前後と思われる。413は高台部分の破片で、高台径2.6cmである。②B区出土である。412は②A区出土で、高台径2.6cmを測る。414は杯または碗で、口縁部は少し外反する。口径13.3cm、器高7.5cmを測る。平城宮IV～Vと思われる。412は底部を欠失する。口径13.3cm、②A区から出土した。

415は無蓋高杯と思われ、②D区から出土した。古墳時代に遡るものと思われる。

416～418は壺であるが、⑥Ⅱ区から出土した416は高台径7.0cm、肩部径10.4cmの小形のものである。肩部の稜は丸く、1条の凹線を施す。417は長頸壺であるが、口縁部を欠失する。肩部は稜をもち、凹線が認められる。高台径8.8cm、肩部径16.9cmを測る。①C区から出土した。418は②A区から出土し、高台径9.3cmである。

⑥Ⅱ区から出土した419は細部であるが、沈線間に櫛刺突による斜行列点文を施している。初期須恵器杯蓋あるいは特殊扁壺の可能性もある。胎土・焼成とも良好で、N6灰色を呈する。

甕2点のうち、⑥Ⅱ区で出土した420は口径21.8cmを測り、口縁部の形態から、MT-15型式期と思われる。421は口縁端部を玉縁状に折り返している。口径23.4cmで、①B区出土である。

土師器

土師器杯と思われるものは、422～430に図示した。いずれも奈良時代のものである。422は口径11.4cm、器高2.1cmの小型で、①A区から出土した。423・424の口径・器高はそれぞれ、17.9cm・2.4cm、20.6cm・2.8cmで、423は①B区、424は⑥Ⅱ区から出土した。425・426は⑥Ⅲ区・⑥Ⅱ区から出土しており、口径は17.9cm・18.4cmを測る。⑥Ⅱ区部分の確認調査G5から出土した427は、口径16.1cm、器高2.6cmで、底部外面およびその周辺をヘラ削りしている。428は口徑15.1cm、器高3.0cmで、⑥Ⅱ区から出土した。内外面とも横ナデ調整である。429・430は碗に近い器形で、それぞれ口径20.2cm、14.8cmを測る。429は⑥Ⅲ区、430は⑥Ⅱ区出土である。

431に示した蓋は、口径23.9cm、残存高1.0cmを測る。①B区から出土している。

432は高杯または皿、あるいは蓋と思われ、口縁端部を外下方に折り曲げているのが特徴であるが、詳細な時期は不明である。口径24.6cmを測り、⑥Ⅱ区出土である。

433は断面三角形の高台が付く碗または鉢で、口径16.7cm、器高5.0cmを測る。内面には暗文が認められる。平安時代以降に降る可能性がある。⑥Ⅱ区出土。434は碗または鉢で、口縁部に注ぎ口を造出し

ている。口径15.7cm、器高5.0cmを測る。③B区出土で、奈良時代のものであろう。

435~437の高杯脚柱部はいずれも外面を面取りし、横断面が多角形を呈する。435は9角形、436は12角形、437は10角形で、それぞれ②B区、⑥Ⅲ区、⑥Ⅱ区から出土している。

壺は438~442に図示した。⑥Ⅱ区出土の438は口径27.6cm、439は①A区出土で口径26.1cm、口径23.3cmの440は⑥Ⅱ区出土である。438~440の口縁端部の形態はほぼ同じで、平城宮Ⅱを中心とした時期と思われる。441の口縁端部は丸くなっているが、磨滅によるものである。⑥Ⅱ区出土で、口径は26.6cmを測る。442も口縁端部は削離している。口径22.1cmを測り、⑥Ⅱ区出土である。

443は鍋と思われ、口径32.4cmの大型品である。⑥Ⅱ区から出土している。

444~446の把手のうち、444・445の牛角状のものは②D区、446の扁平なものは⑥区から出土している。

447は壺の焚き口部分の破片である。底は短い。②D区から出土している。

陶磁器

448は森田・横田分類Ⅱ~Ⅲ類の白磁碗片で、①C区出土である。細片のため口径は不正確である。

449は白磁皿底部で、内外面全面に施釉されている。高台径3.6cm、①A区出土。Ⅱ~Ⅲ類の可能性がある。450は鍋邊弁文の青磁碗細片で、①C区出土。451は押印文のある常滑窯体部片である。

瓦

包含層から出土した瓦は452~462に示した。すべて布目瓦である。452・453の布目には布を引き抜いた際に生じる擦痕が認められ、側面の切断痕跡が縱方向に少なくとも2回認められる。また、452には桶枠板の痕跡や作成時下端の布だまりも認められることから、桶巻作り平瓦であることがうかがえる。凸面はナデ仕上げである。どちらも②D区から出土した。

454~458は繩目タキの平瓦で、454・458の凹面には桶枠板状の痕跡が残るが、桶巻作りとは断定できない。454は①B区、456・458は①C区、455は⑥I区、457は⑥Ⅱ区からそれぞれ出土したものである。

459~461は格子タキの平瓦で、459は桶巻作りの可能性もある。460凹面の側面ぎわには、四線状の界線のようなものが認められることから、桶巻作りかもしれない。459・461は①C区、460は⑥Ⅱ区から出土したものである。

本遺跡から出土した瓦については、遺構出土も含め、平瓦がほとんどを占めると同時に、桶巻作り平瓦と確認できたものはすべて②D区に限って出土していることが特徴としてあげられる。

462は丸瓦の玉縁の可能性がある。①C区から出土している。

石製品

S11は③B区南側出土の砥石である。図の上下端は欠損しているが、側面は全面砥面に使用している。直方体に近く、砥面のカーブは弱い。砂岩製で、残存重量は87.0g。幅約4.5cm、厚さ約2.4cmを測る。

(岸本)

チャート製削器(S12)は①C区から1点出土している。長さ26.0mm、幅27.7mm、厚さ4.8mm、重量4.2g。背面に直線的な連続した剥離調整が認められるが、使用痕の有無が判別できないため、ただの剥離石器とも考えられる。刃角は45度である。腹面は調整がなく、剥離面終端にヒンジフラクチャーが生じている。

(溝上)

※注）「神家」の脱み方については、当事務所の菱田淳子を通じて、京都大学文学部日本史学助教授の吉川真司氏にご教示を賜った。末尾ながら記して感謝の意を表します。

第4章 北村遺跡の調査の成果

第1節 遺構

1. 調査の概要

現地は深さ1m以上におよぶ現代の盛土があり、それを除去すると旧耕作土が現れる。ただし、盛土を行う前に旧耕作土を除去したと考えられる箇所もある。

旧耕作土の下には淡褐色シルトと橙灰色シルトの2種類の床土が認められる。

床土の下には調査区北半では淡灰色～灰白色シルト、調査区南半ではそれに加えて橙灰色シルトが堆積し、これらのシルト層には遺物が若干包蔵されている。

包含層を除去すると淡灰色でマンガン粒が多く含む粘土層が現れ、遺構はこの面で検出した。検出した以降には溝、ピット、井戸がある。

2. 遺構

溝およびピット、井戸を検出した。ピットについては、径10cm程度の杭状のものと径20cm程度の柱穴状のものが混在していたが、いずれも残りが悪く、建物跡や杭列を抽出することができなかった。

S D 0 0 1 (図版2・3、写真図版1)

調査区のほぼ中央で検出した。調査区を斜めに縱断する南北方向の溝である。幅80cm、深さ30cmである。底面に橙灰色砂層があり、上層は灰色粘土が堆積していた。図化できなかったが土器の小片が僅かに含まれていた。

S D 0 0 2 (図版2・3、写真図版1)

SD01の北側で検出した。SD01と平行している。幅70cm、深さ16cmを測る。底面に茶灰色砂層があり、上層は粒状に砂が混じる灰色粘土が堆積していた。

この他にもこの2条の溝と同一の方位を示す溝状の落ち込みを数条検出したが、いずれも残りが悪いものであった。これらの溝の時期を直接示す遺物はないが、後述する包含層出土遺物がおおむね鎌倉時代までのものであることから、遺構の時期もほぼ同じと考えられる。

S E 0 1 (図版2・3、写真図版1)

隅柱横棟継板組の井戸である。一辺がほぼ1mの正方形を呈する。隅柱は一辺10cm程度の角材あるいは径10cm程度の芯持ち材で、納を切って径5cm程度の横棟をはめ込んでいる。井戸枠を構成する継板は幅40cm、長さ2m、厚さ5cm程度のものを二重に並べている。堀方は南北1.35m、南北1.2mの隅丸形である。図化はできなかったが、近世以降のものと考えられる磁器片と瓦片が出土している。

第2節 遺物 (図版52、写真図版91)

報告する遺物は全て包含層から出土したものである。古墳時代から平安・鎌倉時代までのものが混在している。

1は円筒埴輪である。低いタガを持つもので、内面に指頭圧痕が残るもの、全体に剥離が著しく外側のハケ調整もほとんど確認できない。

2は須恵器坏身である。坏身はやや扁平な体部に外反気味の受部がつき、口縁部は少し内傾気味に伸

びる。口縁端部は内側に面を持ち、僅かに窪む。

3は須恵器蓋である。扁平な天井部を持ち、口縁端部は屈曲して垂下する。

4は半瓦である。内面に布目が残り、外面にはやや人振りの格子目タタキが施されている。

5から8は瓦器碗である。体部は内縁気味に立ちあがり、口縁部には強いヨコナデを施し、端部を丸くおさめている。5では不整方向の粗い暗文が認められる。いずれも和泉型の瓦器碗である。

9は瓦器小皿である。丸みを帯びた底から内縁気味に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は丸く収める。

10は土師器小皿である。平底で大きく開き、口縁端部は外側に面を持つ。内面から口縁部にかけて灯芯の痕跡がある。

11は上師器足鍋の脚部である。ヘラ形を整え、ナデを施して仕上げている。

12は白磁皿である。底部外周は露胎で、見込み部に劃花文を施している。

13は青磁合子の身である。口縁部と底部外周が露胎である。

14は施釉陶器碗の底部片である。輪高台を貼り付けている。疊付け部分は欠損しているが、露胎であつた可能性がある。

15は東播系須恵器の捏ね鉢である。直線的に開く体部を持ち、口縁部は上下に肥厚させて外側に面を作る。

S1は石鍋の瘤状隆起ではないかと考えられる石製品である。

M1は煙管の樋首である。銅製で一部にメッキが残り、雑ざ手部分の竹管も僅かに残存している。内部には煤が詰まっている。

M2は用途不明の鉄製品片で薄い板状を呈し、端部は僅かに曲がっている。

第3節 小結

北村遺跡の立地する地点は山陽道（西国街道）と丹波へ通ずる多田道との交差する場所であり、遺跡の西には白鳳時代から鎌倉時代にかけて営まれた伊丹廃寺、南には平安時代後期から室町時代中頃まで存続した北村廃寺が存在している。今回の調査では、これらの寺院が営まれた時期と重なる遺構・遺物を検出している。遺構や遺物の密度が薄いため、集落の一部とは言い難いが、調査地点の周辺に古代末から中世にかけての集落跡があったことが推定される。

(鐵)

第5章　まとめ

第1節　南本町遺跡について－建物配置の形態と遺跡の性格－

南本町遺跡では今回の調査の結果、奈良時代の多数の掘立柱建物跡が検出されたが、前回の復興県営住宅建設に伴う調査（第1次本調査）で検出された5棟も含めて合計20棟以上を数えることとなった。

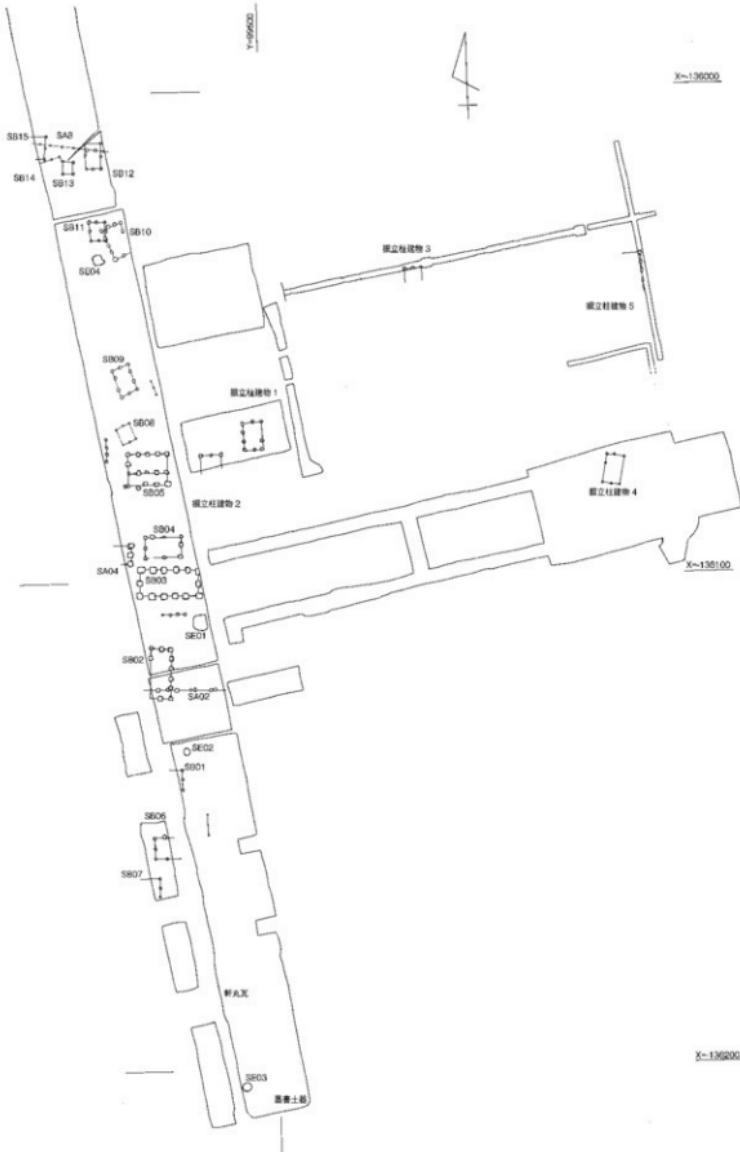
掘立柱建物跡は、柱穴出土土器や建物関連と考えられる遺構および包含層出土土器から、平城宮Ⅱを中心とした時期と判断できるものが多く、それらの建物跡の方向がほぼ揃っていることも判断理由となっている。ただし、判断材料に乏しく、推定の域を出ないものも存在する。

一方、遺物の出土状況から、飛鳥時代に遡ると判断できる遺様も存在している。また、包含層から出土した土器は奈良時代のものが大半を占めているが、一部飛鳥時代に遡るものも含まれている。その他にはわずかに中世の土器や近世以降の遺物が散見される程度である。飛鳥時代と判断される遺構には、塀または柵のSA02と、ほぼ似た方向のSA08のほか、土壇・溝がある。それらは飛鳥Ⅲ～IVと推定できる。SA08を飛鳥時代と判断するには根拠に乏しいが、SA02とは方向の差が7°であるうえに、SA02とSA08は共に調査区の範囲を超えて東西両側にのびる大規模なものであることに加え、その間隔が108mであり、条單の区画単位の数値に近いという理由により同時期と考えることができよう。しかし、柱間はSA02が平均3.5mであるのに対し、SA08では平均2.6mと1m以上もの差があるという、同一の性格としては数値があまりに聞きすぎるという否定的な事実も存在する。ここでは、奈良時代と推定する建物と重複しているSA08は飛鳥時代に遡るものと考えておきたい。これらの塀または柵に囲まれた内部では同時期の建物跡は見つかっていないが、同時期と考えられる土壇・溝などが存在しており、奈良時代掘立柱建物群前身の塀または柵に囲まれた何らかの施設が存在していたものと推定している。

さて、奈良時代の掘立柱建物跡は、⑥団区から②区南半を中心に、③区南部の範囲で認められる。SB02・SB05・S07およびSB12は柱穴出土土器や建物関連と推定される遺構出土土器から平城宮Ⅱを中心し平城宮Ⅰ～Ⅲにおさまると判断でき、それらは南北・東西棟の差はあるものの、桁・梁の方向がほぼ同一である。したがって、それ以外の建物についても、同一方向のものについては同時期の可能性が高いと判断できるであろう。一方、方向が異なるSB08～SB10およびSB14については、時期を判断する材料に乏しいが、SB10についてはSX②D01やSE04が関連遺構と推定できることから、平城宮Ⅱを中心とした時期であることが考えられ、同時に、SB08・SB09・SB12といったSB10と同じ方向の建物が同時期であることが推定できよう。このように、今回⑥・①・②・③区で検出した建物は、すべてが同時に建っていたとまでは言えないものの、平城宮Ⅱを中心とした同時期のものであることが推定される。

次に、第1次本調査で検出された建物であるが、これらについてもすべて平城宮Ⅱを中心としていると判断されていることから、同時期の一連の建物群が東側にもひろがっていることがわかる。ただし、第1次本調査で検出された5棟の建物のすべてが南北棟である。

南本町遺跡でこれまでに検出された奈良時代の建物跡を一覧で示した。南北・東西の方向は別として、南北棟の場合は桁方向、東西棟の場合は梁方向がそれぞれ座標北を中心とどれだけ振れているかで分類したのが方位類型である。Aおよびaとしたものは、桁あるいは梁方向が北を中心と東西への振れの角度が各5°程度以内のもので、Aは東西棟、aは南北棟を示す。この中には、塀または柵として報告したSA04が建物跡の可能性を示すことにより、含んでいる。一方、b類型としたものは20°～25°程度北



第3図 南本町遺跡掘立柱建物跡配置図 (1/1,000)

名 称	桁 行 m	梁 行 m	面積m ²	棟方向	方位類型	振り方形態	備 考
SB01	?	?	2間?	4.0	?	東西	A 方形
SB02	5間	10.1	2間	4.1	41.41	南北	a 方形
SB03	5間	11.6	2間	5.3	61.48	東西	A 方形
SB04	3間?	7.2	2間	4.2	30.24	東西	A 方・円混在
SA04	?	?	2間? 3間	3.0 or 7.0	?	東西	A 方形
SB05	4間	7.8	2間	3.8	29.64	東西	A 方形
SB06	?	?	2間	4.2	?	東西	A 方形
SB07	?	?	2間?	3.8	?	東西?	A ? 方・円混在
SB08	1間	3.5	2間	3.0	10.50	南北	b 円形
SB09	3間	5.2	2間	3.5	18.20	南北	b 円形
SB10	4間	6.5	2間?	4.0	26.00	南北	b 方・円混在
SB11	2間	3.9	2間	3.2	12.48	南北	a 円形
SB12	2間	5.2	2間	3.2	16.64	南北	a 円形
SB13	1間	2.5	1間	2.2	5.50	南北	a 円形
SB14	2間以上	3.3以上	1間	1.5	4.95	東西	C 円形
SB15	2間?	4.5	?	?	?	南北?	a? 円形
掘立柱建物1	3間	5.8	2間	3.9	22.62	南北	a 方形
掘立柱建物2	?	?	2間	3.9	?	南北	a 方形
掘立柱建物3	?	?	2間	3.6	?	南北	a 圓丸方形
掘立柱建物4	3間	5.8	2間	3.6	20.88	南北	a' 圓丸方形
掘立柱建物5	3間?	5.8	?	?	?	南北	a 方形

南本町遺跡掘立柱建物跡一覧表

方向から振れているもので、すべて南北棟である。なお、SB14は70°以上の振れがあるためにC類型としたが、建物であるかどうか疑問が残るものである。ここではA・a類型とb類型の2つに大きく分かれることを確認しておきたい。

A・a類型のうち、東西棟であるA類は、本遺跡中最も大きなSB03の南北中軸線を中心にSB05を北端、SB07を南端として合計6棟が中軸線に絡むようにして南北に並んでいる。SA04が建物跡とするとやや西にずれてはいるが中軸線近くに位置する。この中軸線に絡む南北棟はわずかにSB02の1棟であり、近い位置に存在するのはSB10と掘立柱建物2の2棟に限られる。

このようにして南本町遺跡の掘立柱建物跡をみると、東西棟が重要な位置を占めていることが看取できる。また、建物跡が集中する中心部分となるのは、最大規模のSB03を核とし、北は廻付きのSB05および掘立柱建物1・2まで、南はSB07までの範囲と判断することができるであろう。さらに北部に存在するSB10もやや規模の大きさが目立つが、面積ではSB02の方がはるかに大きい。このことはまた、井戸においてもいえることである。SE01およびSE02はそれぞれSB03・SB01の近くに位置し、どちらも木製井戸枠を有するものであったが、SB10・SB11に接した位置のSE04ではそういった施設は検出されず、素掘りの井戸と推定される。井戸においても建物同様、中心部分のものには木製井戸枠が採用されている。また、SE03においても木製井戸枠であったことが確認されている。SB03は東西棟群南端のSB07よりもさらに約40m南側に位置しているが、それにもかかわらず木製井戸枠を採用していることは、建物群中心部の北側よりも南側の方がより重要な位置づけであったことが推定される。ただし、SE04およびSX②D01から半瓦片が出土しており、SB10・SB11のいずれか1棟またはどちらの棟も部分的にはあるものの、瓦を葺いていた建物であったことが推察される。なお、さらに北側のSE05でも井戸枠が認められない。

SB10・SB11が位置する部分の約10m北側にはSB12・SB13・SB15の3棟の南北建物が存在している。その位置および棟方向から、SB11とSB12・SB13・SB15はひとつの建物群としてとらえるべきであろう。それらは中心部分の建物とは違って規模が小さく、面積が20m²以下であるうえに桁間は2間以下である。

それでは、東側の第1次本調査区ではどうであろうか。すべて南北棟であることはすでに述べたが、

調査範囲が限られているという制約があるものの、建物の配置はかなり疎らであることが看取できる。例えば、掘立柱建物1の東に所在する掘立柱建物3との距離は30m以上離れており、その東の掘立柱建物5と掘立柱建物3とは40m程度の隔たりがある。さらに、掘立柱建物4と掘立柱建物1とは約70mの隔たりがある。建物群中心部の東側へのひろがりは掘立柱建物1あたりで区切りがつきそうであり、そこから東方向へは建物跡は疎らになる。このことは、地形的にも、東側に南北方向の谷が入り込んでいることにより、地盤が下がってゆく地形であることにも関連していると思われる。

次に、方位類型bの建物跡であるが、SB08～SB10の3棟はすべて建物跡群中心部の北側に位置し、第1次本調査区ではこの方向の建物跡は検出されていない。限られた位置に存在する建物跡といえよう。時期的には大きな隔たりはないものと推定されるが、SB11とSB10の重複関係から、A・a類の建物とは同時に建っていたものではなさそうである。北方位からのずれが大きいことは、兵庫県内でも神戸市上脇遺跡や丹波市三原遺跡などの例から、時期が遅る可能性もある。あるいは、SX②D01出土遺物の占相を示すものがSB10と関連するのかもしれない。そうすると、SA02・SA08で囲まれたなかに存在していたものは、土壙・溝とともにこれらb類の建物であった可能性が生じてくる。

以上のように、南本町遺跡で検出した掘立柱建物跡等のうち、SA02・SA08は飛鳥時代の飛鳥Ⅲ頃に遡るものであり、その堀または掘で囲まれた内部にはSB08～SB10が建っていた可能性がある。次の奈良時代、平城宮IIを中心としたその後にはSB03の東西棟を核とし、SB01・SB04・SB05～SB07といった東西棟を中心主体にした建物群が成立する。それらの北側には小規模な建物群を配し、東側にも疎らではあるが南北棟を配置するという構造が浮かび上がってくる。なお、これらの建物群は平城京IV頃には廃絶してゆくようである。

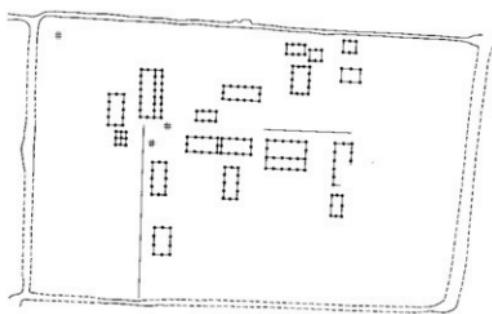
次に、これらの建物群が示す性格について推定しておきたい。南北・東西といった方位に合わせた多くの奈良時代の建物群が検出され、横板組井戸が存在し、「神家」の墨書き土器が出土する遺跡となれば、例えば郡衙といった役所を想定しがちであるが、はたしてそうであろうか。河（川）辺郡衙推定地は、本遺跡の南側に所在する中ノ田遺跡とされている。中ノ田遺跡では多くの掘立柱建物跡のほか、縁石陶器・石帶が出土し、さらに南東の松ヶ内遺跡でも大型倉庫を含む多くの掘立柱建物跡が検出されている。

南本町遺跡の建物の配置についてみてみると、前述のように中軸線を中心とした位置に東西棟を中心とした建物群が集中して存在している。しかし、その配置は官衙遺跡でみられるような「L」・「コ」・「品」字型は示さない。また、倉庫や長殿が検出されていない。建物のうち、1辺1m以上の柱穴掘り方を有し、桁行5間以上で、全長が10mを超える建物はSB03の1棟に限られる。中核のSB03は溝で囲まれ、部分的に瓦葺である可能性はあるものの、廐付建物ではなく、全庭がない。また、南本町遺跡では、木簡・帯金具・石帯や施釉陶器は出土せず、文字墨書き土器では井戸出土の「中井口」や溝出土の「神家」に限られ、硯は転用硯が少量認められるにとどまる。土器類では、杯・皿の量が多いものの、煮炊き用の甕や壺も出土しており、貯蔵用の甕もやや目立つ。建物の配置・規模・種類・遺物の種類など、以上の特徴からは、官衙遺跡とするには貧弱といわざるを得ない。

一方、集落遺跡と異なる点は、建物の方位・配置に統一性・規則性がある。部分的ではあるが、瓦葺の建物が複数存在することが推定される。桁行全長が11mを超えるものがあり、廐付きの建物も存在し、柱穴掘り方平面が方形をなすものが多くを占める。大型の曲物を藏する井戸が存在する。「神家」の墨書き土器が出土している。以上の点から、単なる集落遺跡でないことは明らかであろう。すなわち、官衙遺跡とするには要件に乏しく、集落遺跡とするにはあまりに規則的・瀟洒であり、華奢といえる。これ

らの中間の様相を示すものとしては、いわゆる豪族居宅が考えられる。

南本町遺跡周辺一帯の伊丹段丘（猪名野）には、古墳時代前期から後期にかけての前方後円墳をはじめ多くの古墳が点在している。また、東500mに所在する白鳳時代の猪名寺廃寺が氏寺としての性格が与えられており、その建立者として猪名氏が有力視されている。



第4図 大阪府平尾遺跡造構平面図（集落跡、『古代の村』より）

南本町遺跡で検出された建物群について、猪名寺廃寺と同範の瓦が出土している点を重視して、仮に猪名氏の氏族居宅としてみると、郡衙推定地の北側近隣地に存在し、飛鳥Ⅲ頃にはその前身が成立しており、奈良時代以前からの有力氏族の居宅であることがあげられるが、南本町遺跡の位置が、猪名野古墳群のなかでも前方後円墳が集中する中心部に近いことから、猪名野古墳群の被葬者層が猪名氏系譜であった可能性も出てくる。また、郡衙推定地の中ノ田遺跡が猪名野古墳群中心部に位置していることから、郡衙設置場所の選定にあたって猪名氏が果たした役割が大きく、郡衙内組織の主要な位置を占めていたであろうことも想定される。

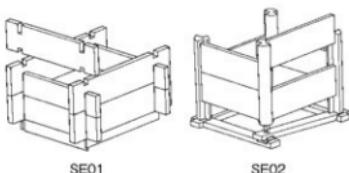
南本町遺跡の建物群について、郡衙に大きく関わりのある氏族の居宅とすれば、南本町遺跡で出土した墨書き土器「神家」の存在もうなづけるものと考えられ、その氏族が猪名氏であったとすれば、猪名寺廃寺と同範瓦が出土している理由も理解しやすいものと思われる。

第2節 南本町遺跡の井戸一構造と配置によるランク差の可能性について—

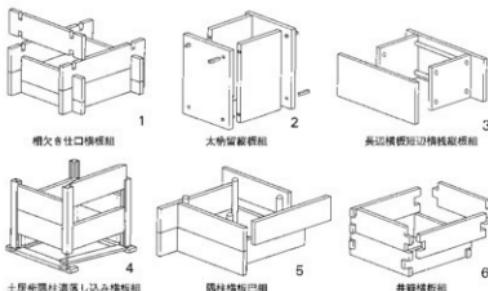
南本町遺跡で検出した井戸には横板の井戸枠を有するものとそうでないものがあり、井戸枠構造にも相欠き仕口横板組のSE01と「上居桁隅柱切欠き横板組」と称すべきSE02の二者が認められた。SE01は中核建物の南に位置するが、SE02はその約25m南側に位置している。井戸枠内法はSE01が1.14mであるのに対し、SE02は75cmと差がある。この大きさの違いは井戸の位置にも示されるように、格式差であろう。

黒崎直氏は平城宮の井戸組井戸の大きさによる格式差を示し、井戸枠構造による差も示唆したが、ここではそれをさらに拡大して、平城宮など宮都以外の井戸について、井戸枠構造による格式差の可能性について探ってみることとする。

南本町遺跡の井戸枠構造のうち、最も高い格式は相欠き仕口横板組であり、その次には隅柱を有する横板組であった。奈良時代の相欠き仕口横板組の井戸は畿内地域においては散見されるが、他型式の井戸や建物跡と同時に検出されているものは、管見では知り得ていない。また、たとえば、愛媛県・山口県・埼玉県では相欠き仕口横板組の奈



第5図 南本町遺跡の井戸枠構造
(黒崎氏の井戸構造図にあわせて作図)



第6図 井戸枠構造の各種（黒崎直氏による）

判明している遺跡はきわめて限られる。例えば兵庫県姫路市上原出遺跡では、奈良時代の官衙的性格とされる建物2群にそれぞれ相欠き仕口横板組と横桟縦板組の井戸が検出されているが、両建物群は約20mも離れた位置にあるため、建物群の位置づけが不明である。わずかに、奈良時代中期頃の郷衝あるいは郷家と想定されている兵庫県西木之部遺跡で好例が認められる。遺跡の性格の当否は別として、C地区において相欠き仕口横板組のSE2と横桟縦板組のSE3の二者が検出されており、それぞれ中心的施設と目される建物跡に近い位置および下位ランクにあたる建物の横に位置している。

一方、石川県加茂遺跡では、相欠き仕口横板組井戸に近接した建物は、蒸掘りとみられる井戸に近接した建物の方が立派であると判断することが可能な逆の例も存在している。加茂遺跡では、調査範囲が限られているためでもあると思われるが、好例に恵まれない現段階では、宮都以外の奈良時代官衙等の施設において、井戸枠構造の型式差による格式差、すなわち、横板組と縦板組では縦板組が格下である可能性を指摘すると同時に、横板組のなかでも相欠き仕口横板組が隅柱横板組よりも格が上であることが想定される点を指摘しておきたい。最後になったが、井戸探索にご尽力頂いた戸田真美子氏に感謝の意を表するとともに、成果を充分生かせなかったことに対するお詫びを申し上げたい。（岸本）

第3節 中近世以降の南本町遺跡－北・中区調査結果のまとめ－

南本町遺跡北区の調査では、「国指定史跡 有岡城跡・伊丹郷町遺跡」に隣接する北①区で近世（19世纪代）の遺構が確認され、他の2地点（北②区・北③区）では、後世の搅乱等によって遺構の残存状況が悪いものの、13世纪代の柱穴や掘溝などの遺構が確認された。このうち、北①区の調査区東壁際で確認された溝状の遺構（SD20）は、現在も残る水路と石垣に沿って検出されたが、出土した陶磁器類より19世纪後半には埋められたと考えられ、現在の石垣は、この構造の遺構が埋まって以後に構築されたものと判断された。このため、今回の調査によって、これまで時期が特定されなかった調査区東側の石垣（史跡の範囲からは除外されているが、その延長は史跡範囲を反映する水路）の構築時期がほぼ確定され、大きな成果を得たといえる。また、「文化改正伊丹之図」（伊丹市指定文化財 伊丹市立博物館蔵）には、今回の調査区に位置する地点に東西方向の水路が描かれており、今回発見されたSD21がこれに相当する可能性が高いと考えられる。但し、この絵図は、天保七年（1836）に写したものとされており、東西方向の水路はその前あるいは以後の絵図にはみられないごく限られた時期のものであり、出土した陶磁器類からもSD20と同時期あるいは近似した時期に一括して、埋められたと考えられる。

良時代の井戸はほとんど見つかっていない。このことがかえって、相欠き仕口横板組井戸の格式の高さを物語るものであろう。

奈良時代の相欠き仕口横板組および他型式の構造をもつ井戸が同時に検出され、しかもそれらの存在する位置が官衙などの遺跡のうちのどの部分にあたるかまで

南本町遺跡中区の3地点4地区（中①A区・中①B区・中①C区・中②区）の調査では、一部に近世（19世紀代）の遺構を含むものの、13世紀を初現とし、16世紀代に至る中世の遺構が確認された。調査地点より約400m南側に位置する南本町遺跡南区では、中世の遺構は確認されておらず、中世の集落は、中区を中心とした北側に展開していることが判明した。しかし、検出された掘立柱建物跡や溝、土坑などの遺構は、調査区周辺に広がっており、集落の一部を調査したに過ぎないと思われる。また、調査区の西側あるいは北側では遺構、遺物ともに比較的、希薄な状態であるため、遺跡の中心部は今回の調査区の東側に存在する可能性が高いと考えられる。荒木村重が天正2年（1574）に伊丹氏を滅ぼし、純権の有岡城を完成させる以前、伊丹氏がこの地域一帯を支配していた時期の集落の様相を示すものとして、この地域の中世集落を考える上で貴重な成果を得たといえる。

（仁尾）

引用・参考文献

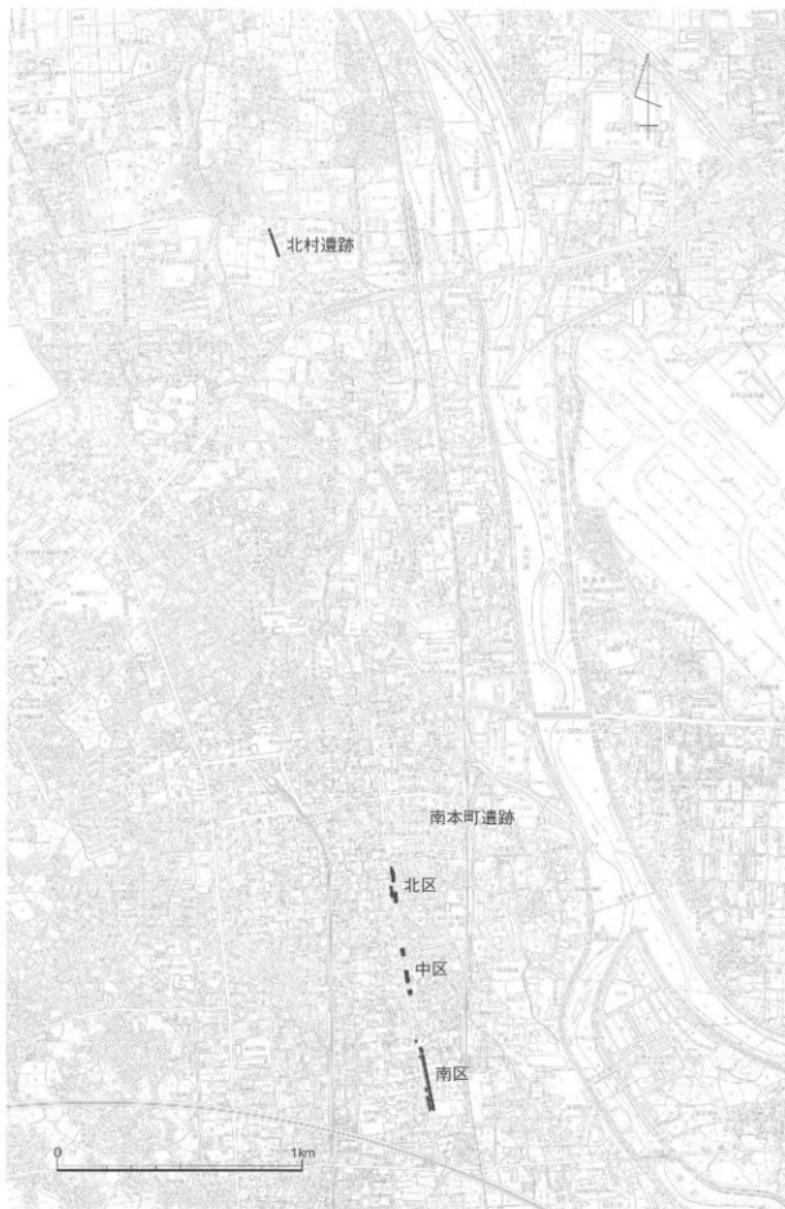
（50音順）

- 伊丹市教育委員会『伊丹市埋蔵文化財分布地図』
浅間俊夫2003『有岡城跡発掘調査報告書X』伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会
尼崎市教育委員会『尼崎市埋蔵文化財分布地図及び手引き』
池田正男・村上泰樹編1993『西本之部遺跡』兵庫県文化財調査報告第124号 兵庫県教育委員会
伊丹市史編纂専門委員会編1968『伊丹市史』第4巻史料編1 伊丹市
伊丹市史編纂専門委員会編1971『伊丹市史』第1巻 伊丹市
上田達太郎編2005『岩屋跡・森本跡』兵庫県文化財調査報告第300号 兵庫県教育委員会
岡田 稔1984『尼崎市猪名寺廃寺跡』尼崎市文化財調査報告第16集 尼崎市教育委員会
岡田 稔1990『尼崎市武庫庄遺跡』（第4～7次調査報告）尼崎市文化財調査報告第21集 尼崎市教育委員会
岡田 稔1994『戸戸戸遺跡』（第3・5・5次調査）『平成3年度尼崎市埋蔵文化財年報』尼崎市教育委員会
岡田 稔はか1996『「道ノ下遺跡」（第2次調査）』『尼崎市埋蔵文化財年報平成4年度』尼崎市教育委員会
岡田 稔はか1996『武庫庄遺跡』（第22次調査）『尼崎市埋蔵文化財年報平成4年度』尼崎市教育委員会
岡田 稔はか1999『松ヶ内遺跡』『尼崎市埋蔵文化財調査年報平成6年度』尼崎市教育委員会
岡田 稔はか1999『古宮遺跡』『尼崎市埋蔵文化財調査年報平成6年度』尼崎市教育委員会
小長谷正治1995『口油井遺跡発掘調査報告書』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第20集 伊丹市教育委員会
甲斐昭光編1997『田能高円遺跡』兵庫県文化財調査報告第166号 兵庫県教育委員会
篠方正樹2003『「ものが隠る歴史 8 戸の考古学」』河成社
川西市教育委員会社会教育室編2000『史跡アカモ道跡－弘生時代の大規模集落－』川西市・川西市教育委員会
岸本一宏編2002『「戦遺跡」』兵庫県文化財調査報告書第232号 兵庫県教育委員会
岸本一宏編2004『二原遺跡・畠田遺跡』兵庫県文化財調査報告書第269号 兵庫県教育委員会
鬼頭清明1985『「古代日本を発掘する6古代の村」』岩波書店
鏡 英記編1998『古本町遺跡』兵庫県文化財調査報告第179号 兵庫県教育委員会
黒崎 直1976『平城宮の井戸』『月刊考古』151号 第一法規出版
黒崎 直1995『藤原宮の井戸』『文化財論叢II』同朋舎出版
小林哲也2002『山口県の井戸跡についての覚書』『陶』第14号 山口県埋蔵文化財センター年報－平成12年度－
佐原 真1972『「平瓦桶巻」の考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
様官 正編2006『小阪田遺跡』兵庫県文化財調査報告書第297号 兵庫県教育委員会
鈴木孝之1990『古代～中近世の井戸跡について(1)』『研究紀要：第7号 財團法人姫王保蔵文化財調査事業団』
田邊明三1981『須恵器大成』角川書店
中川 渉編1994『下加茂遺跡』兵庫県文化財調査報告第131号 兵庫県教育委員会
中島弘一2003『愛媛県内の井戸遺構について(1)』『紀要愛媛』第3号 財團法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
西口和彦・輔田祐治ほか1980『上原田遺跡調査概報』『播但連絡有料自動車道建設にかかる埋蔵文化財調査報告書II』
兵庫県教育委員会
西 弘海1986『土器様式の成立とその背景』真陽社
兵庫県教育委員会2004『贝津郡遺跡地図』
福井英治編1982『田能遺跡発掘調査報告書』尼崎市文化財調査報告第15集 尼崎市教育委員会
福井英治編1999『平成8年度田舎助事尼崎市内遺跡復旧・復興事業に伴う発掘調査概要報告書』尼崎市教育委員会
三浦純夫編1993『加茂電跡－第1次・第2次調査の概要』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会
村上泰樹編1991『北園遺跡発掘調査報告書』兵庫県文化財調査報告第91号 兵庫県教育委員会
山上雅弘編2006『有岡城跡・伊丹町郷V』兵庫県文化財調査報告第301号 兵庫県教育委員会
山上清智編1995『東武庫遺跡』兵庫県文化財調査報告第150号 兵庫県教育委員会
山中敏史・佐藤與治1985『古代日本を発掘する5古代の役所』岩波書店
山中敏史1994『古代官衙遺跡の研究』 報書房
横田賢次郎・森田 魁1978『大宰府出土の輸入中国陶磁器について』『九州歴史資料館研究論集』4
渡辺 純編2006『若王寺遺跡』兵庫県文化財調査報告第305号 兵庫県教育委員会

報 告 書 抄 錄

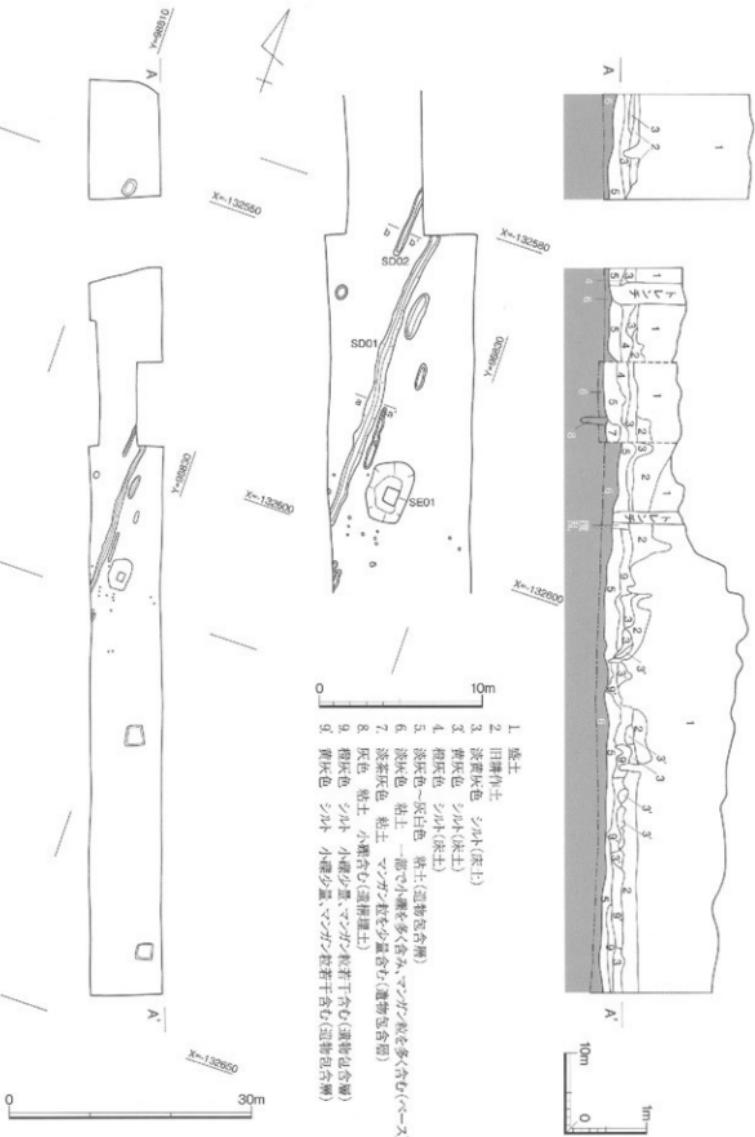
ふりがな	みなみほんまち いせき・きたむら いせき						
書名	南木町遺跡・北村遺跡						
副書名	都市計画道路尼崎港川西線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告						
シリーズ番号	第320冊						
編著者名	岸本一宏・仁尾一人・村上泰樹・鐵・英記・池田征弘・藤田淳・溝上くみ						
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所						
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011						
発行機関	兵庫県教育委員会						
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL 078-341-7711						
発行年月日	2007年(平成19年)3月15日						
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村 遺跡番号					
△△△ 南木町	△△△ 兵庫県伊丹市 南木町1・2・ 4・5・7丁目 △△△ 南町3丁目	080066 28207	34度 46分 07秒	135度 25分 12秒	1997.07~ 2003.02 1996.05~ 2004.05 詳細は別頁	確認調査 440m ² 本調査 6,420m ²	都市計画道路 尼崎港川西線
△△△ 北村	△△△ 兵庫県伊丹市 北村 △△△ 鎌物師5丁目	080017	34度 48分 01秒	135度 24分 47秒	1996.07.15~ 07.16 1996.08.29~ 11.12	確認調査 28m ² 本調査 869m ²	都市計画街路 事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
南木町	埋没古墳 集落跡	古墳時代 飛鳥~奈良 時代	古墳(周溝) 掘立柱建物跡・井戸・ 塀・溝・土礫	須恵器・埴輪 土師器・須恵器・鉄 器・木器(簾串・櫛・ 曲物)・墨書き器・ 瓦・製塙土器 陶磁器・瓦・漆器・ 金属器・石臼	氏族居宅跡か		
		中世	掘立柱建物跡・溝・ 土坑・井戸・埋桶遺 構	陶磁器・土師器・瓦・ 置物・石器・下駄・ 銅鏡			
		近世	溝(堀)・土坑・ 窓・掘立柱建物跡	陶磁器・土師器・瓦・ 置物・石器・下駄・ 銅鏡	有閑城関連部分		
北村	集落跡?	古代~中近 世	溝・井戸・ピット	須恵器・土師器・瓦 器・陶磁器・金属器・ 石鍋			

図 版



調査区配置図

図版2
北村遺跡



北村遺跡調査区平面図・東壁断面図

SD01

a

14.6m
a'



1. 灰色 粘土 よく縮まる
2. 粗灰色 砂

SD02

b

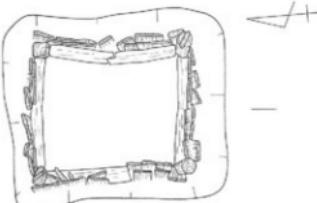
14.6m
b'



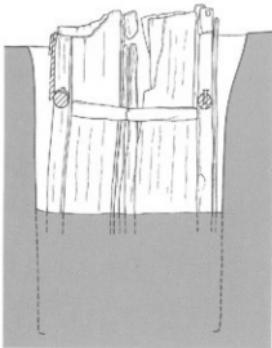
1. 灰色 粘土
2. 茶灰色 砂

0 1m

SE01



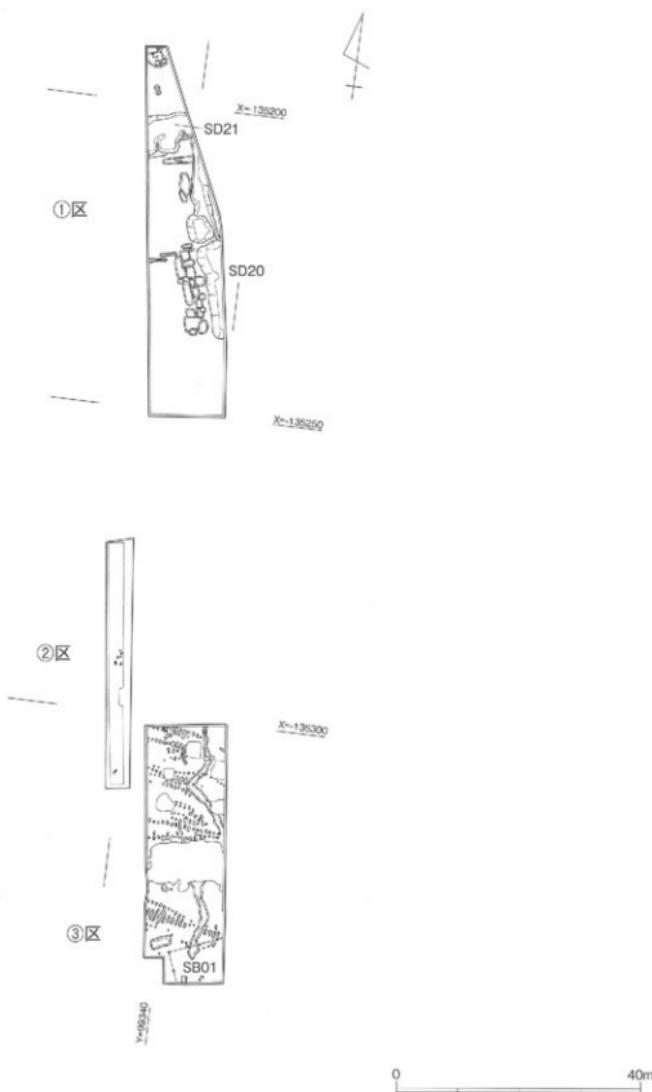
14.2m



図版4

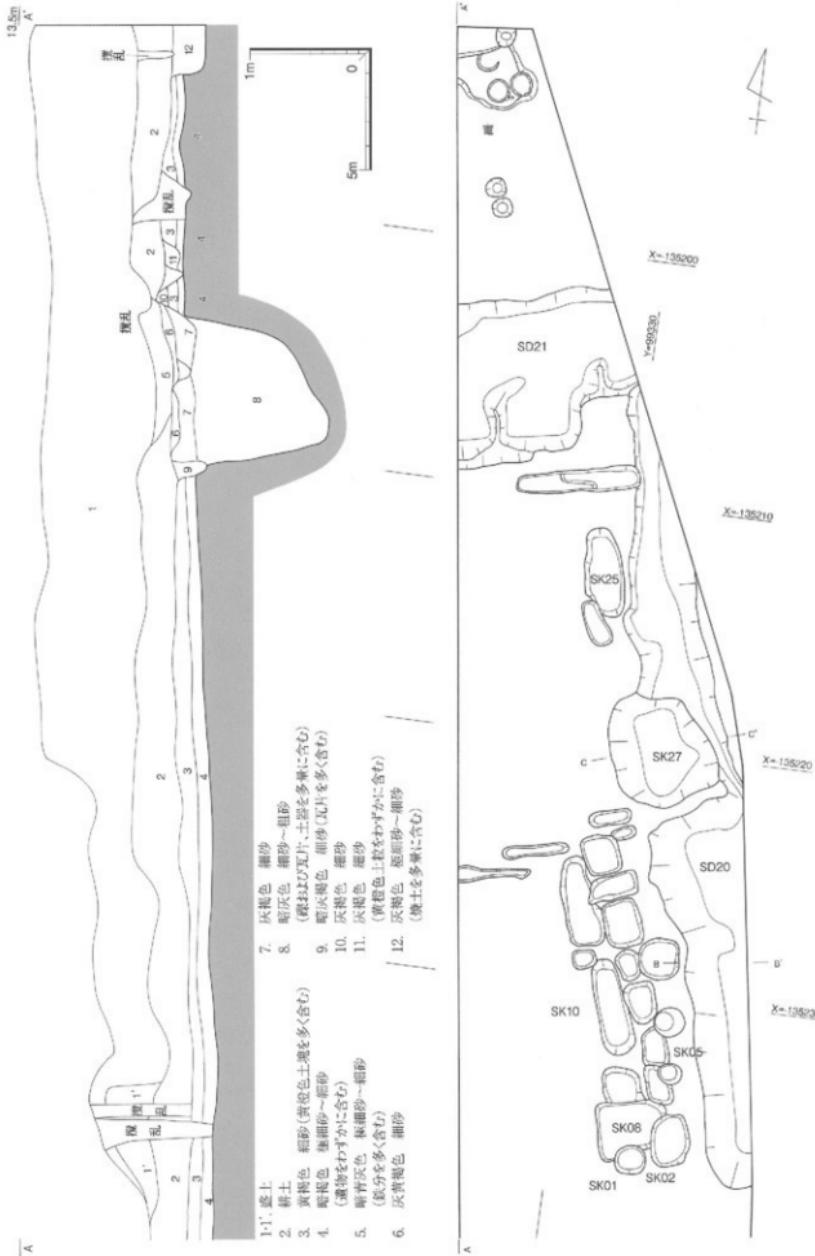


南本町遺跡調査区配置図

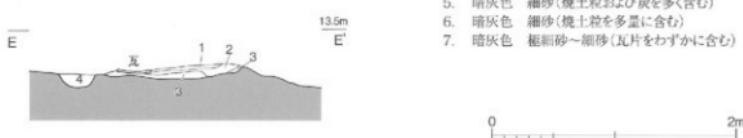
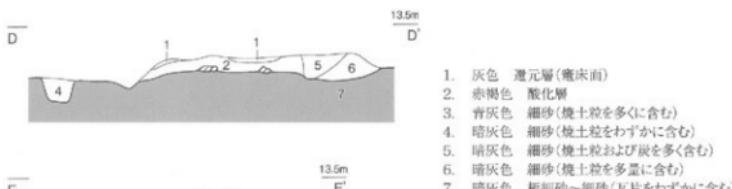
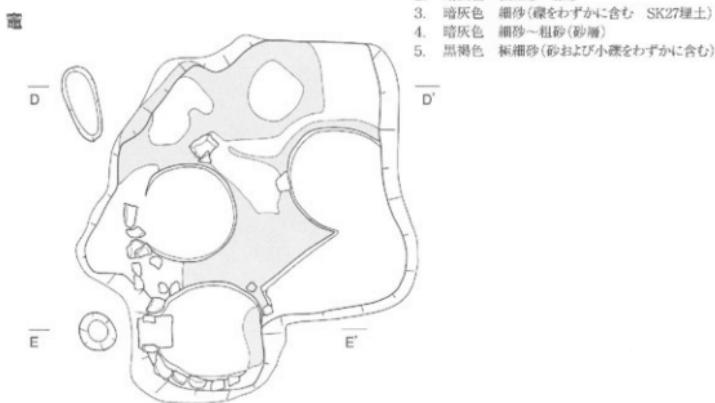
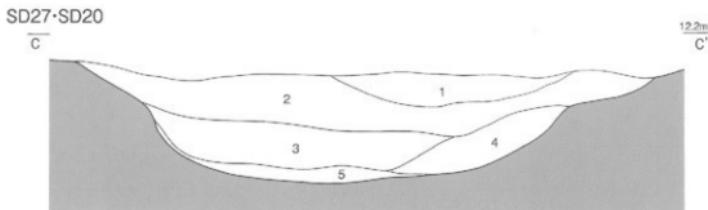
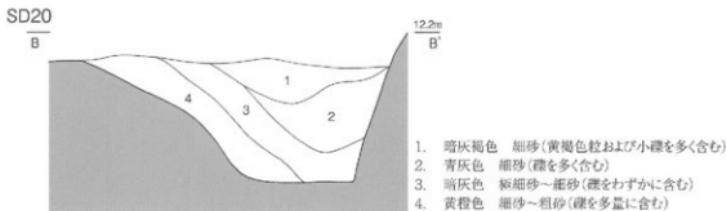


北区平面図

図版 6
北①区



北①区平面・断面図

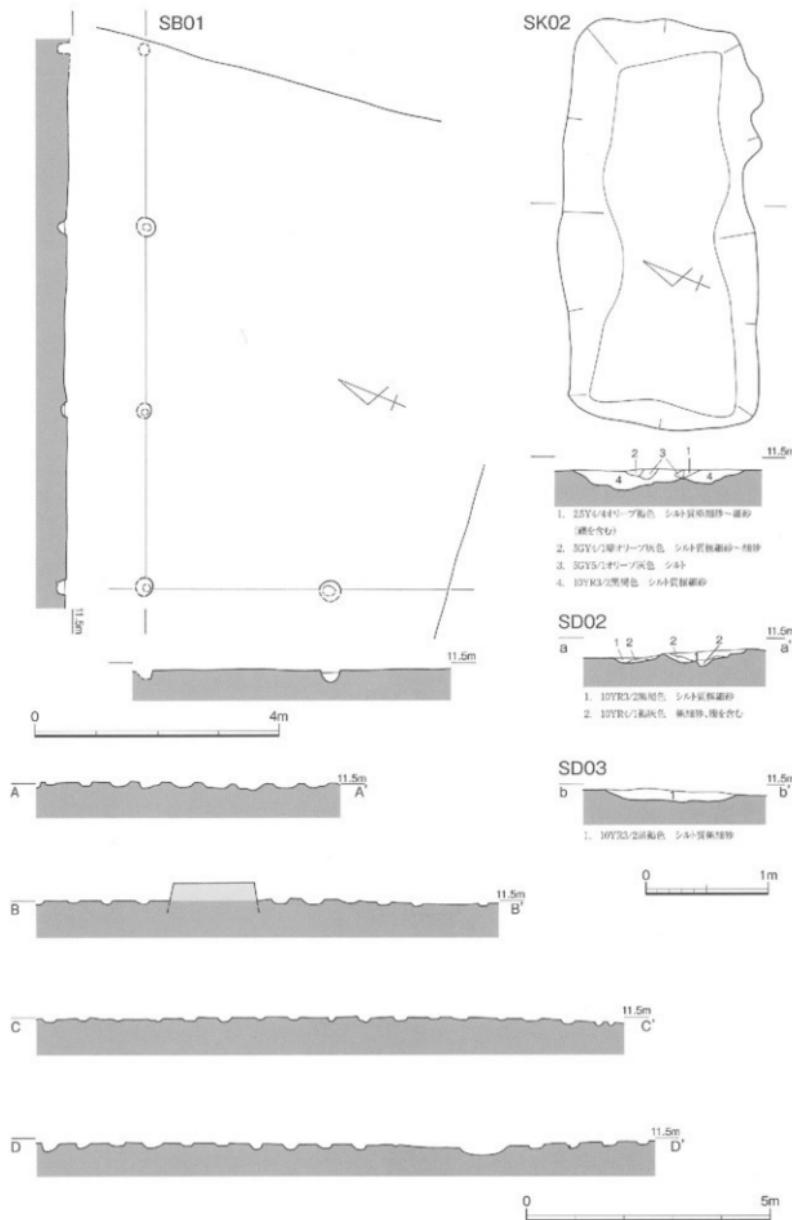


図版 8
北③区



- 盛土、擾乱
 - 5Y3/1オリーブ黒色
シルト質細繊砂(小~中礫・炭を含む) 近代耕土?
 - 5Y4/2灰オリーブ色
シルト質細繊砂(細砂~小礫・炭を含む) 近世耕土
 - 5Y4/3暗オリーブ色
極細砂(粗砂~小礫を多く含む) 床土
 - 5Y4/2灰オリーブ色 極細砂(粗砂を多く含む)
 - 2Y4/2灰黒色 シルト質細繊砂 中世耕土
 - 10YR3/2黒褐色 シルト質細繊砂
 - 25YS/6灰黒色 シルト質粗繊砂

北③区平面・断面図



北③区遺構

図版10
中区

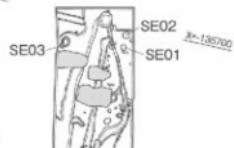


①A区



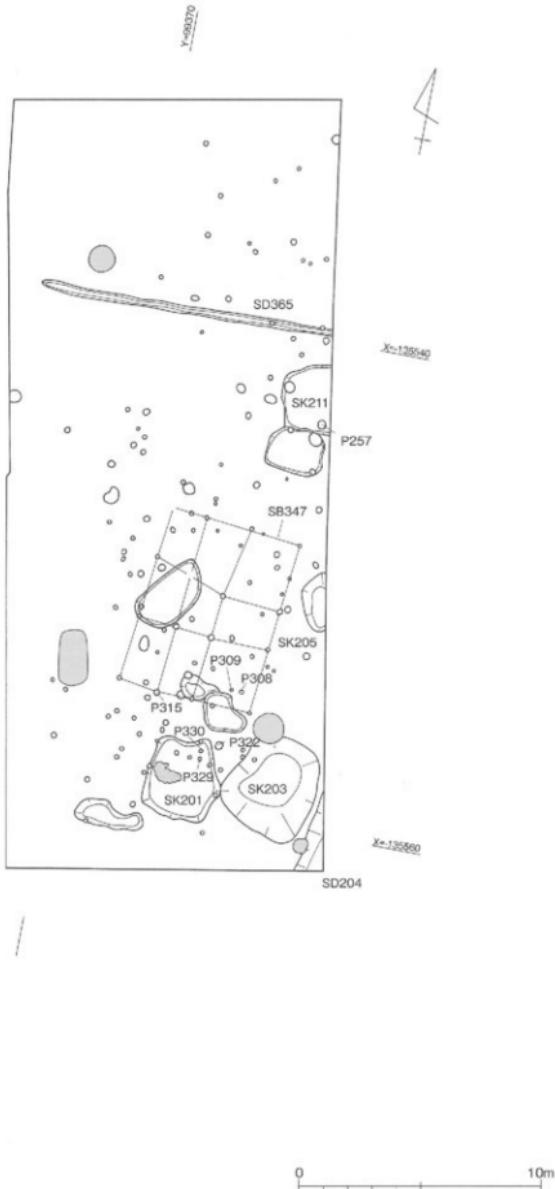
①B区

①C区



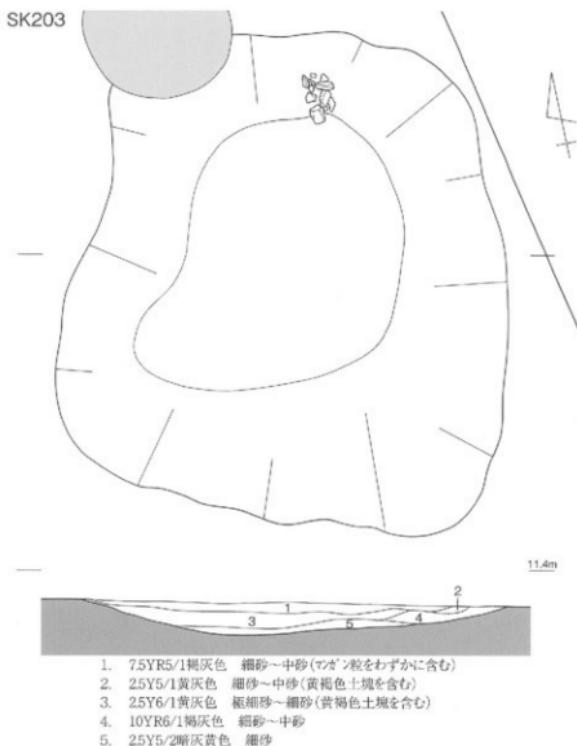
0 40m

中区平面図

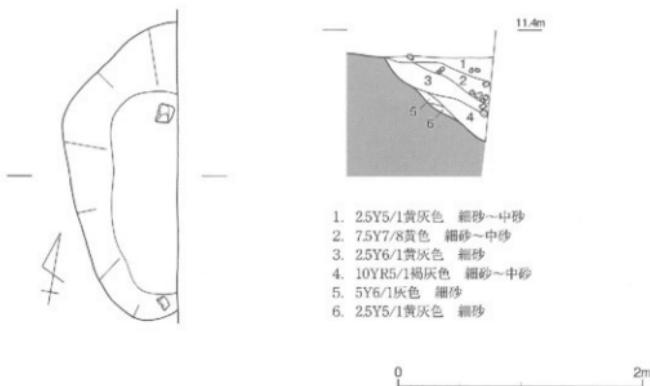


中①A区平面図

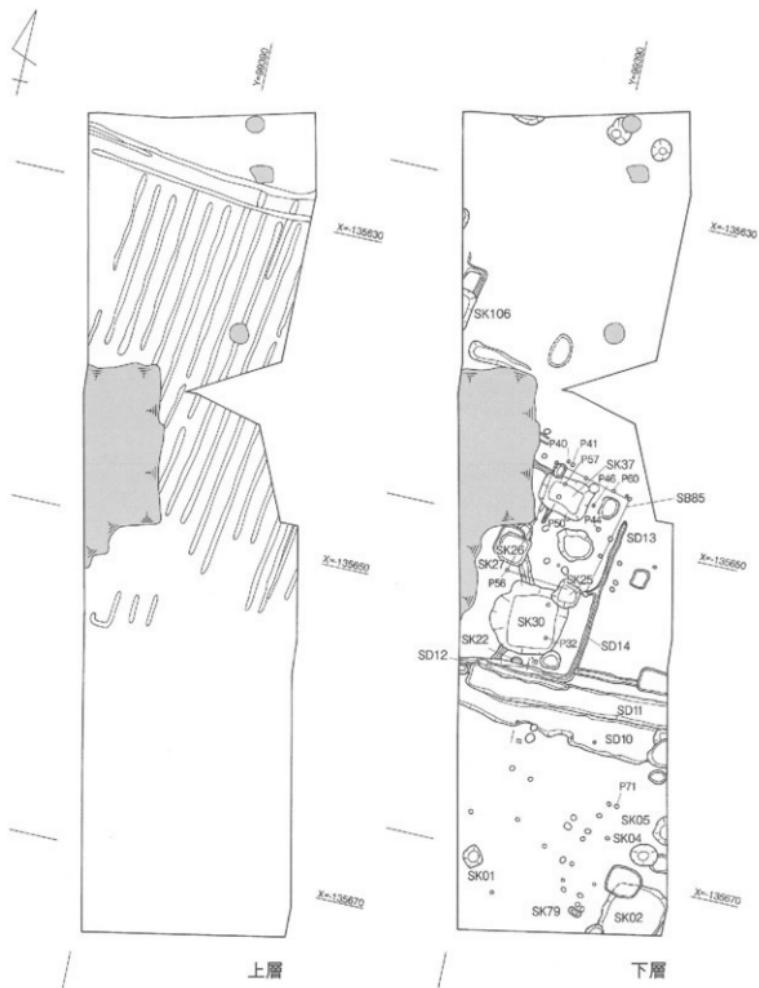
図版12
中①A区



SK205



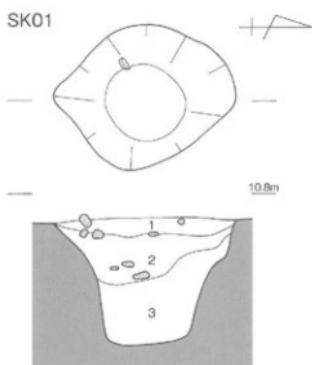
中①A区遺構



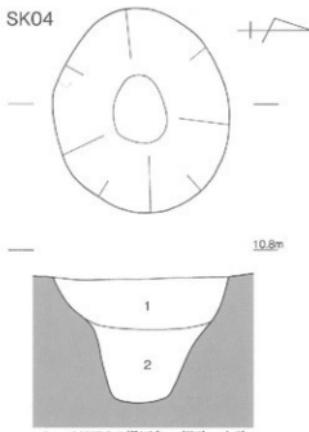
0 20m

中①B・C区平面図

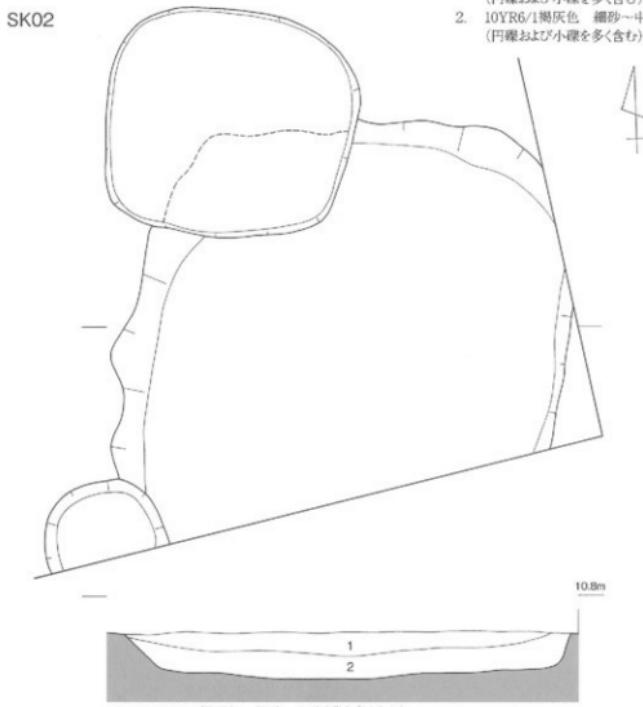
図版14
中①B・C区



1. 2.5Y4/1黄灰色 細緻砂～細砂(マンガン粒を多く含む)
2. 2.5Y4/2消灰黄色 細緻砂(明黄褐色土鉱を多く含む)
3. 2.5Y5/3黄褐色 細緻砂～細砂

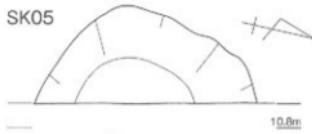


1. 10YR5/1褐灰色 細砂～中砂
(円礫および小礫を多く含む)
2. 10YR6/1褐灰色 細砂～中砂
(円礫および小礫を多く含む)

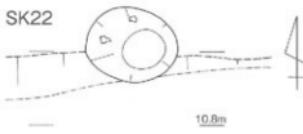


1. 7.5YR5/1褐灰色 細砂～中砂(礫を多く含む)
2. 2.5Y5/1黄灰色 中砂～粗砂

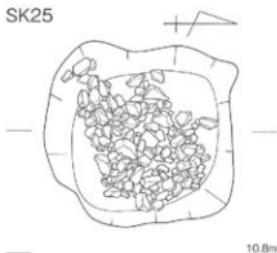
0 2m



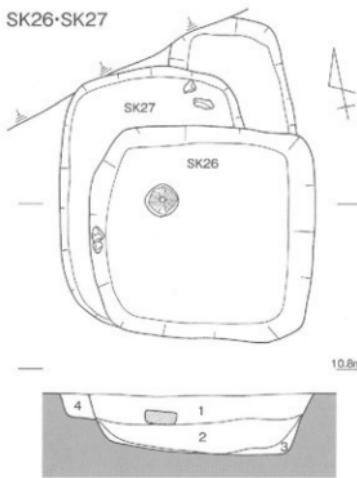
1. 25Y5/2深黄灰色 植物染→中砂(漆をわざかに含む)
 2. 25Y5/3(2)5-1黄色 植物染→中砂(漆をわざかに含む)
 3. 5Y4/1灰色 裸染→中砂
 4. 25Y5/3黄色 塗装→中砂
 5. 10Y4/1灰色 植物染→中砂



- 25YRS/2暗灰黒色 染相細一中形(角部をわずかに含む)
 - 25YRS/3深黒色 染相細一中形(角部をわずかに含む)
 - 30YRS/1褐色/茶色 染相細(太極の色調を各長に含む)

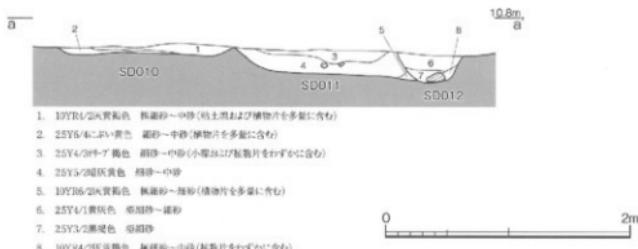


- #### 1. 5Y5/1灰色 粗砂~中砂



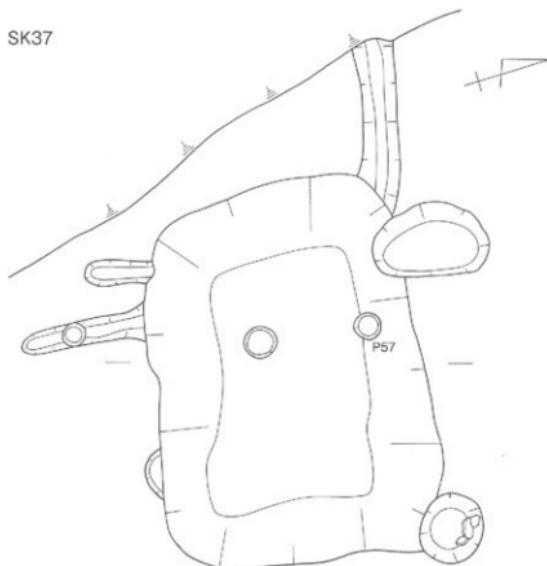
1. 75YR5/1褐色灰色 細砂～中砂
(小理および炭化物をわずかに含む)
 2. 25Y8/1灰白色 細砂～中砂
 3. 10YR6/1暗灰色 相模～中砂
 4. 75YD5/1深灰色 硬砂～中砂

SD10·SD11·SD12

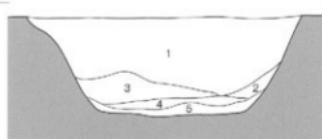


図版16
中①B・C区

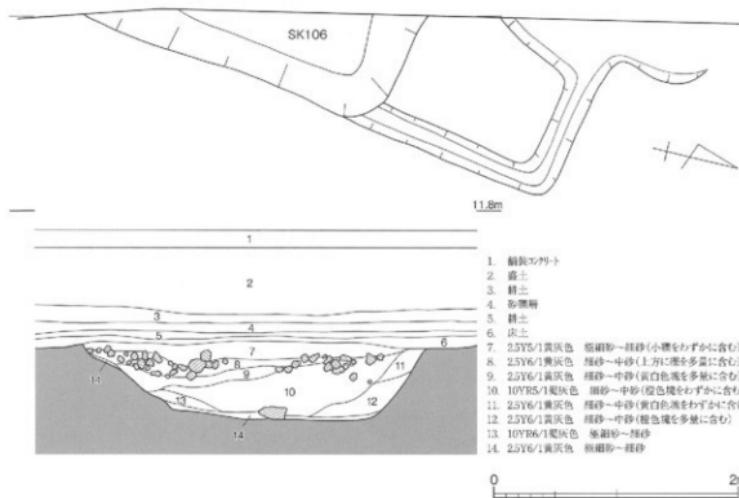
SK37



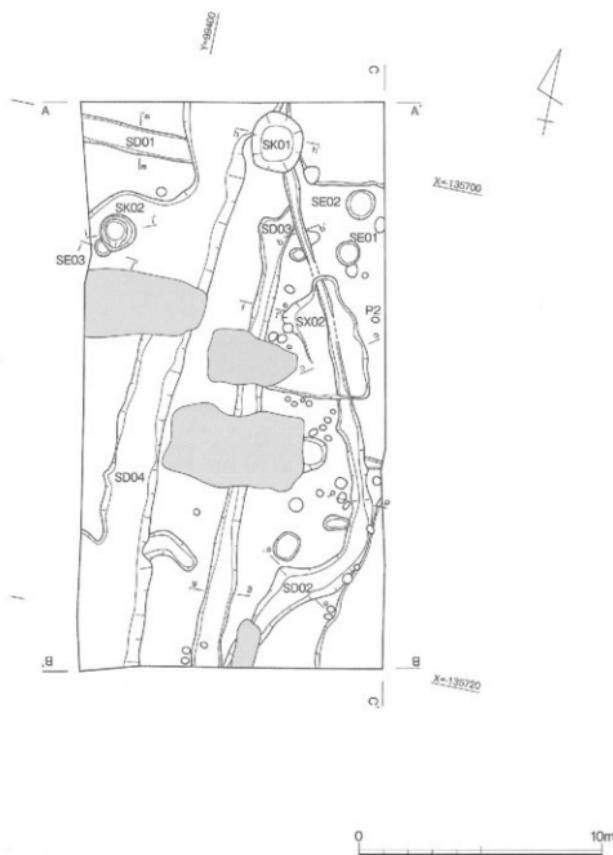
- 10.8m
1. 10YR5/2黄褐色 粗砂～細砂
(1.方に炭を多量に、僅わずかに含む)
 2. 2.5Y6/2K灰褐色 細砂～中砂
(植物片を多量に含む)
 3. 2.5Y6/2K灰褐色 細砂～中砂
(粘土塊および植物片を多量に含む)
 4. 10YR5/6黄褐色 細砂～細砂
 5. 2.5Y6/1黄褐色 粘土層



SK106



中①B・C区遺構③



中②区平面図

図版18
中②区

SD01



1. 7.5Y7/1灰白色 蘆(葦角)混じりシルト 粗砂混じりシルト
2. 5PB6/1青白色 粗砂層

SD02



1. N5/ 灰色 細砂混じりシルト(瓦器破片含む)
2. 砂疊
3. 5B6/1青灰色 粗砂混じり層

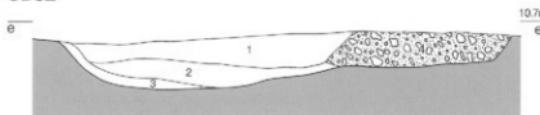
1. N5/ 灰色 中砂混じりシルト
2. N6/ 灰色 粗砂混じりシルト

SX02



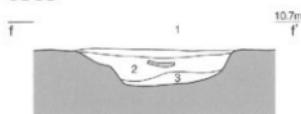
1. 5Y5/1灰色 粗砂混じりシルト(SX02埋土)江戸18c~(新)
2. 7.5Y6/1灰色 シルト質細砂(SD02埋土)江戸初17c(H)

SD02



1. N5/ 灰色 粗砂~礫混じりシルト
2. N5/ 灰色 細砂混じりシルト
3. 7.5Y7/3浅黄色 磨層+砂
4. N6/ 灰色 磨混じりシルト

SD03



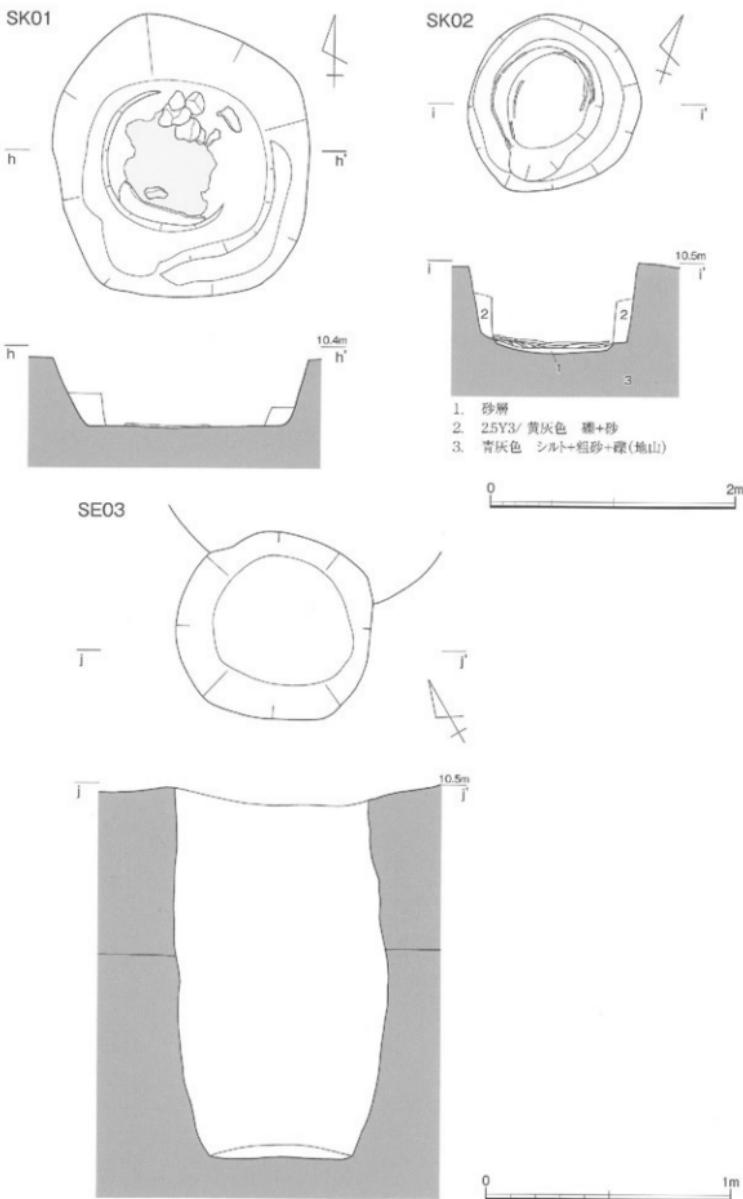
1. 25Y5/1黄灰色 粗砂混じりシルト
(瓦質鍋の破片出土)
2. N7/ 灰白色 シルト質中砂
3. 砂疊 粗砂~礫



1. 5B6/1青灰色 中砂混じりシルト
2. 7.5Y6/1灰色 細砂混じりシルト
3. 7.5Y7/3浅黄色 直径30cmの大の磨+砂

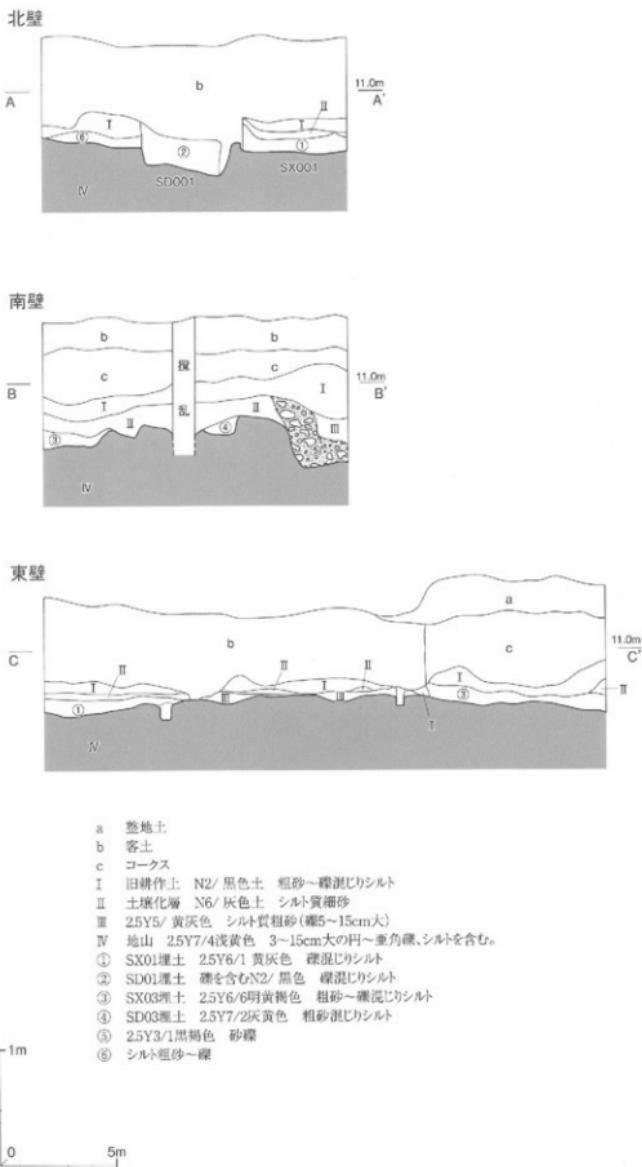


中②区土層断面図



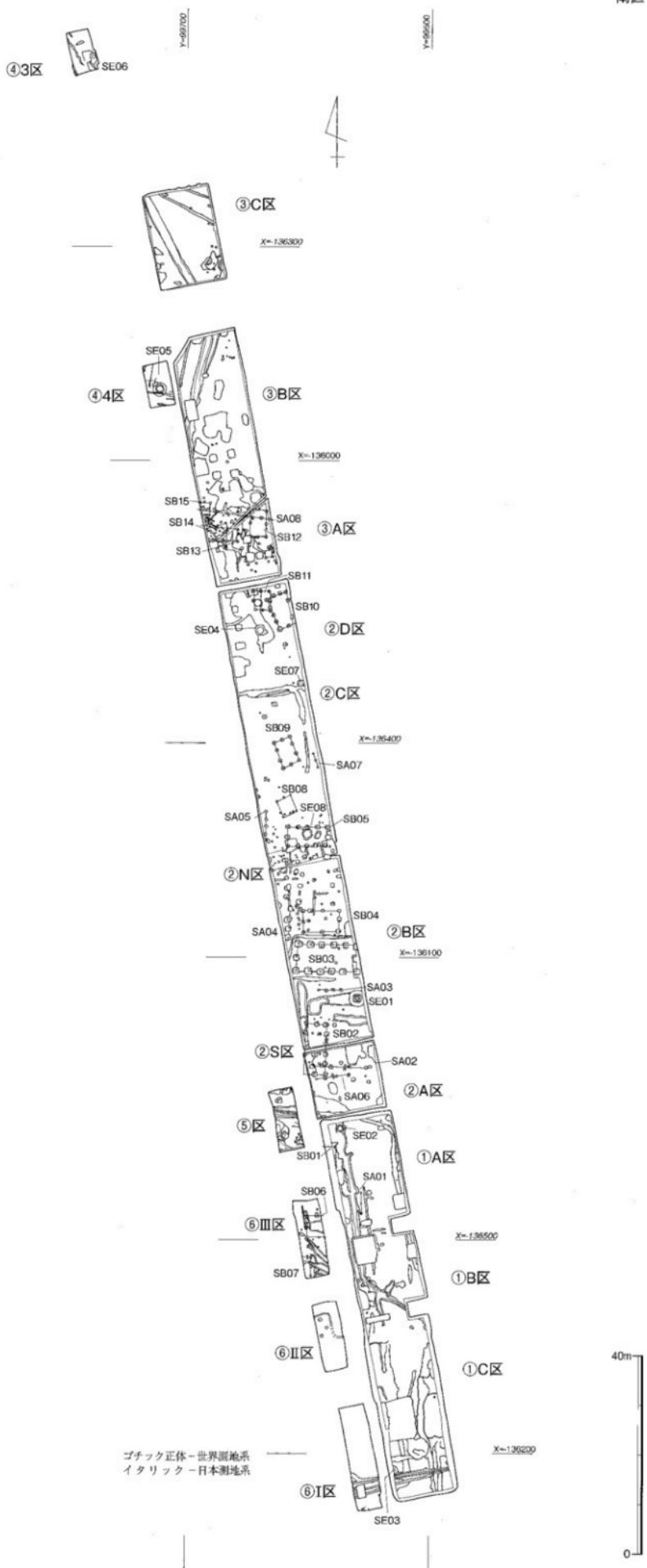
中②区遺構

図版20
中②区



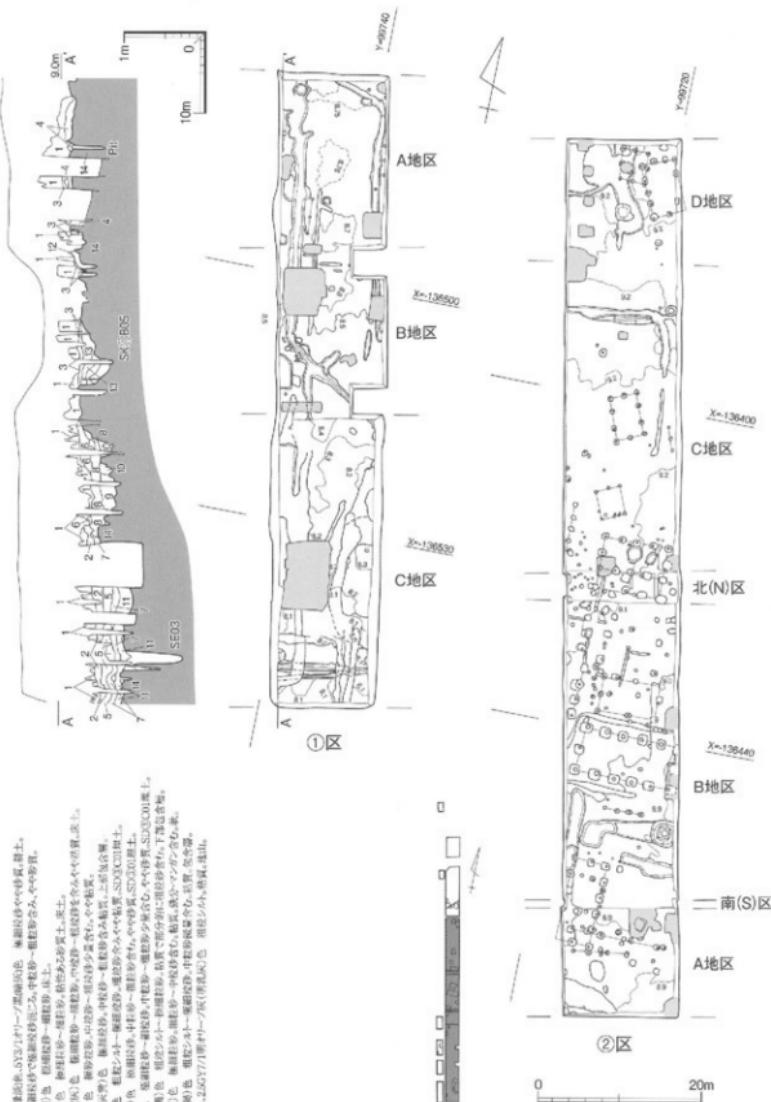
中②区土層断面図

図版21
南区



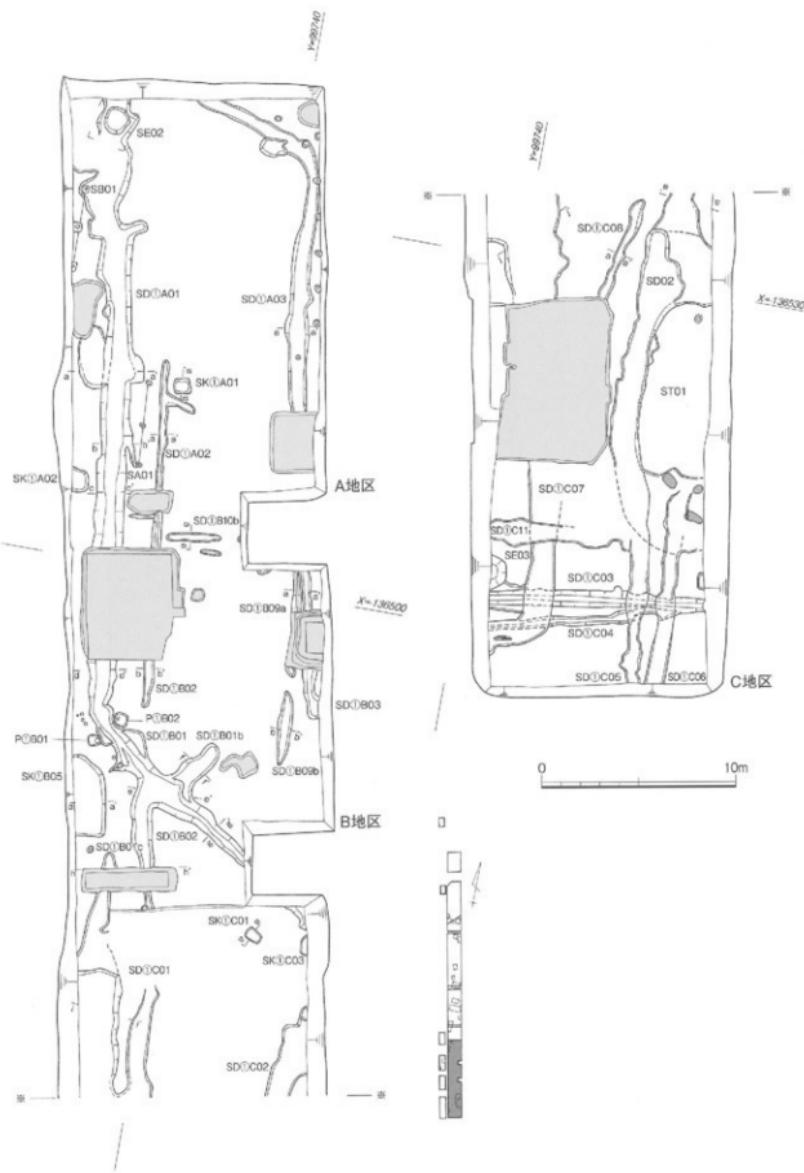
南区遺構全体図

図版22
南①・②区

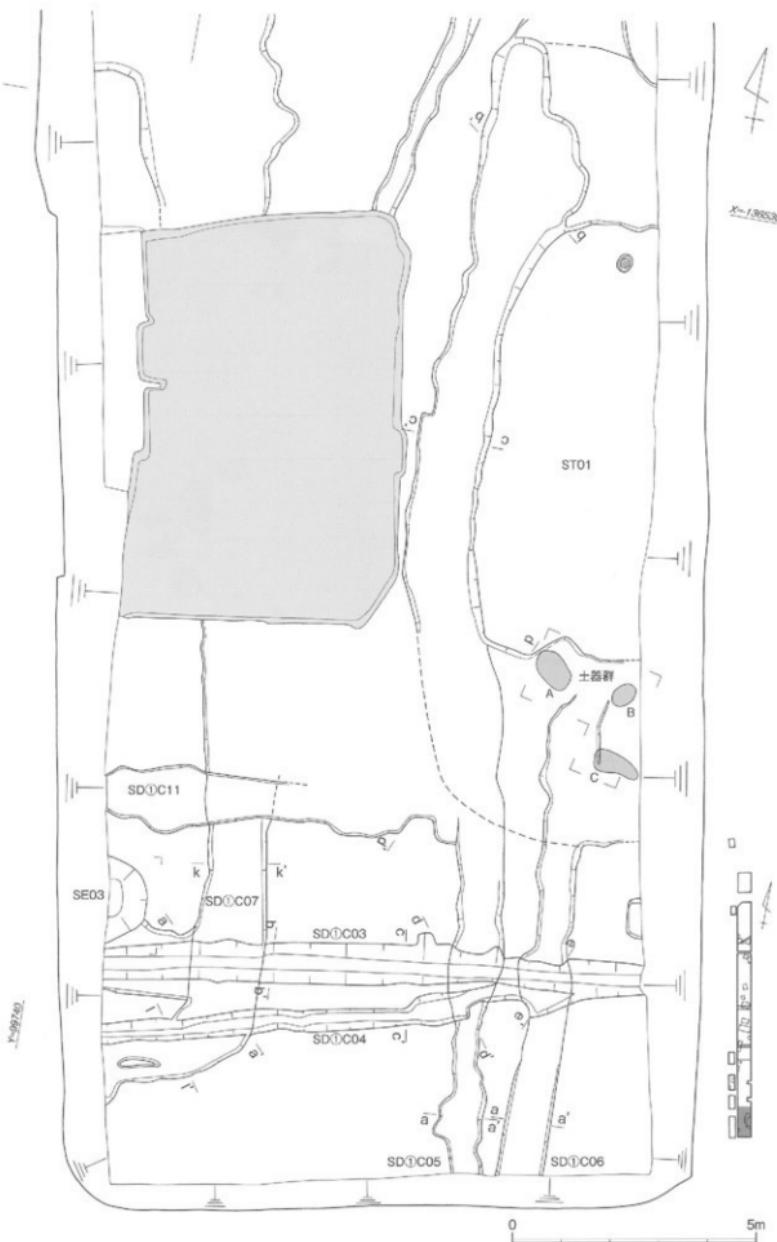


南①・②区構造全体・土層断面図

図版23
南①区

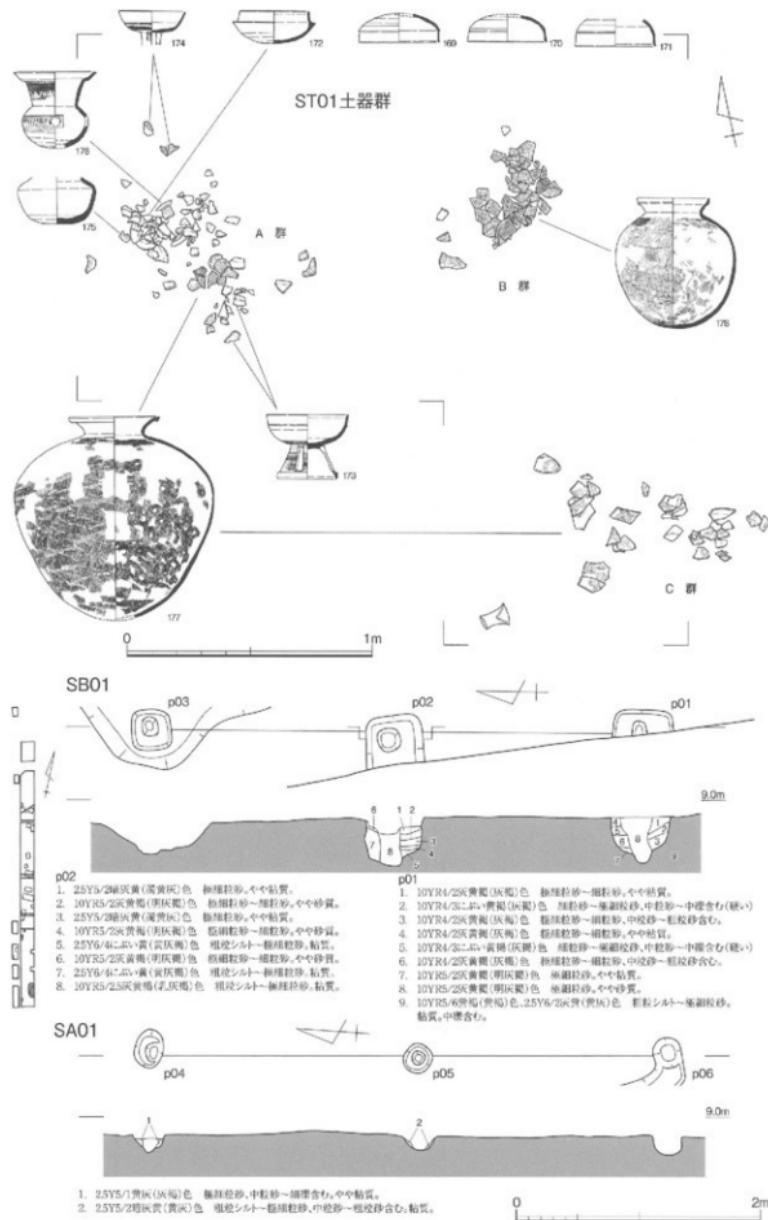


南①区遺構全体図

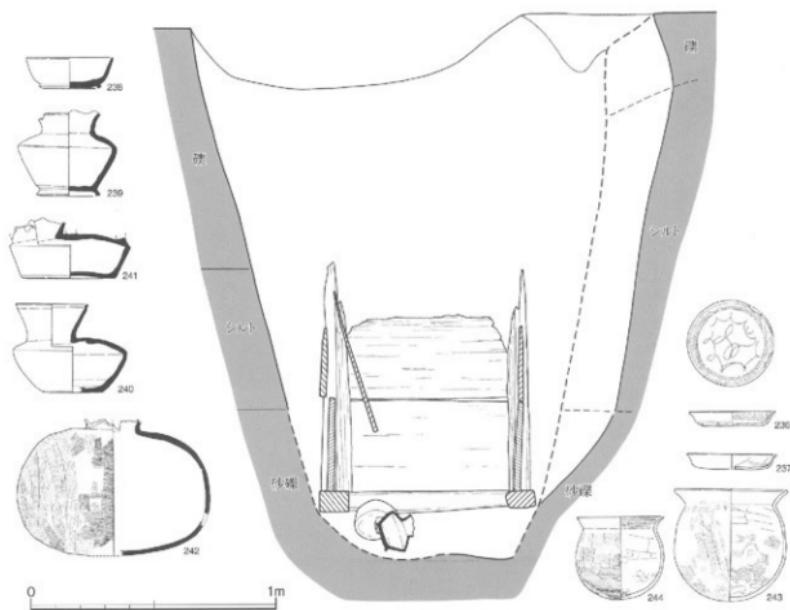
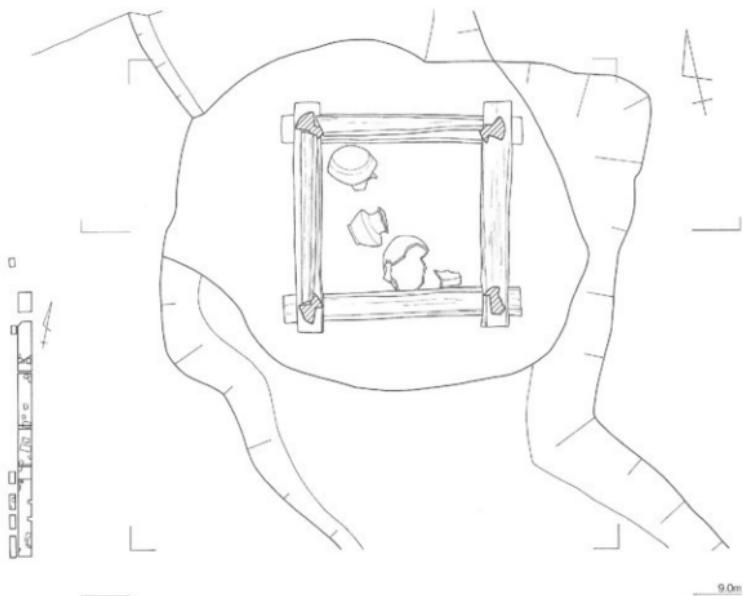


南①区南部

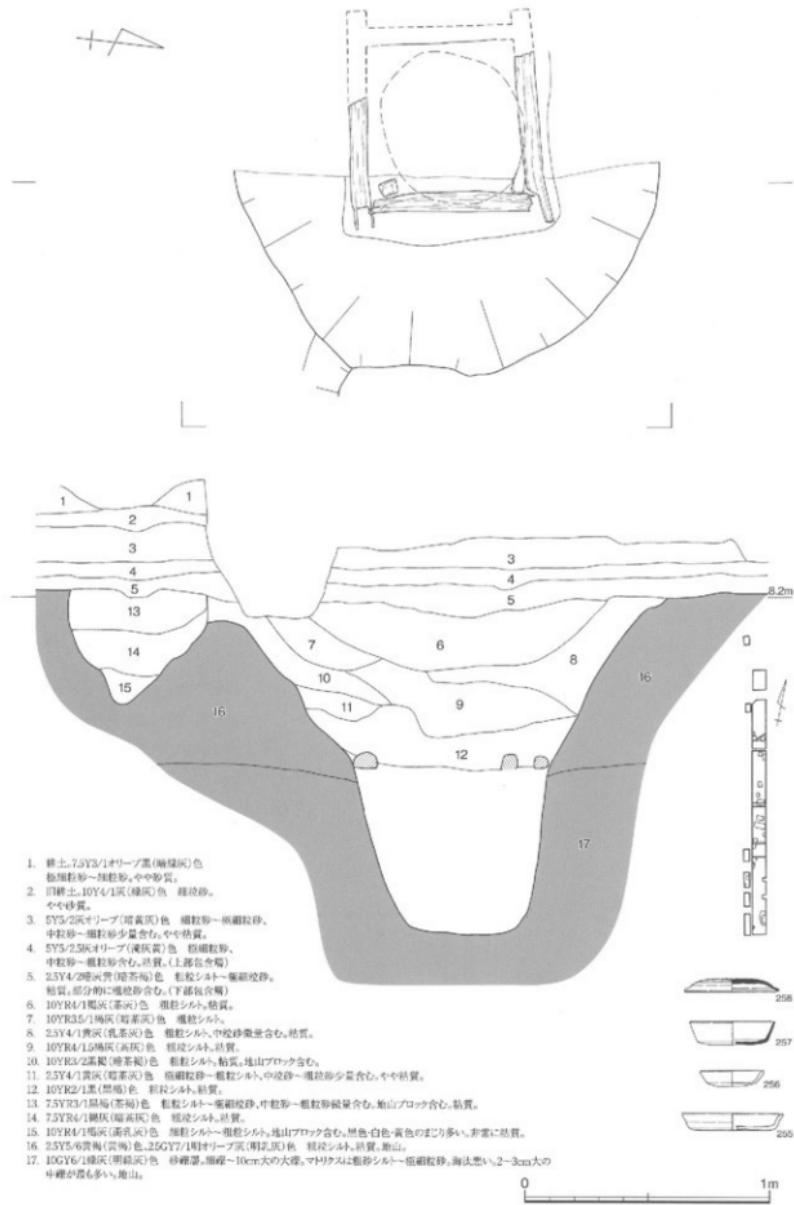
図版25
南①区



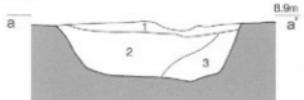
図版26
南①A区



南①A区SE02



SK①A01



1. 25Y5/3黄褐(黄灰)色 垂粗粒砂—细粒砂、中粒砂—粗粒砂含む。やや砂質。
 2. 10YR4/1褐灰(暗灰褐)色 细颗粒砂、中粒含む。やや粘質。
 3. 35Y5/2(灰土)一帯(灰绿)色 粗粗粒砂、中砾多く含む。粘質。

SK①C01



1. GY4/1灰(灰褐色)色 シルト質粘泥細颗粒。1cm大塊の塊山。ブロック含む。肥沃。
 2. 25SY1/1黄赤(乳白色)色 粘土細颗粒。1cm大塊の炭を多量に含み、肥沃状態。浜も混じる。燒土少量混じる。
 3. GY5/1灰(灰褐色)色 植生細颗粒。細粒シルトで砂礫混じる。砂礫山を断面多く含む。肥沃。

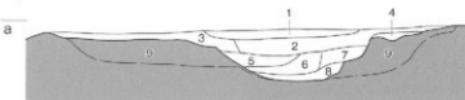
SK①B05



1. 2SY4/18黄灰(灰褐色)色 細粒砂で墨細粒砂混じる、中粒砂～粗粒砂含む。砂質。
 2. 5Y2/1黑(黑褐色)色 粗粒シルト～粗粒粒砂、中粒砂微量含む。粘質。
 3. 2c. 亂出山地が多く混じたもの。粘質。
 4. 5Y3/24リチャード(暗褐色)色 粗粒シルト～墨細粒砂、中粒砂混じる。粘質。

0 50cm

SD①A01



1. IYWA「貴人萬葉」(萬葉)也。御經御經、中御座—般經神也。やや貴氣。

2. IYURIS「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—尼御坐も。やや御氣。

3. IYUWA「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。

やや貴氣。土上御靈(土上翁)

4. IZYU「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。やや貴氣。

5. IZYU「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。土上翁也。やや貴氣。

6. IZYU「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。

6-0御經御經の神也。やや貴氣。やや御氣。神事は少ない。

7. IYU「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。土上翁也。やや貴氣。

IYU「夷祖」(夷祖)也。御經御經、中御座—般經神也。也實。

SD①A01



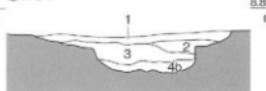
1. EYS-25(ヨリツ)イエヌエス・ヨリツ
細胞膜-細胞膜。
 2. シナ-チ-モウ
細胞-細胞質含む。やがて細胞、別に小脳。
 3. YOKE-CHI-RO
細胞-細胞質含む。細胞内-細胞膜細胞質含む。
 4. SYNS-CHI-RO
細胞膜-細胞膜。
 5. CHI-RO
細胞膜-細胞膜。
 6. CHI-RO-CHI-RO
細胞膜-細胞膜-細胞膜。
 7. CHI-RO-CHI-RO-CHI-RO
細胞膜-細胞膜-細胞膜-細胞膜。
 8. SYNS-CHI-RO-CHI-RO
細胞膜-細胞膜-細胞膜-細胞膜。
 9. YOKE-CHI-RO-CHI-RO
細胞膜-細胞膜-細胞膜-細胞膜。

SD①A01



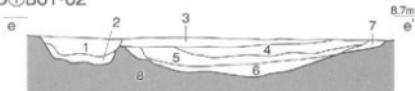
- 5Y4/1灰褐色 細粒砂から粗粒砂(埴生土)。やや貧質、中砂粒少量含む。やや硬い。
 - 3GY5/14栗褐色 粗粒砂→板状膠結(シルト質粘土)。やや貧質、やや軟らかい。
 3. 25GY/2灰黃色 粗粒砂→細粒砂+一些砂少量化(合土土)。鐵分高、土壌含む。やや貧質。
 - 4a. 25Y5/2栗黃色 鉛錫4.2で施肥後少量混入(シルト質粘土)。粘質。
 - 4b. 10YR4/1褐灰色 氮化物及び灰を含む。粗粒シルト(埴生土)。粘質。

SD ① B01



-

SD1B01-02



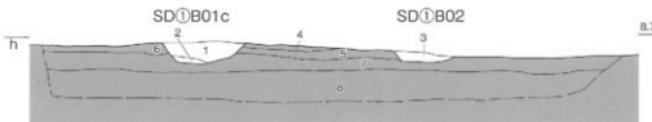
1. 5V4.5/1₂(K)色 錠鉄板で張継鉄板混じり、中央砂少々含む。やや黒質。
 2. 2574/1₂(K)色(鉄) 錠鉄シルバー・張継鉄板、中砂微混含む。軽く。
 3. 柱地(黒鉄) ブラック。
 4. 1074/1₂(K)色(黒鉄) 板状鉄板、中砂粒、中砂粒+細粒少量含む。やや黒質。
 4. 1073/1₂(黒鉄) (高錨高) 錠鉄粒+細粒混含、中砂微混含む。やや黒質。
 5. 2575/1₂(黒鉄) (黒鉄) 錠鉄板+細粒、中砂微混含む。やや黒質。
 5. 5V3/1₂(海綿鉄) (黒鉄) 錠鉄板+細粒、中砂微混含む。やや黒質。
 7. 2574/2₁(黒鉄) (黒鉄) (錠) 錠鉄シルバー+細粒、中砂微混含む。軽く。
 8. 細粒質(黒鉄の真質部)。
 9. 2575/6₁(黒鉄) (黒鉄) 錠鉄シルバー+細粒、中砂微混含む。軽く。

1. 10YR3/2 中行形少



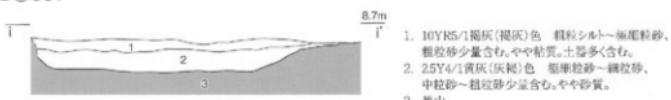
1. 10YN3/2黒櫻(蒸桺)色 梱継粒砂、中粒砂少量含む。やや粗質。
 2. 25Y4.5/1真灰(蒸霧灰)色 粗粒シルト—
板継粒砂、中粒砂少量、粗粒砂微量含む。粗質。

図版29
南①区



1. 10YR3/2黒褐(赤褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。硬い。
2. 25Y3/1黒褐(淡灰褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。硬い。
3. 5Y4/1.5C(羽根褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。
4. 25Y4/2灰灰黄(黄黄褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。
5. 25Y4/1黄灰(灰灰褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。
6. 5Y6/2灰モリーブ(明灰灰)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや粘質。
7. 10Y4/1灰(暗青灰)色、25Y5/6黄褐(黄褐)色 植生シルト~植生粒砂、中粒砂少量含む。粘質。地山。
8. 10GY5/1緑灰(灰灰)色、25Y5/6黄褐(黄褐)色 植生シルト~植生粒砂、中粒砂少量含む。粘質。地山。

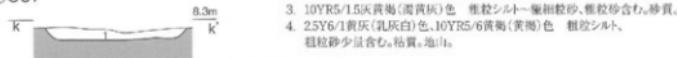
SD①C01



SD①C01

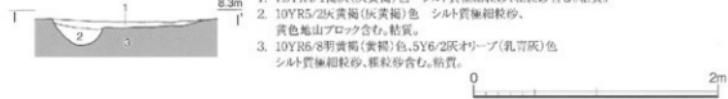


SD①C07



1. 10YR3/2黒褐(黒褐)色 粗粒シルト、粗粒砂微量含む。粘質。

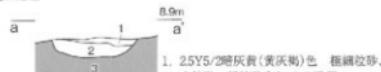
SD①C07・04



1. 7.5YR4/1褐灰(灰黄褐)色 シルト質細粒砂、粗粒砂含む。粘質。
2. 10YR5/1褐灰(灰褐)色 シルト質細粒砂、粗粒砂含む。粘質。
3. 10YR5/1灰灰黄(黄白灰)色 植生シルト~植生粒砂、粗粒砂含む。粘質。
4. 25Y6/1灰灰(乳灰白)色、10YR5/6黄褐(黄褐)色 粗粒シルト、粗粒砂少量含む。粘質。地山。

0 2m

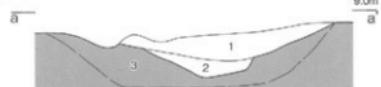
SD①A02



1. 25Y5/2灰灰黄(黄灰褐)色 植生粒砂、中粒砂少量含む。やや砂質。
2. 10YR5/2灰灰褐(灰褐)色 シルト質細粒砂、粘質。
3. 5Y5/3灰モリーブ(灰褐)色 粗粒シルト~植生粒砂、粗粒砂微量含む。やや粘質。

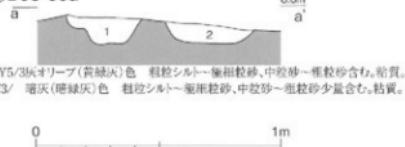
3. 地山

SD①A03



1. 5Y4S/1灰(灰)色 植生粒砂~粗粒砂、中粒砂少量含む。やや砂質。
2. 7.5Y4/1灰(緑灰)色 植生粒砂~中粒砂少量含む。植生粒砂は粘質。
3. 10Y4/1灰(緑灰)色 砂層、中粒砂~大粒、マトリクスは細粒砂。地山。

SD①B03・09a



1. 5Y5/3灰モリーブ(黄灰)色 粗粒シルト~植生粒砂、中粒砂少量含む。粘質。
2. N3/ 灰(緑灰)色 植生シルト~植生粒砂、中粒砂少量含む。粘質。

0 1m

SD①B02



1. 25Y5/6黄褐(黄褐)色、5Y4S/1灰(灰)色 粗粒シルト~植生粒砂。粘質。

0 2m

SD①B09b



1. 5Y5/3灰モリーブ色 植生粒砂。

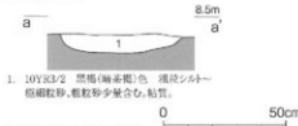
0 2m

SD①B10b



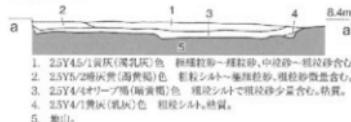
1. 5Y4/2灰モリーブ色 植生砂堆土。
2. 5Y7/8黄色粘土粒を含む。植生粒砂。中粒砂少量含む。

SD①C08

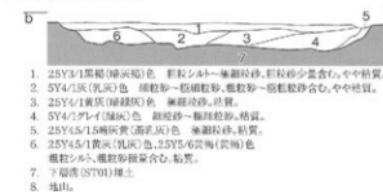


0 50cm

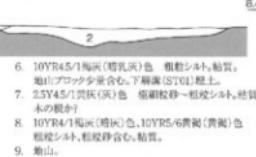
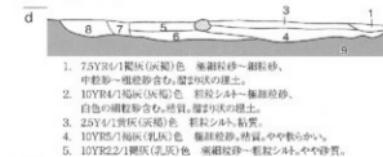
SD①C02



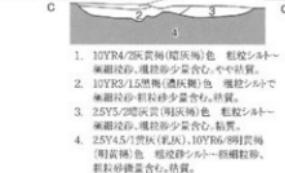
SD①C02(ST01)



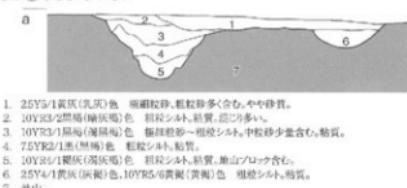
SD①C02(ST01)



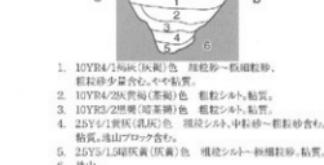
SD①C02(ST01)



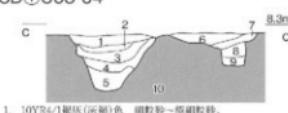
SD①C03-04-07



SD①C03



SD①C03-04



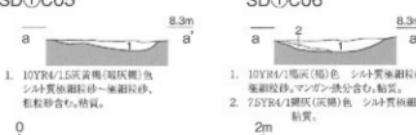
SD①C03-04-05



SD①C03-04-06

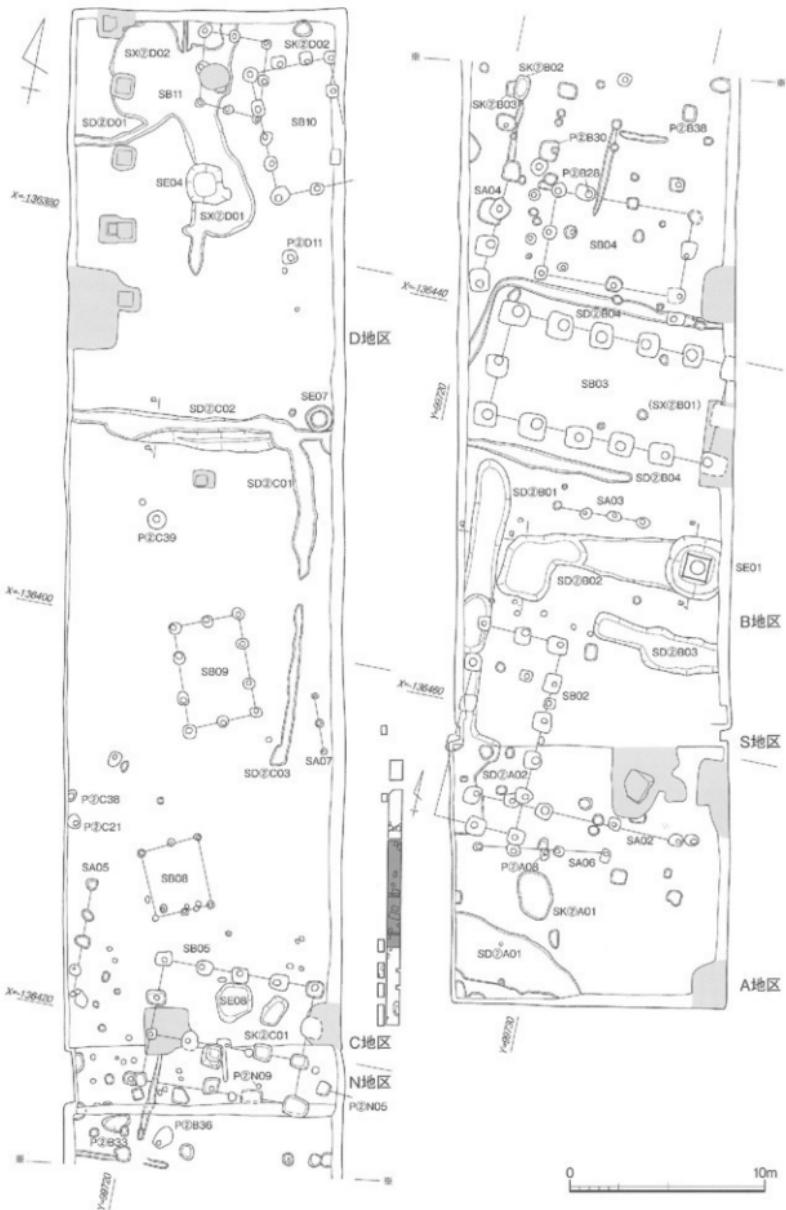


SD①C05

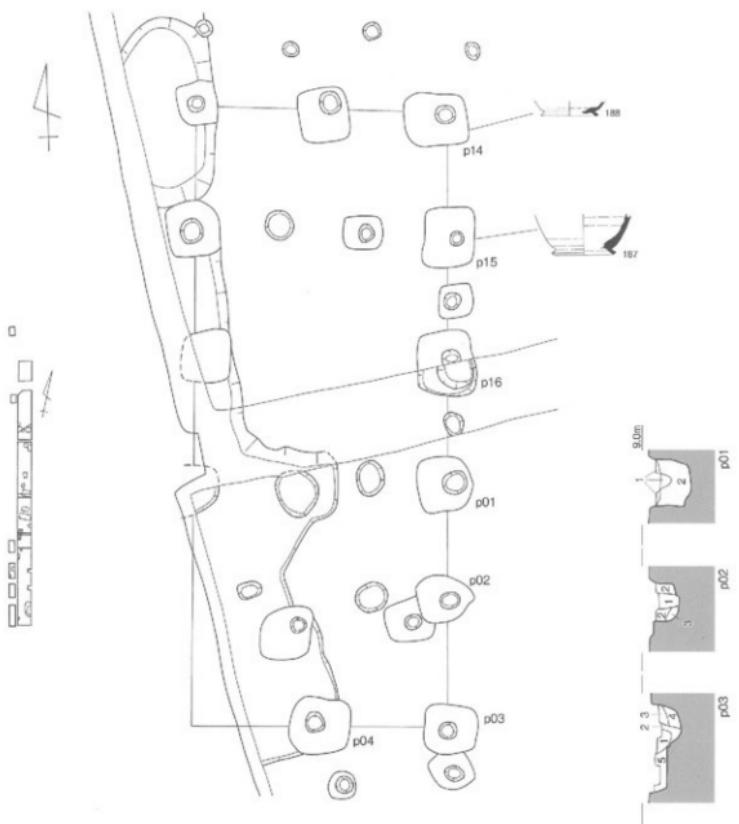


0 2m

図版31
南②区



南②区遺構全体図



p01

1. 10YR6/1褐色灰色 壁面砂
2. 10YR6/6明黄褐色 シート質板細砂で、7.5YR5/1褐色シート質板細砂が筋状に入る。

p02

1. 10YR5/2K黄褐色 壁面砂
2. 2.5Y7/8黄色 シート質板細砂
3. 2.5Y5/2暗灰黄色 シルト質板細砂

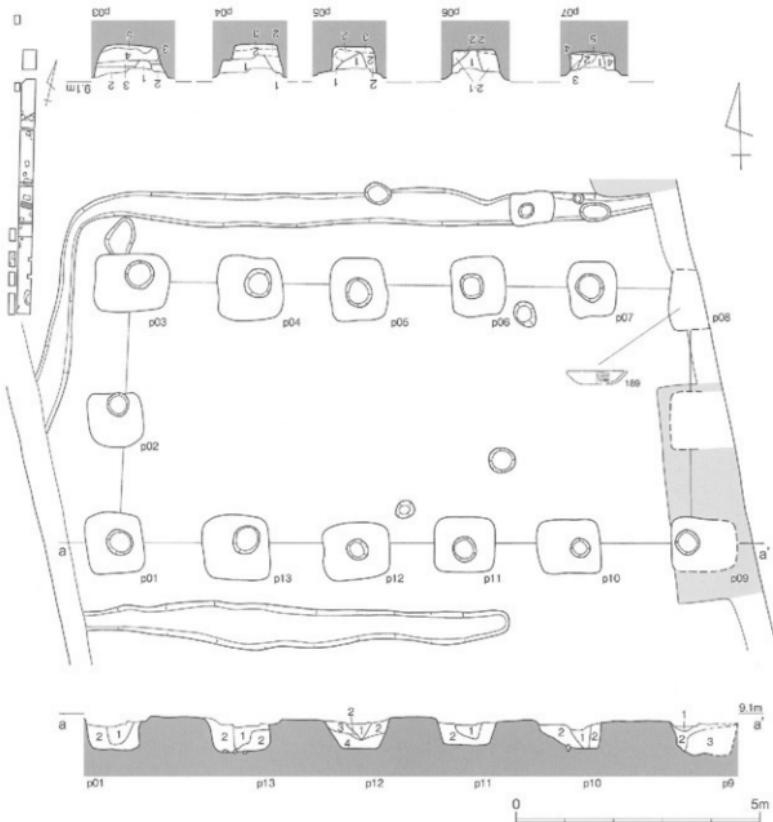
p03

1. 2.5Y5/4暗灰黄色 壁面砂
2. 2.5Y5/1黄色 砂
3. 2.5Y6/4にかい黄色 指細砂(壁面じり)
4. 5Y5/1灰色 壁面砂、青青い壁(壁まる)
5. 2.5Y6/4にかい黄色 磨混じり砂(壁40%)

p04

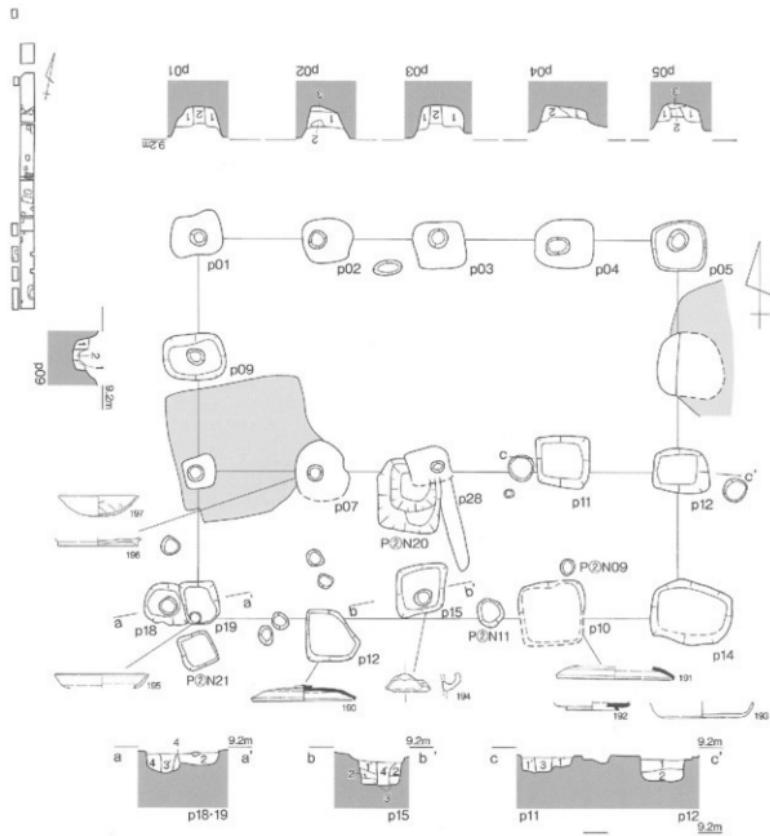
1. 2.5Y3/2灰黄色 壁面砂、土層混じる。
2. 2.5Y5/1灰灰色 壁面砂。

図版33
南②区



- p01
1. 25Y6/4にぶ。・黄色。細砂質2~4cmの大いな複合む。
2. 25Y5/4黄褐色。粗細粒。粘土質2~10cmの大いな複合む。下層が硬い。
p03
1. 25Y3/2灰灰褐色。極細砂。非常に硬い。
2. 25Y7/6明黄色。粗砂混じる。中層混じる。
3. 10YR5/1褐色。粗砂。
4. 10YR7/6明黄色。粗砂質シルト。軟らかく。10YR7/1灰白色。粗細粒。
(硬い)。これら互屢。
5. 25Y6/1灰灰褐色。中層一極細砂。非常に硬い。
p04
1. 25Y6/8赤黃褐色。シルト質粗粒砂。中層混じる。軟らかい。接着性の良さ。
2. 10YR6/1場灰灰褐色。粗砂混じる。灰混じる。硬い。
2. 25Y7/8黄色。粗砂質シルト。硬い。
2. 25Y6/1灰灰褐色。粗細粒。最も硬い。
p05
1. 10YR6/1場灰灰褐色。
2. 10YR5/2灰灰褐色。粗粒砂。
2. 25Y7/8黄色。粗砂質シルト。
2. 25Y6/1灰灰褐色。粗細粒。
p06
1. 10YR6/2灰灰褐色。粗粒砂。
2. 10YR6/1場灰灰褐色。粗粒砂。中層2~8cmの大いな複合む。
2. 25Y6/1灰灰褐色。粗粒砂。

- p07
1. 10YR6/6明黄色。粗細砂。
2. 25Y6/1灰灰褐色。粗細粒。硬い。
3. 25Y7/8黄色。粗砂混じる。
4. 10YR5/2A黃褐色。粗細砂。
5. 25Y6/1灰灰褐色。粗細粒。
p09
1. 25Y3/4灰黃褐色。シルト質粗粒砂。
2. 25Y6/6明黄色。粗粒砂。粘質。
3. 25Y5/1灰灰褐色。25Y5/4にぶ。・黄色。粗細砂。下層は非常に硬い。
p10
1. 25Y6/8赤黃褐色。25Y6/2B灰褐色。粗細砂。
2. 25Y6/3Cにぶ。・黄色。粗細砂。Mn-炭酸沈殿がある。直徑2cmの大いな複合む。硬い。
p11
1. 25Y5/2灰灰褐色。粗粒砂。Mn-炭酸沈殿がある。硬い。
2. 25Y6/3Cにぶ。・黄色。粗細砂。Mn-炭酸沈殿がある。硬い。
p12
1. 25Y6/2灰褐色。粗粒砂。
2. 25Y6/6明黄色。25Y5/3黄褐色。粗細砂。粘質。
3. 25Y5/3黄褐色。粗粒砂。非常に硬い。
4. 25Y5/3黄褐色。粗粒砂。非常に硬い。
※ 1-3Cには直徑2~8cmの大いな複合む。
p13
1. 25Y6/1灰灰褐色。粗粒砂。軟らかく。直徑2cmの大いな複合む。硬い。
2. 25Y6/6赤黃褐色と25Y6/2灰黄色が混じる。粗細粒。直徑2~4cmの大いな複合む。硬い。



p01

1. 25Y6/1灰黄色 シルト。明黄褐色細砂(10YR6/6)と人糞～小穀含む。
2. 10YR6/4にない黄褐色 植縫砂。

p02

1. 10YR6/6弱黃褐色細砂とY6/1灰黄色シルトの混合層。縫合む。
2. 10YR6/4にない黄褐色 植縫砂。
3. 10YR4/3にない黄褐色 植縫砂～シルト。しまりが強い。

p03

1. 25Y5/6黄褐色 植縫砂。穀少量含む。
2. 10YR6/4にない黄褐色 植縫砂。

p04

1. 10YR6/6明黄褐色 中砂～細砂。
2. 10YR6/6明黄褐色 細砂とY6/1灰黄色シルトの混合層。

p05

1. 25Y5/3黄褐色 植縫砂。中砂～小穀含む。遺物を少量含む。
2. 10YR6/4にない黄褐色 植縫砂。穀は①層板は含まない。
3. 25Y6/6明黄褐色 シルト ややしまりが強い。

p09

1. 10YR6/1褐灰色あるいは25Y6/1灰黄色 シルト。明黄褐色細砂(10YR6/6)と大糞～小穀含む。
2. 10YR6/4にない黄褐色 植縫砂。

p11

3. 淡褐色 植縫砂 土器・炭・Mn含む。
- 1'. 黑色 植縫砂。

p12

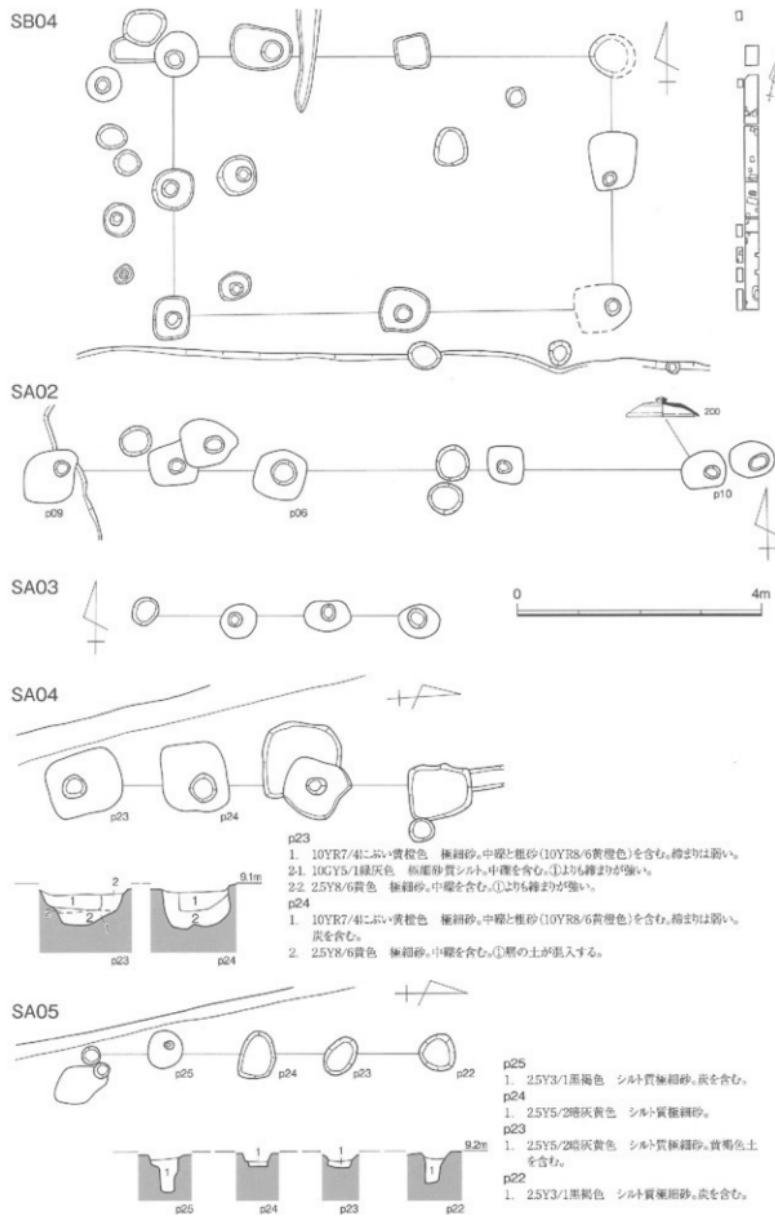
1. 黑色 植縫砂。炭・土器片を少し含む。
2. 黄褐色 細砂凝集・粗縫砂質シルト (大半が地山のブロック)

p14

4. 灰色粘土質。
5. 砂混灰色粘土。

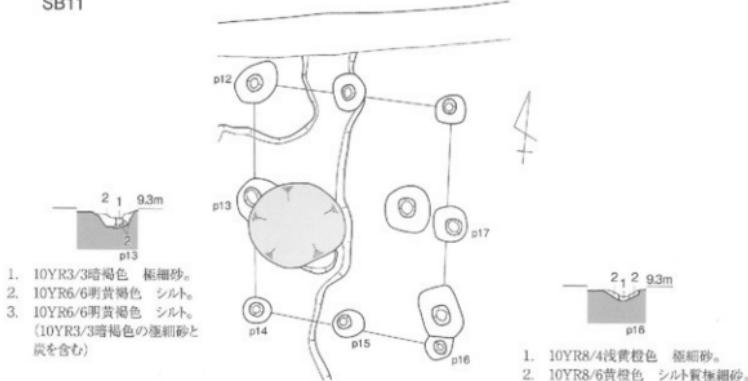
p15

3. 淡褐色 植縫砂。地山の礫(直徑5cm程度)をわずかに含む。
4. 灰色粘土質と地山の黄～黄褐色粘質砂のブロックが地山の礫(直徑5cm程度)を多く含む。土器小片と炭含む。

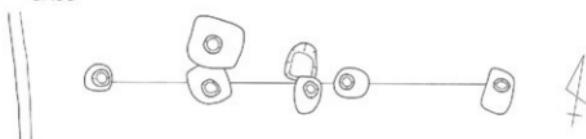


南②A区SA02、B区SB04・SA03・SA04、C区SA05

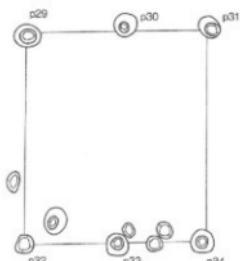
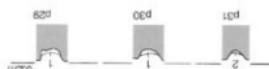
SB11



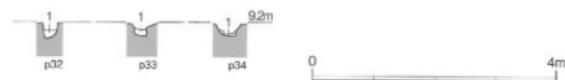
SA06



SB08



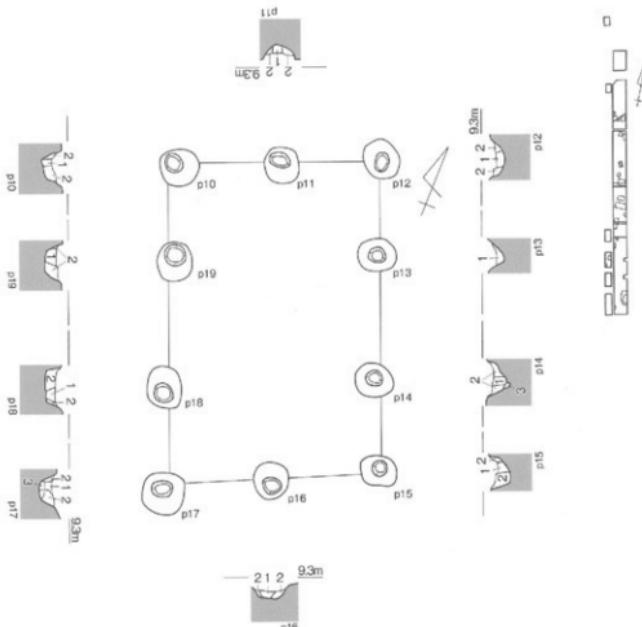
1. 25Y6/2灰黄色 シルト。
2. 1壤土と25Y6/6明黄褐色細砂の混合層。



南②D区SB11、A区SA06、C区SB08

図版37
南②区

SB09



SA07



p10

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。混合物少い。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。灰黄褐色 シルト。(10YR6/2)を含む。礫を含む。

p11

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。灰黄褐色(10YR6/2) シルトを含む。礫を含む。

p12

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。灰黄褐色(10YR6/2) シルトを含む。礫を含む。

p13

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。灰を少量含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 粘質土。礫と灰黄褐色(10YR6/2) シルトを含む。

p14

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。灰を少量含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。

p15

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。

p16

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。灰黄褐色(10YR6/2) シルトを含む。礫を含む。

p17

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。
3. 10YR6/6明黄褐色 シルト。灰黄褐色(10YR6/2) シルトを含む。やや粒状が強い。

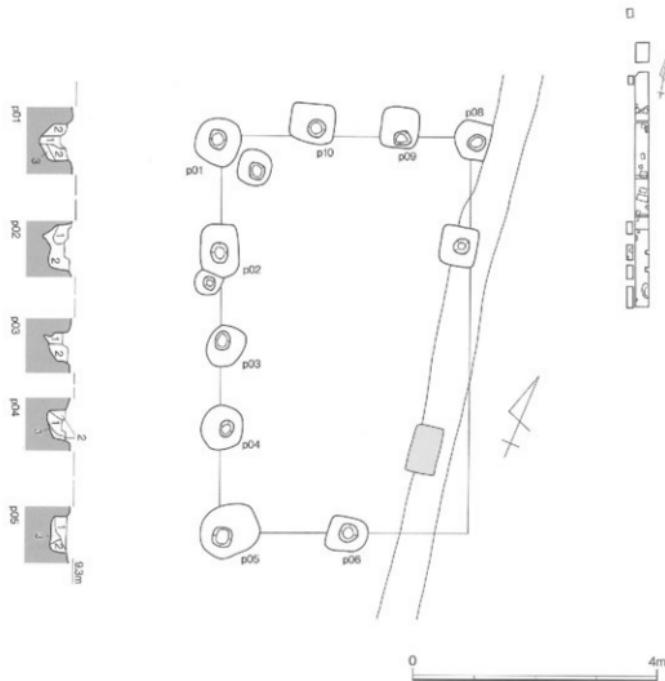
p18

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルトと10YR6/6明黄褐色 シルトの混合層。
2. 10YR6/6明黄褐色 シルト。

大礫含む。

p19

1. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6)細繊維を含む。
2. 10YR6/2灰黄褐色 シルト。明黄褐色(10YR6/6) シルトを極少量含む。(2層の方が上層より明黄褐色上の混入が少ない)



p01

1. 灰色 極細砂。
2. 黄褐色、黒褐色 極細砂。
3. 灰色 シルト質極細砂（地山）

p02

1. 10YR8/6黄褐色 シルト質極細砂。（締まりなし）
2. 2.5Y5/1灰色 極細砂。（硬い）

p03

1. 10YR8/2灰白色 極細砂。
2. 10YR8/3浅黄褐色 シルト質極細砂。

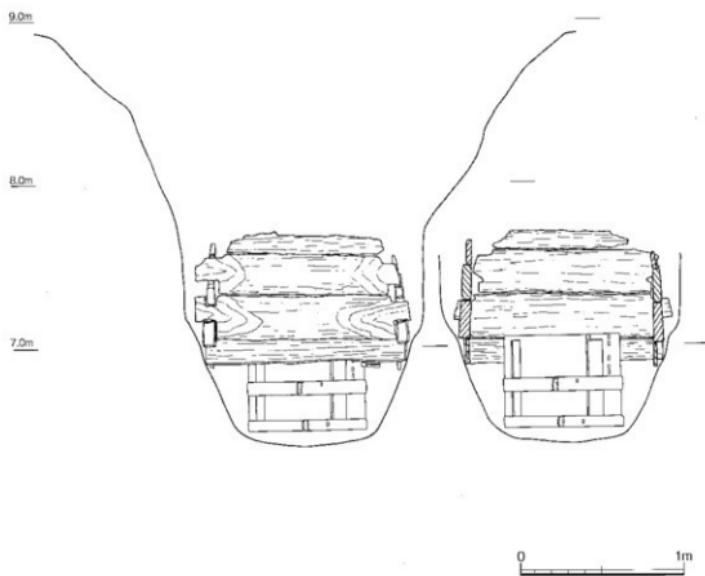
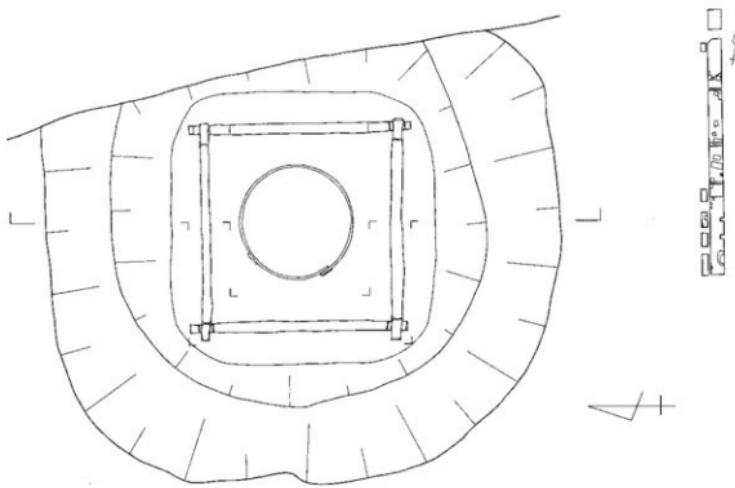
p04

1. 10YR6/2灰黄褐色 極細砂。炭混じる。
2. 2.5Y6/2灰黄色 極細砂。
3. 10YR7/3にかい黄褐色 極細砂質シルト（地山含む）

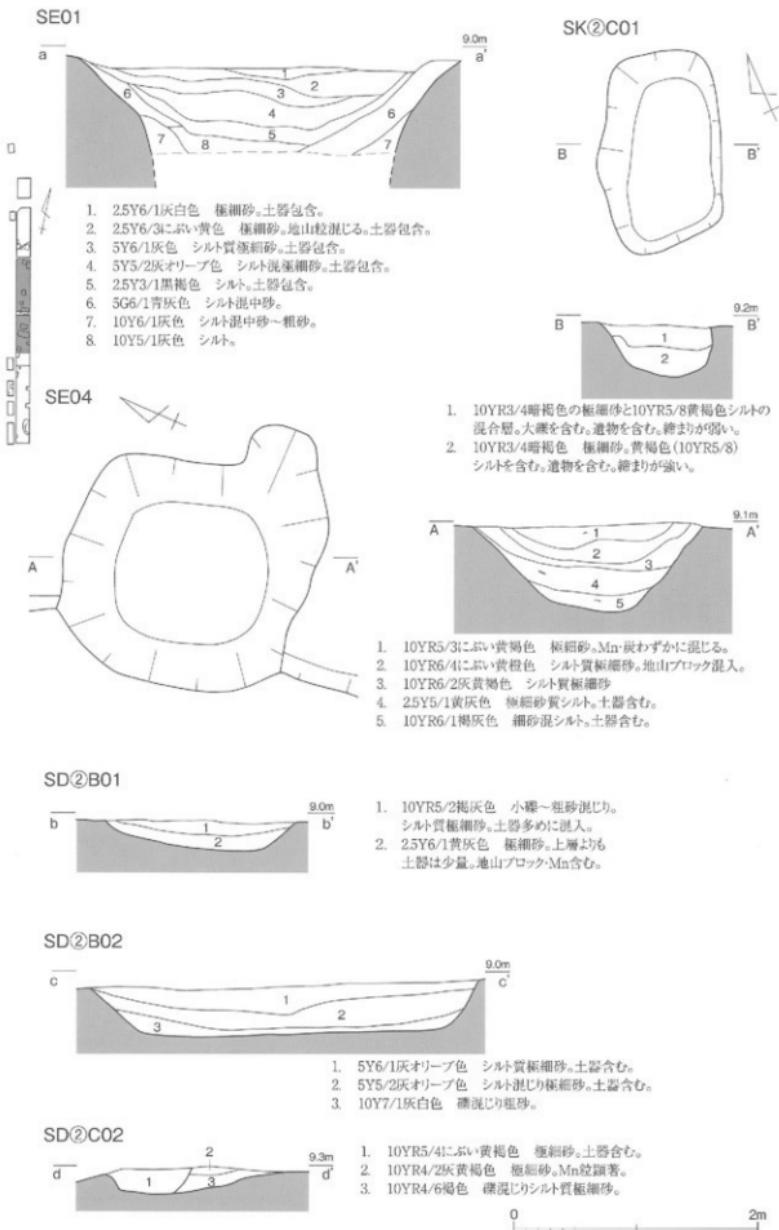
p05

1. 10YR3/2黒褐色 極細砂。一部は2.5Y7/4浅黄色 極細砂シルト。
2. 2.5Y6/2灰黄色 極細砂。
3. 2.5Y7/4浅黄色 極細砂質シルト。一部に黒褐色の極細砂。非常に硬い。

図版39
南②区

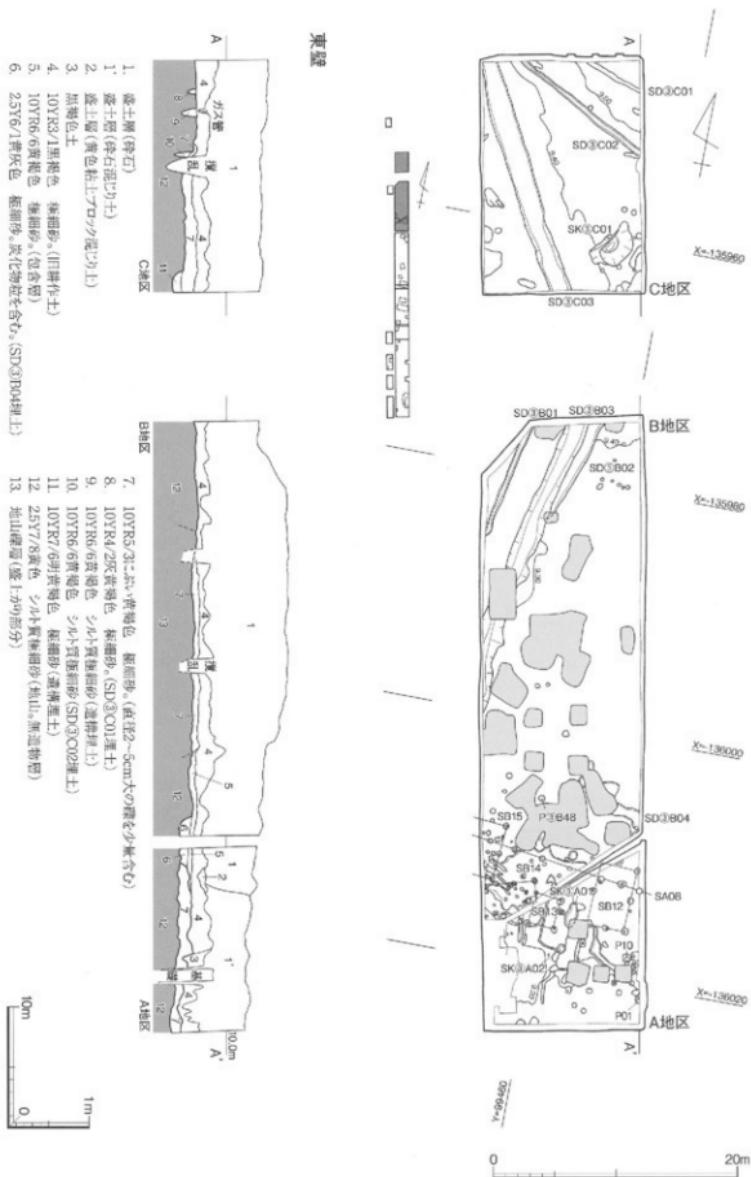


南②B区SE01

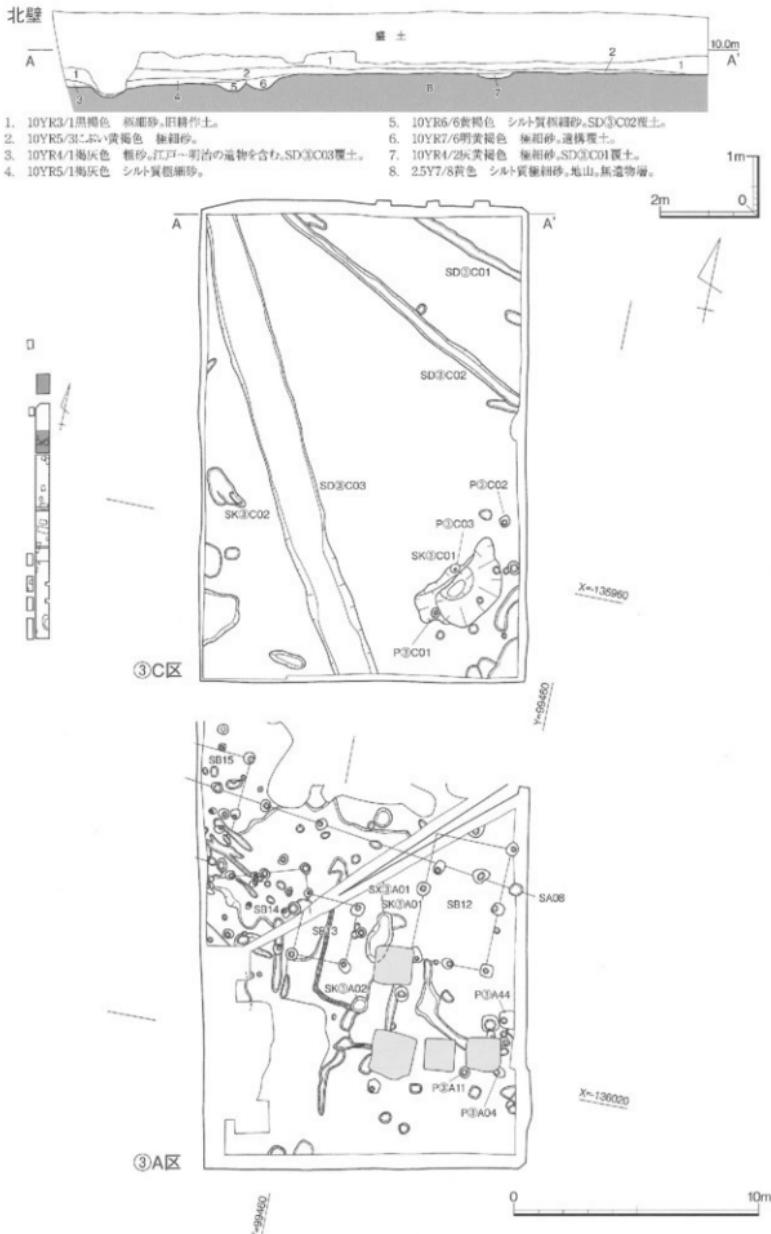


南②B区SE01、SD②B01・02、SD②C02、D区SE04、SK②C01

図版41
南③区

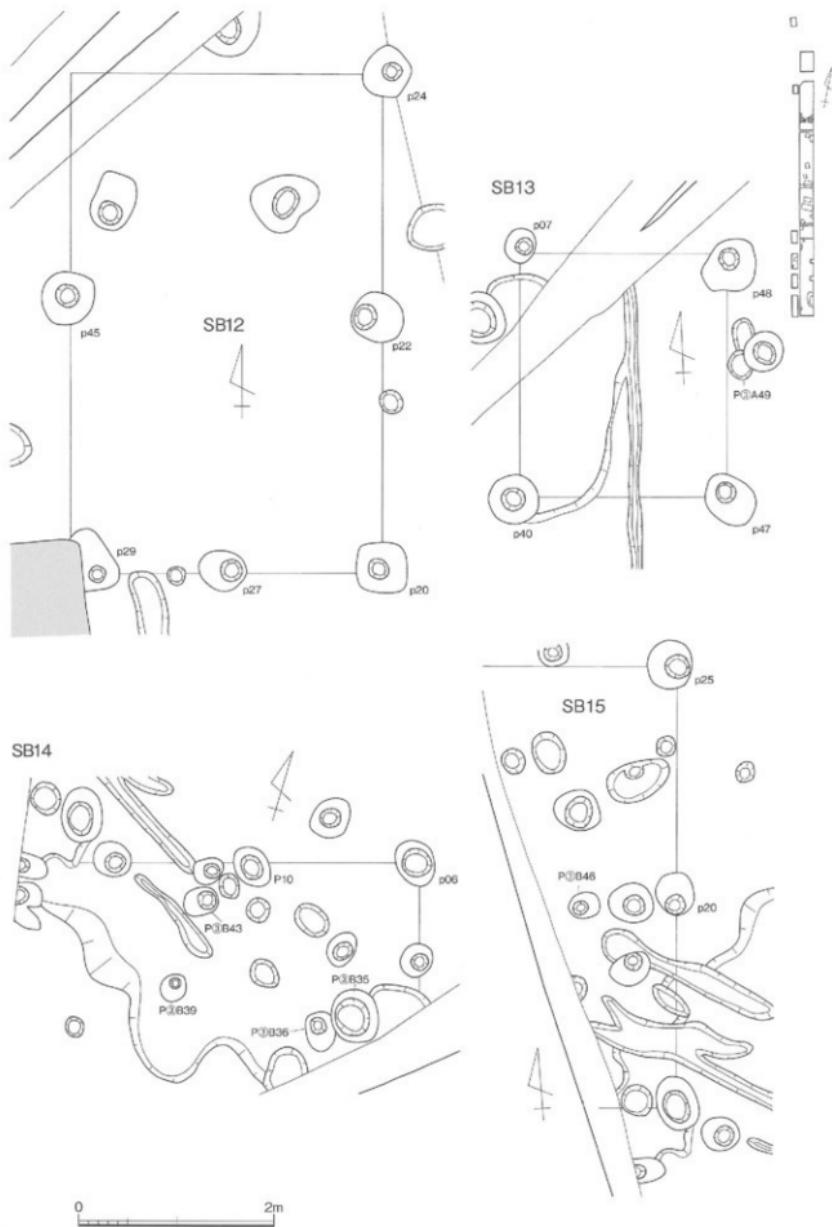


南③区遺構全体・土層断面図



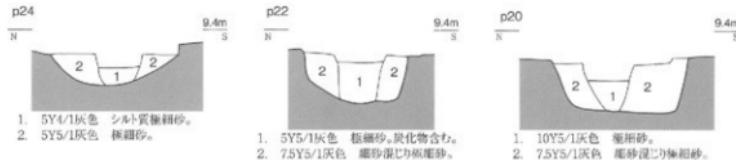
南③区主要部遺構平面・土層断面図

図版43
南③区

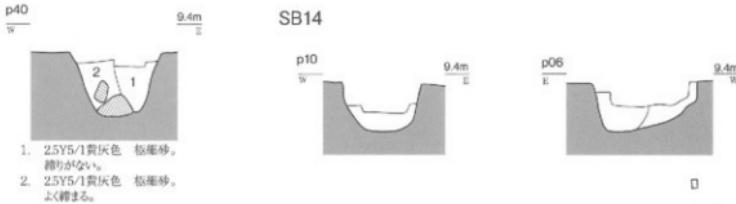
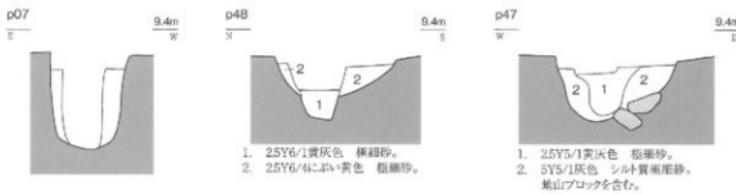


南③区建物跡平面図

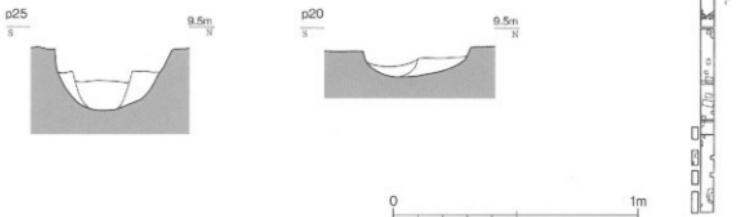
SB12



SB13

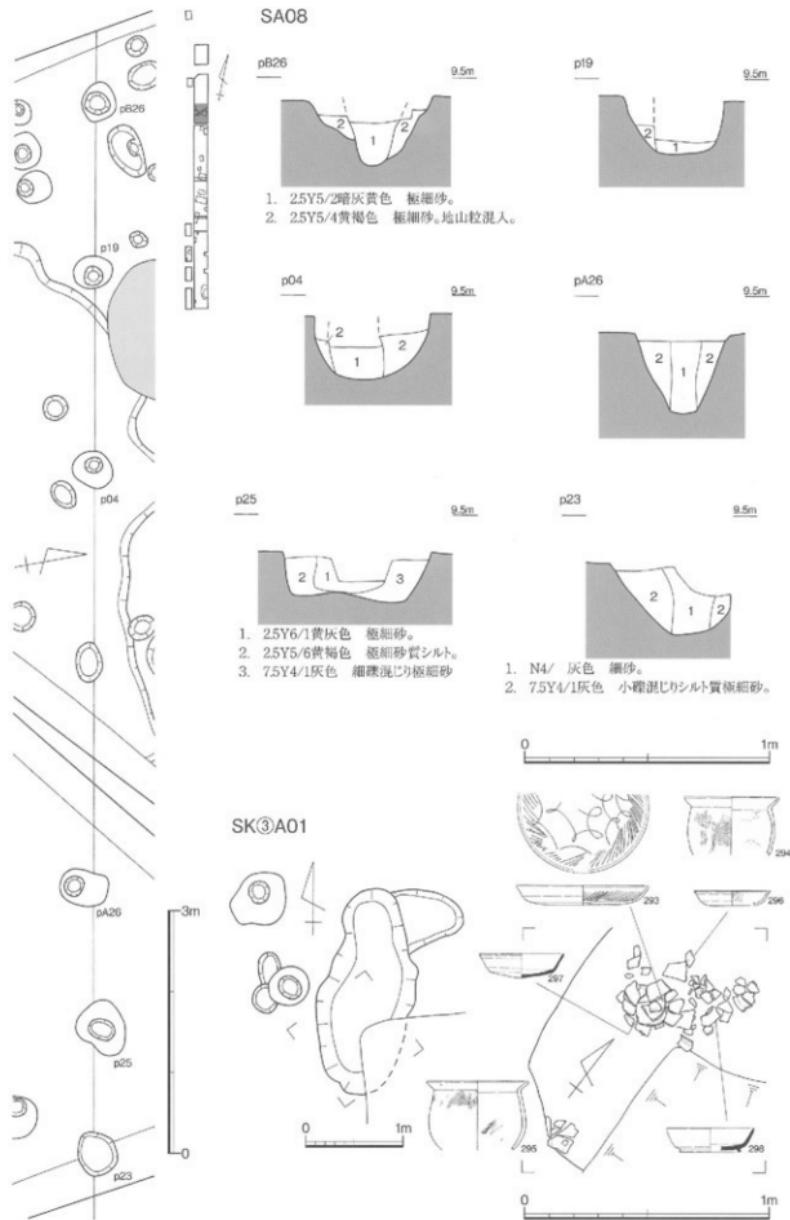


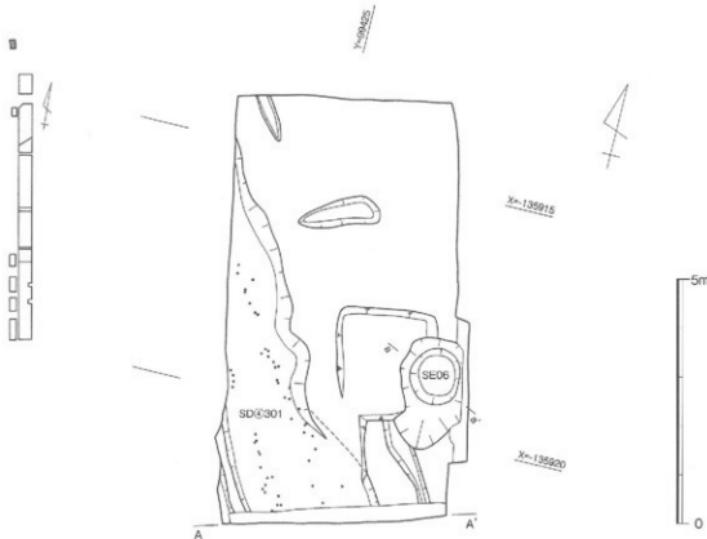
SB15



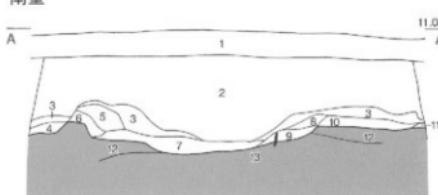
南③区建物跡柱穴土層断面図

図版45
南③区

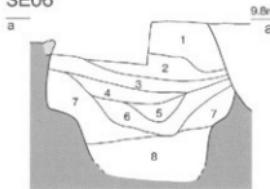




南壁



SE06



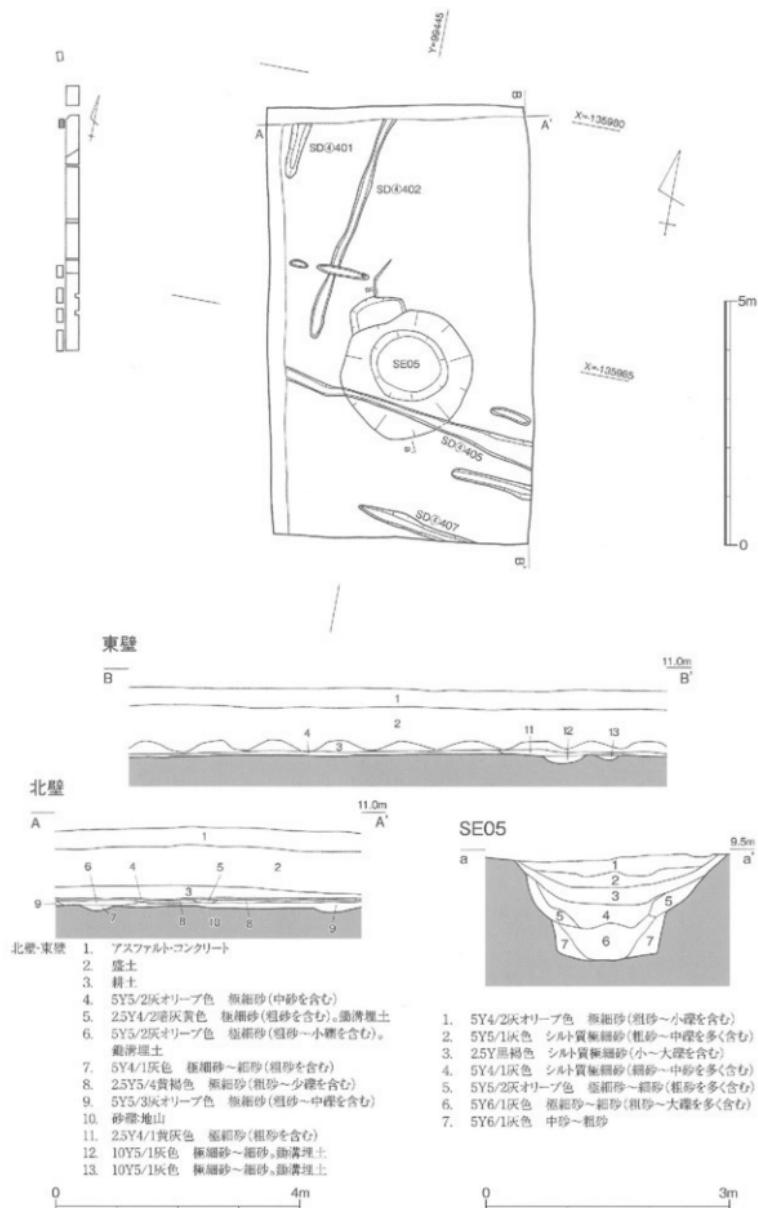
- 1. 2.5Y5/3黄褐色 シルト質植粗砂(粗砂~小礫を含む)
- 2. 2.5Y4/2暗灰黃色 植細砂(粗砂を含む)
- 3. 5Y3/2オリーブ黒色 シルト質植粗砂(粗砂~小礫を含む)
- 4. 5Y4/1灰色 植粗砂(粗砂~中礫を含む)
- 5. 大礫~中礫
- 6. 5Y3/1オリーブ黒色 シルト質植粗砂(粗砂~中礫を含む)
- 7. 5Y5/1灰色 植砂~中砂(粗砂~小礫を含む)
- 8. 7.5Y5/1灰黑色 細砂~中砂(粗砂~大礫を含む)

0 3m

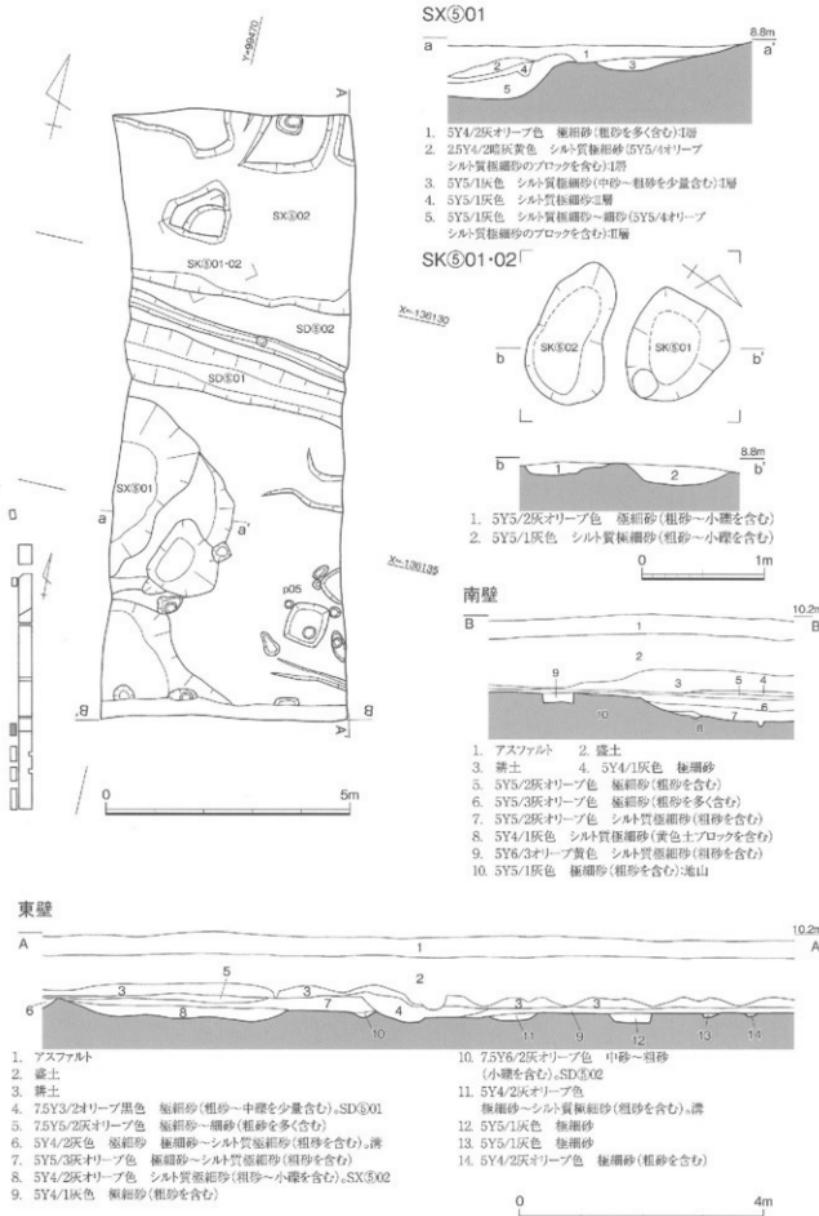
0 2m

南④3区造構全体・土層断面図

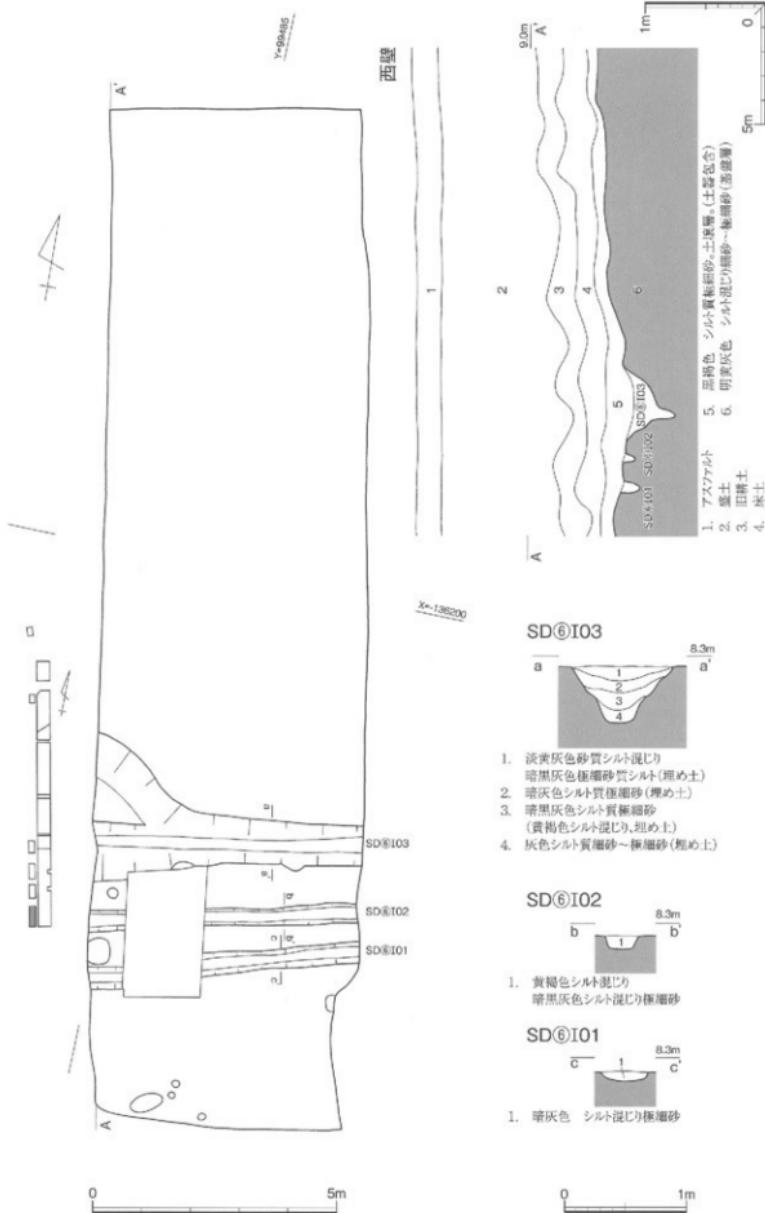
図版47
南④ 4区



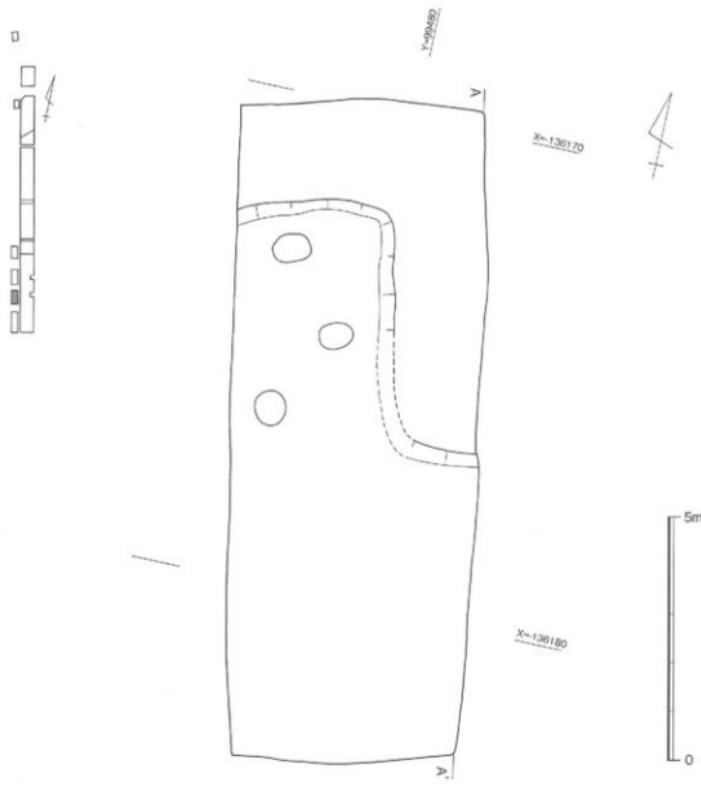
南④ 4区造構全体・土層断面図



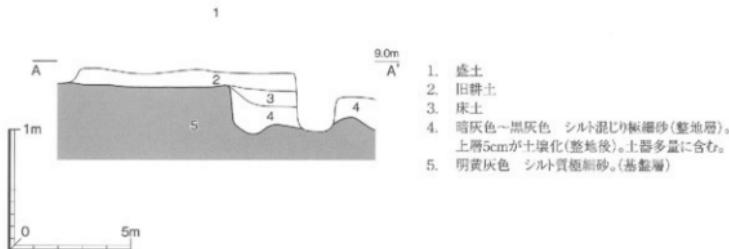
南⑤区構造全体・構造平面・土層断面図



南⑥ I 区造構全体・土層断面図

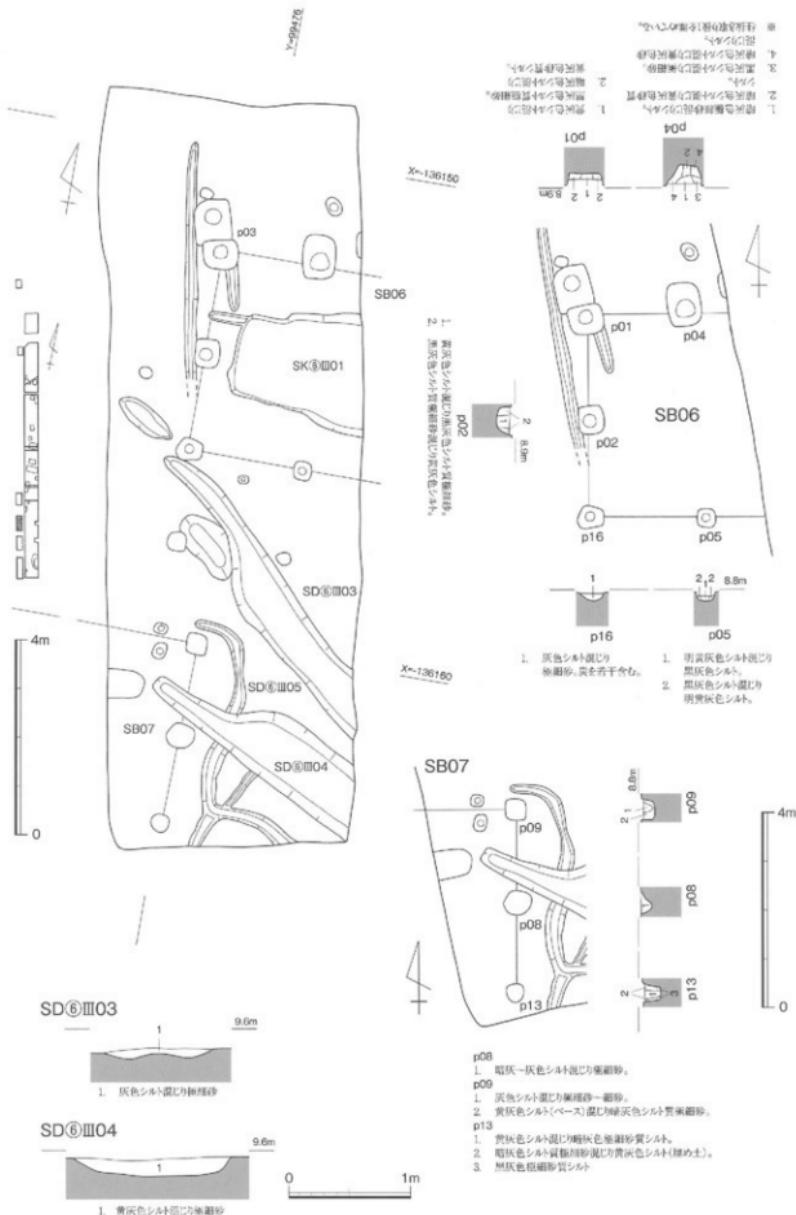


東壁

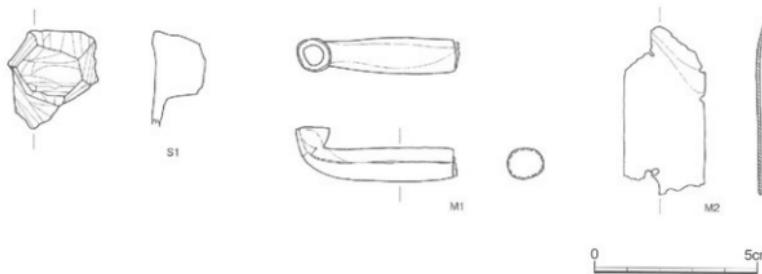
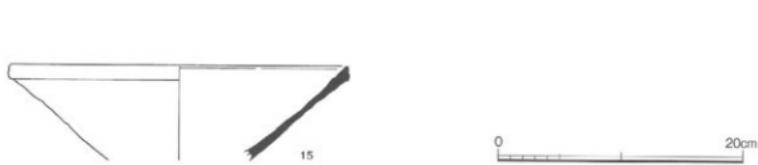
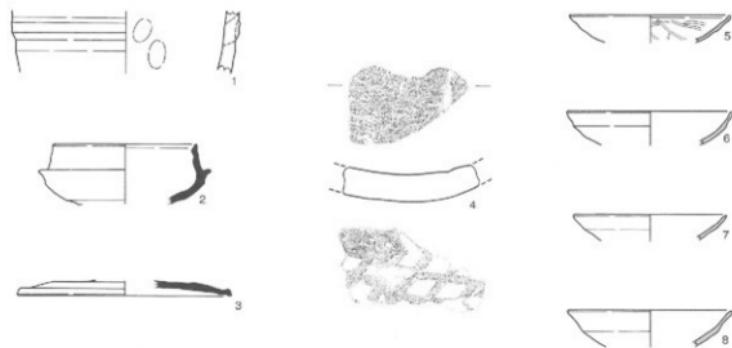


南⑥II区遺構全体・土層断面図

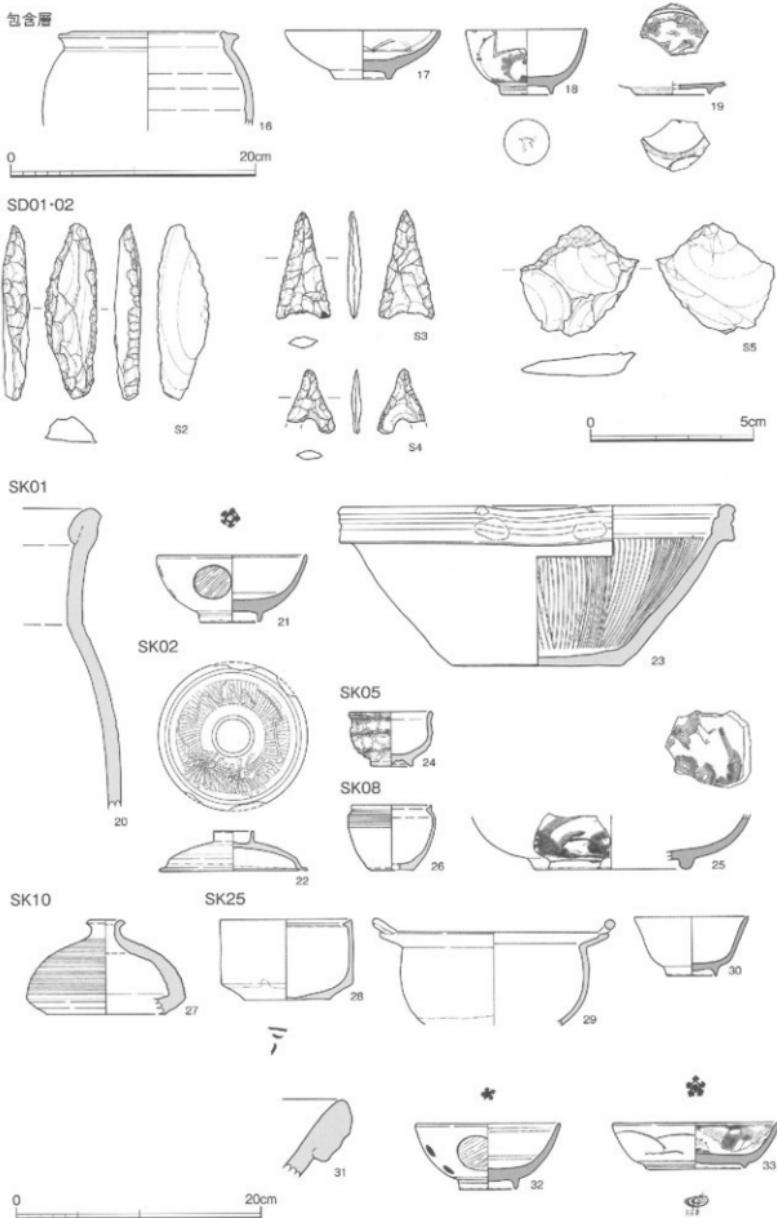
図版51
南⑥Ⅲ区



南⑥Ⅲ区構造平面・土層断面図

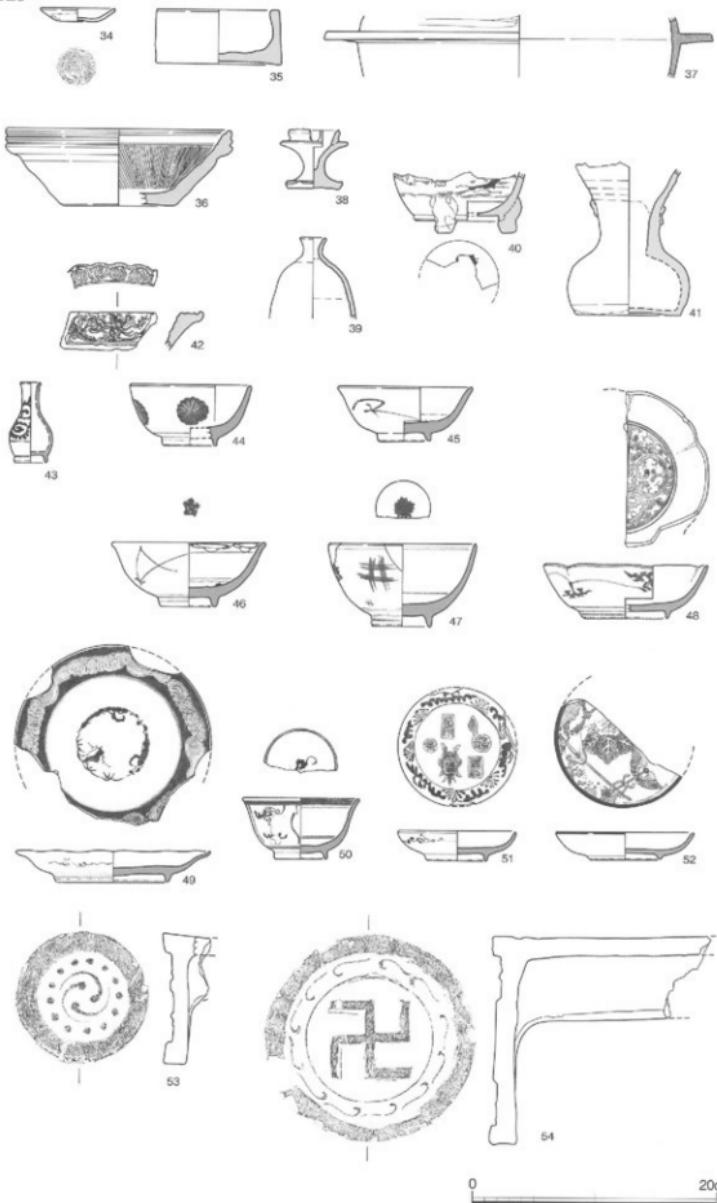


圖版53
北区



北①・③区出土遺物

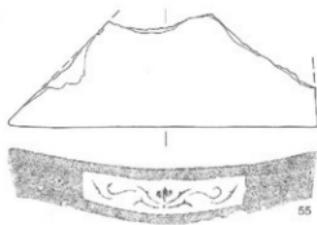
SD20



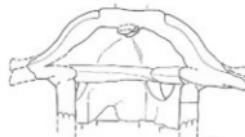
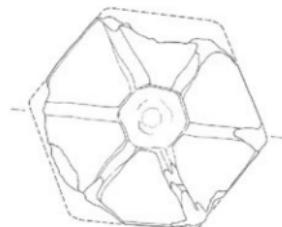
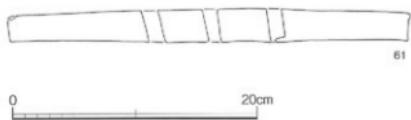
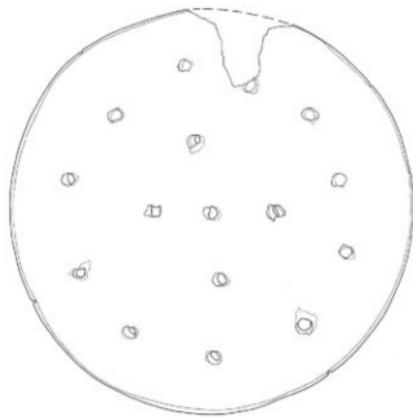
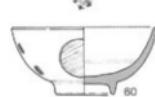
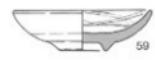
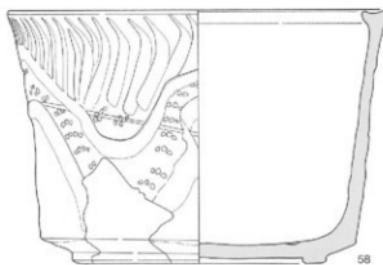
北①区SD20出土遺物

図版55
北①区

SD20



SD21



0

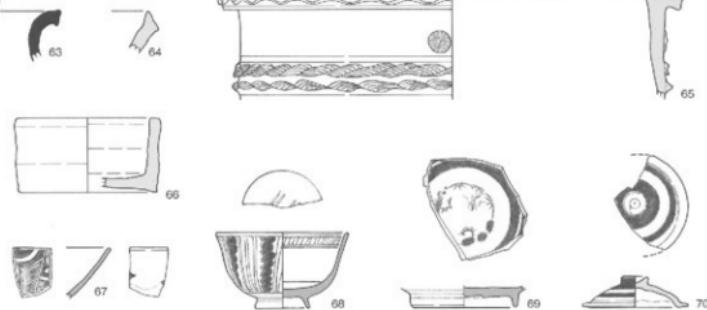
20cm

0

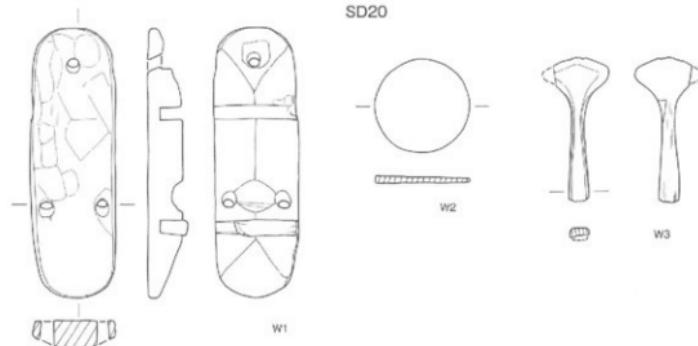
10cm

北①区SD20・21出土遺物

包含層



SK06

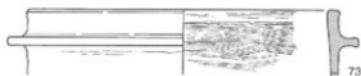


图版57
中①区

C地区 SK01



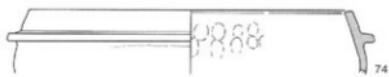
71



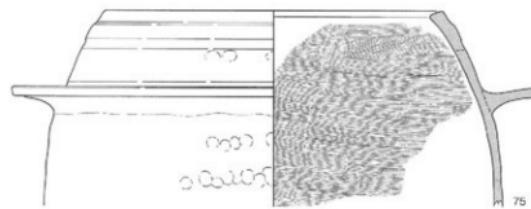
73



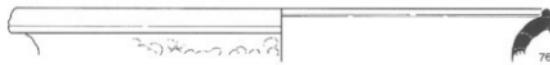
72



74

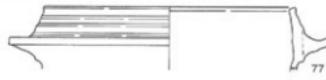


75



76

SK02



77



78

SK04

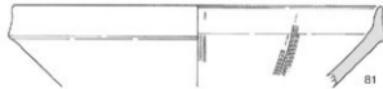


80



79

SK05



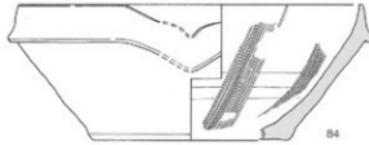
81



83



82

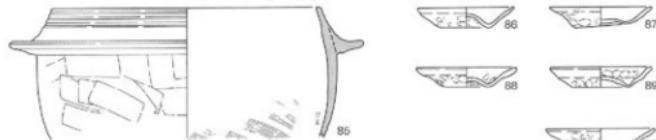


84



中①区遗构出土遗物①

SK79



SD11



SK22



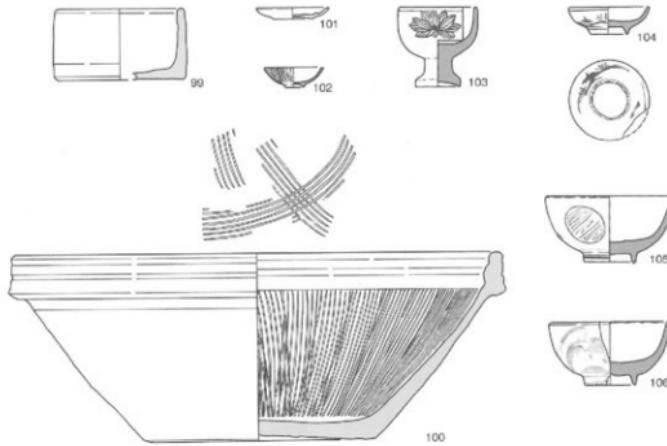
SK37



SK106

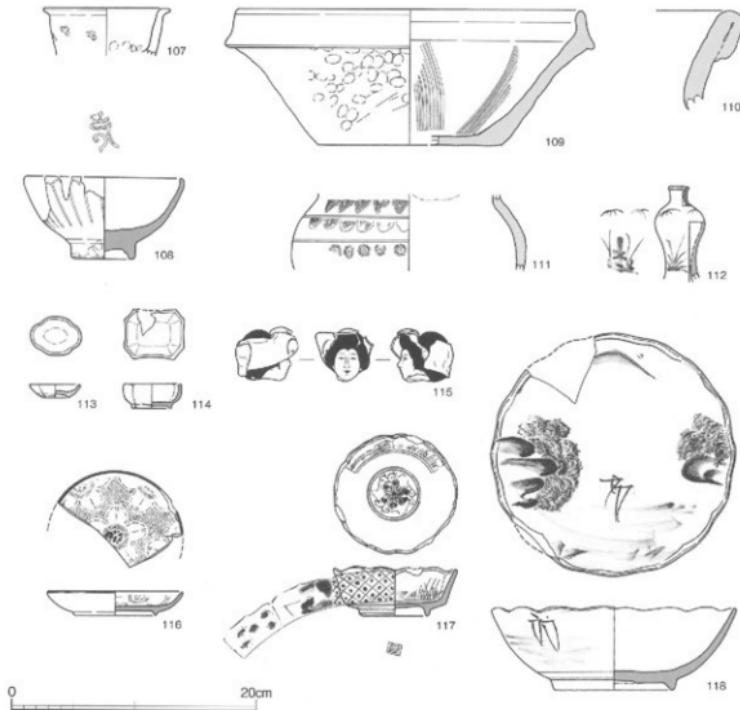


SK20

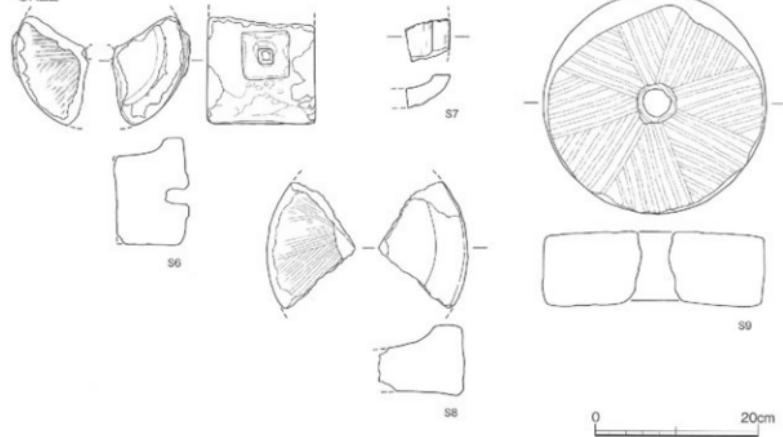


图版59
中①区

包含层

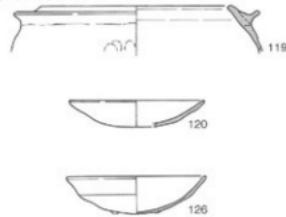


SK22

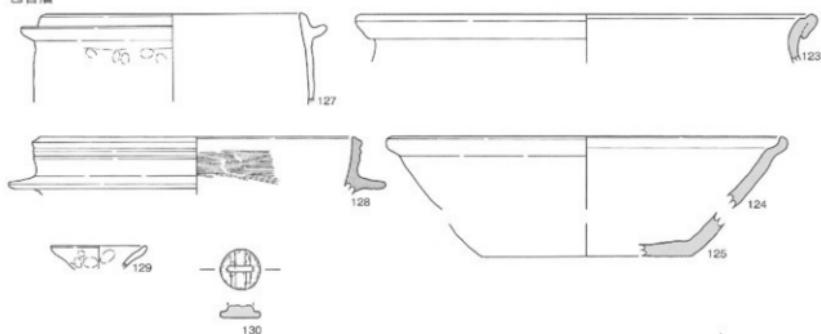


中①区包含层出土遗物

A地区SK201



包含層



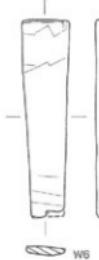
SK205



C地区 包含層



SK05



0 20cm



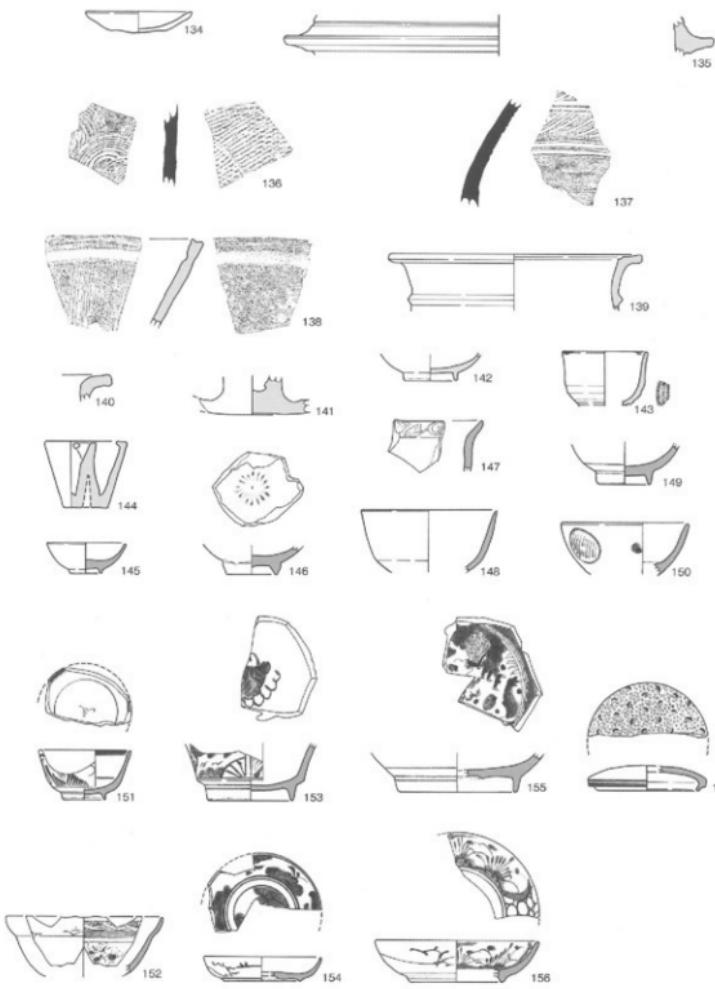
0 40cm

図版61
中②区

SD02



SD04



中②区遺構出土遺物

SE01



SE03



159

SK02

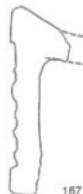
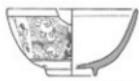
SK01



SX02



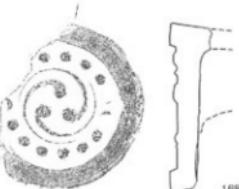
旧耕作土



包含層



510



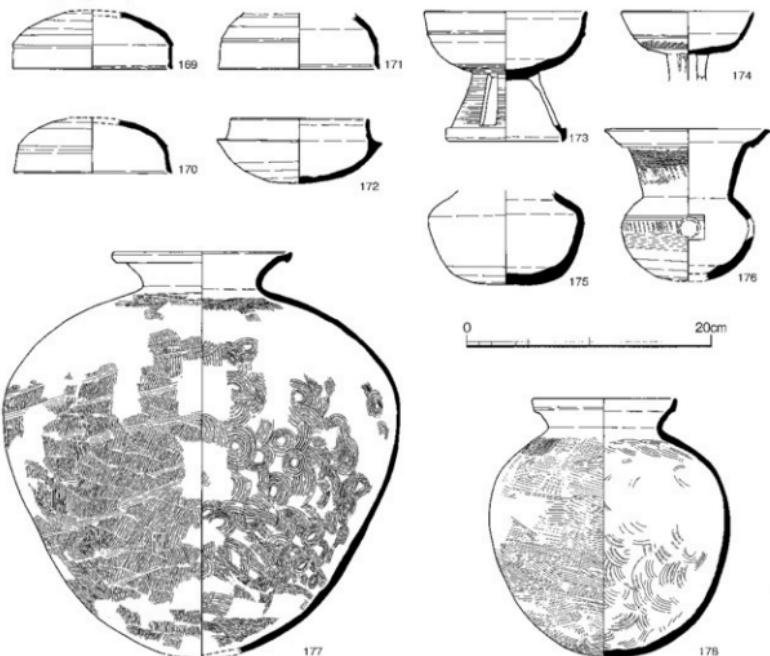
5cm



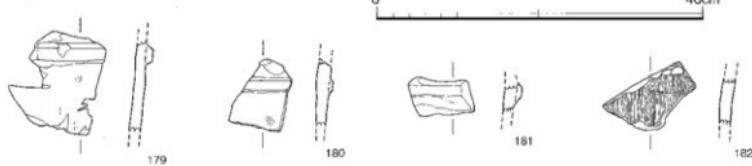
20cm

图版63
南区

ST01(SD①C02)



SD①C01



③区包含層



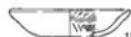
SD③B07



SB02



SB03



SB05



190



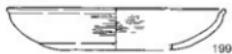
191



SB06



SB07

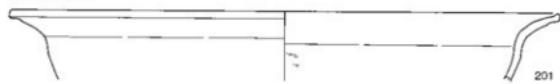


199

SA02



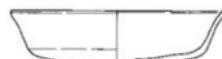
その他の柱穴



201



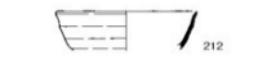
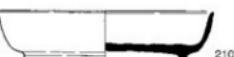
204



205

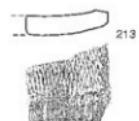
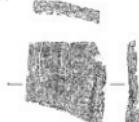


206



207

SD④301



SD⑤02



214

SD⑤III03



215

SD⑤III04

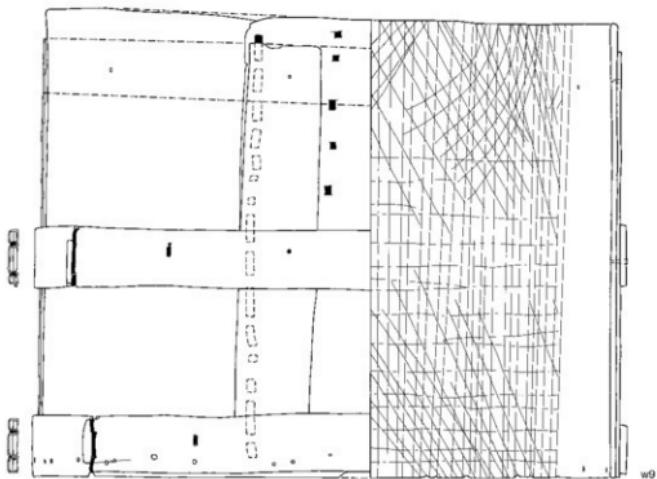
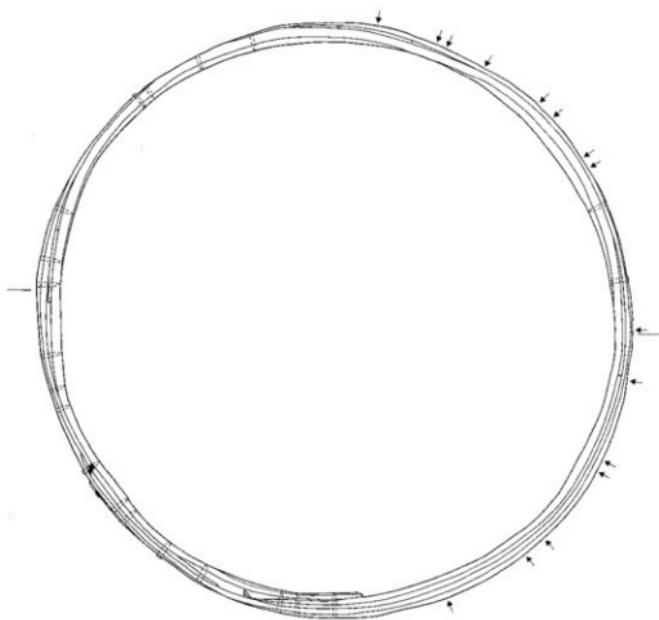


216

217

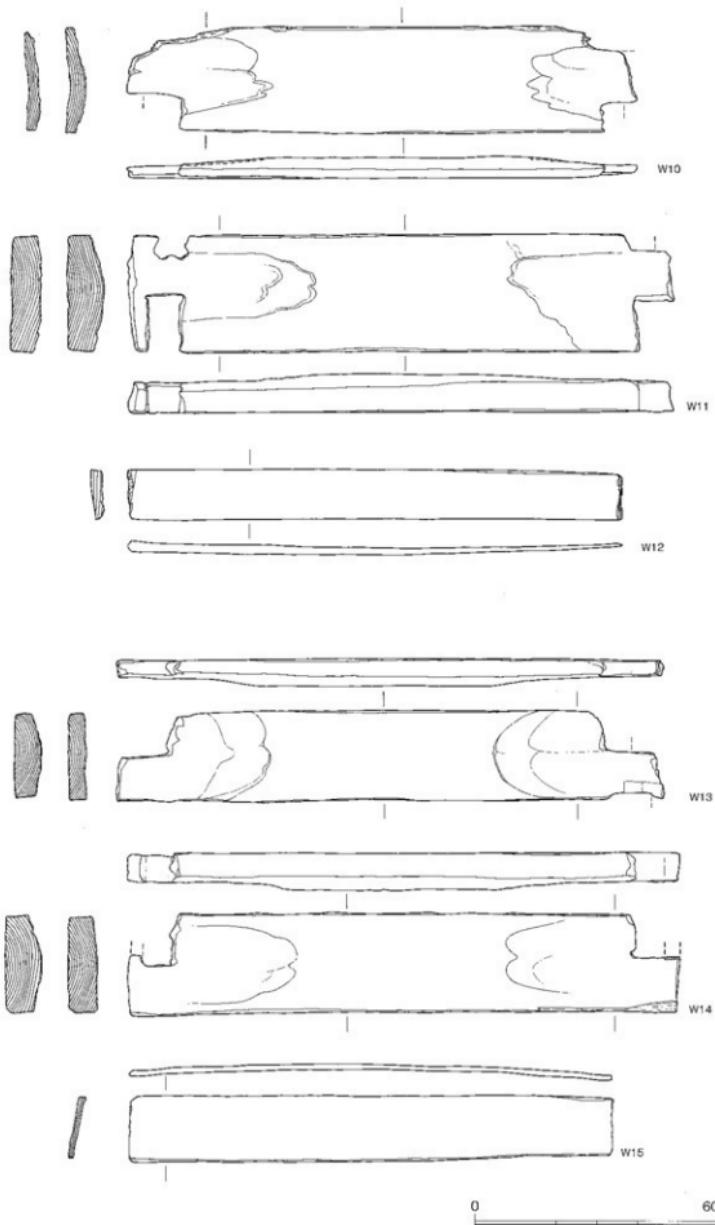
0

20cm



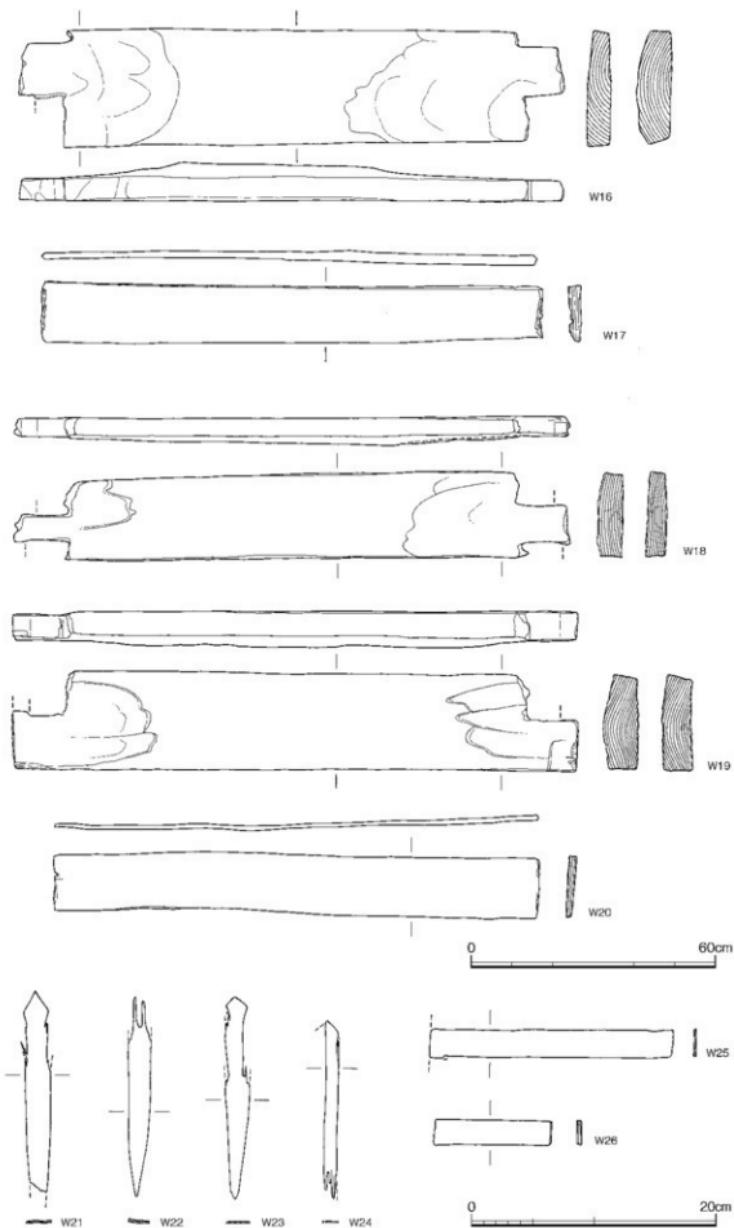
0 30cm

図版66
南②B区

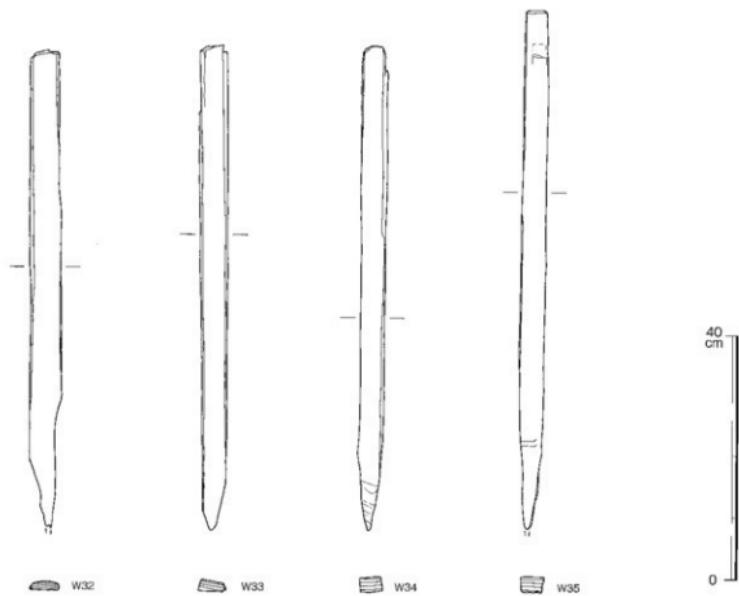
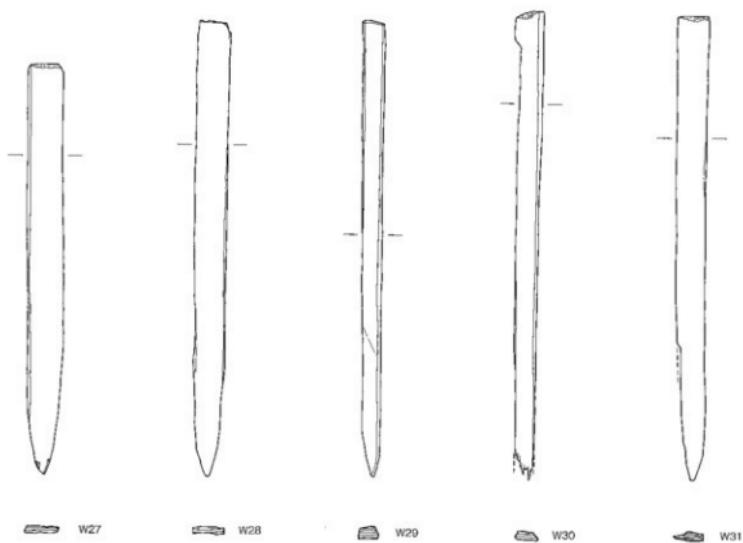


南②B区SE01井戸柾

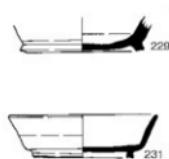
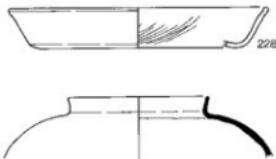
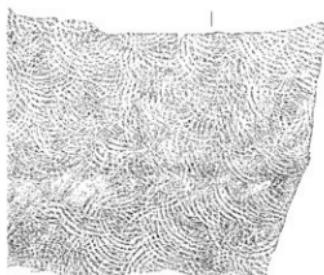
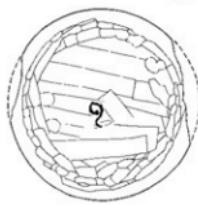
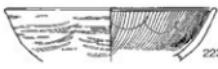
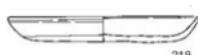
図版67
南②B区



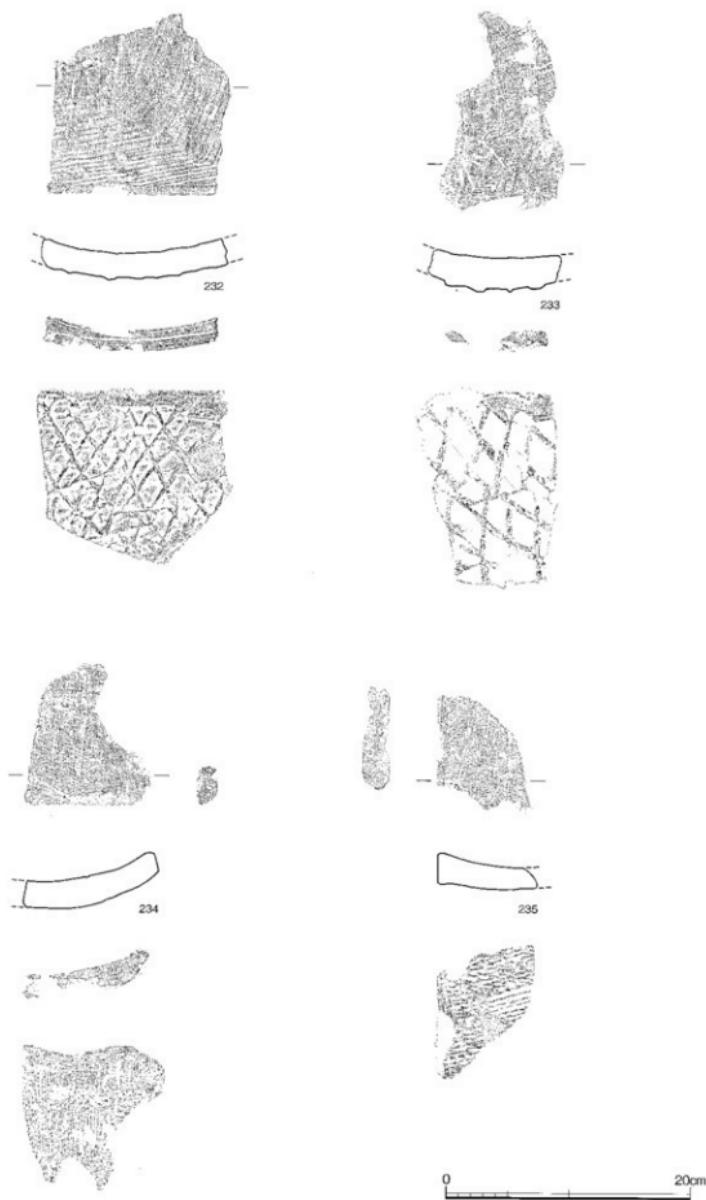
南②B区SE01井戸枠・木製品



図版69
南②B区

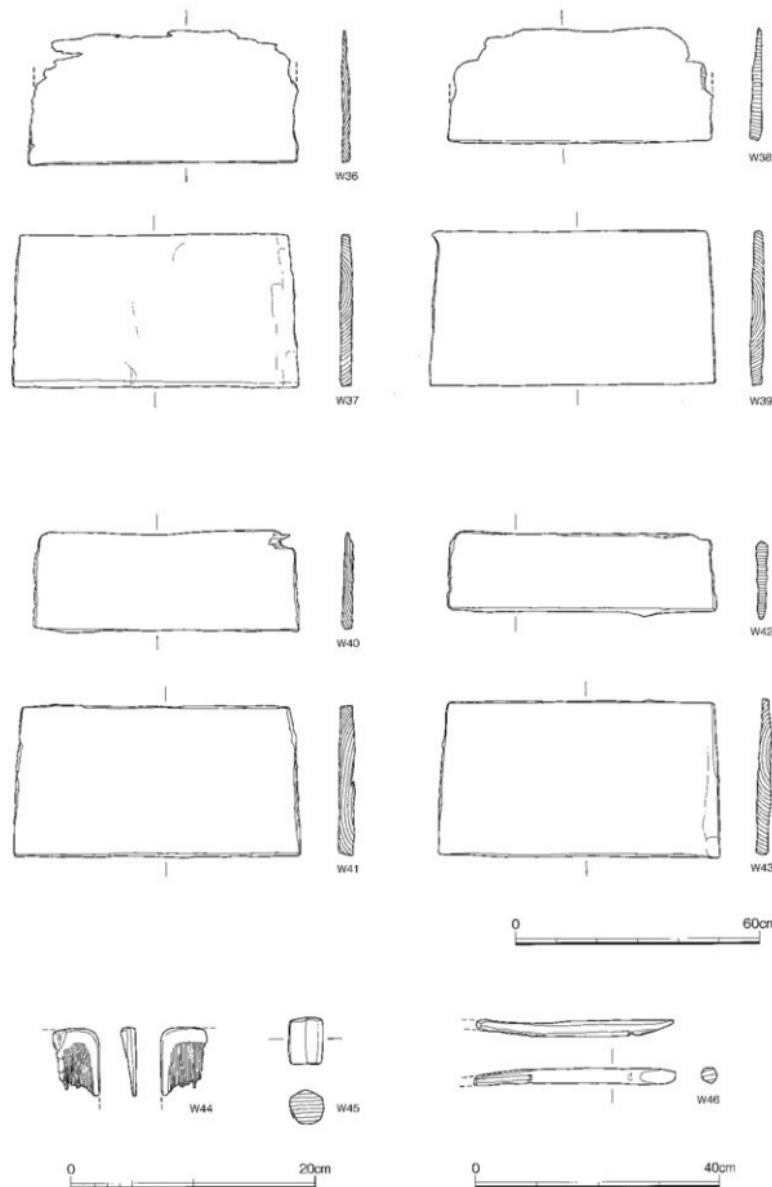


0 20cm



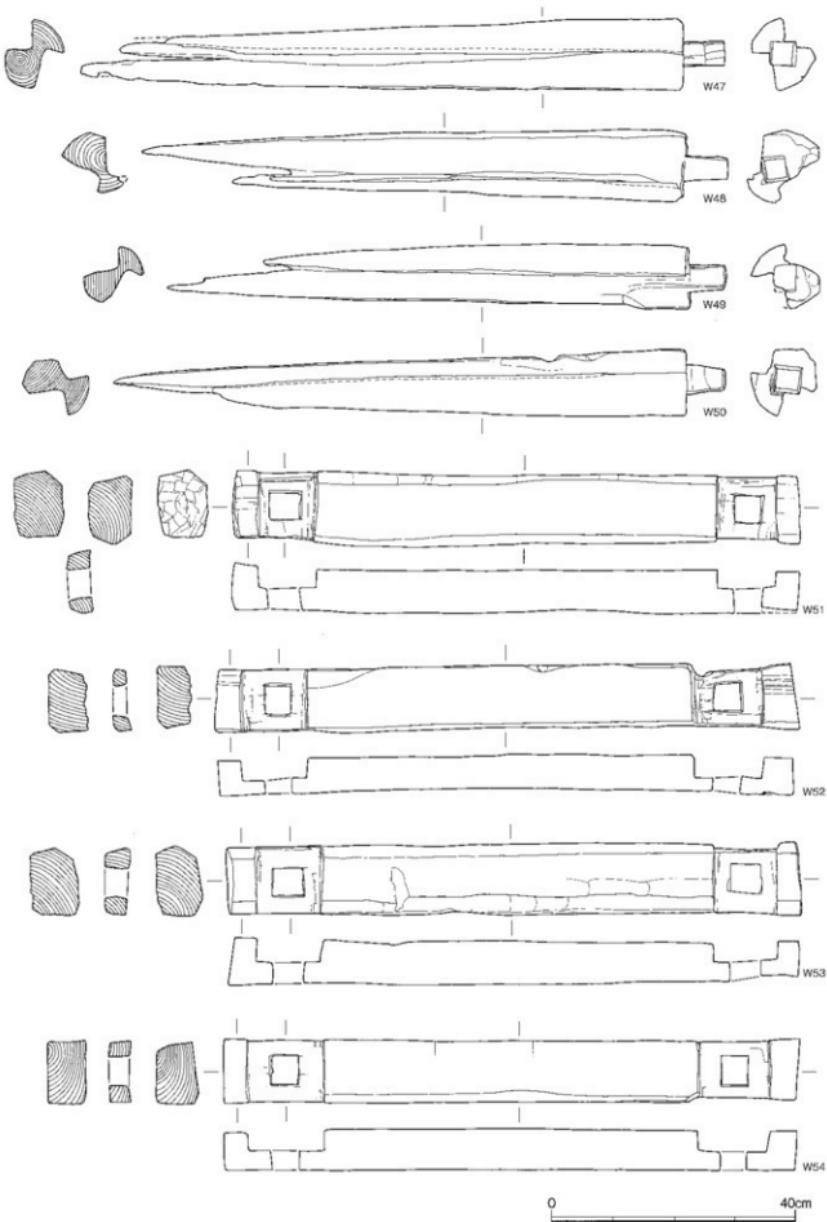
南②B区SE01出土瓦

図版71
南①A区



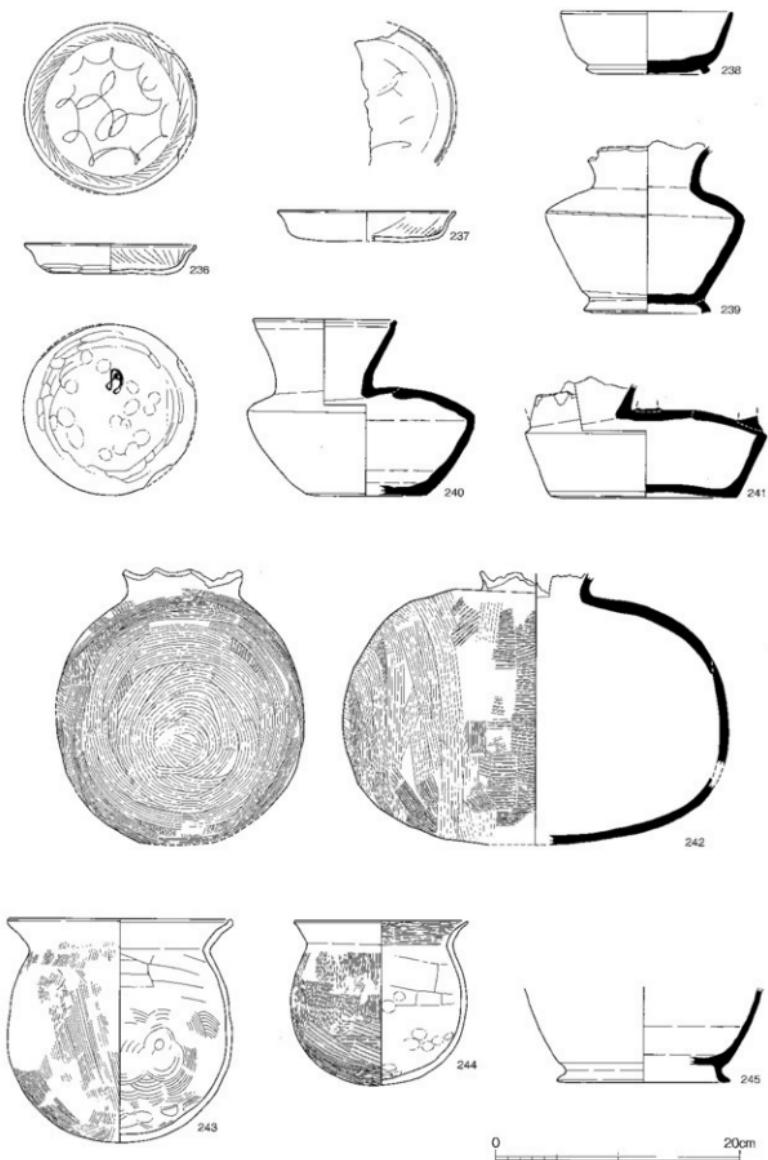
南①A区SE02井戸枠・木製品

図版72
南①A区



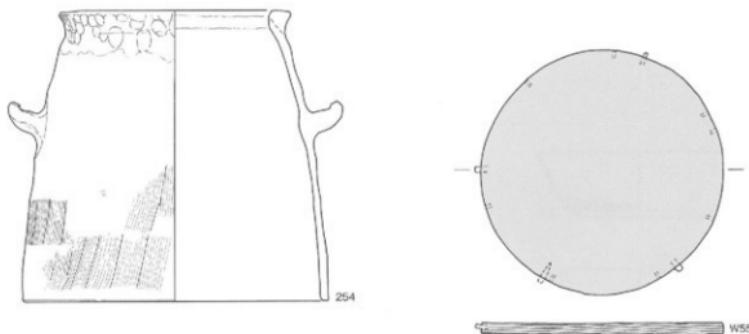
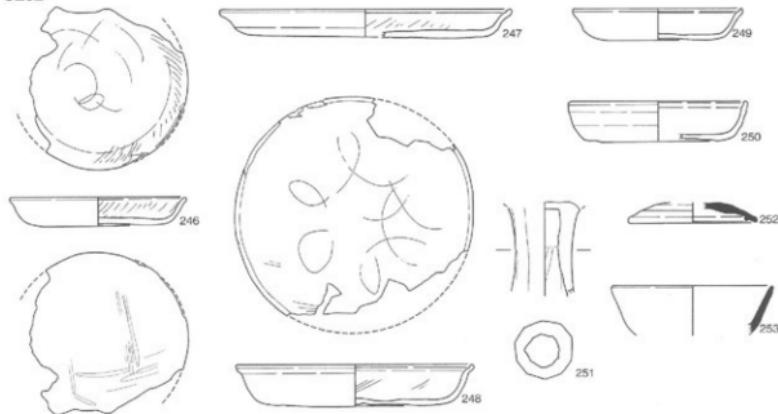
南①A区SE02調木・土居柾

図版73
南①A区

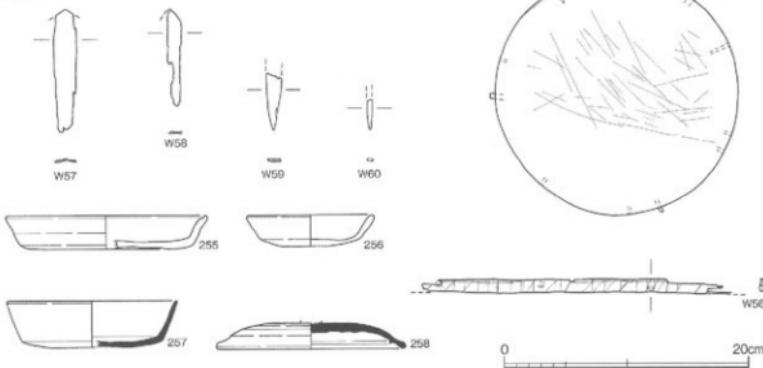


南①A区SE02出土土器（1）

SE02



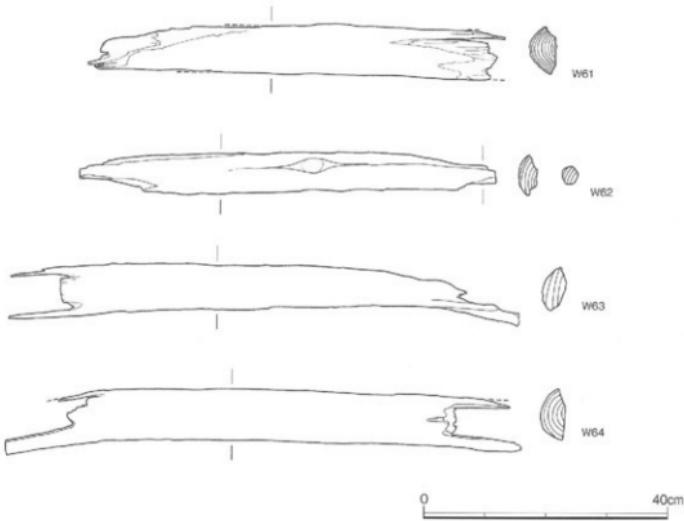
SE03



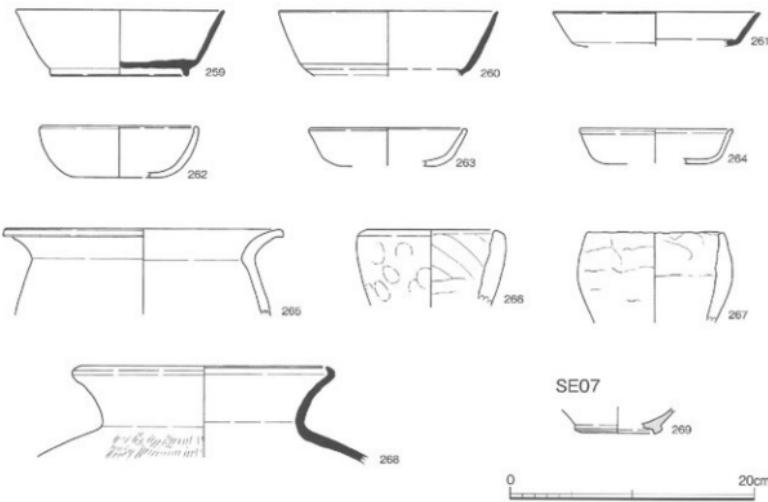
南区SE02・03出土遺物

图版75
南区

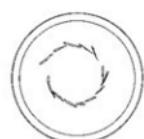
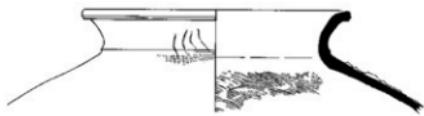
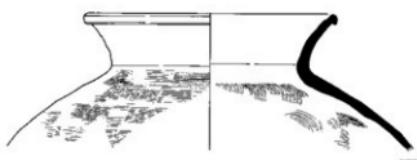
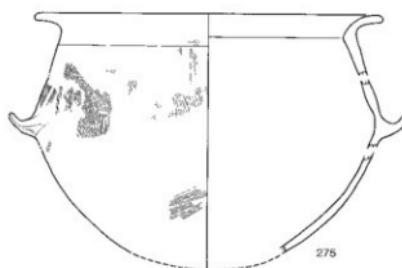
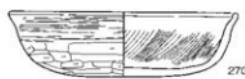
SE03



SE05

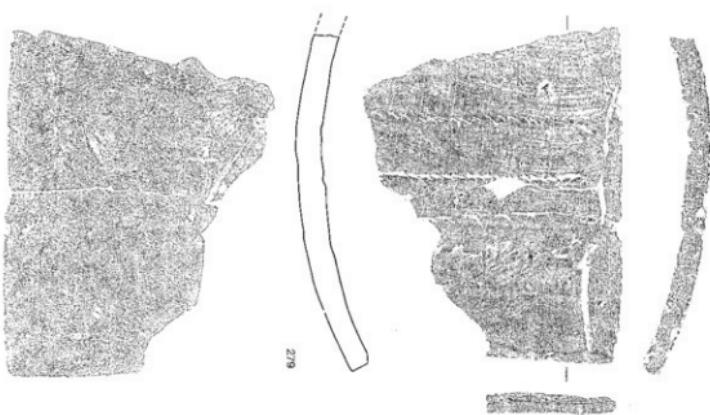


図版76
南②D区

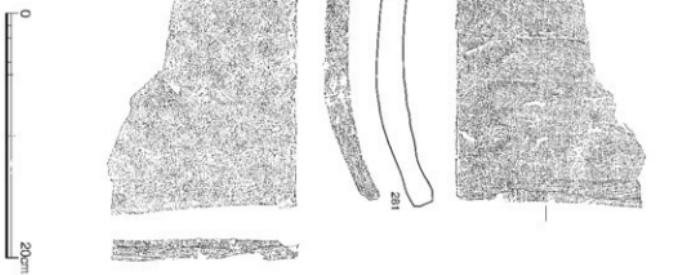


0 20cm

図版77
南②D区



南②D区SE04出土瓦



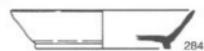
SX②B01



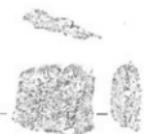
SK⑥III03



SK①B05



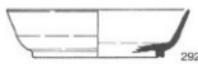
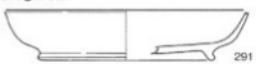
SK⑥III01



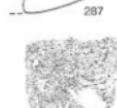
SX⑤02



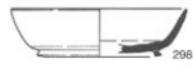
SK②B02



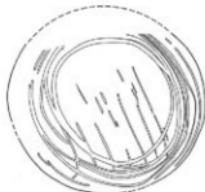
286



SK③A01



SX⑤01



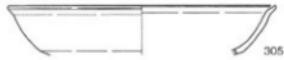
SX③A01



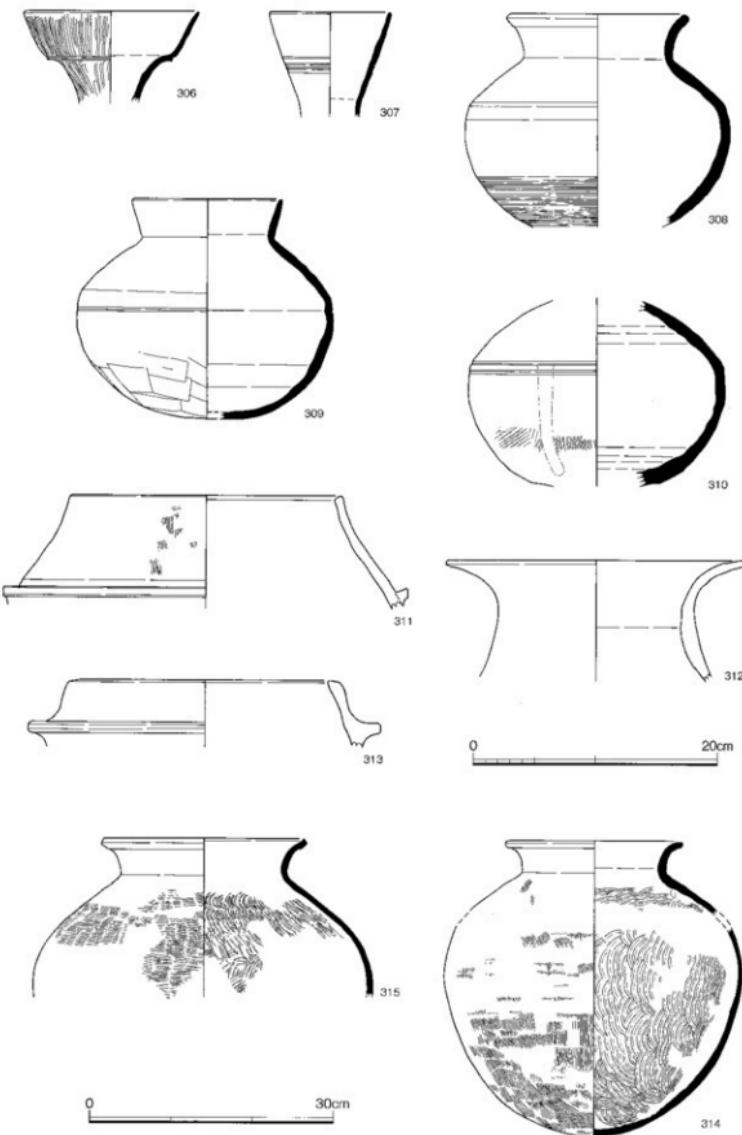
SK②C01



SK③C01

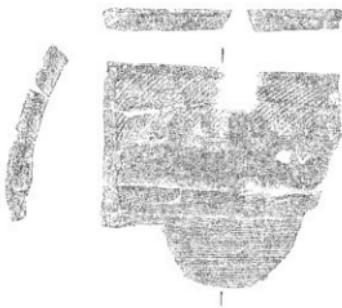
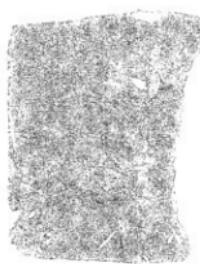
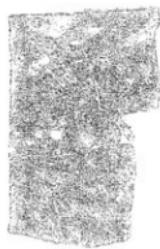


図版79
南②D区



図版80
南②D区

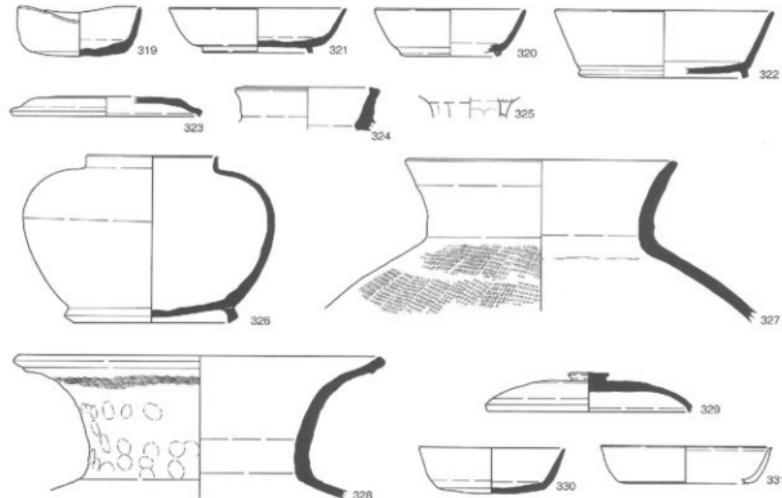
20cm
0



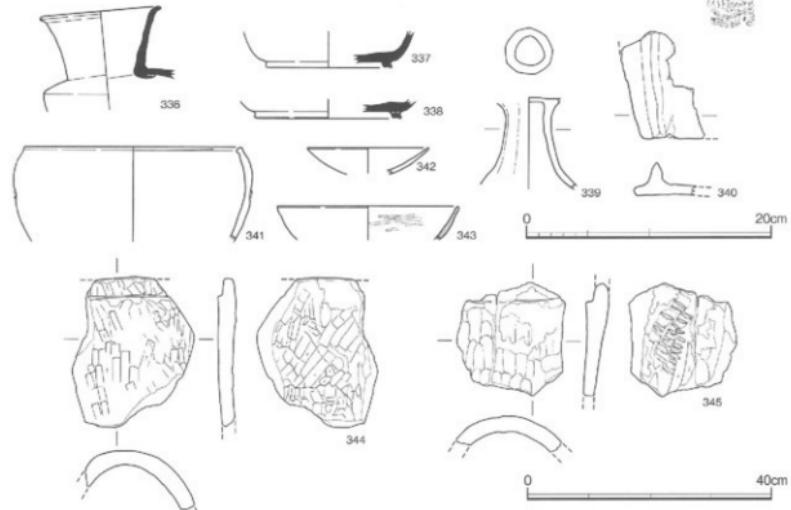
南②D区SX01出土瓦

图版81
南①C区

SD①C01

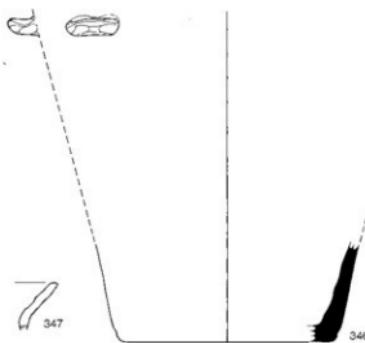


SD①C02

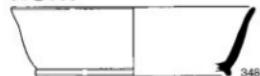


南①C区溝出土遺物

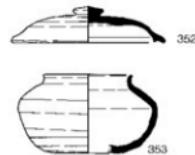
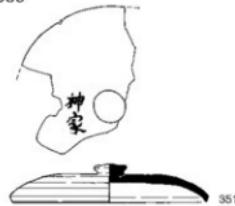
SD①C03



SD①C05



SD①C06



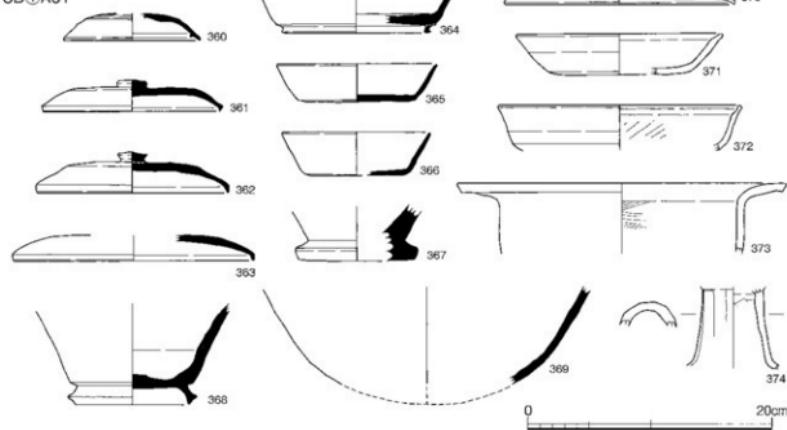
SD①C08



SD①B02



SD①A01



図版83
南区

SD①A02



375

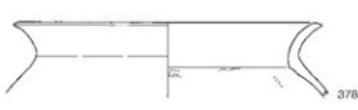


376

SD①A03



377



378

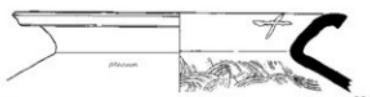
SD②A01



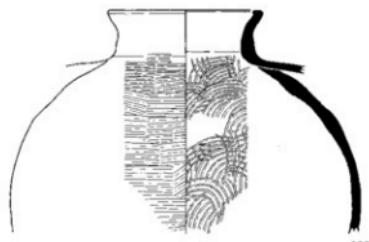
379



380



381



382

SD②A02



383



384

SD②B01



385



386



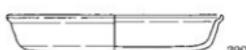
387



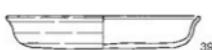
388



389



390



391

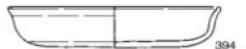


392



393

SD②S01



394



395



396

SD②B02



397

SD②C01



400

SD②C02



SD②B03



398

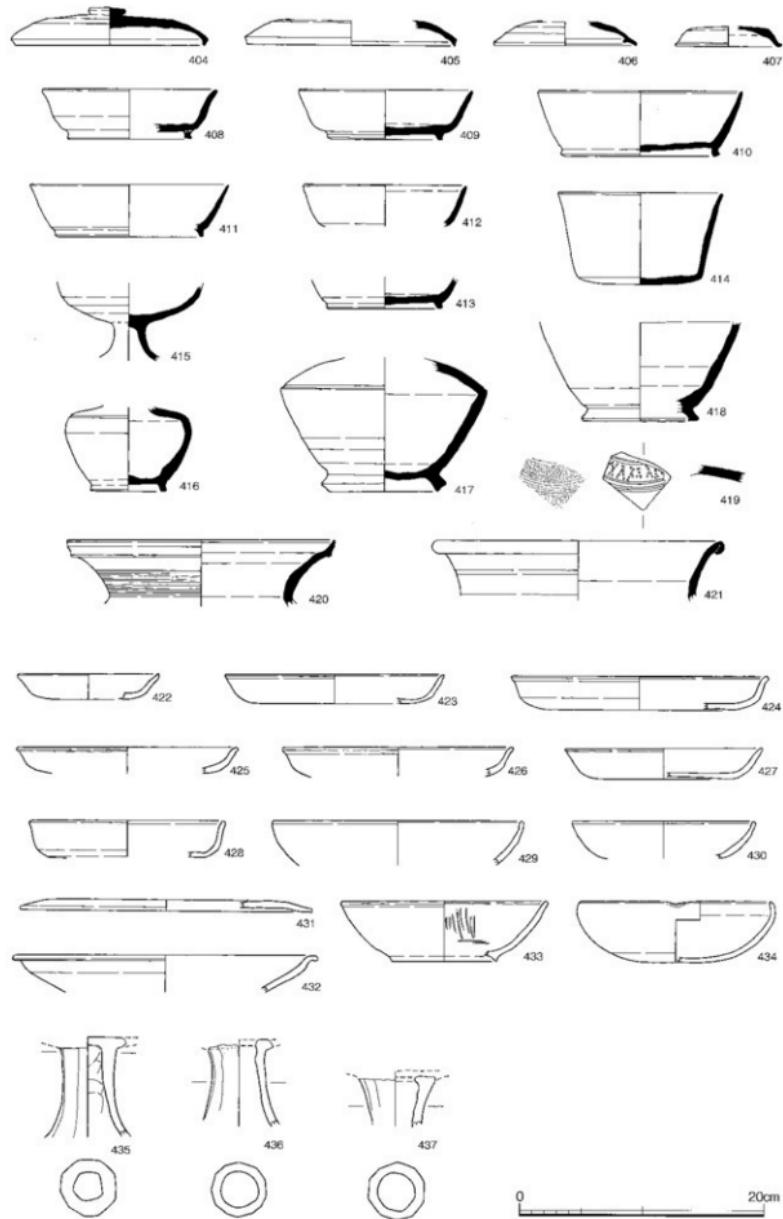
SD③B04



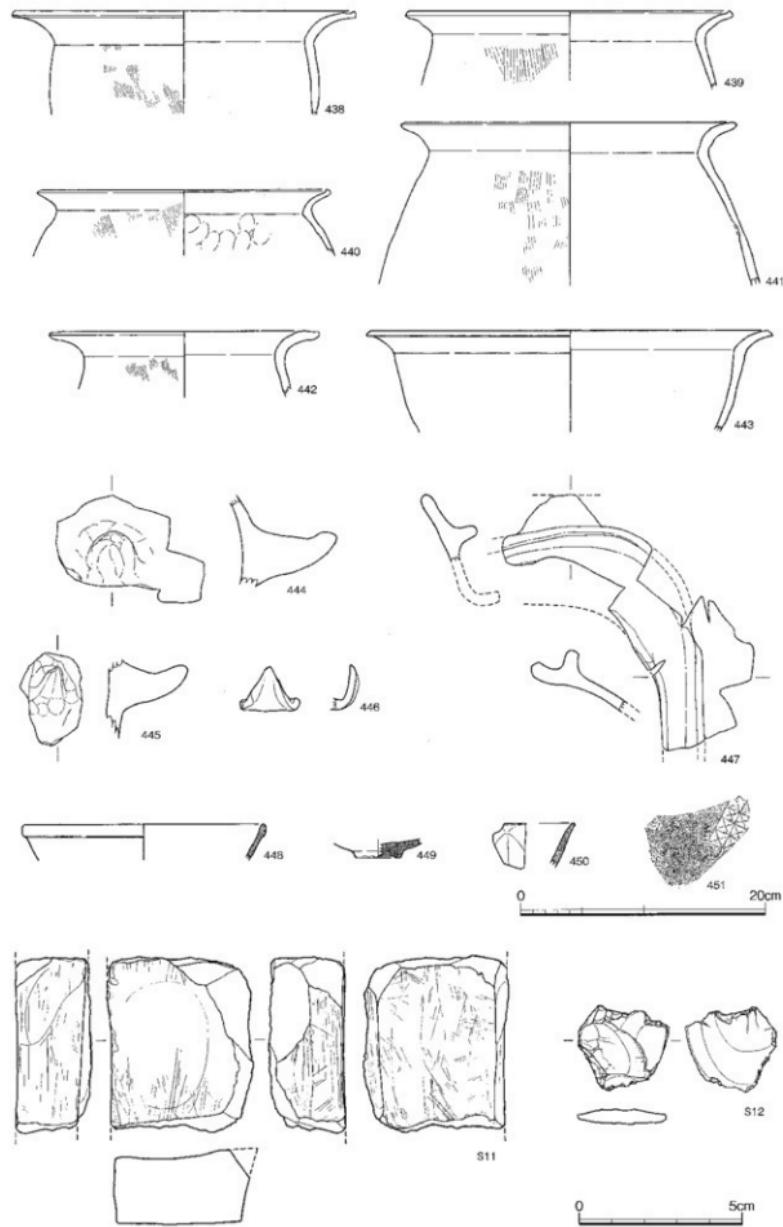
401

0

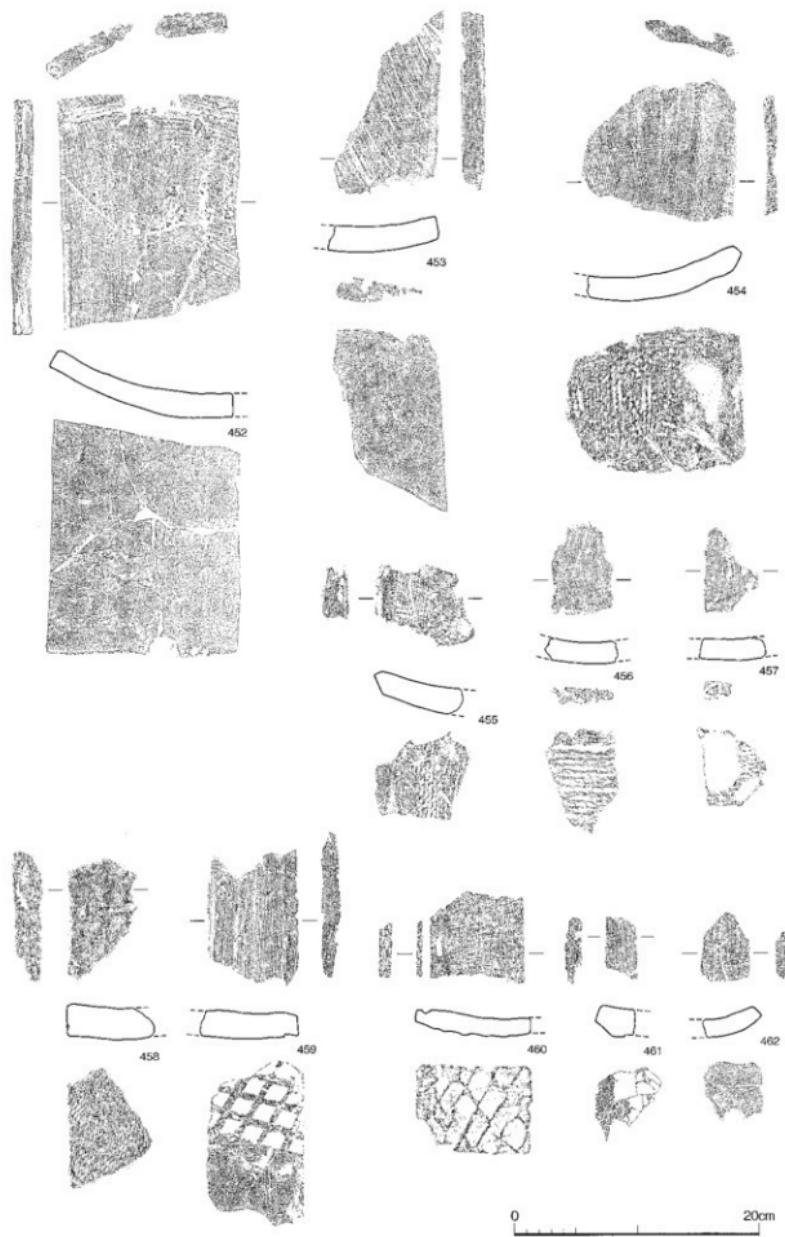
20cm



图版85
南区

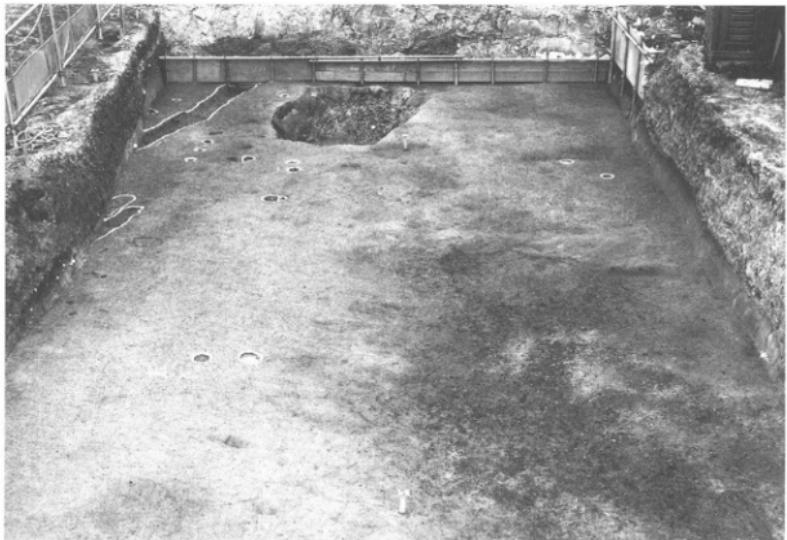


南区包含层出土遗物



南区包含層出土瓦

写 真 図 版



a 調査区中央（南から）



b 調査区北半（南から）



c SE01（西から）

写真図版 2

北①区



調査区全景（南上空から）



調査区全景（北から）

北①区



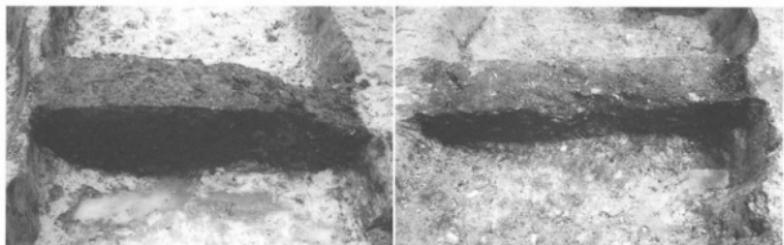
a 調査区西壁土層断面①（北東から）



b 調査区西壁土層断面②（北東から）



c 調査区西壁土層断面③（北東から）



d SK10土層断面（北から）

e SK25土層断面（北から）

北①区



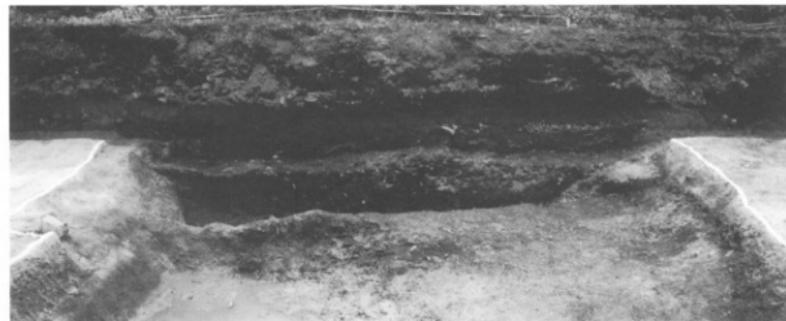
a SD20土層断面①（南から）



b SD20土層断面②（南から）



c SD21完掘状況（北東から）



d SD21土層断面（東から）



竪跡（南から）



竪跡たちわり断面（南東から）



調査状況（南から）